

京都女子大学大学院
博士学位論文

地域社会を基盤としたまちづくりに関する一考察
—いいだ人形劇フェスタへの運営および観劇への住民参加の実態から—

松崎 行代

目 次

序論	1
研究目的と問題の背景	1
論文の構成	2
第1章 飯田市の概要と人形劇フェスタ	5
はじめに	5
1 飯田市の概要	5
2 飯田の文化的土壌	9
2.1 飯田の伝統芸能	9
2.2 人形芝居（人形浄瑠璃）	10
2.3 歌舞伎（地芝居）	14
2.4 獅子舞	15
2.5 人形劇フェスタ成立の文化的背景	17
3 いいだ人形劇フェスタの概要	19
3.1 理念	19
3.2 事業内容と目標	21
3.2.1 公演	21
3.2.2 交流	25
3.2.3 研鑽	26
3.3 組織	26
3.3.1 本部実行委員会	26
3.3.2 地区公演実行委員会	27
3.3.3 市民の参加について	29
3.4 人形劇フェスタの財政	30
3.5 いいだ人形劇フェスタの特徴	32
3.5.1 国内の人形劇の祭典との比較	32
3.5.2 他の文化活動との比較	34
小括	36
第2章 人形劇フェスタをめぐる飯田市の文化行政	37
はじめに	37
1 第1期 第1～6回（1979～1984年）行政主導による開始	37
1.1 市長の政治理念と飯田市の課題	37

1.2	公民館を活用した全市域的開催	39
1.3	行政主導の開始	41
1.4	市民への拡がり	44
2	第2期 第7～10回（1985～1988年）公民館活動として市民への浸透	46
2.1	まちづくりを目指す文化運動としての位置づけ	46
2.2	国際化と市民理解の拡がり	48
3	第3期 第11回～20回（1989～1998年）まちづくりの中核としての拡大	50
3.1	まちづくりの中核への位置づけ	50
3.2	本部と地区の二分化	53
3.3	カーニバルを市民のものへ	55
4	第4期 21回～38回 市民主導の文化活動への発展	59
4.1	市民による新しい祭典の創造	59
4.2	「市民主体」と行政のかかわり	61
4.3	住民の運営への参加の課題	63
	小括	66
第3章	公民館と住民活動の基盤としての地域社会	70
	はじめに	70
1	公民教育の振興と公民館	70
2	社会教育の理念の形成	71
3	公民館のコミュニティセンター化	73
4	まちづくりと公民館	75
5	自治公民館への注目	76
6	公民館研究をめぐる現状と課題	77
	小括	79
第4章	公民館の三層構造と市民参加	80
	はじめに	80
1	飯田市の公民館	81
1.1	歴史	81
1.2	理念	81
1.3	地域自治組織の改訂と公民館	82
2	飯田市の公民館の組織	83
2.1	飯田市公民館	84
2.2	地区公民館	85

2.3 分館	85
3 公民館の三層構造システム	85
4 人形劇フェスタと公民館	88
4.1 公民館の三層構造システムによる市民参加の拡がり	88
4.2 主事の役割	90
小括	90
第5章 地域社会と公民館－分館活動を支える伝統的地域社会－	92
はじめに	92
1 分館の基盤となる集落の実態	92
1.1 集落とは	92
1.2 飯田市の分館と集落	93
2 集落の実態調査	97
2.1 調査方法	97
2.2 結果および考察	98
①自治区画	99
②地縁的組織の実態（水利組合、共有林、氏子）	99
③冠婚葬祭	101
④自治会と分館との関係	101
⑤分館の設置	103
⑥分館の役員	103
⑦分館の活動内容	105
2.3 地域社会の特徴	107
3 人形劇フェスタ地区公演	107
3.1 地区公演実行委員会の実態	107
①実行委員会	107
②各公演会場の運営体制	108
③地区公演実施までの流れ	111
3.2 まとめ	113
4 地区実行委員の意識	114
4.1 調査方法	114
4.2 結果および考察	114
①地区公演に関する会議開催について	114
②人形劇フェスタの価値について	114
③今後の運営及び観劇への参加意思	116

4.3 まとめ	117
小括	118
第6章 市民の観劇参加と継続性のメカニズム	120
はじめに	120
1 市民の観劇参加に関する調査	120
1.1 調査概要	120
1.2 保護者調査について	121
1.3 園長調査について	122
2 市民の観劇参加の実態	122
2.1 市民の観劇参加の実態	122
2.2 市民の観劇参加を促進する要因	124
①過去の参加経験との関係	124
②観劇参加の動機	124
③保護者であるという要因	126
3 保護者の人形劇フェスタへの参加を促進する幼稚園・保育所の役割	126
3.1 幼稚園・保育園の保育活動における人形劇の活用	126
①観劇の活動	126
②演じる活動	127
3.2 人形劇の教育的意義	128
3.3 人形劇フェスタの理解	128
①観劇活動の取り入れと人形劇フェスタ	128
②演じる活動の取り入れと人形劇フェスタ	129
3.4 園における地域の文化資源の活用	130
4 観劇参加という文化活動が継承された要因	131
小括	132
終章	135
引用・参考文献	138
謝辞	144
付属資料目次	i

図表目次

第 1 章

図 1-1 飯田市の位置	5
図 1-2 飯田市の地区	6
図 1-3 飯田周辺の街道	9
図 1-4 伊那谷の人形座の分布	11
図 1-5 黒田人形	12
図 1-6 獅子舞の分布	16
図 1-7 屋台獅子	16
図 1-8 いいだ人形劇フェスタの理念と内容概念図	20
図 1-9 参加証ワッペン（2016 年度）	20
図 1-10 いいだ人形劇フェスタ実行委員会組織図	26
表 1-1 飯田市の人口および世帯数の推移	7
表 1-2 上演参加タイプ別参加劇団数と公演数（2015 年）	22
表 1-3 公演の種類	23
表 1-4 観客者数（人形劇フェスタ 2015）	25
表 1-5 市民の参加について	29
表 1-6 いいだ人形劇フェスタの財政（2015 会計報告）	31
表 1-7 国内の人形劇の祭典	33
表 1-8 国内の市民文化活動について	35

第 2 章

図 2-1 人形劇のまちづくり概念図	63
図 2-2 行政と住民・市民の関係：1 期	66
図 2-3 行政と住民・市民の関係：2 期	67
図 2-4 行政と住民・市民の関係：3 期	68
図 2-5 行政と住民・市民の関係：4 期	69
表 2-1 人形劇カーニバル 1～10 回 参加劇団数および上演の実態	45
表 2-2 ワッペン売上数と劇団員数からみた市民参加数	50
表 2-3 人形劇カーニバル第 11～20 回の概要	55
表 2-4 人形劇フェスタ公演会場および運営参加市民数の推移	64

第 4 章

図 4-1 地域自治組織のイメージ図	82
--------------------	----

図 4-2 飯田市公民館の運営組織図	84
図 4-3 飯田市の公民館の三層構造システム	87

第 5 章

図 5-1 飯田市行政区分としての地区および集落と分館	95
図 5-2 伊賀良地区の自治区画	99
図 5-3 分館の財政	102
図 5-4 伊賀良地区公演実行委員会組	108
表 5-1 伝統的地域社会の実態	100
表 5-2 伊賀良地区の分館	103
表 5-3 各分館の役員	104
表 5-4 分館の活動	106
表 5-5 伊賀良地区公演会場と運営担当（フェスタ 2012）	109
表 5-6 会議回数	114
表 5-7 地区公演が議題となった会議	115
表 5-8 人形劇フェスタの価値	116
表 5-9 地区公演実行委員を終えて楽しかったこと	116
表 5-10 今後の運営参加の意志	117
表 5-11 今後の観劇参加の意志	117

第 6 章

表 6-1 年齢別回答者数	122
表 6-2 就学前期から現在までの居住地別人形劇フェスタへの参加	123
表 6-3 就学前から現在までの人形劇フェスタへの参加形態	123
表 6-4 就学前期・小学生期の人形劇フェスタへの参加・不参加別現在の人形劇フェスタへの参加	124
表 6-5 自分 1 人または大人だけの観劇について	125
表 6-6 子どもの人形劇観劇の推奨	125
表 6-7 子どもに人形劇を観劇させたい理由	125
表 6-8 教育課程・保育を課程への人形観劇の組み入れ	127
表 6-9 2013 年の人形劇観劇の回数	127
表 6-10 教育課程・保育課程への人形劇を演じて遊ぶ活動の導入	127
表 6-11 人形劇を演じる活動の実態	127
表 6-12 人形劇の教育的意義	128

表 6-13 教育課程・保育課程への人形劇の取り入れ・・・・・・・・・・	128
表 6-14 教育課程・保育課程に人形劇を演じる活動が取り入れられていることに人形劇フェスタが影響しているか・・・・・・・・・・	129
表 6-15 教育課程・保育課程に人形劇を演じる活動が取り入れられているのに人形劇フェスタが影響しているか・・・・・・・・・・	129
表 6-16 教育課程・保育課程に人形劇を演じる活動が取り入れられていることに人形劇フェスタがあることが影響していると考ええる理由・・・・・・・・・・	130
表 6-17 保護者への人形劇フェスタの情報提供およびワッペン購入の案内・・・・・・・・	130
表 6-18 人形劇フェスタへの参加・不参加別公民館活動への関心・・・・・・・・・・	131
表 6-19 人形劇フェスタへの参加・不参加別公民館活動への参加・・・・・・・・・・	132
表 6-20 人形劇フェスタへの参加・不参加別自治会への意識・・・・・・・・・・	132
表 6-21 人形劇フェスタへの参加・不参加別自治会活動への参加・・・・・・・・・・	132

序論

研究目的と問題の背景

いいだ人形劇フェスタ（以下、人形劇フェスタと記す）は、飯田市で開催される日本最大の人形劇の祭典である。人形劇フェスタは、1979（昭和 54）年に人形劇カーニバル飯田（以下、人形劇カーニバルと記す）として開始され、1999（平成 11）年から人形劇フェスタに移行した。その後、現在まで 38 年間にわたり継続して開催されている。人形劇フェスタ 2016 は、6 日間の開催中、上演会場 130、上演ステージ 450、運営参加の市民ボランティア 2,500 人、観客延べ 45,000 人であった。

人形劇フェスタの基本理念は「みる 演じる ささえる わたしがつくるトライアングルステージ」というキャッチフレーズに示され、「みる人・演じる人・そしてこの祭典を支えるすべての人が、誰に強制されることなく主体的にかかわってつくりあげる活動である」（いいだ人形劇フェスタ 10 周年記念誌編集委員会，2009：87）と説明している。人形劇フェスタの特徴は、市内全地区の地区公民館および分館を中心に行われる「地区公演」であり、先に挙げた 2,500 人の市民ボランティアの約 5 分の 4（1,900 人）は、地区公演に携わる地区公民館や分館の役員および地区の諸団体の住民である。彼らは、参加証ワッペンをそれぞれ 700 円で購入し、ボランティアとして公演の企画・運営の業務にあたる。

人形劇フェスタが「地区公演」によって市内全域にわたる広域開催と多くの市民の参加を実現させたのは、飯田市では、旧町村に設置されていた町村公民館を合併後は地区公民館として存続させるなかで、住民による活発な活動が行われていた地区公民館を活用したことが大きな要因であると考えられている。飯田市の公民館活動に関心を寄せる社会教育研究者らは、飯田市の公民館活動への市民の相対的に主体的な取組みを評価し、人形劇フェスタを代表する市民の文化に対する活動力を育んできた 1 つの要因が公民館であったと述べている（白石，2011：84-85；佐藤，1989：182-185）。そしてまた人形劇フェスタ実行委員会は、この活動への多く住民を含めた市民の参加を人形劇フェスタの理念に示した「主体的」参加と捉えている。

しかし果たして真実はどうなのか。「みる 演じる ささえる」という多彩な参加形態、また、地区公民館や分館役員としての地区公演実行委員・有志としての通称本部実行委員・その他学校や飯田市婦人会など諸団体に属した参加と、多様な参加を可能にしている人形劇フェスタにおいて、「主体的な市民参加」の実態は、“市民”の視点を組み入れ、“市民”の実態を把握したものであったといえるのか。特に、2,500 人の運営に携わるボランティアのうち、その 5 分の 4 を占める地区公演実行委員会にたずさわる住民の実態を捉えていないのではないのか。筆者は約 20 年間にわたり本部実行委員会に参加し、役員等も引き受ける立場で人形劇フェスタにかかわってきたが、人形劇に関心を持ち自らの意志で参加する本部実行委員と地区公演実行委員の住民との間に違いを感じ、「市民の主体的な活動」と

いう人形劇フェスタの評価に対して違和感を抱いていた。

本論の目的は、この疑問に対し、いいだ人形劇フェスタが他に類を見ない市民の参加を維持しながら 38 年間にわたり継続開催されている実態を、住民の立場から解明することである。と同時にこの過程は、日本社会における「市民」の意味を問い直す作業となるであろう。

なおここで、本論で分析概念として用いる「市民」と「住民」の語の意味について触れておく。「市民」の語は、飯田市内に居住するすべての「市民」を総体として捉え、抽象的に指標する場合に用いる。これに対して「住民」と呼ぶ場合には、飯田市内の特定の地区（本論で集落と呼ぶところの基礎的地域社会）に居住する「地区住民」を意味する。すなわち、「市民」は飯田市の全ての地区住民を指し、かつ地区との関係を捨像した概念であり、「住民」は、地区で生活し、地区で活動する「市民」と概念される。

本研究の分析より、市民が本当に主体的に参加しているとするならば、他に類を見ない事例として、他の地域での同種の活動を興す有効な指針を提供できると考える。また、市民参加が主体的でないとしたら、主体的参加ではない活動が、なぜ全市域に広がる多くの住民の参加を継続的に実現させたのか。そのメカニズムを解明することで、近年の生活様式や価値観の多様化、少子高齢化等によって多くの地域社会で地域自治の存続が困難になっている現在、今後の地域社会への住民参加を考えるための指針を提案できるものとする。

住民の人形劇フェスタへの参加実態の分析にあたっては、次の 3 つを課題とした。1 点目は、行政の人形劇カーニバル飯田・人形劇フェスタへの取組みと住民との関係である。人形劇カーニバルは、市民の地域活動への参加を通したまちづくりをねらいとして行政主導で開始された。人形劇カーニバル・人形劇フェスタの歴史は、飯田市の文化政策への取組みの側面を現している。行政の理念および具体的な取組みと、市民の人形劇カーニバル・人形劇フェスタへのかかわりの関係について考察する。2 点目は、市民の運営への参加についてである。1,900 人におよぶ住民の地区公演へのボランティアスタッフとしての運営の参加を可能にした公民館システムを明らかにするとともに、公民館システムの活用がなぜ成功したのかについて、地区公演を支える分館と集落との関係から考察する。3 点目は、市民の観劇への参加についてである。日本で最大といわれる人形劇の祭典が 38 年間継続開催されてきた背景に、観客の存在があり、その数は 45,000 人にのぼる。これまで市民の文化活動の検証において観客の参加に注目することはなかったが、観客の確保が出来なければ芸術活動の継続開催は不可能であり、観客参加に関する考察はいいだ人形劇フェスタだけでなく各地の文化活動を考えていくうえでも重要な課題であるとする。

論文の構成

上記の研究目的および分析の視点に沿って、本論は、以下のような構成をとる。

第1章では、まず本論の事例となる飯田市の概要をまとめ、あわせて、人形劇カーニバルおよび人形劇フェスタが飯田市に成立し根付いた要因を、住民による伝統芸能の伝承に焦点を当てて飯田市の文化的背景から検証する。

第2章では、飯田市が人形劇カーニバル・人形劇フェスタを、まちづくりを目指した文化行政のなかにどのように位置づけてきたか、そして、その動きのなかで市民は人形劇カーニバル・人形劇フェスタにどのようにかかわってきたのか、人形劇カーニバル・人形劇フェスタの担い手を、行政・飯田市外の人形劇団関係者を中心とする劇人・通称本部実行委員会の構成員である市民（地域社会との関係ではなく、個人の意思で参加する市民）、地区公演を支える住民の4つの範疇に区分し、それぞれの関係を軸に、38年間の4期に分けて分析する。

第3章では、住民が取り組む公民館活動に関して、公民館研究の中心を占める社会教育学の研究成果を概説し、本論文の目的である人形劇フェスタひいては飯田市の公民館活動とそれを支える住民の関係性を、地域社会に着目して分析することの意義をまとめる。

第4章では、地区公演の運営への住民の参加について、三層構造の公民館システムを活用した住民の運営への参加の実態を明らかにする。飯田市の公民館は、「飯田市公民館－地区公民館－分館」の三層構造をなしているが、人形劇フェスタは、この三層構造の公民館システムを活用することによって、市内全地区での地区公演の開催を可能にするとともに、住民の人形劇フェスタへの参加を拡げ、1,900人におよぶ運営参加を可能にしたと考える。この多くの住民の参加を実現させたメカニズムを明らかにする。

第5章では、人形劇フェスタひいては飯田市の公民館活動とそれを支える住民との関係性を集落＝区の地域社会の視点から解明する。人形劇フェスタが多くの住民の参加を実現させた背景には、飯田市では集落を基盤とする伝統的地域社会があることが大きく影響していると考えられる。そこで、特に住民にとって最も生活に密着している分館活動と地域社会の関係に着目し、公民館活動として取り組む人形劇フェスタへの住民の参加の実態を伊賀良地区の集落＝区の調査より明らかにする。

第6章では、人形劇のまち飯田市において、その中核を占める人形劇フェスタはどの程度市民に浸透しているのか、市民は人形劇フェスタをどのように受け止め理解しているのか、「みる・演じる・ささえる」なかでもっとも多くの市民の参加がある観劇参加の側面からその実態を分析し、市民への人形劇フェスタおよび人形劇の浸透について考察する。

分析は、観客の多くを占めると推察できる幼稚園・保育園の園児を持つ保護者を対象としたアンケート調査の結果より行う。20歳代～40歳代が大半を占める保護者のうち飯田市出身者に関しては、自分自身の幼少期から現在に至るまでの人形劇カーニバル・人形劇フェスタへの参加と現在の観劇参加との関係についても分析し、35年以上継続開催されてきた人形劇カーニバル・人形劇フェスタの市民への浸透について考察する。また、観客には多くの子どもが含まれるため、子どもや保護者に影響を与える幼稚園や保育園の保育活

動への人形劇の取り入れや園の人形劇フェスタへの意識が、市民の観劇参加にどのように関係しているのかについても考察する。

以上の考察を踏まえ、終章では、住民の視点から人形劇フェスタへの市民参加の実態をまとめ、今後のまちづくりに向けた課題を明らかにする。

第1章 飯田市の概要と人形劇フェスタ

はじめに

本章では、本研究のフィールドとなる飯田市の概要と歴史を本論との関わりにおいて説明する。まず、全国そして海外から数多くの人形劇団が参加する国内最大の人形劇の祭典いいだ人形劇フェスタが開催されている飯田市について、地理的、社会的特徴を中心に都市の概要をまとめる。あわせて、人形劇フェスタの特徴である地区公演がかつての村や集落である区を基盤とする分館を中心として開催されていることから、飯田市の集落を中心とした文化的風土を江戸時代後期まで遡り、集落において東西の都から伝播され村人が演じるようになった人形芝居や歌舞伎、また、飯田市周辺の高森町瑠璃寺から各集落にひろがった獅子舞を中心に取り上げて明らかに、芸能と村人のかかわりの観点から、飯田市で人形劇フェスタが開始され多くの住民の参加を得て 38 年にわたって継続開催されている要因をその文化的背景から明らかにする。

1 飯田市の概要

(地理)

飯田市は、長野県南部、南アルプスと中央アルプスの間を南北に伸びる伊那谷の南に位置する。3,000 メートル級の山々が連なる両アルプスと伊那谷に沿って流れる天竜川は、南信州を代表する観光地となっている。



図 1-1 飯田市の位置 (出典：飯田市「飯田市の概要」)

(交通)

飯田市は、かつては東西の都をつなぐ主要な街道の要の地であったが、現在は、交通インフラが進んでいない。県北部に位置し新幹線の駅を有する県庁所在地の長野市や、県中

央部に位置し新宿、名古屋に特急電車につながり、飛行場も有する松本市と比べると、飯田市は 1975(昭和 50)年に開通した中央自動車のみが県外への主要な交通手段といえる。市外、県外への移動ばかりでなく、市内の日常的な移動においても自家用車の使用に頼らざるを得ないことが多く、飯田市の人口一人当たりの自動車所有台数は、0.632 台で全国 6 位(2016 年 3 月時点)である(一般財団法人自動車検査登録情報協会「マイカーの世帯普及台数」)。

(気候)

気候は、中央高地式気候と太平洋側気候を併せ持つ。寒冷な長野県内では最も温暖で、冬季に真冬日になることは少なく、また年間を通して日照時間が長い。人形劇フェスタが開催される夏は猛暑日になることも多いが、昼夜の気温差があるため過ごしやすい。

こうした気候の特徴や、天竜川の両岸に広がる河岸段丘の地理的な特徴を活かし、稲作の他果樹栽培が盛んで、桃、梨、りんご、柿と多くの果物が栽培されている。また、日照時間の長さを活かした太陽光発電の普及に、行政と NPO 法人が協働の取組みを展開している。

(沿革)

飯田市の市政は、1937(昭和 12)年に飯田市と上飯田町が合併し、飯田市が発足した。その後、現在までに 6 回の合併が行われた。

1956(昭和 31)年：座光寺村・松尾村・竜丘村・三穂村・伊賀良村・山本村・下久堅村が合併。

1961(昭和 36)年：川路村が合併。

1964(昭和 39)年：千代村・龍江村・上久堅村が合併。

1984(昭和 59)年：鼎町が合併。

1993(平成 5)年：上郷町が合併。

2005(平成 17)年：上村・南信濃村が合併。

(地区)

合併前の旧町村は、行政区画の「地区」となり、それまでの地域社会の範域がほぼそのまま保持された。旧町村の庁舎は飯田市の支所(現在は、地域自治振興センター)となった。現在飯田市は、1956(昭和 31)年に合併した座光寺村をはじめその後の合併町村 15 がそれぞれ地区となり、そして、1968(昭和 43)年に市政が施行された当初の飯田市が橋北・橋南・羽場

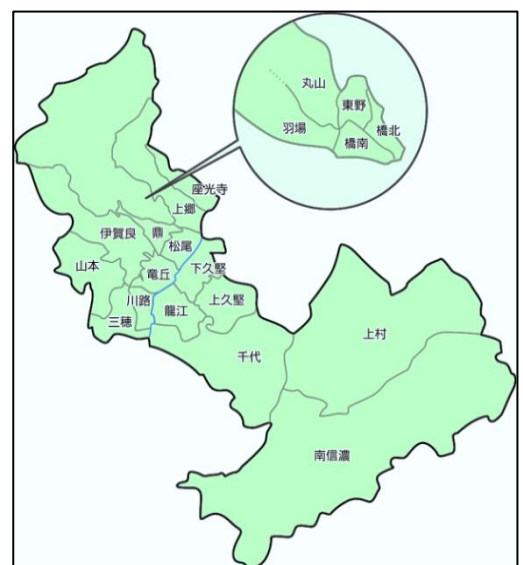


図 1-2 飯田市の地区 (出典：飯田市「地区情報」)

・丸山・東野の 5 つの地区となり、合計 20 の地区によって編成されている（図 1-2 参照）。旧町村をそのまま地区として独立させたことは、伝統的地域社会を基盤にした各地区の自治の確立に大きく影響したといえる。

飯田市は、2007（平成 19）年 4 月から新たな住民自治の仕組みとして「地域自治組織」を導入し、市内の 20 の地区は地域自治区となった。地方自治法によって地域自治区になったことにより、地区に市長の権限に属する事務を分掌させるとともに、住民の意見を反映させつつこれを処理させる機能を地区が有するようになり、組織が変更された。詳しくは、第 4 章の公民館組織で詳述する。

（人口）

人口は 2000（平成 12）年の国勢調査時の 110,589 人をピークに減少傾向にあり、2010（平成 22）年の国勢調査では 5,254 人減少して 105,335 人であった（表 1-1 参照）。合計特種出生率は、2005（平成 17）年には 1.52 まで落ち込んでしまったが、ここ数年は、1.70 前後で推移している。合計特殊出生率は全国や県の平均と比較すると高い率となっているが、少子化傾向に歯止めがかかっているわけではない。

高齢化率は、28.1%（2010 年国勢調査より）である。

15 歳から 64 歳までの生産年齢人口はほとんどの年齢人口が全国平均を下回っており、特に 20 歳から 24 歳の年齢層が低い。これは、高等教育機関が少なく、高校卒業後約 7 割がこの地を離れることが大きな要因と考えられている。

転入・転出の動向は、2000 年ころは転出が転入を 1,000 人以上上回る状況が続いていたが、2005（平成 17）年以降は転入・転出共に減少しながら差は縮小する傾向にあり、2012（平成 24）年以降は、200 人程度の転出超過で推移している（飯田市「飯田市版総合戦略」）。現時点（2016 年 9 月）の世帯数は、39,755 世帯である（飯田市「市勢の概要」）。

表 1-1 飯田市の人口および世帯数の推移

	1980 年	1985 年	1990 年	1995 年	2000 年	2005 年	2010 年	2015 年
人口（人）	109,465	111,009	110,402	110,204	110,589	108,624	105,355	101,522
世帯数（戸）	21,872	26,337	27,198	33,577	35,487	37,350	37,867	39,656

（国勢調査の結果より筆者作成。なお、人口は、現在の飯田市の行政区域に組み換えた数値。）

（産業）

近代までは、養蚕や水引などの伝統産業により発展してきた。水引は、現在、水引製品の国内生産の約 70%を飯田市が製造している。1960 年代以降、先端技術を導入した精密機械、電子、光学のハイテク産業が産業の中心を占めているが、半生菓子、漬け物、味噌、

酒などの食品産業、市田柿、りんご、なしなどの果物やその加工品を中心とする農業なども比較的活発である。

事業所数は、6,411 事業所（民間）。従業者数は、50,841 人（総務省統計局「平成 24 年度経済センサス」）。

農林業に関しては、農家数は、5,021 戸。販売農家は、2,451 戸。自給的農家は、2,570 戸。経営耕地面積は、1,779.38 ヘクタール。（農林水産省「2010 年世界農林業センサス」）

商業に関しては、事業所数は、1,244 事業所。従業者数は、8,092 人。販売額は、22,622,822 万円（経済産業省「平成 24 年 12 月工業統計調査」）である。

（学校）

小学校は、基本的に行政区画の地区に 1 校ずつ設置されている。しかし、旧飯田市であった橋北・橋南・丸山・羽場・東野地区の 5 地区は 3 校が、千代地区には 1 地区に 2 校が設置され、市内には合計 19 校の小学校があり、児童数は 5,644 人である（2015 年 5 月 1 日現在）（飯田市教育委員会「平成 27 年度飯田市教育要覧」）。なお、これらは全て公立学校である。

中学校も全て公立で、市内に 9 校、生徒数は 3,086 人（2015 年 5 月 1 日現在）（飯田市教育委員会「平成 27 年度飯田市教育要覧」）。

1994（平成 6）年、人形劇カーニバル第 16 回開催の年には、教育委員会が市内全小・中学校に人形劇クラブの設置を提案し、学校教育のなかに子どもたちが人形劇を演じる活動が組み込まれ、子どもたちの人形劇カーニバルへの上演の参加が広がった。しかしその後、小学校では特別活動（クラブ）の時間数が減少、また中学校では生徒数の減少によってクラブが精査されるなかで人形劇クラブが消滅する学校もみられ、現在は一部の学校でクラブ活動としての人形劇の取り組みが継続されている。ただし、クラブはなくなったものの、小学校では総合的な学習の時間で人形劇に取り組む学校が多くある。

高等学校は、公立 4 校、私立女子高校 1 校の計 5 校で、生徒数は 3,710 人（2015 年 5 月 1 日現在）（飯田市「飯田市のプロフィール」）である。

高等教育機関は、私立短大飯田女子短期大学が 1 校あり、2013 年ごろまでは、幼児教育学科の学生を中心とした子ども文化研究会があり人形劇に取り組んでいた。

幼児教育・保育関係は、幼稚園が私立 5 園・公立 1 園の計 6 園、園児数は 514 人。このうち私立幼稚園の 4 園は幼保連携型認定こども園を併設している。保育園は、公立 20 園、園児 1,308 人。私立 15 園、園児 1651 人（2015 年 5 月 1 日現在）（飯田市「飯田市のプロフィール」）。幼稚園、保育園をあわせた就園率は、3 歳以上児保育が 94.5%、3 歳未満児保育が 30.5%、待機児童数は 0 人である¹。

¹ 飯田市保健福祉部作成の、2014 年度の飯田市内の幼稚園・保育所の入園児数等に関する資料より。

以上の複数のデータに表れた数字からは、飯田市は、少子高齢化と人口減少、若者の流出による人口構造の変化が過去数十年にわたって着実に進行し、かつ今後もこの傾向は続くと考えられる。また、周辺の高齢化率が高い町村の合併により、山間地域から市中心部へと子育て世代の移住も増加しつつある。この結果、特に中山間地域の集落では集落機能の低下が生じているが、このような状況にあってもなお、人形劇フェスタに全市域から地区住民が参加し、規模を拡大し続けているという現実を解明する事に本論の関心が向けられている。

2 飯田の文化的土壌

2.1 飯田の伝統芸能

飯田市を中心とする伊那谷南部²（飯田市他下伊那郡 3 町 10 村）の地域は、民俗学や伝統芸能の宝庫と言われている。かつてこの地域に伝播された神事や芸能は、住民が精力的にその享受に励み、観て楽しむ芸能から住民自身が演じて楽しむ芸能となり、そのなかのいくつかは現在に至ってなお継承されている。

鎌倉時代からとも室町時代からとも言われている遠山郷³の霜月祭り、阿南町新野の雪祭り、天龍村坂部の冬まつりなどの神事には、神楽や田楽の古い形がみられ能や狂言などの原点とも言われている。また、飯田市の黒田人形・今田人形、阿南町早稲田の早稲田人形といった人形芝居（人形浄瑠璃⁴）、大鹿村や下条村の歌舞伎、そして、飯田市を中心に 30 にもおよぶ屋台獅子の獅子舞など、年間を通した祭りにあわせて行われる奉納芸能の数は枚挙に遑がない。

飯田は古くから東西を結ぶ交通の要所であった。天竜川の東岸には、江戸から茅野を経て大鹿を通り遠州水窪の山住神社に至る秋葉信仰の道、秋葉街道。天竜川の西岸には、塩尻から飯田を経て根羽を通り、岡崎、名古屋に至る伊那街道、また、木曽の中山道と伊那街道を結ぶ大平街道と清内路道、飯田から新野を経て上津具、名古屋に至る遠州街道が走っていた。こうした街道により、物資の運搬とあわせ文化の伝播が盛んに行われた。東西

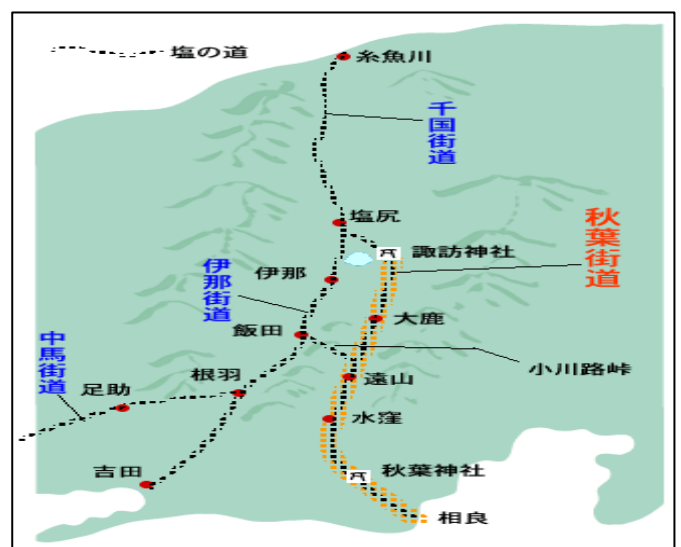


図 1-3 飯田市周辺の街道（出典：遠山観光協会「秋葉街道」）

² 伊那谷南部とは、飯田市と下伊那郡 3 町 10 村を指す。下伊那郡 3 町 10 村は、2016 年 10 月時点の人口は約 2 万 200 人。面積は、12 万 7 千㎡である。

³ 現在の、飯田市南信濃地区・上村地区。

⁴ 太夫の語る浄瑠璃節にあわせて上演する人形芝居を人形浄瑠璃と言う。飯田市を含めた伊那谷の地域に江戸時代以降成立した人形芝居は、ほとんどが人形浄瑠璃であった。

の都に芸能が花開いた江戸後期、飯田は山間の地にありながら、養蚕を中心に経済的にかなり豊かであった（桜井,1985：39-43；大沢,1985：44-48）。そのため、飯田で生産された煙草・和紙・繭・椀・干し柿などが名古屋方面に運ばれ、代わりに関西の人形芝居や三河の花火、また、江戸の歌舞伎が飯田に入ってきた（日下部,1985：120-121）。

人形劇カーニバルが飯田で開始された背景の1つとして、当時の市長松澤太郎は、飯田で育まれてきた風土をあげ、この地が神事芸能、人形芝居、農村歌舞伎など多彩な民俗芸能が伝承されている特異な歴史的風土を持つ土地であること、そして、なかでも人形芝居は、かつて伊那谷全域にわたり20座を超えるほどあり、現在もなお今田人形・黒田人形(飯田市)、早稲田人形(阿南町)、古田人形(箕輪町)の4座が現存することを挙げている（松澤,1992：339）。

また、佐藤一子は、たまたま飯田で始まった人形劇カーニバルが「飯田でなければならない」と自覚されるようになった要因として、市民自身が外部からの文化を受容し育てていくことのできる豊かな文化的土壌をもっていた、すなわち、民俗文化財の宝庫と言われるほど豊富に存在している伊那谷の「土着的民主文化」、特に江戸期以降東西文化の交流支点として栄えた人形芝居（人形浄瑠璃）などの民俗芸能の伝統を現代に継承し、さらに戦後の先進的な社会教育活動、文化運動を通じて市民の能動性が培われてきたことによって耕された文化的土壌があると捉えることができるとし、地域に根ざす文化振興を考える際にこのような文化的土壌がいかに形成されたかと言う問題こそ鍵であることを飯田の事例は示していると述べている（佐藤，1989：163）。

人形劇カーニバルが成立し、それが全市域に広がり、35年を経て継続開催されている文化的背景を民俗文化にまで遡って考えることは、客観的根拠を有しないという指摘があることは予想できるが、上記の佐藤の指摘にもあるように、飯田市の民俗文化的背景は人形劇カーニバル・人形劇フェスタと無関係とは言えないと考える。

そこで本節では、人形劇フェスタが、市民が、運営や演じるという「つくる」側からも、観客として「みる」側からも参加する文化活動であること、また、広く飯田市内全域の地区が人形劇公演の開催に取り組み、35年以上にわたって、住民が運営に携わり、住民が観劇を楽しむ背景には、広く伊那谷一帯に江戸時代より民衆の間で造られてきた伝統芸能や祭りの存在が無関係ではなく、現在も飯田市の風土の基盤に流れているとの想定に基づいて、飯田市の民俗文化の歴史と現状を示し、人形劇カーニバルの成立と住民の参加を得て現在の人形劇フェスタの35年継続開催に至る文化的要因を探る。

2.2 人形芝居（人形浄瑠璃）

飯田市立美術館の調査（飯田市美術館，1991：7）によると、かつて長野県には33の人形座があり、そのうちの29座が上伊那・下伊那両地域にまたがる伊那谷に存在していた。このうち、現在も継承されている人形座が4座ある。北から、上伊那郡箕輪町の古田人形、

飯田市の黒田人形・今田人形、下伊那郡阿南町の早稲田人形である。これらはどれも 300 余年の歴史を持ち、「伊那谷四座」として、現在も地元の神社の奉納上演のほか、伊那人形芝居保存協議会主催の四座合同発表会、人形劇フェスタ、ほか依頼による上演、また小中学校での指導など年間を通して活動を行っている⁵。

伊那谷に人形芝居が伝わったのは天保 4（1647）年、現在の下伊那郡下条村吉岡に名古屋の人形遣い幅下団兵衛が来訪し芝居を行ったのが始まりといわれている（日下部，1974a：5）。その後、現在の飯田市千代地区の人々が自らも演じてみたいと元禄元（1688）年頃人形を買い求めたが、その人形はあまり遣われないまま、宝永元（1704）年に今田（現在の飯田市龍江地区）の観音講の人々に買い取られた（日下部，1974d：16-18）。同じ頃、黒田（現在の飯田市上郷地区）では、正命庵の遊芸堪能な正岳真海が、近隣の若者を集めて三味線や人形を弄んだと伝えられている（日下，1974b：3-8）。



図 1-4 伊那谷の人形座の分布（出典：飯田市美術博物館，1991，『伊那谷の人形芝居』 p 7）

⁵ 松崎行代，2010 年 7 月，「伝統芸能の伝承（1）－今田人形を中心に－」日本子ども社会学会第 17 回大会口頭発表。松崎行代，2011 年 7 月，「伝統芸能の伝承（2）－黒田人形を中心に－」日本子ども社会学会第 18 回大会口頭発表。



図 1 - 5 黒田人形

(出典：伊藤義夫，2001.
『麦島正吉と仲間による黒
田人形覚書』 p162)

また、伊豆木（現在の飯田市三穂地区）に陣屋を持つ旗本小笠原氏、上古田（現在の上伊那郡箕輪町）の豪農唐沢氏らが相次いで人形を買い求め、人形芝居が伊那谷各地で始められた（日下部，1974c：14-16）。当時は素人の物真似の域を脱しない程度のものであったようである。しかし、竹本義太夫や近松門左衛門が活躍し人形浄瑠璃が演劇としてのスタイルと内容を固めつつあったのが元禄や天保の頃であることから考えると、大阪や江戸から遠く離れたこの地に人形芝居が伝播していたのは注目すべきことである。

都で一斉を風靡していた人形浄瑠璃も、明和・安永（1764～80 年）頃になると、歌舞伎の興隆により観客を奪われた。そのような状況のなかで、関西の人形遣い達が生きる場所をもとめ伊那谷に流れ込んだと考えられる。折しも、伊那谷では人形芝居が大人気で、人形遣いを歓待し、師匠とあがめ、その芸の習得に努めた。師匠を得た伊那谷の人形芝居は従来の真似の域を脱し、素人離れした本格的な芸能を楽しむまでに発展した。このように元禄より始まり順次各村に拡がり、最も多くなったのは幕末から明治初年にかけてであった。

村で人形芝居に取り組み始めたきっかけは一様ではなく、後の継承の在り方にまで影響を与えているといえる。現飯田市龍江地区今田の今田人形は、当時、賭け事などの遊技に夢中になる若者らを心配した村の観音講の 10 名の村人が、数年かけて村の全戸から 48 文ずつ、人形や道具を購入するための資金を集め、村の若者の教育活動として人形芝居を始めた（伊藤，2003：44-64）。一方、現上郷地区黒田の黒田人形は、一定の加入金を支払わないと構成員に入れない講の人々が資金を出して人形等を購入し、講を中心に開始した（日下部，1974c：17-19）。そのため、人形芝居をやることができる家の者は村のなかでも一定の財力を有し、人形芝居を行うことは一種のステイタスであった。

ところが一転、明治の末にはそれらのほとんどが廃滅してしまう。その要因は、第 1 に、天保の改革令による「神事祭礼に芝居見物の見せ物禁止の触」である。飯田藩でも天保 12 (1840) 年 7 月、郷村神社祭礼の芝居見物を禁じた。しかしながら前年に新しい舞台を建てた下黒田では、天保 13 年この舞台を使い子ども操ということにして実は若連が人形芝居を行い罰せられた(日下部, 1974d : 14-18)。このような人々の情熱のあるところでは、どうにか藩の規制の網をかいくぐり人形芝居を続ける努力がなされたが、それほどの情熱がなく御触に忠実に従ったところでは、人形芝居が途絶えてしまった。さらに第 2 の人形芝居の障壁は、明治維新後の諸識鑑札制度であった。上演に際しての申請書類の提出や臨検のわずらわしさ、また、安くはない鑑札料を毎年払い続けることの負担から、上演が行いにくくなり人形芝居をやめてしまうところが増えた(日下部, 1974d : 18)。その後、明治 20 年には素人芸人の鑑札はなくなり、素人芝居の流行によって男女問わず舞台に立つようになった。しかし、技術的困難さがある人形芝居よりも、上手下手は別として誰でもとりかかることが出来る歌舞伎(地芝居)は人気が増し、大正時代に活動写真に代わられるまで続いた。古田人形の記録によると、歌舞伎(地芝居)を演じたいという若者と人形芝居を守ろうとする年配者の間での対立が一時期あったことが記されている。

人形芝居は天保以来支配者らのさまざまな抑圧にあい、そのたび人々の人形への情熱がかいくぐってきたが、最終的には、明治時代に入り歌舞伎(地芝居)に心を傾けた若者の意思にとどめを刺された形でほとんどが終息してしまった(飯田市美博物館, 1991 : 56-57)。

こうした歴史を背負いながらも、現在飯田市内には、上郷地区黒田の黒田人形、龍江地区今田の今田人形の 2 つが保存会を結成し活動している。かつては、今田人形ではかつての村=集落の若者組・青年団を中心に、いわば村=集落の若者の社会教育の場として、また、黒田人形では、村=集落内の講を構成する家の者だけが参加できる講組の形態で人形芝居が継承されてきた。しかしながら、昭和 50 年代に入ると、会社勤務の増加等生活様式の変化や価値観の変化などから、伝統人形芝居に参加する人が減少し、継承が大きな課題となった(日下部, 1981 : 8-11)。そこで両人形芝居とも居住地や年齢、性別等の参加条件を撤廃し、広く参加者を受け入れるようになった。

人形劇カーニバルが飯田市で開催されるようになり、今田人形と黒田人形は人形劇カーニバル・人形劇フェスタの伝統人形芝居分野の中心に位置づけられ、人形劇カーニバル 10 周年を記念して姉妹都市提携を結んだフランスのシャルルヴィル・メジエール市の世界人形劇フェスティバルや、人形劇フェスタ 10 周年を記念して提携した台湾雲林市の雲林人形劇フェスティバルに今田人形が招聘された。また、地元学区の小学校・中学校と連携を取り、特別活動や課外クラブ、有志の子どもたちへの稽古など積極的に子どもたちへの指導を行い、地元の伝統芸能である人形芝居への関心の拡張をねらうなど、一時衰退傾向を見せていた 2 座の活動が活発になっている。

現在は、上郷地区黒田の下黒田神社、龍江地区今田の大宮八幡宮の祭典他、人形劇フェスタを中心とした市内のさまざまな文化祭典等での公演を、各座とも年間 30 公演程を行っている⁶。

2.3 歌舞伎（地芝居）

17 世紀初め出雲阿国によって始まったとされる歌舞伎は、元禄時代にさしかかる頃その形が整い、江戸に荒事の演技で名を売る市川団十郎、西に恋愛劇に巧みな坂東藤十郎という名役者が登場し、歌舞伎役者が地方巡演にも出演するようになった。伊那谷にも、天保年代、江戸から当時名優と言われた歌舞伎役者の一座が来演した。天保 2（1831）年には五代目岩井半四郎が飯田村に、さらに天保 5（1834）年 10 月には三代目尾上菊五郎（音羽屋）一座 77 人が下川路村（現在の川路地区）で 13 日間の興業をした、また、天保 12（1841）年 7 月には七代目市川団十郎（成田屋）一座 72 人が同じく下川路村で 10 日間の興業を行った（今村，2002：3-9）。江戸の名優たちの度重なる来演は、当時江戸の金座で幕府の金改役並に造幣方を勤めていた後藤三右エ門の義兄である関島光広の働きが大きかった（日下部，1985：121）。下川路村では、10 間に 8 間の回り舞台を建設し、名優を迎える準備を行った。下川路村での公演は 2 公演とも赤字であったが、続いて弘化 3（1846）年四代目坂東三津五郎を、翌弘化 4（1847）年には坂東三津太郎を招いて興業を行った。こうして江戸歌舞伎の名優を次々に招いたため、歌舞伎界に伊那谷の名が知られ、明治時代以降は、東京のみでなく関西歌舞伎の名優も続々と来演するようになり、飯田町には明治 12（1899）年に歌舞伎座という大劇場が建設された（日下部，1985：122）。

天保以来度重なる名優の巡演により飯田をはじめ伊那谷の人々の歌舞伎熱は高まり、村々の神社に舞台が建てられ、氏子の若連が師匠を招いて半月、20 日も稽古をつけてもらい、歌舞伎（地芝居⁷）の上演を行うようになった。回り舞台のある大規模な舞台ではなくても、社務所や集会所を兼ねた平舞台はどここの神社にも建てられた。明治 10 年過ぎになると、飯田町だけで半分職業的な芝居集団が 5・6 座もでき、遊芸稼人という鑑札を受け、村々の祭りに買われて上演を行った（日下部，1985：122-123）。

こうして人形芝居と拮抗するように誕生し活発に行われるようになった歌舞伎（地芝居）も、人形芝居同様、ほとんどの集落で、明治になって出された鑑札や、坪内逍遙に始まる

⁶ 2010 年、筆者が黒田人形座座長高田正男氏、今田人形座座長澤柳太閤氏に行った聞き取り調査より。

⁷ 地芝居とは、地方の人々によって行なわれる歌舞伎芝居のこと。地狂言、草芝居、村芝居、田舎芝居と同じ。農閑期や祭礼などの際にその土地の若者を中心に演じられてきた。古くからあったが、文化文政期（19 世紀初頭）に普及し、江戸末期から明治にかけて最も盛んであった。

新劇運動や映画の隆盛により若者の関心が薄れ活動は廃絶していった。その中にあって、現在も継承されているのは、飯田市近郊の大鹿歌舞伎（下伊那郡大鹿村）、下条歌舞伎（下伊那郡下條村）の2座である。なかでも、近年、大鹿歌舞伎は映画やテレビドラマの題材に選ばれたことで注目を集め、春秋の年2回行われる村内の神社での奉納上演は、境内を埋め尽くすほどの観客が県外からも数多く参集している。また、どちらも村内の小学校で子どもたちへの伝承活動を行い、地域の伝統文化の理解と継承に取り組んでいる。

2.4 獅子舞

そうしたなか、人形芝居や歌舞伎には手が届かないが、獅子舞なら道具も安く手軽にできて村の祭礼行事として禁止令にもかからないと、歌舞伎（地芝居）を捨て獅子舞を始める村の青年たちが現れだし、村の芸能は流行に流され再び次のものへと代わっていく。

飯田市を含む下伊那地方は、上述のように、古から芸能の盛んなところであるが、中でも、飯田市を中心とした平野部には獅子舞が数多く分布し、現在30を超える獅子舞がかつての村である集落＝区を中心に行われている。これらの獅子舞は、形態的にはいずれもいわゆる「二人立ちの獅子」に属するものである。すなわち、大振りの神楽獅子系統の獅子頭に胴幕（ホロなどとよぶ）を垂らし、その幕の中に2人ないしは3人以上の者が入って獅子を舞わす形のものである。飯田地方には、同じ二人立ちの獅子舞に改良を加えた胴幕の中に囃子方を入れて獅子が行道する「練り獅子」とか「屋台獅子」と呼ばれるものがあり、大神楽の舞を主として演じる二人立ちの獅子舞「大神楽獅子」と勢力を半ばして分布している。この屋台獅子は、全国にここ飯田地方にのみ存在すること、また、これだけの数の獅子舞がこの地域に集中してあることは、注目すべきである（三隅、1986：63-68）。

これらの獅子舞の源は、飯田市に隣接する下伊那郡高森町大島の瑠璃寺の獅子舞とされている。この獅子舞は、天永3（1112）年、寺建立の際、滋賀県坂本の日吉神社の獅子舞を伝承して催されたのが起源とされている。現在の獅子舞は、宇天王と獅子、そして警護の猿と赤鬼、青鬼である。獅子の行道は、まず宇天王が眠っている獅子の前に立って獅子を起こす、獅子が目を覚まし暴れだす、それを宇天王が鎮めるというものである。この形は、江戸末期頃固定化され現在に至っているようである（三隅、1986：68-78）。

この瑠璃寺の獅子舞が近隣の村＝集落へ伝播したのは明治になってからである。この時期になって飯田の各村＝集落地区に広く伝播されたのは、前述した人形芝居および歌舞伎が鑑札や経済的な問題から各村＝集落で継承しにくくなったことが大きな要因であった（三隅、1986：183-184）。

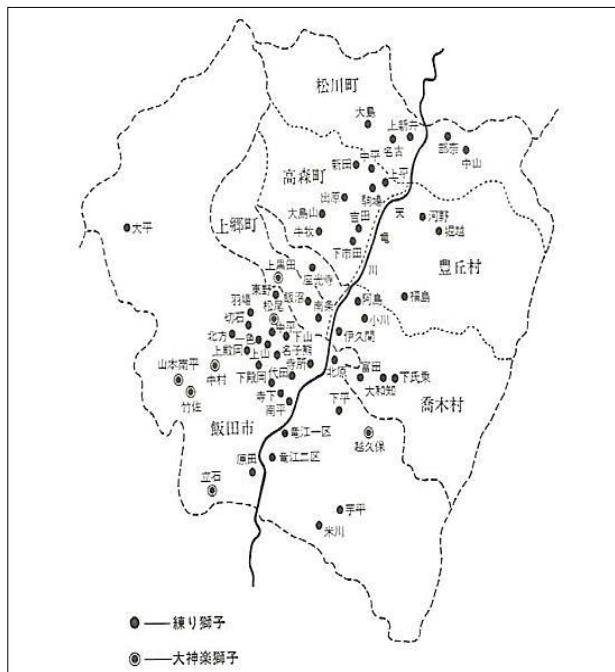


図 1-6 獅子舞の分布

(出典：三隅治雄，1986『芸能のパノラマ』p67)



図 1-7 屋台獅子

(出典：三隅治雄，1986『芸能のパノラマ』p92)

そして、その伝播において、既存の形をそのまま教えたり、教えられたそのままを受け入れたりせず、必ずなにか一工夫して自分たちのオリジナリティを出したものにしているところに、飯田の人々の独自性と芸能への情熱が表れている。つまり、瑠璃寺から下伊那郡高森町牛牧への伝授においてわざわざ違うお囃子を考案して教えたり、また、人形芝居や歌舞伎が盛んな時代には、宇天王の代わりに浄瑠璃「菅原伝授手習鑑」の松王・梅王・桜丸を練り獅子の引き手になって登場させるように変えたり、また、オカメやヒョットコが獅子の行道に先駆してこっけいな振りを見せるような付け加えをして村＝集落ごと自分たちの獅子舞を生み出している。

そしてまた、「お練祭り」があったことが、獅子舞、特に屋台獅子の伝播を広く勢いづかせたことは確かである（三隅，1986：88）。「お練祭り」は、飯田市街地北端の大宮諏訪神社で、寅年と申年に行われる式年例祭の際に開催される。これは、江戸時代飯田藩主脇坂守が同神社を深くあがめており、社殿再建（慶安 4・1651 年）にあわせて、獅子や田楽、歌舞音曲を取り入れた盛大な祭りを始めたのがきっかけで始まった。江戸時代は屋台や山車、神輿、子どもの踊り、お囃子などが各村＝集落から出されていたが、時代により出し物に変化してきた。2016（平成 28）年 3 月 25～27 日の 3 日間にかけて行われた「お練祭り」には、計 47 団体が参加、そのうち獅子舞は 31 団体、このほか、大名行列、踊り、太鼓、長持行列も含まれていた（飯田お練り祭り実行委員会「平成 28 年お練り祭り参加・協賛団体」）。

なかでもひととき注目されるのが、東野（飯田市東野地区）の大獅子と本町 3 丁目（飯

田市橋南地区)の大名行列である。大名行列は、火災による屋台焼失に伴い新たに大名行列の道具を購入し、明治5年より演技を披露するようになった。東野地区は諏訪大宮神社の御膝もとの地区としてこれに対抗し、何か目先の変わった世間をあっと言わせる出し物と考え大獅子を制作し登場させたのが始まりである。当初、張りぼてで作った5尺4寸の大獅子が大評判となり、その後1920(大正9)年の御大典を機会に本獅子を名古屋の業者に制作を依頼し現在に至っている。東野地区と同様、市内の集落＝区の住民は、自身の集落＝区の獅子が一番目立つすばらしい出し物となるよう切磋琢磨した。その競争のなかで獅子が大型化し、屋台獅子が飯田の地域一円に広がっていった。こうして獅子舞は、大正ごろ最も隆盛を博したが、その後は衰退し、昭和40年代後半(1970～75年)には休止が相次ぐようになった。

しかしながら、平成に入り、再び集落＝区で活発な取組みが展開されるようになる。なかには、新たに獅子を作り住民が獅子舞に取り組み始めるところもみられるようになった。飯田市鼎地区では、休止していた1区＝集落の獅子舞が昭和63(1988)年に復活、1994(平成6)年に獅子舞の無かった区＝集落に獅子舞が新設され、現在10区＝集落中7区＝集落で獅子舞が行われている。2007(平成17)年には、人形劇フェスティバルと友好提携を結ぶ台湾の雲林県の人形劇フェスティバルに鼎地区中平区＝集落の獅子舞が招待され参加した。これを機に、2008(平成20)年より鼎地区で南信州獅子舞フェスティバルが開催されるようになった。3回目を数える2010(平成22)年には、第13回全国獅子舞サミットが飯田市市街地で大々的に開催され、以後毎年開催されている。2015(平成27)年の第7回は、獅子舞22団体(このうち鼎地区の5団体は子ども獅子もあわせて出演している)、太鼓2団体の参加があった(南信州獅子舞フェスティバル実行委員会、「第7回南信州獅子舞フェスティバル参加団体」)。

2.5 人形劇フェスタ成立の文化的背景

伝統芸能の宝庫といわれる伊那谷・飯田の伝統芸能を代表する人形芝居(人形浄瑠璃)、歌舞伎(地芝居)、獅子舞をとりあげ、その歴史的変遷をみてきた。その結果、江戸時代中期以降に誕生したこれらの3つの芸能は、世代交代を繰り返すようにして、人形芝居、歌舞伎、獅子舞、そして現在の人形劇フェスタに至るまで、一つの流れとしてつながってきていることがわかる。その流れは、飯田の人々の、新しく面白いものへの志向と、観ることと合わせ自分たち自身が演じて楽しむことへの志向に強く影響されるなかでの変遷であったといえる。

三隅治雄は、民俗芸能は実は早くて30年、遅くて40～50年を1周期として盛衰を繰り返すと考えられ、その点からみて、昭和30年代以降、獅子舞が衰退した後に、飯田に新たな芸能が育っていないことに対し不安感があると指摘している(三隅：1986,103)。三隅が危惧した昭和30年代以降、市民のなかに生じた新たな芸能が人形劇の祭典人形劇フ

ェスタであったといえる。人形劇関係者のお祭りを開催したいと人形劇関係者が飯田市に依頼したことから開始に至った人形劇カーニバルが、市民・人形劇人・行政の3者で取り組み、20年をもって終了した後には、この祭典を絶やしてはいけない、自分たちの祭りとして新たな形で継続していこうという市民の働きによって人形劇フェスタが誕生し今日に至っている。この38年間の経緯は、まさに江戸時代の人形芝居や歌舞伎に取り組み、自分たちの村に新たな芸能を生み出した歴史に通じるものがあると考えられる。また、多くの人形劇関係者が飯田に集まることで開始された人形劇カーニバルを、原形は保ちながら自分たち地区住民のお祭りにしてしまう点は、瑠璃寺の獅子舞が各地に伝播される中で各地区が一工夫を凝らし、あらたな特色をもつ自分たちの村の獅子舞を創造したのに通じていて妙である。

また、人形芝居も歌舞伎もそして獅子舞も、飯田のほぼ全域の各地区の集落＝区に分布していたことから考えると、かつての村である集落＝区がお互いに意識しあい、他の村で面白いことをやっていたら自分たちの村も取組み、他の村よりも良いものをつくりだそうとする文化・芸能に対する意欲と切磋琢磨する対抗意識があったことがうかがえる。このようなかつての村である集落＝区のまとまりと対抗意識があったことが、地区住民の新たな芸能への積極的な取り組みやと継承を生じさせたと考えられる。

平成の時代に入り、鼎地区を中心に再び盛り上がりを見せる獅子舞は、飯田旧市街地に本部を置く人形劇フェスタからの刺激を受けていることは十分考えられる。また、同じ鼎地区において、獅子舞が無かった区＝集落があらたに獅子舞を作り取組み始めた動きは、まさに大正時代獅子舞全盛期当時の、飯田地域全体への伝播に重なる動きであると考えられる。

また、人形劇フェスタの地区公演においても、市内全20地区の集落＝区において開催され、住民が運営し住民が観劇して楽しむ、自分たちの集落＝区の夏の行事として取り組む姿は、芸能への関心や観劇の楽しみを住民皆で楽しもうとする姿勢、そして、他の集落＝区がやるならば自分たちの集落＝地区もやるという、集落＝区同士がお互いを意識し合う関係にある伝統的な地域社会の関係性が今に通じていることも考えられる。

以上の点から、市民文化活動である人形劇フェスタが、この飯田の地に38年継続して開催され、伝統の域に至るようになった文化的要因を整理すると、次の2点が明らかになった。

- ①伊那谷南部に位置する飯田市の人々はかねてより芸能への関心が高く、来飯した芸人をもてなすとともに、観ることも、演じることも村＝集落の住民自らが楽しみ、新たな芸能を根付かせていく気風がある。
- ②かつての村である集落＝区を単位としたまとまりがあり、地区住民がそろって芸能に取り組む伝統が培われており、かつ、集落＝区の相互の対抗意識があることで、集落＝区ごとで取り組まれる芸能・文化活動が積極的に展開される。

以上の2点を、現在の人形劇フェスタにかかわる住民の姿に結びつけてみると、①に関しては、全国から参加する劇団を集落＝区で取り組まれる地区公演で受け入れ、単に上演を行うだけでなく終了後に交流会を実施するなど飯田にやってきた外からの人々を受け入れ、もてなす姿勢があること。また、観客がいることで文化イベントは成立するが、人形劇を観ることを楽しむ住民が多数存在することで、地区公演による広域開催を可能にした。②に関しては、集落＝区という地域社会のつながりが強いことで地区公演が成り立ち、しかも、地区住民の集落＝区への帰属意識が集落＝区間の対抗意識を生み、より楽しい祭りという向上の意識を強めたことで、継続を可能にしたと考察できる。こうした点より、本論において市民文化活動による地域づくりを考えるうえで、かつての村である集落＝区レベルの地域社会に視点を置いてその実態を捉えて分析することは、人形劇フェスタが38年間継続し、なお発展を続けている実態を理解するうえで重要であったと言える。

3 いいだ人形劇フェスタの概要

3.1 理念

いいだ人形劇フェスタは、「みる 演じる ささえる わたしがつくるトライアングルステージ」を理念として掲げ、これを祭典に関わる一切の活動の中核に置いている。「人形劇フェスタは、みる人、演じる人、そしてこの祭典にかかわる人のすべてが、誰に強制されることなく主体的に関わってつくっていく市民の文化活動である（いいだ人形劇フェスタ10周年記念誌編集委員会，2009：87）」ことが、この一文に表われされている。初代実行委員長である高松和子は、「演じる」という創造活動とあわせ、「みる」という行為を行う観客も舞台芸術を成立させる一要因として、そして「ささえる」活動も祭りを企画運営する創造活動として、人形劇フェスタをつくるのはこの活動に参加する一人ひとりであるという意味合いが込められていると述べている（いいだ人形劇フェスタ10周年記念誌編集委員会，2009：88）。

人形劇フェスタの前身である人形劇カーニバル飯田は、市民参加のまちづくりをねらい行政主導で始められ、市民⁸・劇人⁹・行政の三者によって運営されていた。1979（昭和63）年に開始された人形劇カーニバルは20年を迎えた1998年に終了となり、翌年、市民によって企画運営される新しい人形劇の祭典いいだ人形劇フェスタとして新たなスタートを切って今日に至っている。

人形劇フェスタは、有志で参加する市民によって組織されたいいいだ人形劇フェスタ実行委員会が企画運営を担い、教育委員会組織内に位置する飯田文化会館人形劇のまちづくり係

⁸ なお、第2章で、この市民が一樣ではなく、地区公演の開催を支える住民を別の範疇で捉えることができることについて論じる。

⁹ 人形劇カーニバルおよび人形劇フェスタでは、人形劇団関係者を「人形劇人」略して「劇人」と呼んでいる。



図 1-8 いいだ人形劇フェスタの理念と内容の概観図

(出典:『いいだ人形劇フェスタ 10 周年記念誌 つながってくー人形と歩んだ 30 年ー』p91)

図 1-8 は、人形劇フェスタ実行委員会が作成した、いいだ人形劇フェスタの理念と内容の概観図である。

実行委員会では、人形劇フェスタの理念にある「みる人も、上演する人も、運営にあたる人も、どのような参加形態においても、主体的にかかわって祭りをつくる」を具現化する象徴として、参加証ワッペンを取り上げている。参加証ワッペンは、観客、上演者、運営スタッフとしてこの祭典に参加する者は購入が求められ、期間中、各会場での着用が必要となる。参加証ワッペンは、この祭典の考えに賛同し、この祭典のづくり手である意志を表すものとして、実行委員会では位置付けている。3 歳以上一律 700 円で、本部が置かれる

飯田文化会館、飯田市民公民館と市内 20 地区の地区公民館、市内のプレイガイドを有する書店等で販売するほか、市内の保育所および幼稚園のなかには園児および保護者等の購入

が事務局として市民の活動を支えている。前身の人形劇カーニバルは市民・劇人・行政の三者が実行委員会を組織し、市民はそのなかで 3 本柱の一角を担っていた立場とは大きく異なり、人形劇フェスタは、市民が考え、提案し、協議して、皆の賛同を得られれば、皆でその提案の実現に向けて取り組む市民文化活動となり、行政はあくまでも裏方で、市民が組織する実行委員会に対し情報の提供を行ったり、企画運営に関する実務を担うこととなった(いいだ人形劇フェスタ実行委員会 30 年記念誌編集委員会, 2009 : 87)。



図 1-9 参加証ワッペン(2016 年版)

を取りまとめている園もある¹⁰。

このような実行委員が唱えるところの「市民の主体的関わり」が実態としてどのようなものであるのか、さらにそこで意味されている「市民」とはだれであるのかについては、第5章で考察することにして、本章では、人形劇フェスタの主催者の公式見解として公表されている実行委員会の見解を記述するにとどめる。

3.2 事業内容と目標

実行委員会は、図 1-8 に示したように、いいだ人形劇フェスタの事業内容を、「みる 演じる ささえる わたしがつくるトライアングルステージ」で示された理念のもと、①公演、②交流、③研鑽と大きく3つを置き、事業の実施を通し、人形劇の普及と向上、地域文化の振興、まちの活性化、そして、住民の豊かな心が育まれていくことを目標として掲げている。以下、いいだ人形劇フェスタ実行委員会が編集した10周年記念誌『つながってくー人形たちと歩んだ30年ー』（いいだ人形劇フェスタ30周年記念誌編集委員会, 2009）を参考に、人形劇フェスタの事業内容をまとめる。

3.2.1 公演

・目的別 A・B・C タイプの設定

実行委員会は、人形劇フェスタの中心は人形劇の公演であるとしている。そして、公演を A・B・C の3つのタイプに設定している。

A タイプは、プロ劇団が意欲的な作品を紹介することを目的とした公演で、会場および参加証ワッペンその他に必要となる有料チケットの価格を劇団が設定する、いわゆる劇団の自主公演型の公演である。

B タイプは、実行委員会がすぐれた作品を観客の紹介・提供することを目的に実施する公演で、B タイプ上演参加に応募した劇団（作品）から実行委員会が選考する。先行された劇団（作品）は、飯田文化会館や飯田人形劇場、飯田市公民館など市街地の公共施設で上演される有料公演、および、地区公演として参加証ワッペンのみの上演をおこない、市街地から離れた周辺部の集落＝区の地区住民を中心に観劇してもらう。これは、全市民に対し一定の芸術性を持つ作品観劇の機会を平等に保障したいという実行委員会の配慮である。

C タイプは、プロ・アマチュア問わず、自主参加により誰でも上演参加することができる公演である。全国から参加するアマチュア劇団は C タイプでの上演参加となる。また、プロの劇団でも、いわゆる上演料なしで「手弁当」での上演参加を希望し、人形劇フェスタに参加する劇団もある。そうした劇団のなかには、例えば、地区公演での上演終了後の

¹⁰ 幼稚園や保育園と人形劇フェスタとの関係については、第6章で詳述し、参加証ワッペンの取扱いに関しても採り上げている。

地区住民との交流会を楽しみにしている場合や、地区公演で企画された寺社など特別な空間での上演を楽しみにしている場合もある。また、飯田市内の小学校・中学校では授業や課外活動として人形劇に取り組む学校が多くあり、そうした子どもたちの人形劇団や、NPO 法人いいだ人形劇センターや保育士の人形劇講習会など市内で開催される人形劇の講習会受講者や、その他市民によって結成されたアマチュア劇団などの参加がみられる。

実行委員会は、上記の A・B・C の 3 つのタイプを設定する目的を、プロの劇団の収入への配慮、上質な作品の確保と市民への提供、劇団に上演機会を提供する事での劇団の研鑽と上演者および観客のそれぞれの目的が達成されることへの配慮であるとしている。劇団は、それぞれの目的に合わせて、A・B・C タイプを選択し参加登録を行っている。

・全参加希望劇団の受け入れ

人形劇フェスタには、プロ・アマチュア、現代人形劇・伝統人形劇等を問わず、毎年約 250 劇団が上演参加し、開催期間中の A・B・C 3 つのタイプの公演回数は合計 450 公演を数える（表 1-2 参照）。実行委員会は人形劇フェスタの理念に基づき、上演参加を希望する劇団に対しては、その希望を実現させることを基本姿勢とし、上演会場を確保している（ただし、初参加劇団の上演会場は慎重に設定し、評価委員が作品を観劇することとし、観客への配慮もあわせて行っている）。

近年、上演希望劇団が増加傾向にあり、305 劇団の申し込みがあった 2013（平成 25）年度以降、それまでの 8 月第 1 週木曜日から日曜日までの 4 日間の開催（ただし、周年記念を実施する場合は延長。）を火曜日から日曜日までの 6 日間の開催に延長し、公演会場および上演時間が安定的に確保できるよう変更した。

表 1-2 上演参加タイプ別参加劇団数と公演数（2015 年）

上演参加劇団 タイプ別劇団数 (劇団)		A タイプ	B タイプ	C タイプ	計
	現代人形劇：プロ	24	65	24	113
	現代人形劇：アマ	—	2	92	94
	現代人形劇：学生	—	—	34	34
	伝統人形劇：プロ・アマ	0	3	5	8
	海外劇団：プロ・アマ	0	8	2	10
	計	24	78	157	259
公演数 (公演)	有料公演	42	27	—	69
	ワッペンのみ	—	140	248	388
	計	42	167	248	457

（出典：いいだ人形劇フェスタ実行委員会「2015 年 参加登録・公演等の記録」）

・本部公演と地区公演

人形劇フェスタの公演は、人形劇フェスタ全体の企画運営にあたるいいだ人形劇フェスタ実行委員会、通称、本部実行委員会が企画・運営を担当する本部公演と、地区公民館や分館の役員の他集落＝区の諸団体を含めた地区住民によって組織された地区公演実行委員

表 1-3 公演の種類

地区公演 (75 会場)	<p>担当：地区または会場ごとに設置される地区公演実行委員会（通称、地区実行委員会）。</p> <p>地区公演実行委員会は、地区公民館および分館の役員が中心的なメンバーとなり、その他、PTA や地域の諸団体の住民によって組織される。</p> <p>また、児童養護施設や特別養護老人ホームなどの施設職員が実行委員会を組織し、施設を会場に実施する公演もある。この場合も、施設利用者以外の観劇も可能としている。</p> <p>会場：地区公民館、分館他、地区内の寺社や、保育所・幼稚園・小中学校、老人・児童施設など。なお、これらは全て集落・分館が基盤となっている。</p>
本部公演 (60 会場：文化会館等は会議室 1 室は 1 会場とみなす)	<p>担当：人形劇フェスタ実行委員会（通称、本部実行委員会）。当日の運営は、実行委員会の公演部会の実行委員他、期間中のボランティアであるサポート・スタッフが運営にあたる。</p> <p>また、土曜日の午後に市街地を歩行者天国にして開催されるふれあいアップルタウンでは、商工会議所関係者、商店街店主らが実行委員として参加する。</p> <p>会場：飯田人形劇場や飯田文化会館、飯田市公民館等の市街地の公共施設。人形劇フェスタ開催中のイベント広場となるセントラルパークの特設ステージ、土曜日の午後開催される、商工会議所や飯田市観光課と共同で開催される飯田祭りの一環を占める市街地の歩行者天国「ふれあいアップルタウン」での公演。</p> <p>本部企画公演の内容（2015 年）</p> <p>海外の人形劇公演・伝統人形芝居・初めて出会う人形劇（3 歳未満の子どもを対象とした人形劇）・学生交流公演（高校生、大学生の交流と研鑽を目的とした連続公演）・キッズワールド（保育士のサポート・スタッフが付き添い、子どもたち自身が 3 作品から 2 作品を選択して観劇する）ミッドナイトシアター（土曜日 21 時から、実験的な作品を含む上演）・森の紙芝居劇場（かざこし子どもの森公園を会場にした紙芝居の公演）。</p>
その他 自主企画公演 (1 会場)	<p>担当：個人の有志</p> <p>会場：個人住宅</p> <p>備考：実行委員会からの金銭・人的な助成なしで、個人で実施。</p>

（筆者作成）

会、通称、地区実行委員会によって企画運営される地区公演の 2 つに大別できる。なお、本部実行委員会と地区実行委員会に関しては、後述する。

人形劇フェスタ実行委員会では、本部公演、地区公演を、次のように分類している。まず、前者の本部公演は、人形劇芸術の振興や人形劇フェスタからの人形劇の発信をねらって設定されたその年のテーマや企画にあわせて本部実行委員会が企画・運営する公演で、それらの多くは本部実行委員会の事務局が置かれる飯田文化会館、飯田人形劇場、飯田市民館、交流広場として中央公園に設営されるセントラルパークなど、市街地の公共施設で実施される。上述の A タイプや B タイプの有料公演は、本部公演として実施される。一方、後者の地区公演は、前身である人形劇カーニバル開始当初から、全市域にわたる広域開催による多くの市民の参加をねらって行われてきた公演で、各地区の地区公民館や集落＝区の分館・神社仏閣・保育園など、住民にとって身近な場所で上演を行い、住民に観劇を楽しんでもらうために、地区公民館や分館の役員を中心とした住民が企画・運営を行う公演である。

なお、2015（平成 27）年、2016（平成 28）年と、本部公演にも地区公演にも属さない、個人が企画し運営する公演が実施されている。自宅を会場に、企画者とその知人数人を運営スタッフとして行った公演である。個人が企画した公演でも、実行委員会に企画提案し助成金やスタッフ等の人的援助を受ける場合は本部公演となるが、この公演は何の助成も受けずに実施した。実行委員会では初めてのケースで、今後どのように位置づけ対応していくか検討するとのことであった¹¹。

・地区公演

地区公演の会場数は 75 会場を数え、期間中の公演数は約 135 公演である。市街地から 1 時間近く離れた地区会場や、定員 50 名ほどの小さな会場もあるが、観客を地区住民に限定してはいない。来場者は、地区外はもとより県外の参加者も、劇団や作品を選んで来場し観劇することが出来る。とはいっても、多くは地区内の住民が観客の中心を占める。地区公演の合計観劇者数は、12,400 人。内訳は、大人約 5,850 人、子ども約 6,550 人である（いいだ人形劇フェスタ実行委員会「いいだ人形劇フェスタ 2015 参加登録・公演等の結果」）。この数は累計数ではあるが、飯田市の人口 10 万 3 千人の約 1 割が地区公演に観劇参加していることになる。

¹¹ 三穂地区の個人住宅「稲葉住宅」で開催された公演である。この稲葉住宅で編み物教室・茶道教室・展示会などの文化活動を実施している川上恒夫氏は、様々な文化活動を通して、過疎化する三穂地区の人的交流を活発化させたいと考え、稲葉住宅での文化活動の一環として人形劇フェスタの公演を企画・実施した。この公演について、2016 年 8 月、人形劇フェスタ実行委員長原田雅弘にインタビューしたところ、実行委員会内で今後どう位置づけ対応するか検討するとのこと、現在は、本部公演、地区公演のどちらにも当てはまらない新しいケースであることが明らかになった。

表 1-4 観客者数（人形劇フェスタ 2015）

	会場数	ステージ数	観劇者数 (人)	大人	子ども
有料公演		69	7,603	6,098	1,505
ワッペン公演		388	32,972	17,583	15,389
本部公演	61	254	20,550	11,728	10,327
地区公演	76	134	12,422	5,855	6,567
計	137	457	40,575	23,681	16,894

（出典：いいだ人形劇フェスタ実行委員会「いいだ人形劇フェスタ 2015 参加登録・公演等の結果」を参照に筆者作成）

地区公演の企画・運営は、地区公民館・分館の役員他、PTA やその他集落＝区の諸団体によって、地区内の地区公演を統括するかたちで地区公民館が、または、分館を中心とした地区公演の会場ごとに組織された地区公演実行委員会が担う。この地区公演実行委員会に関わる市民は、例年約 1,900 人を数える。これだけ多くの市民が運営にボランティアとして参加する文化活動は、他にはあまり見られない。国内で開催されている他の人形劇フェスティバルや音楽祭等の文化活動との比較からみたいいいだ人形劇フェスタの特徴については、本節の最後で述べる。

3.2.2 交流

人形劇フェスタでは、人形劇を核とした様々な人々の交流を事業内容の重要な 1 つに挙げている。そのため、市民と人形劇人、市民同士が出会い交流を生み出す場が、さまざまなレセプションや公演においてねらわれている。レセプションでは、開催を告げるオープニングセレモニー、全国そして海外からの人形劇団をもてなすウェルカムパーティー、ボランティア・スタッフと人形劇人が集まり慰労と次年度の再会を誓うお別れパーティーなどがある。また歩行者天国となった市街地で開催されるわいわいパレードは、人形劇人が自分たちの人形を持って市街のメイン通りをパレードし沿道の市民との交流を楽しむ。

以上のような本部実行委員会が実施する交流を目的として企画された事業ばかりでなく、各地区の住民が企画運営にあたる地区公演においても、事前の打ち合わせを地区公演実行委員の住民が劇団に直接連絡して行ったり、当日の会場設営や進行、駐車場の案内、運営を、また終了後には手作りの料理でもてなす交流会を開催し人形劇やいいだ人形劇フェスタについて話を弾ませることが多い。人形劇カーニバルを含めて 30 年以上続くこの人形劇の祭典には、10 回、20 回と繰り返し参加している劇団も多く、それらの劇団のなかには、単なる上演の場としてだけではなく、住民との温かな交流をいいだ人形劇フェスタ

の魅力として参加を続けている劇団が多い。

3.2.3 研鑽

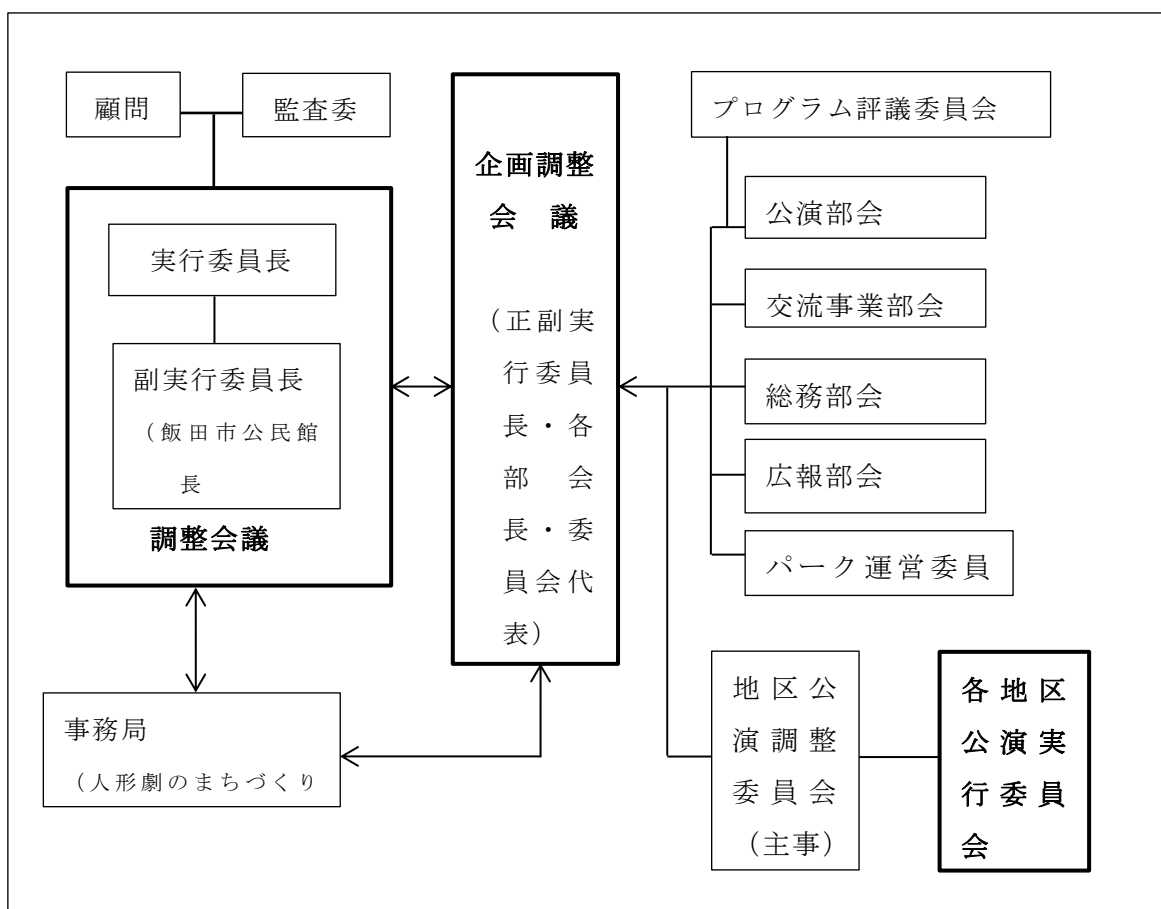
最後に、研鑽である。実行委員会では、人形劇の普及と向上、地域文化の振興、まちの活性化、市民の豊かな心の育成をねらい、人形劇制作に関するワークショップの開催や、子どもと人形劇に関する研究会・シンポジウムなどの開催を「研鑽」と考えて実施している（いいだ人形劇フェスタ 10 周年記念誌編集委員会，2009：90）。

3.3 組織

3.3.1 本部実行委員会

人形劇フェスタは、有志の市民によって組織されたいいだ人形劇フェスタ実行委員会によって企画・運営が行われている。いいだ人形劇フェスタ実行委員会は、次で述べる地区公演実行委員会、通称、地区実行委員会に対し、通称、本部実行委員会と言っている。

図 1-10 いいだ人形劇フェスタ実行委員会組織図



（出典：いいだ人形劇フェスタ実行委員会「いいだ人形劇フェスタ組織図」）

本部実行委員会に有志で参加する市民は、企業の事務職員、販売員、建設会社役員・職員、小中高等学校・幼稚園教諭、保育士、団体職員、パート職員など、多様な職種に携わる人々であり、年齢は 20 歳代から 60 歳代、性別では女性が半数以上を占めている。本部実行委員は、転勤等による引っ越しや、出産等の理由以外で委員を辞める人は少なく、多くの人が 10 年以上継続して実行委員会に参加している¹²。

いいだ人形劇フェスタ実行委員会の組織図は、図 1-10 のようである。なお、組織は、第 1 回人形劇フェスタ当初から状況にあわせ運営に支障が無いよう随時検証と変更が加えられている。現在は、前述の事業内容で示した公演・交流・研鑽の事業内容を円滑に実施するため、4 部会・3 委員会が組織されている。本部実行委員会に参加する実行委員はプランニング・スタッフとして、人形劇フェスタ全体の企画・期間中の運営・事後の反省と、年間を通して業務に従事している。現在のメンバーは、約 80 名で、有志で参加するこれら一般市民のなかから、実行委員長 1 名と、副実行委員長複数名が選出される。

部会とその業務内容は次のとおりである。

- ・公演部会：公演全般、ワークショップ、地区公演の指導
- ・交流事業部会：市民・劇人の多彩な交流のための企画運営、式典などのレセプション
- ・広報部会：広報、記録、ガイドブック等の作成、インフォメーション運営
- ・総務部会：ボランティアの募集および指導と管理、グッズ制作・販売
- ・パーク運営委員会：セントラルパークの企画運営、模擬店出店管理
- ・公演企画委員会：特集・企画公演の企画、海外劇団作品の選考、有料公演の選考
- ・プログラム評議委員会：期間中の上演および催事を視察し、終了後の講評を次年度に反映させる資料作り

正副実行委員長、各部会の部会長による企画運営委員会は、おおよそ月 1 回程度開催され、次年度の開催日、テーマなど開催にあたっての基本事項や、各部署および事務局等との横断的な連携のための協議が行われる。そして、企画運営会議の年間計画に合わせて、各部会は担当業務に関する検討および準備作業のための会議が開催される。

また、期間中のサポート・スタッフと称するボランティアスタッフを総務部会が募集し、各部会の業務に参加してもらっている。サポート・スタッフは中学生以上を対象とし、多いときには 500 人以上の参加があった。現在は 250 から 300 人くらいとなっている。

3.3.2 地区公演実行委員会

地区公演は、20 地区に約 75 の地区公演会場が設営され、各地区公民館または分館を中心とした集落=区の公演会場ごとに実行委員会が組織され、地区公演実行委員会ごとに企

¹² 筆者は、人形劇フェスタ実行委員会に 1999（平成 11）年の第 1 回から 2013（平成 25）年の第 15 回まで参加していた。実行委員の職種や年齢等に関する正確な調査はしていないが、この間 10 年以上の参加者の様子よりまとめている。

画・運営を行っている。ここに携わる地区公演実行委員は、市内で総勢約 19,00 人を数える。これらの地区公演実行委員は、地区公民館および分館の公民館委員を中心に、PTA 役員、婦人会など集落=区の諸団体の役員である。また、数年前からは、いくつかの地区公演実行委員会で、当日のみ活動に参加するサポート・スタッフを応募し、中高生の子どもたちが参加しているところもある。

本部実行委委員会は、個人の意志によって参加した有志の市民が、年間を通して実行委員会の活動に取り組んでいる。一方、人形劇フェスタのもっとも特徴といえる市内全地区の広域に広がる地区公演を担う地区公演実行委員会は、地区公民館や分館および集落=区の諸団体の役員を中心とした住民が、集落=区の自治活動の回り番として役職にあたったことで参加する人がほとんどである。人形劇フェスタが掲げる理念には、個人の意志のもと参加することとなっており、実際に、本部実行委員の市民も地区公演実行委員の住民も、みな 700 円の参加証ワッペンを個人負担で購入しているが、本部実行委員と地区公演実行委員とは、参加姿勢のうえでは大きな違いがあるといえる。

地区公演を実施するかは、毎年、それぞれの地区公民館または分館での住民の話し合いにより決定される。人形劇カーニバルが終了し、人形劇の祭りをここで途絶えさせてはいけないという市民が参集して話し合いが行われ、新しい祭典人形劇フェスタが開始されるに至った過程において、地区公演に関して住民の意見を集約した検討が行われたかは不明であり、現実には、人形劇カーニバル時代からの形態がそのまま継続されて実施されることとなった。

地区公演実行委員会は、予算面、劇団の決定、プログラムの決定など、本部実行委員会と連携を取りながら運営を展開していくが、それぞれの地区公演実行委員会は独立しており、各地区公演実行委員会同士の横のつながりは持っていない。また、地区公演実行委員である地区住民の代表が本部実行委員会の企画運営会議に参加することはなく、会議には、地区公民館に配属された主事によって構成される飯田市民館主事会の人形劇プロジェクトの代表者が 75 会場の地区公演の連絡窓口となる「地区公演調整委員会」として会議に参加している（図 1-10 参照）。

人形劇フェスタ 10 周年記念誌発行にあたって開催された座談会で、主事を永年経験し地区実行委員会を深く知る飯田市職員の氏原理恵子は、こうした実態から、有志市民によって組織された本部実行委員会と住民によって組織された地区公演実行委員会は実際のつながりがほとんどないこと、また参加する市民の意識の面からも本部実行委員会と地区公演実行委員会には大きな違いがあり、人形劇フェスタ実行委員会の体制を、「本部実行委員会と地区実行委員会の二重構造といえる現状がある」と発言している（いいだ人形劇フェスタ実行委員会 10 周年記念誌編集委員会，2009：206-207）。

地区公演実行委員会の実態に関しては、第 5 章で詳述する。また、地区公演に深くかわる地区公民館および分館に関して、地区公民館に配置された市の職員である主事の役割

に関しては第 4 章で詳述する。

3.3.3 市民の参加について

人形劇フェスタは、「みる 演じる ささえる わたしがつくるトライアングルステージ」に表されるように、観客として、上演者として、運営スタッフとして、さまざまなかたちで参加する市民によってつくられる祭典であるとしている。市民の参加は一様ではなく、参加の形態も、参加の意思・きっかけも、さまざまである。表 1-5 に、人形劇フェスタへの市民の参加について整理してまとめた。

表 1 - 5 市民の参加について

市民	運営	地区実行委員会関係 (住民) 1,900 人	地区公民館役員、分館役員
			PTA
			地域の諸団体
			有志：サポート・スタッフ
			有志：企画提案者（*1 名）
		本部実行委員会関係 600 人	有志：市内人形劇関係者
			有志：人形劇に取り組んではない市民（計 80 人）
			婦人会（おいなんよサロン担当）
			有志：サポート・スタッフ（中学生以上）（計 450 人）
	上演	学校関係	小中学校児童生徒劇団
		文化会館・いいだ人形 劇センター講座受講生	公立保育士人形劇研修会受講生
			いいだ人形劇センター主催人形劇講座受講生
		アマチュア劇団	一般成人
	観劇	一般市民	子ども～大人
		運営参加市民	本部実行委員、地区公演実行委員
		上演参加市民	学校関係劇団、人形劇講座受講生、一般アマチュア劇団
行政	運営	実行委員会事務局	教育委員会飯田文化会館人形劇のまちづくり係
		本部実行委員会	飯田市公民館館長（副実行委員長）
		地区公演実行委員会	地区公民館主事（飯田市職員）
		サポート・スタッフ	飯田市職員
		ふれあいキャブ	飯田市職員・飯田市職員 OB

（筆者作成）

参加形態は、大きく分けると、運営、上演、観劇の3つである。運営に関しては前述したとおりである。上演は、市内の小中学校のクラブや総合的な学習の時間で人形劇に取り組んだ子どもたちによる上演が毎年15校ほど、また、NPO法人いいだ人形劇センターで開催されている人形劇講座や、保育士の研修会で実施されている人形劇講座があり、その受講生が発表の場として上演を行っている。その他、人形劇カーニバル当時公民館で誕生した母親による人形劇サークルや青年会議所が開催した「市民人形劇講座」などをきっかけに誕生したアマチュア劇団が上演参加している。

3.4 人形劇フェスタの財政

人形劇フェスタ実行委員会によると、人形劇フェスタの財政は、独立採算制をとっており、2015年度の決算報告は、表1-6のとおりである（いいだ人形劇フェスタ実行委員会、「いいだ人形劇フェスタ決算書」）。

収入は、合計約5,700万円である。そのうち、飯田市の助成金1,800万円と飯田市が申請を出し獲得した助成金（文化庁他）を合わせた合計3,370万円が、収入全体の約60%と、半分以上を占めている。参加証ワッペンの売上げは約850万円で全体の約15%。Bタイプ公演の有料チケット収入およびワークショップ受講料収入、および、ふれあいアップルタウンや広域公演での上演による公演料収入は、合計約820万円で全体の15%。つまり、おおよそ毎年収入として見込める収入は約30%で、60%は市の情勢や助成金採択の有無によって確保が保障されていない不安定な予算で占められている。とはいっても、市の1,800万円は、1999（平成11）年の人形劇フェスタ第1回目の2,000万円からは減少しているとはいっても、2012（平成24）年以降は1,800万円を維持している。

一方、合計支出は約5,100万円である。そのうち、地区公演実行委員会関係は、合計約710万円で、支出金額全体の14%に過ぎない。地区公演会場費は、市の助成金1,800万円の10%、地区企画公演費はワッペン売り上げ収入（見込み）の10%となっている。つまり地区公演会場費は、約75会場の地区公演会場にほぼ均等（1会場あたりおよそ24,000円）に配分され、各地区公演実行委員会がそれぞれで自由に使用することができる。また、地区公演企画公演費は、夏祭りとの合同開催やスタンプオリエンテーションで地区内の数会場を回る仕掛けを施す企画、ライトアップした寺での夜間公演、また、マイクロバスをレンタルして周辺地区の子どもたちを市街地の上演会場に引率する企画など、事前に企画提案を提出し、採択されたものに補助金が支給される。補助金の金額は、地区企画公演費として、ワッペン売り上げ見込みの10%として90万円が予算化されている。企画提案数、また、企画内容と申請金額により、提出された企画提案を審査し、採択された企画にそれぞれの助成金が支給される。毎年5~6件の申請があり、各地区公演において工夫が凝らされている。

表 1-6 いいだ人形劇フェスタの財政（2015 会計報告）

【収入の部】

項 目		支出額
基本参加費（ワッペン収入） 700 円×12,088 枚		8,461,600 円
負担金	飯田市	33,700,000 円 飯田市（18,000 千円） 文化庁（14,000 千円） 地域創造（17,000 千円）
	企業協賛金（2 社）	600,000 円
	ふれあいアップルタウン公演負担金	315,000 円
	広域公演（周辺町村での上演） プレゼント公演（7 団体）	1,640,000 円
有料売上料	有料公演収入	3,301,400 円
	ワークショップ受講料	332,300 円
協賛金（1 団体・3 社）		3,294,776 円
繰入金（劇人参加費繰入）		446,765 円
賛助会員会費（1 口 1 万円）		390,000 円
諸収入	手数料（出店料 他）	206,500 円
	雑収入（お別れパーティー参加費 他）	1,180,370 円
合 計		57,307,935 円

【支出の部】

項 目		支出金額
地区公演実行委員会	地区会場費	1,800,864 円 * 飯田市負担金（通年分）の 10%
	地区企画公演費	900,000 円 * ワッペン売り上げ見込みの 10%
	地区公演 B タイプ公演費	3,681,400 円
	上演還元金（C タイプ参加劇団）	743,324 円
公演関係費	B タイプ劇団公演費	3,951,776 円
	海外劇団公演費	11,601,408 円
	伝統人形芝居公演費	511,728 円
	学生・アマ連続公演費	259,200 円

	屋外企画公演費	1,378,106 円
	その他企画公演	6,803,871 円
	ワークショップ費	1,104,055 円
	公演環境整備費	548,437 円
交流事業費	おいなんよサロン費 各種セレモニー費 わいわいパレード費	1,220,200 円
セントラルパーク運営費	会場設営費 パーク運営費 など	4,791,189 円
広報宣伝費	印刷物・広報企画	6,535,829 円
	ウェルカム人形展費	60,995 円
総務運営費	総務部会費	3,218,148 円
	企画運営費	392,324 円
	事務費	1,206,426 円
	記録費	343,848 円
部 会 合 計		51,053,128
20 周年準備費		500,000 円
国際発信事業		1,100,363 円
定期預金		100,000 円
予備費		124,070 円
合 計		52,877,661 円

(いいだ人形劇フェスタ実行委員会「いいだ人形劇フェスタ 2015 決算書」より筆者作成)

3.5 いいだ人形劇フェスタの特徴

3.5.1 国内の人形劇の祭典との比較

国内の人形劇の催事は、人形劇まつり・人形劇フェスティバルなどの名称で、各地で開催されている。飯田市においても、2 月に開催される地元のアマチュア人形劇団によるりんごっこ劇場、11 月に伊那谷の伝統人形芝居四座の研修発表会として開催される伊那人形芝居などがあり、全国で開催されているさまざまな規模の祭典をすべて把握することは難しい。

ここでは、日本ウニマ（NPO 法人国際人形劇連盟日本センター）の年鑑「日本の人形劇¹³」およびインターネットの HP で確認できた人形劇の祭典を 6 つ取り上げて、開催内容および主催（運営従事者）を中心に市民の参加状況に関して人形劇フェスタとの比較を行

¹³日本ウニマ発行の年鑑「日本の人形劇」2011～2015 年度版を参照した。

った。採り上げた人形劇の祭典とその概要は、表 1-7 のとおりである。

表 1-7 国内の人形劇の祭典

名称	開催日・会場	開催内容	主催者
喜多方発 21 世紀シアター	8 月上旬 4 日間 25 会場 (保健センター・図書館・小学校など)	演劇、音楽、人形劇、落語、大道芸など幅広いジャンルの舞台芸術。 一般市民の観劇および各地の子ども劇場や会館職員などへの見本市として開催。	喜多方 21 世紀シアター実行委員会 (喜多方プラザ自主文化事業推進協議会職員・ボランティア)
ひらかた人形劇フェスティバル	3 月中旬 2 日間 枚方市牧野生涯学習センター	ひらかた人形劇連絡会参加劇団を中心とした市内のアマチュア劇団の上演、および、プロ劇団の上演は特別公演として実施。	ひらかた人形劇連絡会 (連盟参加劇団)
人形劇フェスティバルさっぽろ冬の祭典	2 月 2 日間 札幌子ども劇場やまびこ座	市内のアマチュア劇団が合同制作した人形劇の発表会として開催。(9 回公演)	札幌人形劇協議会 (協議会参加劇団)
池袋いけいけ人形劇まつり	5 月上旬 2 日間 東京都豊島区民センター	東京池袋周辺の人形劇団が集合し、いけいけネットワーク(池袋地域人形劇連絡協議会)を結成し、家族で人形劇を楽しめる場を提供している。	池袋いけいけ人形劇まつり実行委員会 (池袋地域人形劇連絡協議会加盟劇団)
いなさ人形劇まつり	11 月下旬 2 日間 浜松市引佐協働センター他	地域の人への人形劇鑑賞の提供。 人形劇の向上をねらい、コンテストの開催。 地元の産物および飲食物の販売。	浜松市いなさ人形劇まつり実行委員会(引佐市職員・ボランティア)
西宮人形劇まつり	6 月 2 日間	小さな子どものいる家庭を中心に、人形劇を楽しんでもらう。 (小学生以下無料)	西宮人形劇グループ連絡会(人形劇団関係者) 西宮市文化振興課(行政職員)

(筆者作成)

祭典の主催および運営従事者については、枚方人形劇フェスティバル、人形劇フェスティバルさっぽろ冬の祭典、池袋いけいけ人形劇まつり、西宮人形劇まつりなど、上演参加する人形劇団が自ら実行委員として企画・運営に携わる祭典が多い。インターネットを活用してボランティア募集をしている実行委員会もあるが、多くは、祭典に上演参加する劇団である。実行委員およびボランティアの運営参加者数、またそこに人形劇団関係者以外の一般市民が占める割合は不明である。

開催内容については、喜多方発 21 世紀シアターは、人形劇以外の舞台芸術を含み、しかも一般市民の鑑賞はもちろんであるが、見本市的な要素を含んだ催しとなっている。また、人形劇フェスティバルさっぽろは、祭典の会場となる札幌こども劇場やまびこ座で日常的に活動する市民の人形劇団が合同制作した人形劇の発表会を開催目的としており、他の 4 つの祭典とはやや趣旨を異にする。他 4 つの祭典は、市内の住民を中心とした観客に人形劇を楽しんでもらうことを目的として開催している。特に西宮人形劇まつりは子育て支援を意識し、年齢の低い子ども連れの親子の参加をねらっている。

開催会場は、喜多方発 21 世紀シアターは、市内の保健センターや図書館、小学校等 25 会場での開催を行い、いいだ人形劇フェスタにはおよばないものの数カ所の拠点施設中心の開催ではなく広域的な開催を行っている。

以上からは、あらためて人形劇フェスタが日本で最大といわれる大規模な祭典であることがわかる。規模は会場数が大きく関係するが、人形劇フェスタは市内 130 会場を確保することにより、全国からのプロ・アマチュアの劇団の参加をすべて受け入れることが出来ている。そして、市内のアマチュア人形劇団や募集によって得られた市民有志の運営に携わるボランティアスタッフだけではなく、全地区に広がる地区公民館や地区公民館と密接に連携する集落=区に配置された分館を活用することで、多くの住民の運営への参加を得て大規模な人形劇の祭典が実現している。まさに、市内全体に平面的に広がる、市民参加の人形劇の祭典である点が、飯田の人形劇の祭典・人形劇フェスタの特徴といえる。

3.5.2 他の文化活動との比較

1970 年代以降、画一的な行政の在り方が見直されるなか、まちづくりへの市民の参加を促進する取り組みが各地で始まり、そのなかで芸術活動に注目が集まり始めた。そうした芸術祭の中には、まちおこしと映画文化の振興を目指して開催される湯布院映画祭（湯布院映画祭実行委員会「湯布院映画祭」）、鳥取県鹿野町の鳥の劇場で演劇活動に取り組む I ターンの劇団員が住民とのかかわりのなかで芝居をつくり上演する鳥の演劇祭（千代，2013：155-171）、また、過疎高齢化が問題となる瀬戸内海の島で美術作品を制作・展示し県外からの観光客誘致による活性化をねらった瀬戸内国際芸術祭（中島，2012：71-89）、街の活性化をねらい音楽家と商店街の店主らが取組み 76 万人もの来場者を集める仙台市の定禅寺ストリートジャズフェスティバルなど、舞台芸術から美術、音楽と多様な文化財

を媒体としたフェスティバルが開催されている。(表 1-8 参照)

表 1-8 国内の市民文化活動について

名 称	開催期間	内 容	主催・運営参加者
瀬戸内国際芸術祭	3 月～11 月 3 期にわけ、 108 日間	香川県瀬戸内海の島で、島外の芸術家がアート作品の制作・展示を行う。	瀬戸内国際芸術祭実行委員会（香川県、香川県商工会議所、高松市、公益財団法人福武財団）
鳥の劇場演劇祭	11 月 9 日間	鳥取県鹿野町の廃校となった小学校の校舎を利用し、都会からやって来た劇団が演劇活動を開始し、年に 1 回、演劇祭を開催する。	鳥の劇場実行委員会・鳥取県 住民のボランティア（受付など）
湯布院映画祭	8 月 5 日間	由布院町で映画の上演およびトークショーなどを開催する。	湯布院映画祭実行委員会 （市外の映画愛好家を中心に湯布院町のボランティア）
定禅寺ジャズフェスティバル	9 月 2 日間	仙台市の繁華街のストリートや公園でのジャズ演奏およびフリーマーケットの開催。	定禅寺ジャズフェスティバル実行委員会

(筆者作成)

これらのフェスティバルは、人形劇フェスタと同様にまちづくりとして取り組まれているが、その大きな違いは、人形劇フェスタは市民が運営し市民が人形劇鑑賞を楽しむことを主としているが、他のフェスティバルは運営にあたるのもそれを楽しむのも市民を主とした取り組みではない点である。瀬戸内国際芸術祭は、香川県および高松市の行政が主となって実行委員会を組織し運営にあたり、島の住民は、この祭典において特別な役割を担ってはいない。鳥の演劇祭では、ボランティアの募集を行い、開催期間中の会場の受付などに参加する住民もいるがわずかである。湯布院映画祭は、町外在住の映画愛好家が実行委員会の中核を組織し、由布院町のまちおこし活動に携わる住民が協力している。以上の 3 つの文化活動は、行政や外部からの短期または I ターンの流入者が企画運営にあたり、楽しむのも、観光を目的とした外部の人々である。

唯一、仙台市の定禅寺ジャズフェスティバルは、仙台市の音楽愛好家と商店街関係者が音楽によるまちづくりを目指して取り組む文化活動である。財団法人堺都市政策研究所の

調査結果によると、公益社団法人 定禅寺ストリートジャズフェスティバル協会が実行委員会の中心となり、メンバーは約 60 名である。このほかに期間中のボランティアは 1,500 名である。ボランティア・スタッフは、公募および実行委委員の呼びかけによって参集する。また、来場者数は 2 日間で 74 万人を数え、フリーマーケットやアートイベントも併催されているが、2 日間で 74 万人は、開催地の仙台市青葉区の人口 281,000 人（2005 年世論調査より）の 3 倍弱であり、かなり多い人数といえる。ジャズフェスティバルに参加する団体は、アマチュアもプロもオーディションによる審査によって出演が決定される。例年 730 団体 5,000 人が全国から参加している。このジャズフェスティバルは、市から 5,000 万円の助成を受け実施しているが、運営自体は市民によって組織された実行委員会で行っている。1991 年に開始され、東日本大震災が発生した 2011 年も開催し、2016 年で第 20 回を数えている（財団法人堺都市政策研究所，2011，1-17）。

この定禅寺ジャズフェスティバルといいだ人形劇フェスタでは、多くの市民が運営スタッフや観客として参加している点、行政の資金面での支援は受けているが市民有志のメンバーによる実行委員会が組織され企画運営にあたっている点など、市民文化活動としての共通点がみられる。そのなかで人形劇フェスタの特徴は、地区公民館や分館を活用し、全市域に広がりを持った地区公演を開催をすることで、住民が自分たちの住む集落＝区での地区公演を企画・運営し、その集落＝区の住民に観客として参加し楽しんでもらう、住民がつくり、住民が楽しむ人形劇の祭典である点である。

小括

人形劇フェスタは、1979（昭和 54）年に人形劇カーニバルとして誕生し、現在 38 年の歴史を重ねている。行政自治区である地区に配置された地区公民館や、かつての村である集落＝区の分館を活用し開催される地区公演による広域開催は、全国のアマチュア・プロの人形劇団の上演参加を保障し、日本一の規模を誇る人形劇の祭典を実現させた。また、この地区公演による広域開催は、地区公民館や分館を基盤として開催されることにより、集落の住民が、飯田市を統合する文化活動に参加することを促進させ、例年 1,900 人にもおよぶ運営へのボランティア参加を継続的に維持している。

これが、人形劇フェスタの大きな特徴といえるが、では、なぜ地区公民館や分館を活用したことで多くの市民が参加し、それが 38 年も継続的に維持されているのかについては、市民参加の文化活動や、市民参加のまちづくりの活動を考えていくにあたっても問題となるところである。この点は、第 4・5 章で考察する。

第2章 人形劇フェスタをめぐる飯田市の文化行政

はじめに

当初、行政主導で開始された人形劇フェスタは、市内全域から 2,500 人を越える多くの市民が参加してつくり上げる文化活動となり、38 年間継続開催されている。本章では、飯田市が人形劇カーニバル・人形劇フェスタを、まちづくりを目指した文化行政のなかにどのように位置づけてきたか、そして、その動きのなかで市民は人形劇フェスタにどのようにかかわってきたのか、人形カーニバルの担い手を、行政、飯田市外の人形劇団関係者を中心とする劇人、人形劇フェスタ実行委員会の構成員である市民（地域社会との関係ではなく、個人の意思で参加する市民）、地区公演を支える住民の 4 つの範疇に区分し、それぞれの関係を軸に、38 年間を次の 4 期に分けて分析する。

1 期 第 1 回～第 6 回（1979～1984 年）の行政主導による開始期

2 期 第 7 回～第 10 回（1985～1988 年）の公民館活動としての市民への浸透期

3 期 第 11 回～第 20 回（1989～1998 年）のまちづくりの中核としての拡大期

4 期 第 21～38 回（1999 年～2016 年）の市民主導の文化活動への発展期

各期を、以下 4 節に分けて論述する。

1 第 1 期 第 1～6 回（1979～1984 年）行政主導による開始期

1.1 市長の政治理念と飯田市の課題

人形劇カーニバルは、1979（昭和 54）年 8 月に、第 1 回が開催された。当時人口 8 万人の地方都市の飯田市に、日本各地からプロおよびアマチュアの人形劇団が 60 団体・381 人の人形劇人が参集し、市民ほか一般参加者 3,769 人の観劇参加を得て、2 日間にわたり市内 17 会場で 44 公演が実施された。参加劇団数や上演会場数は、現在に比べると規模は小さいが、市内全域に広がる広域公演の実施、そしてその広域公演の劇団受入れに市民がかかわり市民・劇人・行政の三者がかかわってつくり上げるという人形劇の祭典は、それまでには見られない画期的なものであった。

人形劇カーニバル誕生の契機は、前年 1978（昭和 53）年に、宇野小四郎（当時財団法人現代人形劇センター理事長）と須田輪太郎（当時人形劇団ひとみ座座長）から、当時の飯田市長松澤太郎へ寄せられた、飯田市を会場に人形劇関係者の全国集会を年 1 回開催したいという申し出であった。

松澤は、人形劇や人形劇界に関する知識や情報を持たなかったものの、「なぜか強く心を動かされ心の中ひそかに期するところがあった」（松澤、1992：10）と当時を振り返って述べている。それは、市長に突き付けられていた 2 つの課題が強く影響し、直感させたといえる。1 つは、オイルショック後の経済不況のなか 1977（昭和 52）年に策定された全国総合開発計画による「地方の時代」の提唱、および過疎化・高齢化が進行する地方都市

の地域活性化という地方都市に突きつけられた課題。もう 1 つは、松澤の政治理念である地方自治体独自の行政の確立という課題である。

ここでまず、松澤の経歴および政治理念に関して触れておく。松澤は、1956（昭和 31）年、飯田市教育委員会を設置するにあたり、当時の松井卓司市長（市長在任期間は、1955～1968 年）に懇願され、初代教育長に就任し、4 期 16 年、1964（昭和 39）年まで教育長を務めた。なおこの期間、市立図書館長を兼任した。その後、1964（昭和 39）年に総務部長に抜擢され、合併および 1961（昭和 36）年に発生した台風による三六災害の復興事業によって赤字が増大した市の財政再建に取り組み、財政の健全化を果たした。その後、こうした行政への経験を足場に 1968（昭和 43）年に市長選に出馬するも落選。次期 1972（昭和 47）年に再出馬し、市長就任を果たした（増田，2003：163-184）。

松澤が教育長に就任した 1956（昭和 31）年は、7 ヲ村の合併が行われたが、旧村に置かれていた公民館は合併後も地区公民館として残し、住民による公民館活動が継続的に行われることを期待した。その議論の過程を、松澤は後に、飯田市歴史研究所の益田が行ったオーラルヒストリー調査で次のように述べている。

合併をしたんだから旧村はムラ根性をやめて、すべて一本化して、大所高所から判断をして行ふべきだ。そうするためには役場は廃止する、公民館も中央に一つ公民館があってそれぞれ分館とすべきだという意見と、当時は今のように意識が高かったわけじゃないから、役場がなくなっちゃうのは淋しいなあとか、公民館はおらの方に置いてほしいなあという素朴な意見と、両方あったわけだ。合併したからにはムラ根性は出さなくて大所高所から物事を判断すべきだという大乘論と、支所もほしい、公民館も独立して置きたいという小乗論とあって、かなり議論したんだ。俺は教育長だったから、その議論に加わっておって、別に俺の主張が通ったわけじゃないけど、公民館は独立して存在をする。そういうことになったのが昭和 31 年。それが今非常に大きな効果を産んでおるなあ。（増田，2003：178）

当時教育長であった松澤の意見だけではなく住民の意見を聞き、合併後、旧町村であった各地区に町村公民館をあらためた地区公民館と支所が置かれ、それまで旧町村の住民が取り組んできた社会教育としての公民館活動が継続された。松澤は、市長就任中、地区公民館の施設整備に力を入れた。就任 1 年目には、前市長の退任時に既に決定されていた山本地区公民館の建設が実施された。山本地区公民館建設に際しては、経緯は不明確であるが、今までは支所（旧町村の役場）の中に町村公民館を同居させていた形態から、新たに、地区公民館となった公民館のなかに支所を同居させる形態をとる構想が決定していた。老朽化した支所の取り壊しと地区公民館の建設にあたっては、松澤が市長在任の 4 期 16 年の間に、市内全地区の地区公民館の建設が実施され（最後の松尾地区公民館は、在任中に

計画され、退任の翌年完成した。)、地区公民館のなかに支所を同居させる形態がとられた。なお、旧飯田市の 5 地区（橋北・橋南・羽場・丸山・東野地区）は、現在の飯田市公民館である中央公民館を活動拠点とし地区独自の地区公民館を持っていなかったが、他地区と同じように 5 地区それぞれに地区公民館が新たに建設された（増田，2003：177）。ただし、この 5 地区の支所は、飯田市役所本庁内に設置され、地区公民館に支所が同居する形態をとっていない。

地区公民館の中に支所を同居させる形態は、松澤が提案したものではなかったが、その後、全ての地区において地区公民館に支所を同居させる形態を統一して実行したことからは、松澤が公民館活動を重視していた政治理念の一旦がうかがえる。また、私立図書館長を兼務で担当していたことや、市長時代にも市民との読書会を開催するなど、読書による学びを重視していた松澤は、各地区の地区公民館に市中央図書館の分館を設置させた。

僕が市長になってから公民館が役場に同居しておるんじゃなくて、公民館の中の一部に支所を置くんた。そして公民館には図書館の分館を全部設置するんだと。そういうものを体系づけた。（増田，2003：178）

松澤は、市民自治の実現をめざし、そのための市民の学びの場として公民館の充実を考えていた。以下の言葉には、彼の市民自治を目指す政治理念が伺える。

7 年半教育長をやって、その間に飯田市の公民館がかなり充実してきたので、その延長線上で、僕は市長になってからも公民館、社会教育、あるいは文化行政を重視する姿勢をとってきたつもりなんだ。（中略）今でいう地方分権とか「地方の時代」というものを、教育長の頃から、もっと地方は地方なりの、あるいは地方独自の行政をやらにやいかん、そうすべきだと。そうするには公民館とか社会教育を盛んにして、もっと市民が行政とか政治を勉強しなきゃいかんと。市民の意識を高めなきゃ、いくら行政が号令をかけたって上意下達。（中略）同じ目線で同じレベル（傍点筆者）に立つんだ、市民と市役所は。（増田，2003：177）

松澤は、市政への市民の参加を勧めるため、市長就任 2 期目の 1978（昭和 53）年には、市民 40 名の参加を募り、市民を交え第 2 次飯田市基本構想をまとめた。

以上の松澤の取組みや発言からは、彼が、市民が行政に関して学ぶことを重視し公民館を住民の学びの場と考えていたこと、市民と行政の協働的な関係をめざしていたことの 2 点が推察できる。

1.2 公民館を活用した全市域的開催

第1章1の飯田市の沿革で触れたように、飯田市は1937（昭和12）年以降数回にわたる合併を実施した。旧町村はそのまま行政区画の地区となり、人形劇カーニバルが開始された1979（昭和54）年は、飯田市は16地区で構成され、各地区ごと合併前からの地縁的集団を基盤として、自治会活動や地区公民館および集落＝区の住民が取り組む公民館活動が活発に行われていた。集落＝区の地域社会を基盤とする地区のまとまりは強硬であったが、一方、松澤が次に述べたように、地区の間のつながりに欠け、市としての一体感を形成するには至っていなかった。

たとえばどこかで盆踊りをやるから補助金がほしいとか、どこかで夏祭りをするから補助金がほしい、そういうことを言うんだけど、小さな部落の単位でやるだけで、それがいっこうにつながりをもっておらん。あのころはイベントなんていう言葉は知らなんだけど、市全体が市民全体が一つのものに向って収斂をしてやっていくものがないかな、そういうことを考えておったところだったんでね。ところが、飯田の町で祭りをやって、それにある程度の補助をしてやっても、村（筆者注：合併後の地区）の方の連中は飯田だけが得をするんじゃないか、おれたちはせいぜい飯田の町（筆者注：旧飯田市にあたる飯田市の市街地地域。）へ金落して帰ってくるだけじゃないか。そういう地域根性みたいなものがあって足を引っ張るんだよ。（中略）1期半ばかり市長をやってみて、いろいろなことをやってみて、なにか全市でやれることはないかなと考えておったときなんで、これはおもしろいかもしれない。（後略）（増田，2003：179）

松澤は、こうした飯田市の特徴と課題を、宇野・須田両名の人形劇の祭典開催の提案を聞き、人形劇の祭典を「地域づくりの文化イベント」にしようと考えたのである。人形劇カーニバルを発案した当時を振り返って次のように語っている。

地方自治の主旨に基づいた地域の真の活性化を実現するための方策、つまり地域住民が健康で文化的な人間居住の総合的環境を整備する、そのための共通目標の確立に人形劇が活かせるのではないか。人形劇を媒体として、市民が挙って参加し、共に楽しみながら互いに連帯を深め、共通の目標に向かって行動しうる何かが生まれないだろうか、今にして思えば「地域づくりのための文化的イベント」を想定した。（松澤，1992：13-14）

劇人の須田、宇野から人形劇の祭典開催について検討の申し出があったのが1978（昭和53）年の10月か11月で、次年度の夏の開催まですでに1年を切っていた。「地域づくりのイベント」への可能性を直感した松澤は、その後、次のように述べ、公民館の活用を当初から念頭に置き、開催に向けて検討していたことがわかる。

これは一つは偶然だった。もう一つは、なにかないかと模索をしておるときだったもんだから僕が飛びついてやった。これは公民館の上に乗っければうまくいくぞと。ということは、公民館というものがしっかり組織ができておったときだったから。やっぱり公民館の上にのつけたのでうまくいったんだけど、同時に、支所があり、支所周辺の自治会があったので、拠点で、昔の地区（筆者註：集落である合併後の区で、自治会の単位となっている。）でやっているんだけど、カーニバルがここまで発展してきたのも独立した公民館（筆者註：地区公民館）と独立した支所と、それを中心とした地域のまとまり、そういうものがしっかりしておるから、こういう形のカーニバルができたんだと思っているんだ。（増田，2003：180）

松澤は、公民館の活用を想定し、1978（昭和 53）年 10 月か 11 月ごろに、社会教育課長に開催の検討を告げた。社会教育課長は劇人側代表者との話し合いのなかで、劇人側が提案した拠点会場だけでの開催ではない、人形劇をまるで出前のように市内各所に届けるような分散公演による広域開催の提案を受け、こうした形であれば「市民みなに広く還元できるお祭りになる（人形劇カーニバル飯田 10 周年記念誌編集委員会，1990：172）」と判断したことで、各地区の公民館や集落＝区の分館を活用した分散公演という今までの各地の人形劇の祭典ではみられない市内全域での広域開催が決定された。

その後、年が明けると劇人代表者、社会教育課に加え、市民の代表として飯田市の文化団体から飯田子ども劇場、飯田文化協会の代表者が参加し、新しい人形劇の祭典の具体的な内容が話し合われ徐々に詳細が決定していった。市民と劇人と行政の三者がかかわってつくりあげること、また人形劇カーニバルという名称が決定したのは 1979（昭和 54）年 4 月か 5 月。そして地区公民館の館長によって組織された公民館長会で決定し、各地区公民館主事に連絡が回ったのは、7 月中旬であった。8 月 11・12 日の開催予定日からすでに 1 ヶ月を切った中、公民館の活動として実施するよう社会教育課からの指示をうけたものの、実際は、主事が業務のほとんどを担い、地区の公立保育園の保育士や子ども劇場の会員等に加わってもらうことで、第 1 回目の人形劇カーニバルの各地区での公演は実施された（人形劇カーニバル実行委員会 10 周年記念誌編集委員会，1990：170）。

1.3 行政主導の開始

このように人形劇カーニバルは、当時の松澤市長の政治理念を念頭に、市内全域の市民が一つの活動に収斂することで、市民の一体感、協同性の生成をねらい、行政主導で開始された。しかしながら開始 3 年程は、市民への拡がりはなかなか進まなかったようである。

当時、伊賀良地区公民館主事の今村英明、当時飯田市社会教育課課長の山下舜平は、人形劇カーニバル 10 周年記念誌座談会で、以下のように当時を振りかえっている。

宇佐美（劇人）：（筆者註：分散公演について、旭川で行われた第1回全国人形劇フェスティバルとの違いから）飯田の場合には、受け取り手が、地域の人間がそここうちゃんと、キャチャーがいてくれて、ピッチャーの球をポンととってくれる訳で、そこが大きな違いですね。

今村：いやがっているんだけど。

宇佐美：いやがっているんでしょうけど。（笑い）

山下：いや、実際にはねえ、そりゃあね。（笑い）

今村：ぶちあたると痛いから受けにゃあ、しょうがないって感じでね。

山下：公民館だって困っちゃってるわけですよ。ポンと7月20日ごろ通知を出してね、それも、まあ一応、実行委員長に飯田市の公民館長を祭り上げといて、そういう形でもっていったんですけどね、そりゃあ無理はないと思う。訳がわからんですからね。

今村：まともになったのは、81年からですかね。

宇佐美：ああ、そうですか。第3回からですね。

山下：まともって言うのは……。

今村：会議とか通知がまともだった。というのは、その2年間、僕のところに資料が無いわけです、その2年間。

それと、不満も多かったしね。最初の頃。だから、事務局もある部分から参加させないとわからんけど、手伝いだけやれっていうかっこの2年間だったですね。仕事だけやれっていう。（笑い）

（中略）

今村：会場の決定だとか、全部教育委員会で勝手に決めている形だったですね。で、81年からは、それぞれの会場の規模だとか逆に会場の調査をしました。

山下：そう、何の設備があるとかね。こういう設備のセットができるかっていう調査をしておいて、それにあわせる劇団をある程度まで選んで……。

今村：それが出来たっていうのは、81年。

宇佐美：それが、3回目ですか。

今村：3回目位です。

宇佐美：ぐらいなのね。

松澤は、「飯田市の公民館活動にのっける」ことでが住民に浸透させ、新しく始める人形劇の祭典を公民館を活用することで開催を実現させ、その活動が単なる文化イベントではなく「地域づくりのための文化イベント」になると考えていた。

しかしながら、公民館活動にあたる住民そしてそこに関わる主事らは、上から下ろされてきたものを拒否できず「いやがって」いながらも仕方なく受けとめて行っていたことが、

上記の当時公民館主事であった今村の言葉から明らかである。

人形劇カーニバルが 3 回、4 回と回数を重ね、徐々に住民の参加を拡げていくことができたのは、実行委員長になった飯田市公民館長の言葉によると、「国際児童年に始めた人形劇カーニバルの児童健全をめざした取組み」という趣旨（人形劇カーニバル飯田実行委員会，1990：24）が地区住民に理解されたからと考える。しかしながら、松澤市長がこの人形劇の祭典を飯田市で開催することを決定したねらいは、この祭典を市民の文化活動としてまちづくりを展開することであり、「国際児童年をきっかけとした子どものための文化活動」という狭義のねらいは、公民館長あるいは社会教育課が市民への理解を容易に得るための思惑のなか行われたことであり、人形劇カーニバルの趣旨は松澤市長の真意であるまちづくりから社会教育に変えられてしまったといえる。

つまり、先の座談会の発言から伺えるように、突然市長からやれと言われてそれを引き受けざるを得ない市民の心情を察した飯田市公民館長や社会教育課が、住民の理解を少しでも得ることができるように、ちょうど 1978 年が「国際児童年」であったことから、この大規模な人形劇の祭典の趣旨を子どものために行う事業としたのではないかと推測できる。実際、子どものための事業としたことは、市民の理解を得て、地区住民の我が地区の子どもたちのためにという思いは、住民の地区公演への協力を促進させたと考えられる。

こうした飯田市公民館長らの思惑を松澤市長は知っていたのかは不明であるが、人形劇カーニバル開催を 5 ヶ月後に控えた 1979（昭和 54）年 3 月の市議会で、松澤市長は、「特別に今年が国際児童年だからということで、現在その記念事業というようなものをいたす考えは持っておりません（飯田市議会事務局，1979：5）」と答弁している。ここに、行政の首長である市長と、市長の命を受けて実際に運営を進める教育委員会社会教育課および公民館長との、それぞれの思惑の違いは明らかである。

市長が望む全市域での広域開催と集落＝区の住民が広く参加する祭典の開催のためには、実際に地区公演を受け入れその運営に携わる住民の理解が必要であるが、開催にあたっての時間的問題と準備不足のなか、住民にとってわかりやすく理解を得やすいのは「子どもたちが楽しむ活動」ということであったと考えられる。つまり、松澤が市長として開始にあたって考えた思惑と、この後、人形劇カーニバルがまちづくりをその趣旨として大きく位置づけていく流れをみると、国際児童年であったことを効果的に引用し「子どもの健全育成」を前面に出して市民理解を拡げたと考えられる。

以上のように、人形劇カーニバルは、市民参加のまちづくりをねらったイベントとして、市民・劇人・行政の 3 本柱でつくり上げる活動であることとしていたが、開始から一定のかたちが出来上がるまでの第 6 回までは、社会教育課と劇人の二者を中心に進められ、市民参加は名ばかりのものであった。本来、公民館活動は住民が取り組むものであるが、開始当初は、3 本柱の市民は住民ではなく、飯田子ども劇場や飯田文化協会といった一部の

団体の代表者が市民として、3本柱の1本を担っていた。

地区公演の運営は、公民館主事が中心になって実働にあたっていた。初年度は、開催数週間前に主事に連絡が入り、主事さえも詳細が把握できないままの実施であった。住民の社会教育の場である公民館活動に位置付けた開始であったにもかかわらず、住民にとってみると、行政が進めたものが下ろされたかたちで開始されたといえる。ただしそれを拒否せずに受け入れたのは、実行委員長となった公民館長が国際児童年と関連させた「子どもの健全育成のため」という開催趣旨が大きく影響したといえる。各地区の地区公民館で開催することにより、公民館は、わが地区の子どもたちのためを考え、地区公民館での地区公演開始の意義を理解した。

1.4 市民への拡がり

人形劇カーニバルの最大の特徴といえる、市内全地区で開催される地区公演は、上述の座談会の発言にもあったように、第4回以降になってようやく、それぞれの地区公民館の環境に相応しい作品の割り振りが検討されたり、住民が準備段階から参加して、実行委員会事務局や劇団と連絡をとって進めることが出来るようになり、住民が取り組む社会教育である公民館活動として、住民が参加してつくり上げていく仕組みが構築されていった。そして、人形劇カーニバルは順調に参加劇団・劇団員数を増加させ、あわせて上演希望劇団の上演を引き受ける飯田市内の地区公演会場も数を増やしていった。表2-1の会場数を見ると、回を重ねるごとに増加している経緯がわかる。第1回は17会場であったが、人形劇カーニバルの運営体制が整ってきた第5回以降は、一気に34会場に増加し、公演数も140公演となった。これにあわせ、開催期間も4日間に延長された。

また、第3回までは地区公民館や分館を中心とした地区公演が中心の人形劇の祭典であったが、第4回からは、商工会などが主催する飯田まつりが人形劇カーニバルの期間に合わせて開催されることとなった。飯田まつりは、市街地を歩行者天国にして吹奏楽団やダンスチーム等のパレード、ゲームや飲食物を提供するお祭り広場の開催、企業や町会他様々な有志団体の連が練り踊る盆踊り「飯田りんごん」などが催される。人形劇カーニバルにあわせた開催にあたっては、人形劇カーニバル実行委員会側は、商業的な関係からはできるだけ離れて、市民による文化運動として進めていくと開始当初は考えていたため、慎重に検討された（人形劇カーニバル飯田実行委員会10周年記念誌編集委員会，1990：41）。

人形劇カーニバルは、3回の回数を重ね組織が整い始めたが、この段階では、ワッペン売り上げ（表2-1参照）からも理解されるように、市民の間に十分に浸透するには至っていなかった。地区公演を実施している地区内における広報活動が十分でなく、住民への周知が十分ではなかったこともあるが、市内全域に分散して公演が開催されるなか、市内全域で開催されている人形劇の公演すべてをまとめて人形劇カーニバルという飯田市民の祭典だという全体像が捉えにくい点が、飯田市民全体に周知を拡げる壁となっていたよう

である。

表 2-1 人形劇カーニバル 1～10 回 参加劇団数および上演の実態

	開催期間	劇団数	劇人数	上演会場数	公演数	ワッペン 売上枚数	観劇者数 (子ども)
第 1 回(1979 年)	2 日間	60	381	17	44	4,150	
第 2 回(1980 年)	3 日間	60	313	19	49	4,328	
第 3 回(1981 年)	2 日間	88	524	20	74	5,125	
第 4 回(1982 年)	3 日間	95	618	24	80	5,838	
第 5 回(1983 年)	4 日間	114	651	34	140	7,202	
第 6 回(1984 年)	〃	112	729	41	137	7,891	18,670
第 7 回(1979 年)	〃	126	829	54	150	9,208	21,387
第 8 回(1980 年)	〃	180	1,311	56	141	17,889	28,419 (15,638)
第 9 回(1981 年)	5 日間	191	1,234	62	154	18,375	33,294 (17,980)
第 10 回 (1982 年)	〃	330	2,234	107	288	27,008	78,658 (37,620)

(出典:いいだ人形劇フェスタ 10 周年記念誌編集委員会, 2009,『つながってくー人形たちと歩んだ 30 年ー』p260)

* 観劇者数に関しては、1～5 回までは記録なし。第 10 回は、世界人形劇フェスティバルを併催した。

当時、長野放送局飯田支局勤務であった伊藤義夫は、人形劇カーニバル開始期の 4 年間飯田支局に勤務し、この祭典の市内および市外への広報活動や、今田人形の継承活動支援に尽力を尽くした。伊藤は、赴任した飯田市で開始された人形劇カーニバルが、素晴らしい取り組みであるにもかかわらず、市外はもとより市民さえも周知していない実態に驚き、残念に思った。そこで、飯田市観光課などのより広く行政の部署や商工会などの民間団体を巻き込んで広く広報していくことを提案し、その一環として「飯田りんごん」開催の提案を強く勧めたのである。伊藤は、1992 (平成 4) 年に開始された地域文化フォーラム ‘92 のシンポジウムで、次のように述べている。

あれ（以前は秋に行われていたお祭りで、後の「飯田りんごん」を含めた「飯田まつり」となった祭り：筆者）がカーニバルの時期に移ったのには公民館の主事さんには、怒られたと思います。なぜ、あそこに移ったかというと、実は劇人のみなさんを市民総出でお迎えしたい。それからもう一つ、市民の人たちに人形劇カーニバルが行われてい

るんだと知ってもらうため。最初の年には舞台を作りまして、人形劇カーニバルの看板も掛けて、舞台はつかわなかったけれど雨でしたから。でも人形劇カーニバルを飯田でやっているんだとみんなに知ってもらえた（人形劇カーニバルシンポジウム実行委員会，1992，「地域文化フォーラム'92 の記録」：66）。

こうして回を重ねるなかで、地区公演のかたちが作られるとともに地区公民館を通して住民への人形劇フェスタの理解が広がった。

また、伊藤のような積極的に人形劇フェスタに意見し、かかわる一般市民の存在がきっかけとなったのか、その点は不明であるが、地区公演以外の催事のひろがり人形劇フェスタに見られるようになり、そこにかかわる地区公民館や分館を中心とする住民以外の市民の参加が現れ始めた。このような人形劇カーニバルの最初の転機が 1985（昭和 60）年第 7 回で起きる。

2 第 2 期 第 7～10 回（1985～1988 年）公民館活動として市民への浸透

2.1 まちづくりを目指す文化運動としての位置づけ

前節の表 3-1 からわかるとおり、人形劇カーニバルは開始から 6 回を重ね、年々規模が拡大し、参加劇団、参加劇人数、上演会場数、ワッペン売上数とも、開始当初の約 2 倍に増加した。また、当初地区公演を中心としていた内容も拡大をみせ、先述したように、第 4 回には飯田祭りが同時開催されるようになり、歩行者天国での「お祭り広場」が開催され、街頭での人形劇の上演とお楽しみひろばが開設された、また、第 6 回にはワークショップの開催や市街地商店街のウィンドウ人形展の開催と、さまざまな催しが行われるようになった。このような多角化をうけ、運営面において、実行委員会事務局を担当していた社会教育課と地区公民館主事を中心とした実働部隊だけでは業務をこなすことが難しくなっていた。特に、地区公民館主事の本業である地区公民館で行われる地区実行委員会の要求や要望に対応しきれない事態が生じ、問題となった。そこで、7 回目の準備を進めるなかで、地区公民館主事が、人形劇界の現状分析や人形劇カーニバルの位置づけ、今後の運営などについて提案をまとめ、人形劇カーニバルの課題解決と今後の方向性の明確化に取り組んだ。

ここでまとめられた提案により第 7 回には運営体制を一新し、実行委員長に市長、そして事務局を社会教育課から飯田市公民館に移動した。事務局が教育行政を担当する社会教育課から教育機関である公民館に異動したことで、人形劇カーニバルが地区公民館や分館を中心に住民が取り組むまちづくりを目指す市民文化活動であることが、行政組織のなかでも明確に位置づけられた。

開催期間中に行われる実行委員長である市長の挨拶は、それまで公民館長が第 1 回の国際児童年に重ねて慣例的に述べていた「児童の健全育成のため」に代わり、「まちづくり」

「地元住民と一体となって」という言葉が並べられるようになった（人形劇カーニバル飯田実行委員会 10 周年記念誌編集委員会，1990：60）。つまり、松澤市長が人形劇カーニバルを開催しようと考えたそもそもの目的であった市民が参加する文化活動によるまちづくりというねらいが、この時点で改めて示されることとなった。

さらに第 7 回より、飯田市における人形劇カーニバルの位置付けおよび基本的な考え方に関する明文化についての検討が始まり、1987（昭和 62）年第 9 回の開催にあわせ人形劇カーニバル実行委員会が発表した。以下 6 項が「カーニバルの基本的な考え（人形劇カーニバル飯田実行委員会，1987：3）」である。

- ・カーニバルは、市民と劇人と行政が一体となってつくりあげる文化運動であり、文化創造の喜びがその原動力である。
- ・カーニバルは、地域平面（地域全体に広がりを持つ）の趣旨に基づき、分散公演を基本的な柱とする。
- ・カーニバルは、自由・平等の主旨に基づき、すべての劇人が手弁当により参加すること及び全ての観劇者が統一価格のワッペンにより観劇することを原則とする。
- ・カーニバルは、現代芸術と伝統芸術を調和させ、新しい芸術を創造していく場である。
- ・カーニバルは、劇人相互および市民相互の研修と交流の場であるとともに、劇人と市民のふれあいの場である。
- ・カーニバルは、地域の文化発展のみならず、まちづくり、地元の企業の活性化、観光資源の開発、国際化等を含めた地域の総合的発展をめざしている。

第 1 項にカーニバルを「市民と劇人と行政が一体となってつくりあげる文化運動」と性格付け、それはまた第 3 項の自由・平等の主旨に基づき、劇人は手弁当で参加し、全観客が統一価格のワッペンにより観劇することを原則としたことにより、一層「文化運動」としての位置づけが明確に示された。この、文化運動という規定は、人形劇人が飯田で人形劇の大会を開催するにあたって市民との交流を目的とした芸術活動としたいという提案から発想されたといえる。しかし、人形劇フェスタは、市民・劇人・行政の 3 者によってつくり上げる文化活動であるとし、行政を市民や劇人と並列において協同的な関係としていることは疑問である。あわせて、行政は、1 回目に 50 万円その後も 3 回目には 70 万円、4 回目には 83 万円、6 回目には一気に増額し 200 万円、7 回目には 350 万円、9 回目には 800 万円と（人形劇カーニバル飯田実行委員会，1990：124）、年々増額させて補助金を支出している点からは、この文化活動を文化運動と規定していることへの疑問がさらに大きくなる。

佐藤一子は、基本的な考え方に示された文化運動という規定に対し、「当初から行政当局が補助金を支出して関与している事実を考慮するときわめて斬新なとらえ方ということが

できる。このカーニバルは社会教育行政が主軸となって支援している公共事業としての側面を持っている。先進的な飯田市の社会教育の実績があるからこそ、「文化運動」という捉え方が行政上も自然に行われているとって過言ではないであろう。市長部局も「イベント」ではなく「文化運動」であるとの認識をふまえ、市民の主体的な参加を促進するのみならず、人形劇人の感性と文化的要求を最大限尊重する姿勢を保持している。このことがカーニバルの発展をささえる基本的要因のひとつとなっている点が第一に注目されよう」と述べている（佐藤，1989：164-165）。佐藤は、飯田市ではかねてより公民館を中心とした社会教育が活発に展開されており、それは社会教育行政の功績であったと評価している。そして、人形劇カーニバルにおいても、行政主導、行政の指導下で進めるにもかかわらず、あたかも市民主体の「文化運動」として進めようとしている飯田市のやり方を、飯田市においては自然なことであり、市民の主体性を促進するとして評価している。しかし、9回で800万円にも膨らんだ補助金を出す中で、どれだけ市民の主体性が保障されるのかはなほ疑問であり、文化運動としての位置づけは、まさに行政の「理念」であり、行政の方針であったと考える。すなわち行政がカーニバルに参加する「市民」に「かくあれかし」と期待した行政指針が示されたものであるといえよう。したがって、人形劇カーニバルが行政主導で設定されたものであり、実際に地区公民館で公演の運営にあたる住民にとっては、飯田市の統制が取れた社会教育行政のシステムを活用して行政から下ろされたものであったと感じてもおかしくないものであったと考えられる。

2.2 国際化と市民理解の拡がり

第3回人形劇カーニバルにアメリカとハンガリーから初の海外劇団が参加したのを契機に、第7回にはハンガリーと台湾から、そして第8回には「第2回ウニマアジア会議」（主催：ウニマアジア委員会・日本ウニマ）が併催され、アジアを中心に12カ国の人形劇関係者が参加した。各国の人形劇の現状と問題点が協議された会議のほか、各国の人形劇団の上演が多数行われ、飯田の街は国際色豊かに賑わった。市民は、観劇を通して海外の人形劇文化に触れ、また、ホームステイの受け入れや通訳ボランティアにより海外の劇人との直接的な国際交流を体験した。（飯田市，1989：「広報いいだ」No466）

これに続き、ウニマ（国際人形劇連盟）が4年に1度開催している「ウニマ世界大会・世界人形劇フェスティバル」を1988（昭和63）年のカーニバル第10回に併せて招致する活動に取り組み、決定を得た。

松澤市長は、カーニバルが回を重ねるなかで徐々に市民に浸透し、市民上げてのカーニバルになったと判断し、

今後は、この国際的な大行事を如何に立派に成功させるかについて全市を挙げて取り組むことになりますが、このことがこの地方の文化や芸術の振興に役立つだけでなく、

青少年の眼を世界にむかって大きく開かせ、国際化時代にふさわしいような人材が育成せられ、この地方の活性化のために大きく役立つことを期待するものです（飯田市、1986：「広報いいだ」No464）。

と、「広報いいだ」で述べている。

また、1988（昭和 63）年 6 月開催の市議会にて、間近に迫った第 10 回カーニバル・世界人形劇フェスティバル開催に際し、

こういうことを通じて市民が外国の人たちと接触をしたり、そしてその友好を深めることによって、自負心というような言葉をお使いになりましたが、やはり今までは山の中の小さな閉塞的な都市、地域でありました飯田の市民が大きく世界に目を開くことができるというようなことになることを期待しておるわけでございます。（中略）これをきっかけにして国際交流をすると、なんとか市民が自信を持って国際的な場に出て行けるような、あるいは国際感覚が身につけられるようなということを期待しておる（飯田市議会事務局、1988：10）。

と、地域で成熟してきた活動を広く海外にまで発信することで、人や文化のより多様な交流を生み出し、地域住民の国際化の育ちとともに地域へのアイデンティティ育成がねらわれると述べている。

第 10 回を記念して併催された世界人形劇フェスティバル（日本ウニマ主催）は、9 日間という通常の倍以上の期間を設定し、海外からの参加 31 劇団 403 人、国内劇団とあわせると 330 劇団 2,234 人、107 会場での上演が実施された。この時も、海外から来た人形劇人と飯田市民との交流はさまざまな場面に生まれ、地方都市の田舎ならではの温かいもてなしを受けた海外からの劇人は、その後「IIDA」の名を広く世界に広げることとなった。（人形劇カーニバル飯田実行委員会 10 年誌編集委員会、1990：85-93）

当時の日本ウニマ会長の川尻泰司は、

（人形劇カーニバルが）地域に開いた窓という観点でいうなら、とにかく全てが中央集中、大都市中心に行われがちなわが国の状況下で、地方的地域社会に人形劇という年齢的差別を超えて、子どもから大人までを含めて働きかける文化的活動を通して、地域社会の文化的活性化をもたらし、さらにその国際的展開によってその地方的地域性に大きな刺激をもたらし、生活、文化、行政にその国際的ひろがりを見ちびき入れるという役割を果たしたとあってよいように私は思う。（人形劇カーニバル飯田 10 周年記念誌編集委員会、1990：126-141）

と述べ、人形劇カーニバルの 10 年間を評価している。

第 7～10 回の参加劇団、参加劇団員数、ワッペン売上枚数、観劇者数をみると（表 2-2 参照）、劇団員の参加の増加もさることながら、ワッペン売上枚数は、劇団員の増加以上の増加が毎年みられる。ワッペン売上数から参加劇団員数を除いた数を単純に市民のワッペン購入数（市民参加数）として推察すると、第 7 回は 8,379 枚、第 8 回は約 2 倍に増加し 17,758 枚。第 10 回はさらに 7,000 枚増加し 24,774 枚である。第 10 回は、世界人形劇フェスティバルが併催されたが、規模の拡大による運営側に携わる市民の増加とあわせ、海外からの人形劇団の参加が、市民の関心を高めることに影響したと考えることが出来る。

表 2-2 ワッペン売上数と劇団員数からみた市民参加数

	劇団 (人)	劇団員数 (団)	ワッペン 販売数 (枚)	市民参加推測数 (ワッペン売上枚数－劇団員数) (人)	観劇者数累計 (子ども)(人)
第 7 回 (1979 年)	126	829	9,208	8,379	21,387
第 8 回 (1980 年)	180	1,311	17,889	17,758	28,419 (15,638)
第 9 回 (1981 年)	191	1,234	18,375	17,141	33,294 (17,980)
第 10 回 (1982 年)	330	2,234	27,008	24,774	78,658 (37,620)

（出典：人形劇フェスタ 10 周年記念誌編集委員会，2009、『つながってくー人形と歩んだ 30 年ー』p260）

世界人形劇フェスティバルを併催した第 10 回人形劇カーニバルが大成功に終わり、市民に人形劇フェスタの存在が広く周知され、市民や劇人の間に「人形劇のまち」がキーワードとなり、「人形劇のまちづくり」への機運が一気に高まったと、当時を知る元飯田文化会館館長飯島剛氏は述べている。（いいだ人形劇フェスタ 10 周年記念誌編集委員会，2009：64-69）

3 第 3 期 第 11 回～20 回（1989～1998 年）まちづくりの中核としての拡大

3.1 まちづくりの中核への位置づけ

人形劇カーニバル 10 周年の成功を受け、第 11 回以降をどうしていくかが飯田市にとって大きな課題となった。市は文化庁の協力を得て、第 11・12 回に「地域づくり文化フォーラム」を開催し、人形劇カーニバルを文化による地域づくりの先進的事例として全国へ発信するとともに、国内の実践に学ぶパネルディスカッションを開催し、参加者相互が文化によるまちづくりについて考え合う場を設けた。

また、庁内においては、1992（平成 4）年に「人形劇のまち研究プロジェクト」を設立し、10 年にわたる人形劇カーニバルの成果を振り返るとともに、今後「人形劇のまちづくり」をスローガンとしてまちづくりを進めていくための検討が重ねられた。翌年まとめられた報告書¹⁴には、人形劇のまちと言われるようになった経緯、これまでの成果、人形劇のまちが求めるものと、その実現にむけた具体的事業展開がまとめられた。

人形劇カーニバル 10 回を通しての成果については、市民・劇人・行政それぞれに関しては、以下のようにまとめられている。

〔報告書〕 第 3 節 人形劇カーニバル飯田のもたらしたもの

（2）行政の立場から

- ①今までに人形劇カーニバル飯田ほどに多くのそして幅広い層の市民がかかわり参画して展開される事業はなく、「文化を基調とした地域づくりの重要性」或いは「地域づくりにおける文化的側面の重要性」を認識することになった。
- ②世界人形劇フェスティバルやウニマアジア地域会議の開催、シャルルヴィル・メジエール市との友好都市提携などにより「地方の国際化」が実感される機会となった。
- ③行政内部における人形劇カーニバル飯田に対するコンセプトづくりがなされていない。

（3）劇人の立場から

- ①年 1 回の表現の場が保障され、全国の劇人同士の交流を深め、情報交換を行う機会となっている。
- ②束縛されない環境のなかで、また手弁当で参加することで劇人自らのアイデンティティの発見・認識につながっている。
- ③現代芸術と伝統芸能が調和した環境づくりを自ら主体的に参加し創造することが出来る。
- ④参加のメリットが少ないと判断したプロ劇団が、人形劇カーニバル飯田へ参加しない状況が表れだしている。
- ⑤手弁当方式が今まで人形劇カーニバル飯田を継続し得た要因である一方、劇人としてノーギャラでいつまで参加できるかという不安が出始めている。

（4）市民の立場から

- ①人形劇を通した人と人との触れ合いにより、地域に関心を持ち、ロマンや誇りを持つようになっており、コミュニティづくりへの熱意が出てきている。
- ②地域の伝統芸能が再認識され、伝統人形浄瑠璃そのものも活性化されてきている。

¹⁴ 飯田市は 1992 年に『「人形劇のまち」研究プロジェクト研究報告書』をまとめた。

③人形劇カーニバル飯田の展開を出発点として、いろいろな場面でまちづくりに参画する人々が現れ始めている。

④社会人のサークル、小中学生のクラブなど、地元のアマチュア劇団が作られ、市民の側に文化を創造する力が根付き始めている。

⑤文化では商売にならないと感じている市民がいるなど、市民として人形劇カーニバル飯田を支えていくという気持ちの盛り上がりには欠ける。

(飯田市, 1992 : 3)

本プロジェクトのメンバーは、教育委員会教育次長を座長に、建設部都市計画課長・商工部商業観光課長の2名を副座長に、市内の12課から課長を含め16名の職員および文化会館館長と会館職員2名の行政職員合計19名、そして橋北公民館館長1名のあわせて20名で構成された。こうしたメンバー構成のプロジェクトのなかで市民や劇人の実態把握がどのように行われたか、客観的根拠となるデータは示されていない。

「人形劇のまち」については、次のようにまとめている。

- ・カーニバルは13回の歴史のなかで子どものための文化事業としてだけでなく、地域文化を育てる可能性をもった事業であるというように見方が変化し、地域文化やコミュニティへの波及効果が大きく、単なるイベントではない文化運動としての継続性を有している。
- ・「人形劇のまち」の求めるまちづくりの理念は、「いろいろな人が訪れ楽しい交流のある開かれたまちをつくりたい」というものである。このまちづくりを進めることは、少なくとも地域の個性を明確にし、多様な文化を育んできたこの地域の特徴を現代に再生し人形劇を通して世界や国内とのいろいろな交流を可能にして、この地域で生活することが楽しいという雰囲気を創造してゆくことである。
- ・具体的な事業や事業展開については、人形劇のまちの理念にあっていれば、カーニバルをさらに振興するだけでなく、いろいろな事業展開が望まれ、その際は、市民が主体になるもの、劇人が主体となるもの、行政が主体となるものというように分かれるが、それぞれがはっきりした目的意識をもって事業を展開していくことが大切であるとしている。

(飯田市, 1992 : 5)

行政は、公民館を活用するかたちで人形劇カーニバルを各地区の集落＝区で実施し、点として市内全域に祭典を拡げた。そして、その定着化により、点として各地区で行われていた人形劇カーニバルを飯田市を一つにまとめる祭典とし、まちづくりのシンボルとして

位置づけ「人形劇のまち」づくりを進めていくこととしたといえる。

その後の飯田市の人形劇のまちづくりは、この報告書をもとに、カーニバルの開催、人形劇の地域への普及、人形劇関連施設等の充実、人形劇を介した国内外との交流といった施策により組み立てられ、展開されることになった。そして、それらは、1994（平成 6）年に飯田文化会館に設置された「人形劇のまちづくり係」が担うこととなった。

こうした経緯を踏まえ、1996（平成 8）年にまとめられた飯田市第 4 次基本構想では、「人も自然も美しく輝くまち飯田ー環境文化都市ー」を目指す都市像とし、「人形劇のまちづくり」を明確に位置づけた。「子どもは美しく豊かなところと夢を育み、大人たちは誇りを感じて交流を楽しんでいる『人形劇のまち』を飯田市の個性として磨き、小さな世界都市をめざします」として重点プログラムの 1 つに置き、また、「個性的で魅力的な地域文化を育むとともに、人形劇の振興に貢献できるように、今まで以上に市民・劇人・行政が一体となって、人形劇をいかしたひとづくりを進めていきます」として、ひとづくりの柱に位置づけた。

3.2 本部と地区の二分化

人形劇カーニバル 10 周年を記念し、文化会館に併設させて飯田人形劇場が開設された。これにあわせ、文化会館と人形劇場を市の文化活動の拠点とすべく、文化会館のこれまでの貸し館業務に事業企画業務を含め機能拡充が図られた。この画期的な変革により、行政のハードとソフト両面からの文化政策への取り組みが始まった。

そして、第 11 回人形劇カーニバルからは、実行委員会事務局を飯田市公民館から飯田文化会館事業係へ移管させた。これまで各地区の公民館主事は、拡大したカーニバル事業へのかかわりが大きくなり、本来の業務である各地区公民館や分館の公民館活動として取り組まれる地区公演に十分かわれない状況が続いていた。しかし、この体制により、地区公演以外の事業を本部実行委員会の事業として文化会館事業部が事務局として担当する本部実行委員会が行い、主事は住民の文化活動として行われる地区公演の支援に専念できるようになり、地区公演を通した「ひとづくり」のための活動の充実がねらわれた。当時伊賀良地区公民館の主事であった木下巨一は、この頃より人形劇カーニバル地区公演に住民の関心が向けられるようになり、伊賀良地区では今でも継続され開催されている「夜のカーニバル」と銘打たれた大人向け人形劇公演が、ある 1 人の住民の提案により開催されるようになったと述べている¹⁵。

こうして、地区実行委員会を中心とした地区公演が市内全域に広がることによって、人形劇カーニバルの規模が大きくなっていった。そして、地区公演は各々の地区の地区公民館や集落＝分館が中心となった住民による地区公演実行委員会が担い、規模の拡大したカ

¹⁵ 2011 年 8 月、飯田市公民館にて、現在飯田市公民館副館長の木下巨一氏にインタビューを実施した。

カーニバル全体の総括および本部の公演や催事は事務局である行政の文化会館や劇人が中核を占める本部実行委員会が担うというように役割が明確に分化していった。これはカーニバル全体における地区公演および地区公演実行委員会のあり方や位置づけに少なからず影響を与えた。つまり、全国からの劇人・観客の集客をねらう活動や人形劇の芸術的向上・劇人の交流研鑽に直接関わる公演や催事を担う「本部（実行委員会）」と、広く飯田市民に人形劇を普及し合わせて集落＝区のひとづくりをねらった社会教育を担う「地区（実行委員会）」が、この頃より次第にそれぞれの色合いを異にし、差別化、隔離化されていく要因になったと推察する。

また、飯田人形劇場を皮切りに、人形劇のまちの活動拠点・シンボルの建設は、カーニバル第 10 回終了後に交替となった田中秀典市長時代に顕著になる。1994（平成 6）年に今田人形座の活動の拠点として今田人形の館、1998（平成 10）年に飯田市に接する豊丘村出身の竹田扇之助が座長を務める竹田人形座の人形および資料を保管展示する竹田扇之助記念国際系操り人形館、そして、1999（平成 11）年には、黒田人形座の活動拠点として黒田人形浄瑠璃伝承館が開設された。行政は、こうした建物によりハード面の充実を図ることで、カーニバル開催期間のみでなく、そこでの人形劇の公演や日常的な稽古活動の展開が可能になり、日常的にまちのなかに人形劇の雰囲気が醸し出される「人形劇のまち」らしさをつくり出そうとした。

さらに、ソフト面では、1994（平成 6）年に、当時の教育長小林恭之介の意向により、市内全小中学校（全て公立）に人形劇クラブを設置し学校において人形劇に取り組むよう指示し実施に移された。小林は、「観るだけでなく実際に演ずることを通して創造的で豊かな心を育てる」と、人形劇が子どもの情操教育に相応しい教材であるとして、学校教育への浸透を図った。人形劇について何も知識を持たない教諭が多いなか、文化会館では、教諭対象の指導者研修講座を開講し、学校での人形劇普及の支援にあたった。

会議等での資料には残されていないが、教諭らの困惑は大きかったという声が聞かれた。

こうして、1989（平成元）年から 1998（平成 10）年まで、人形劇カーニバル第 11 回から第 20 回までの 10 年間は、前半が「人形劇のまちづくり」を政策として明確にすること、後半が第 4 次基本構想に則って「人形劇のまちを飯田の個性として磨く」ことであったと前出の元飯田文化会館館長飯島は述べている（いいだ人形劇フェスタ 10 周年記念誌編集委員会、2009：67）。

表 2-3 に第 11 回から第 20 回の人形劇カーニバル開催状況の概要をまとめた。第 20 回は、世界人形劇フェスティバルを開催したため、開催期間が長く、参加劇団及び公演数も多い。また、参加証ワッペンが、第 14 回までは 500 円であったが第 15 回以降 700 円（3 歳以上一律）となった。

地区公演を中心とした公演会場数は約 80～90 会場。ワッペン売上数は、11 回目は 20,000 枚を超えていたが、減少し 15,000 枚ほど。観劇者数は、12・13 回に 40,000 人を超えた

がそれ以降は 32,000 人ほどを維持している。

表 2-3 人形劇カーニバル第 11～20 回の概要

	開催期間 (日)	劇団数 (団)	劇人数 (人)	上演会場数 (会場)	公演数 (公演)	ワッペン売上 (枚)	観劇者数 (子ども) (人)
第 11 回 (1979 年)	4	243	1,472	80	201	20,396	39,588 (21,394)
第 12 回 (1980 年)	4	271	1,954	81	220	18,924	40,519 (20,958)
第 13 回 (1981 年)	4	260	1,877	79	215	18,891	40,728 (21,546)
第 14 回 (1982 年)	4	265	1,881	80	209	17,694	33,070 (16,645)
第 15 回 (1983 年)	5	307	1,981	90	268	16,742	32,973 (17,162)
第 16 回 (1984 年)	4	284	1,963	88	239	16,413	32,357 (16,034)
第 17 回 (1979 年)	4	300	1,837	90	211	15,977	31,735 (15,445)
第 18 回 (1980 年)	4	301	1,883	88	230	14,849	31,276 (15,696)
第 19 回 (1981 年)	4	283	1,694	90	231	14,867	32,285 (16,938)
第 20 回 (1982 年)	8	379	2,421	94	293	18,922	51,532 (22,890)

(出典：いいだ人形劇フェスタ 10 周年記念誌編集委員会，2009，『つながってくー人形たちと歩んだ 30 年ー』pp260-261)

3.3 カーニバルを市民のものへ

田中市長は、1993（平成 5）年 12 月の市議会において文化活動の推進について、つまり、市民参加の文化によるまちづくりへの行政の関わり方を述べている。

地域における文化活動は、地域の連帯を育み、日常の市民生活に潤いをもたらすものでなければならない。そのために活動の主体は市民であり、行政が文化活動を施行する

ようなあり方は、部分的、過渡的にはあり得ても、本来の姿ではなくして。生涯教育という時代を迎え、これら市民の活動を情報や施設、財政面でサポートできる体制づくりを主体とし、ともに行動しつつも行政は本来黒子の立場にあるべきと考えております。（飯田市議会事務局、「飯田市議会会議録平成 5 年」）。

この「行政は黒子、カーニバルは市民のもの」という考えを、田中市長は就任当初から変わらず持っていたようである。就任直後に実施された人形劇カーニバル 10 周年記念誌の座談会で、これからの望ましい人形劇カーニバルの在り方について次のように述べている。

どうやって市民のものにしていくかなということですね。先ほどの話の中にございました公民館活動が盛んだから今日まできたってというのは、これはもう間違いのないところですけども、ウインドー（人形展）の展示にしましても、やっと市民のみなさんがかなり理解を示してきてくれた。これを今後は市民のもとに戻さなくてはいけないということです。環境整備はいろいろ作ってくれましたが、今度はそれをどうやって利用して市民のものに根付かせていくかということです。（人形劇カーニバル飯田 10 年誌編集委員会、1990：223-224）

田中市長は「市民」を連呼し、「市民のもとに戻す」「市民のものに根付かせる」と述べている。人形劇カーニバルは、前市長松澤太郎が、市民が参加しつくりあげる文化活動によるまちづくりの展開を目指して開始し、市民と人形劇人と行政の三者がそれぞれの役割をもってかかわりつくり上げる祭典のかたちの構築を目指した。上述した変遷でも明らかなように、開始から祭典のかたちがつくりあげられる段階は、行政主導ですすんだ。市民が参加する文化活動として、公民館を活用し市民が運営に携わることとして設定された地区公演も、実態は地区公民館の公民館主事と保育士や飯田子ども劇場会員が中心となっており、公民館委員を中心とする住民の参加はなかなか広がりを見せられずにいた。しかし、10 年が経過し、人形劇カーニバルの規模が拡大し、地区公演の運営に住民がかかわるようになり、さらに、青年会議所等の幅広くさまざまな市民諸団体が本部実行委員会にかかわり人形劇カーニバルに参加するようになってきていた。

田中市長は、人形劇カーニバル開始当初ねらっていた地区公民館や分館の役員を中心とする住民だけでなく、青年会議所などの自ら手を挙げ活動への参加を申し出る諸団体の市民にまで参加の幅が広がった実態をみて、行政は市民をサポートする立場になるべきであり、それが生涯教育を目指す時代の行政の在り方だと考えたのである。

カーニバルが飯田市の夏の行事として定着した第 11 回以降、地区公演以外での劇人との交流やイベント的な賑わいの創出を求める市民の団体が新たに結成され、人形劇カーニ

バルに参加し始めた。第 11 回より活動を開始した市民会議は、当初、実行委員会広報部のサポートのために公募された有志市民であったが、彼らが市街地の住民や商店街関係者であったことから市民会議と称する団体を立ち上げた。市民会議では、期間中の観劇が難しい商店街関係者のために 7 月にプレフェスティバル「ふれあいパペットリーナイト」を開催したり、人形劇人パレードを盛り上げるために景品を提供したり、また、「人形劇人と語る会」を開催し人形劇カーニバルの将来像や劇人・市民それぞれの役割、それぞれの要望などを話し合う場をつくった。飯田青年会議所は、第 11 回より遠方より来飯した人形劇人の移動をサポートする車での送迎ボランティア「ふれあいキャブ」を開始した。また、12 回目からは人形劇カーニバルの催事の中心となる飯田市中央公園で行われていたカーニバルステーションの運営に団体としてかかわるようになり第 17 回からは運営の中核を担うようになった。飯田市婦人会や農協（JA）は、市民と劇人との交流を深めようと、「野外交流会・焼き肉大会」を企画し、実施した。

田中市長が「市民」と言うのは、地区公演にかかわる地区公民館や分館の役員である住民たちではなく、第 10 回を越えてあらたに人形劇カーニバルに参加してきた上記のような市民団体への拡がりを目指している。カーニバル第 9 回に発表された、上掲の「人形劇カーニバルの基本的な考え方」の 6 項目の最後に「・カーニバルは、地域の文化発展のみならず、まちづくり、地元の企業の活性化、観光資源の開発、国際化等を含めた地域の総合的發展をめざしている。」とある。市民参加を実現させる方法として、人形劇カーニバルは市民が参加しつくりあげる文化活動であるとして、市内全地区の地区公民館や分館を中心に開催される地区公演を最大の特徴とし重視してきた。地区公演は住民が人形劇文化を楽しみ、人形劇を介して住民と劇人、住民同士など多彩な交流を楽しむことがねらわれてきたが、第 11 回以降は、まちの観光や市の国際化に人形劇カーニバルを活用することがねらわれていったと考えられる。そして、地区公演の中心となる公民館役員の「住民」と、市街地の盛り上がりや人形劇の振興を目指した企画の提案および実施にあたる団体や個人で参加する「市民」という、2 つの活動内容と”市民”が存在するようになった。

第 20 回の節目の年を視野に入れ、田中市長は 1994（平成 6）年 9 月の市議会にて市民にとってのカーニバルの価値を次のように述べている。

第 20 回の人形劇カーニバルにかかわります最大の課題は、その時、名実ともにカーニバルのまちを超えて、いかに人形劇のまちへ近づいているか、それは小さな世界都市への姿へ脱皮しつつある状況にありたいということです。先にも申したとおり、21 世紀は心の時代、生きがいの時代、文化の時代として色濃くなるものと思われます。一地方都市でありましても、世界に光を放つ珠玉のようなまちにしよう、それを市民が意識し、愛するものを持っていることが、これからの国際社会の中で生きる手だてとなるものだと思います。（飯田市議会事務局、「飯田市議会会議録平成 6 年」）

ところが、第 20 回の人形劇カーニバル開催を直前に控えた 1998（平成 10）年 7 月、田中市長より突然のカーニバル終了宣言が出され、人形劇カーニバルは一旦幕が閉じられることになった。人形劇カーニバルが終了に至った経過について、田中市長は同年 9 月の市議会において次のように答弁している。

事態の引き金となったのは、カーニバルの事前打合せにおける行政側事務レベルの不用意な発言であったが、それに至るまでも長い間の様々な課題や意志の疎通を欠いた事例の積み重ねがあり、それらがその発言によって一気に吹き出したと考えられる。その発言とは、劇人と市民と行政の三者が共同し等しく主催者の立場を担う三位一体の関係の中で役割分担を担い成長してきたにもかかわらず、「劇人委員を市で委託したい」との提案だった。（飯田市議会事務局、「飯田市議会会議録平成 10 年」）

そして、来るべきときが来たと予想された当然の事態であったという一議員の見方も受けながら、劇人・市民・行政の三位一体について、さらに考えを述べている。

ことによると三位一体の意味を単に 3 つのものが 1 つに融合するというように理解をしている向きが多いが、劇人・市民・行政の関係性のなかに、少なくとも 2 つの重要な意味合いがあると考えている。1 つは、三者がそれぞれ行動の理念や様式、そして価値観が異なるということであり、人形劇カーニバルにおいてはあえてこれをひとつにしようとするのではなく、まず、お互いが基本的に異なるものであることを認識しながらその上で互いの特性を生かしながら共有できるものを見出し、ともに育んでいこうというもの。今回の事態は、お互いの違いをまず認め合うというこの原点が風化したために生じたことだともいえるのではないか。もう 1 つは、三位とは固定的、絶対的なものではなく、流動的であり、総体的な関係だと思う。このことこそ、20 年間を検証し、新たな人形劇の祭典を考える上で舞台が飯田であることの必然性を説明する重要なポイントだと考えている。「文化とは農耕や土地、さらには自然や風土といった地域固有の環境の中で、人びとの多岐にわたる継続的な活動の集積として培われるその地域独特の息型の形式の総称である」そうした考え方に立つと、本来行政の主導によって形成されるといった類の形にはまったものではないと考える。そうすると、あらたな三位一体の体制においても、行政は基本的には黒子としてかかわることになると考える。（飯田市議会事務局、「飯田市議会会議録平成 10 年」）

つまり、行政は、市民が自ら提案し、企画し、運営する、市民の文化活動が飯田市で展開されることが、飯田市の目指すまちづくりにつながると考え、市民が新たな祭典を生み

出すことを念頭に、三位一体の人形劇カーニバルを一旦終了させたといえる。

1998（平成 10）年 11 月 15 日、最後の人形劇カーニバル実行委委員会において、実行委員長である田中市長は、

私としては今回のことは、カーニバルが 20 年間積み重ねてきたものを否定するものではなく、成人を迎えたカーニバルがこれからの時代にふさわしくなっていくために、必要な選択であったと理解しております。（いいだ人形劇フェスタ 10 周年記念誌編集委員会，2009：80）

と述べている。人形劇のまちをまちづくりの柱に据え、その核を人形劇カーニバルとしていた行政は、人形劇カーニバルが終わり、飯田から人形劇の祭典が無くなってしまうことは想定していなかった。田中市長の言葉には「新たな三位一体の体制においても、行政は黒子として関わることになる」とあり、21 年目以降、新たな形での祭典の継続が想定されていた。新たな祭典の誕生に向けた水面下の動きがあったかは不明である。しかし、この言葉からは、市長の終了宣言によって人形劇カーニバルは終わるものの、新たな祭典の開始に向けて動き出す市民がいることを確信していたことが想像できる。

なお、地区公演に関しては、1998（平成 10）年 9 月 10 日に飯田市公民館長・主事会合同会議が早々に開催され、飯田市長から終了決定までの経緯と問題が説明され、それを受けた協議を通して飯田市公民館は来年以降も人形劇の祭典に取り組む姿勢であることが決議された¹⁶。表 2-3 に示したように、第 11 回以降第 20 回まで、公演会場数は 80 から 90 会場を維持し、人形劇カーニバルの規模が維持されたまま開催を続けていた事実からは、地区公演が各地区の地区公民館や分館を中心に安定して実施され、市民に理解が広がっていたと考えられるが、9 月 10 日の公民館長と主事の会議が、各地区の地区公演実行委員に関わった住民の声を集めたものだったのかは不明である。

人形劇カーニバルの開始にあたって、終了においても、行政と人形劇人の間でことが進み、祭典をつくる三本柱に置かれた市民には、決定事項が下ろされてくるだけで、どちらにおいても振り回されていた感がぬぐえない。にもかかわらず、次節で触れるが、行政が想定したとおり、人形劇カーニバルの終了を受け、市民の有志が新たな祭典を目指して活動をはじめ、地区公演を担う地区公民館や分館も継続を決断していることは疑問である。

4 第 4 期 21 回～38 回 市民主導の文化活動への発展

4.1 市民による新しい祭典の創造

開催前に市長の終了宣言が発表された第 20 回の人形劇カーニバルは、周年記念として

¹⁶ 新しい人形劇の祭典準備会が作成し、1999 年 3 月 18 日のプレス発表で配布された発表資料に、終了宣言の発表からの経緯がまとめられた。

世界人形劇フェスティバルを併催し、8日間、380劇団が参加、市内94会場で290ステージが上演され、例年以上に大規模な開催であった。

終了後、10月に入り庁舎内にプロジェクトが立ち上げられ、今後の人形劇の祭典について市の考えの方向性をまとめることとなった¹⁷。また、10月24日には、市内唯一の短大である飯田女子短期大学の教授であり市内の幼稚園長を務める高松和子の呼び掛けにより集まった市民9名により、人形劇カーニバルの必要性や市民にとっての位置づけが話し合われた。参加したのは、短大教員2名（高松と筆者）、青年会議所メンバー4名、飯田子ども劇場1名、その他2名。ここでは、人形劇カーニバルが20年間継続された成果として伝統人形芝居が活気づいた、ボランティアが生き生きとかかわれる、人形劇カーニバルにあわせて帰郷するなどがあげられるとともに、市民がもっと意見を出せる場が欲しいという意見が出された¹⁸。

以上のように、11月15日に予定されていた人形劇カーニバル実行委員会解散前に、行政そして市民のなかに新たな祭典に向けての話し合いが生まれた。11月27日には、飯田文化会館会議室において準備会設立に向けた集会が開催された。参加者は、市民有志による新しい人形劇カーニバルを考える会¹⁹、南信州アルプスフォーラム人形劇カーニバルを考える会部会、飯田青年会議所、地元劇人有志、飯田市公民館、市役所プロジェクトチーム、教育委員会、教育長、教育次長、文化課長、飯田文化会館人形劇のまちづくり係の、市民団体と行政の関係者であった。この集会をうけ、11月30日には「新たな人形劇の祭典」準備委員会設立会議が飯田市教育委員会文化課の呼びかけで開催され、これまで準備会に参加していた団体の他、関心のある一般市民の参加が呼びかけられた。

こうして、人形劇カーニバル終了宣言以来、市内にいくつか立ち上がっていた新しい人形劇の祭典について考える市民の集まりと教育委員会を中心とした行政が一つに組織され、「新しい人形劇の祭典」にむけた検討が始まった。12月9日には新しい人形劇の祭典のための呼びかけ人会議が開催、年明けの1月には準備委員会が立ち上がり、名称や組織、内容など新しい祭典をどのようなものにするか協議された。2月には「いいだ人形劇フェスタ」という名称が決定し、4月には開催要項の発表とともに参加劇団の受け付けが始まった。

人形劇フェスタの概要については第1章で触れているが、人形劇カーニバルと大きく変

¹⁷ 1998年10月16日付の信濃毎日新聞に「人形劇カーニバル 市が庁内プロジェクトー飯田の祭典特色どう示す」のタイトルで、庁内プロジェクトの設置について報道された。

¹⁸ 1998年10月26日付信濃毎日新聞に「新時代へ市民の意見を、グループや個人初会合 位置づけや運営行政と対等に」のタイトルで報道された。なお、筆者もこの会議に参加した1名であった。会議の内容に関しては、手元に残る会議記録等を資料にまとめている。

¹⁹ 飯田女子短期大学教授・慈光幼稚園長高松和子の呼びかけにより、人形劇カーニバルに関わっていた青年会議所、市民会議、市内の人形劇団および劇人実行委員ら、団体個人の市民によって組織された。第1回の会議は10月24日に開催され、9名が参加（信濃毎日新聞10月26日付け）。

わった点は、市民が提案し企画して祭典をつくっていくという運営体制である。有志で集まった市民によって人形劇フェスタ実行委員会が組織され、そのなかから実行委員長が選出された。初期の実行委員会は、新しい人形劇の祭典準備委員会に参加していた市民がほぼそのまま参加し、実行委員長にはその中心的な役割を担っていた高松和子を選出された。

第1章で触れたが、人形劇フェスタは、参加の意志を持った人が「みる・演じる・ささえる」のどんな形態からでも参加できる文化活動である。この理念を実現させるため、その意思を表すものとして参加証ワッペンを購入するワッペン方式は、人形劇カーニバルを踏襲した。

祭典の核となる人形劇の公演に関しては、プロの劇団がエントリー形式で行う自主公演や、ノミネート形式で行う本部企画公演などを新たに設定したほか、毎年公演部会を中心に特集企画を組み、その年の人形劇フェスタの特徴を明確にしたプロデュースを行い飯田からの人形劇の発信を行うこととした。また、人形劇カーニバルの最大の特徴であった市内全域で開催する地区公演は、引き続き地区公民館や分館を中心に地区公演実行委員会が住民によって組織され運営されることとなった。その他催事ではオープニングセレモニーやおわかれパーティーなどの式典や、飯田市中央公園を催事広場とするセントラルパークの設営、土曜日の市街歩行者天国で開催される人形劇人によりわいわいパレード、ワークショップやシンポジウムなどの研修の場の開催も踏襲された。

内容的には一見して人形劇カーニバルとさほど変化が見られないものとなった。人形劇フェスタ実行委員長の高松は、「どこが変わったのかではなく、どう変えたいか、なのです。一人一人が提案してつくるお祭りになったのです。（いいだ人形劇フェスタ 10 周年記念誌編集委員会，2009：99）」と述べている。本部実行委員会に参加するプランニングスタッフは、人形劇フェスタ第1回以降、数を増やし現在では約80名を数える。このうち、正副実行委員長と各部会の正副部会長によって組織された企画運営会議は、1年を通して定期的に開催され、企画提案、具体化、準備、実施、反省の繰り返しのなかで活動を展開している。

4.2 「市民主体」と行政のかかわり

人形劇フェスタとなり、行政は「黒子」として、市民の活動を支援する立場として位置づくこととなった。行政の黒子としてのかかわりは、市長および教育長が顧問に、会計監査に行政側の人も含める、そして、実行委員会事務局として事業の全体を教育委員会文化会館人形劇のまちづくり系の職員が支え、その業務内容は、会議の開催、対外的な交渉、会計処理等多岐にわたっている。

人形劇のまちづくり係は、ひとづくりやまちづくりを役割としているため、市民の発案や手法などを吟味し、時にサポートし、時にガイドしたりリードしながら進める体制がとられている（いいだ人形劇フェスタ 10 周年記念誌編集委員会，2009：95）。また、人形劇

カーニバルから引き続き補助金が助成されている。人形劇カーニバル第 1 回は 50 万円（予算総額 235 万円）であったが、第 6 回で 200 万円（予算総額 556 万円）、第 11 回目以降徐々に増額され、第 18 回目には 1,500 万円（予算総額 3,140 万円）、第 20 回の世界人形劇フェスティバル同時開催の際には 1 億 1,670 万円（予算総額 1 億 4,440 万円）の特別補助が市財政から支出された。

人形劇フェスタとなってからは、第 1 回が 2,000 万円（予算総額 3,585 万円）で、人形劇カーニバルの通常年の補助額よりも多くなっていた。その後も、1,800～2,000 万円（予算総額の約 6 割）を毎年補助金として助成している。上述のように、「市民が主体」といいながら、人形劇フェスタは、総予算額の約 6 割を飯田市からの補助金によってまかなっている。ここにはメイン会場の飯田人形劇場や飯田文化会館の会場費や事務局職員さらに地区会場で中核の役割を果たす主事の人件費は含まれていない。ボランティアスタッフとして参加する市民や上演参加の劇人もワッペンを購入して経費の一定割合を担っているとはいえ、補助金額の比率を考慮すると「市民主体」のフェスタと文字通り理解するには違和感を禁じ得ない。特に次項で述べる地区公演への補助金配分を考えると、全市域規模での人形劇フェスタがどこまで「市民の主体性」に立脚したものであるかはさらなる考察が必要であろう。しかしながら、次に述べるように飯田市が市の重点施策に据えるまちづくりの重要課題に人形劇を取り上げ、そのシンボリックな活動である人形劇フェスタを、1,800 万円の補助金（直接経費）でこれだけ多くの市民参加を得て実施できているという点では、十分に評価に値する。

飯田市は、第 4 次飯田市基本構想（1996～2005 年）において、飯田市の目指す都市像として「人も自然も輝くまち 飯田 環境都市を目指して」を掲げている。そして、産業づくり、都市づくり、人づくりの 3 つの重点目標を置き、5 つのプロジェクトを設けている。その中の 1 つが「人形劇のまちプロジェクト」であり、図 2-1 のように記されている。

「子どもたちは、美しく豊かな心と夢をはぐくみ、大人たちは誇りを感じて交流を楽しんでいる「人形劇のまち」を飯田市の個性として磨き、小さな世界都市を目指します。そのために、人形劇のもっている芸術性や政策的な広がりなどを様々に生かして、こころを豊かにする教育、学習活動を振興し、人形劇のまちらしさが見える施設などの整備を進めるとともに、世界との交流を拡げるイベントの開催などに取り組みます。」（飯田市、1996、43）

市としては、前述のような理念を掲げ、具体策として人形劇のための施設の充実や人形劇の定期的な公演、劇団の育成、学校の人形劇活動への取組みに関する通年を通した事業、そして、市民が企画運営する人形劇フェスタの支援という施策がとられた。

表 2-4 人形劇フェスタ公演会場および運営参加市民数の推移

	公演会場（会場）				運営参加（人）			
	地区	本部	広域	合計	本部実行 委員	地区公演 実行委員	サポート スタッフ	合計
第 1 回	81	11	—	92	—	—	369	—
第 2 回	71	25	—	96	—	1,277	456	—
第 3 回	74	23	3	100	65	1,305	830	2,200
第 4 回	72	27	4	103	86	1,465	649	2,200
第 5 回	75	25	6	106	79	1,482	573	2,134
第 6 回	77	32	8	117	66	1,638	560	2,264
第 7 回	79	29	7	115	52	1,707	396	2,155
第 8 回	79	47	8	134	62	1,946	452	2,460
第 9 回	78	39	8	125	62	1,992	458	2,510
第 10 回	91	51	9	151	88	2,015	666	2,769
第 11 回	76	51	10	137	86	1,928	470	2,484
第 12 回	76	49	10	135	80	1,641	444	2,165
第 13 回	74	48	9	131	80	2,069	379	2,528
第 14 回	72	52	10	134	82	2,108	323	2,513
第 15 回	73	49	10	132	81	1,626	362	2,069
第 16 回	75	54	9	138	87	1,735	328	2,150

（いいた人形劇フェスタ実行委員会「飯田人形劇フェスタ 1999～2015 参加登録・公演等の記録」より筆者作成）

この本部実行委員会が管轄するサポート・スタッフの参加減少とあわせてみると、地区公演実行委員会への参加者の維持は、やはり公民館を活用していることが影響していると考えられる。この 1,900 人におよぶ地区公演実行委員会への住民の参加が維持され続けていることに関しては、第 4 章・5 章で分析を行う。

人形劇フェスタとなり、個人的に有志で参加した市民によって組織された本部実行委員会では、地区公民館や分館の役員として参加する住民によって組織される地区公演実行委員会に対しても、人形劇フェスタの理念に掲げた「主体的な参加、企画提案による充実」をねらっていた。高松は「地区公演は、人形劇を広範に広め、市民にとって身近なものにし、多くのアマチュア劇団の発表の場として、また劇人との交流の場として飯田らしさを支えてきたなくてはならないものとなっていることを承知しながら、もっと住民の発想を生かし、主体性を持った運営にしようということが話し合いの中であらためて確認された」

(いいだ人形劇フェスタ 10 周年記念誌編集委員会, 2009 : 94) と述べている。

この話し合いとは、人形劇カーニバル終了後の、新しい人形劇の祭典を考える準備会における話し合いであり、それが、新しい人形劇の祭典となった人形劇フェスタにおいて実現が求められたのである。しかし、地区公演実行委員会に関しては、公民館長と主事と市長の参加した会議で継続が確認されたというだけで、住民の具体的な声がどれほど新しい人形劇の祭典の検討の場に取り入れられたかは全く資料がなく、疑問である。

地区公演にもっとも深くかかわる地区公民館の主事が組織する主事会人形劇プロジェクトのリーダーをかつてつとめ、人形劇フェスタ 10 周年記念誌の座談会に参加した当時丸山公民館主事の氏原理恵子は、地区公演の運営に参加した住民の様子を次のように語っている。

私はフェスタになってから知らないのによくわからないのですが、たぶん意識の中ではあまり変わってないと思います。名前が変わったことも（筆者挿入：住民は）意識していない）。いまだにカーニバルって言っている人もいます。二重構造で…。

変わらずに地区公演として 30 年間土台にある部分と、意識が高い方たちのなかで企画がどんどん成長していく本部といわれる部分と、二重構造の中で進んでいるというか、発展してきているフェスタ、カーニバルなんだなと。

地区の方では、主事と館長さんが相談して決めるというより、（筆者註：地区公民館の）文化委員さんとか、（筆者註：自治会の）自治会の健全育成委員とか PTA の方とか各地区で実行委員会を組織して、まずその方たちが話し合いをしてそれぞれの（筆者註：地区公演）実行委員会の中で人形劇をある程度のマニュアルにそって運営するか決めます。また、運営そのものとは別の部分で、地区をどうやって人形劇で元気にしていくかということ話を話し合い、そこから地区独自の企画公演などが生まれます。その部分が面白いなって思うんですね。

主事は、あくまでも地区（筆者挿入：住民）の実行委員さんが主体で動いていただくために必要なサポートをする裏方であり、実行委員さんにはやってよかったという充実感を少しでももっていただけるようにと考えています。（人形劇フェスタ 10 周年記念誌編集委員会, 2009 : 207-208）

以上の発言にあるように、人形劇カーニバルから人形劇フェスタに名称が変わったことも知らない住民がいるという事実が、住民の実態を表している。地区公演を担う住民と、「意識が高い」本部実行委員会メンバーの「二重構造」という表現に、人形劇フェスタの組織構造の実態が示されている。20 年間、地区や集落＝区では、人形劇カーニバルはむら（地区や集落＝区）の行事として定着し、地区公民館や分館の役員が中心となって運営する夏のお祭りのようなものになっていた。住民は、人形劇フェスタとなっても、人形

劇カーニバルから変わることなく集落＝区の年中行事の 1 つとして理解し、地区公演を運営しているのである。

このように、氏原が述べたように、本部実行委員会に集まった有志の市民と、地区公演実行委員の地区公民館や分館の役員としてあるいは PTA の役員として参加する住民とでは、人形劇フェスタの捉え方も参加の意識も異なり、まさに人形劇フェスタは、本部実行委員会と地区実行委員会の二重構造のかたちが形成されている現状にある。

小括

以上、人形劇カーニバルのスタートから人形劇フェスタに移行し 18 年目を迎えた今日までの通算 38 年間にわたり、飯田市がこの祭典をまちづくりに位置づけようとするなかで、行政はこの祭典にどのように関わってきたのか、そして、市民は行政のまちづくりとしての祭典への取り組みを受けてこの祭典にどのように参加してきたのかを分析した。その結果、38 年間の歴史において行政主導から市民主導への 4 期における行政、市民、そして住民の関係の変遷が明らかになった。

第 1 期（人形劇カーニバル第 1 回～第 6 回）は、行政主導によってスタートした人形劇カーニバルが形を定着させ、市民への理解を拡げ始めた 6 年間である。

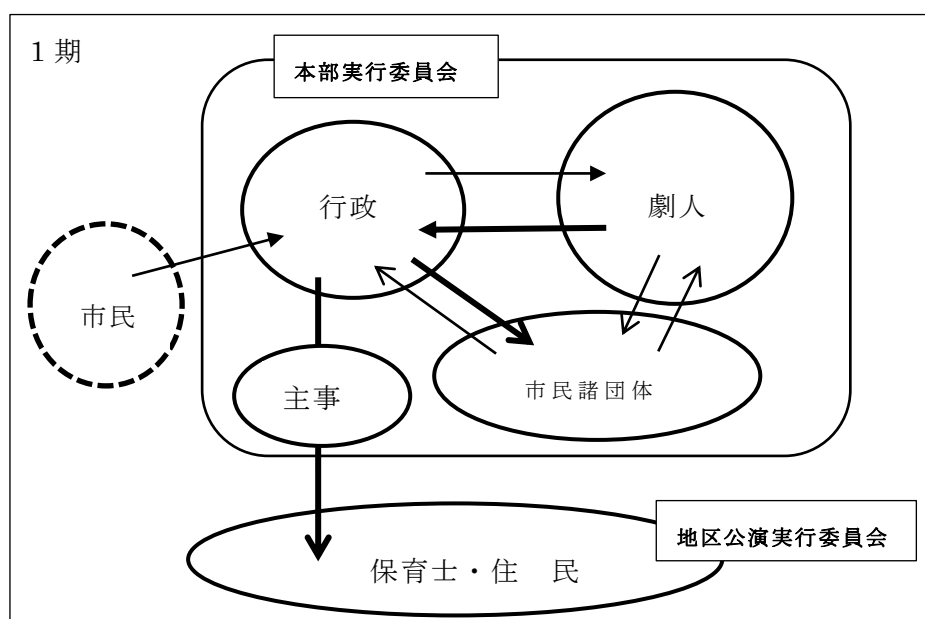


図 2-2 行政と住民・市民の関係：1 期

（筆者作成）

人形劇カーニバルは、人形劇人のお祭りを飯田市で開催したいという人形劇人からの請願と、行政が検討していた市民のまちづくりへの参加にむけた施策への取り組みが結合し、行政主導で開始された。行政は、市民・人形劇人・行政の三者がかかわりあってつくり出す文化活動としていたが、実態は、児童文化活動を展開する飯田子ども劇場代表者と飯田市内の文化活動にかかわる飯田文化協会代表者を市民として参加させ、社会教育課を事務

局、そして地区公民館の主事を実働部隊とした行政と、人形劇人との間で検討された内容が、地区公民館の主事を通して住民に下ろされるかたちであった。人形劇カーニバルは全市域的な市民参加をねらい、市内全地区での地区公演を開催することとしたが、初年度は急な開始の決定であったため住民の協力が得られず、地区内の保育園の保育士や子ども劇場関係者の協力を得ながら公民館主事が中心となって取り組んだ。第1回がユネスコの国際児童年であったことから、事務局となった社会教育課および実行委員長となった飯田市民館長は、この祭典の趣旨を子どものための活動とすることで住民の理解を拡げていった。第4回ごろから地区公演が地区公民館や分館の役員を中心とした住民によって運営されるようになり、開始当初松澤市長が真にねらっていた市民参加によるまちづくりへの活動としての形ができ始めた。また、第3回には、信越放送飯田支局の伊藤のような人形劇カーニバルの外部への発信や市民への浸透への具体的な提案をする人物も登場してきた。

第2期（人形劇カーニバル第7回～第10回）では、地区公演の定着を機に、実行委員長を市長に、また事務局を飯田市民館に移管し、人形劇カーニバルをまちづくりを目的とや分館を活用した地区公演が、地区住民によって運営されるようになり、実行委員長となった市長は人形劇カーニバルをとおしたまちづくりを提唱した。人形劇界にも人形劇カーニバルの存在が周知されることで参加劇団が増加し、それに対応し地区公演会場数も増加した。そして、第1回目には50万円であった市の助成金は、第7回に350万円、第9回には800万円と一気に増額し、規模の拡大を実現させた。第10回には周年記念とし、日本ウニマ主催の世界人形劇フェスティバルを開催し、この年建設された飯田人形劇場などの市街地の公共文化施設や市内全域に拡がる地区公演でも海外劇団の公演が行われ、市民の人形劇フェスタの理解が広がった。

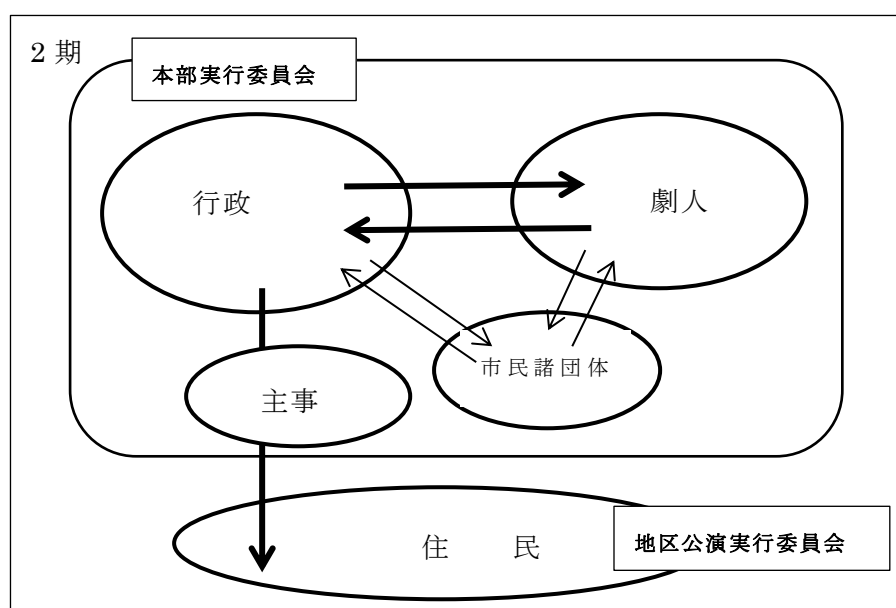


図 2-3 行政と住民・市民の関係：2期

（筆者作成）

第3期（人形劇カーニバル第11回～第20回）には、事務局が飯田文化会館人形劇のまちづくり係に移管し、まちづくりの中軸に人形劇カーニバルが置かれるようになった。本部実行委員会には、自発的参加の市民が登場して様々な新たな企画が提案され開催内容の多様化が進んだ。こうした自発的に参加する市民と、地区公民館や分館の役員として地区公演の運営に参加する住民では、参加方法や参加意識において大きな違いがあり、地区公

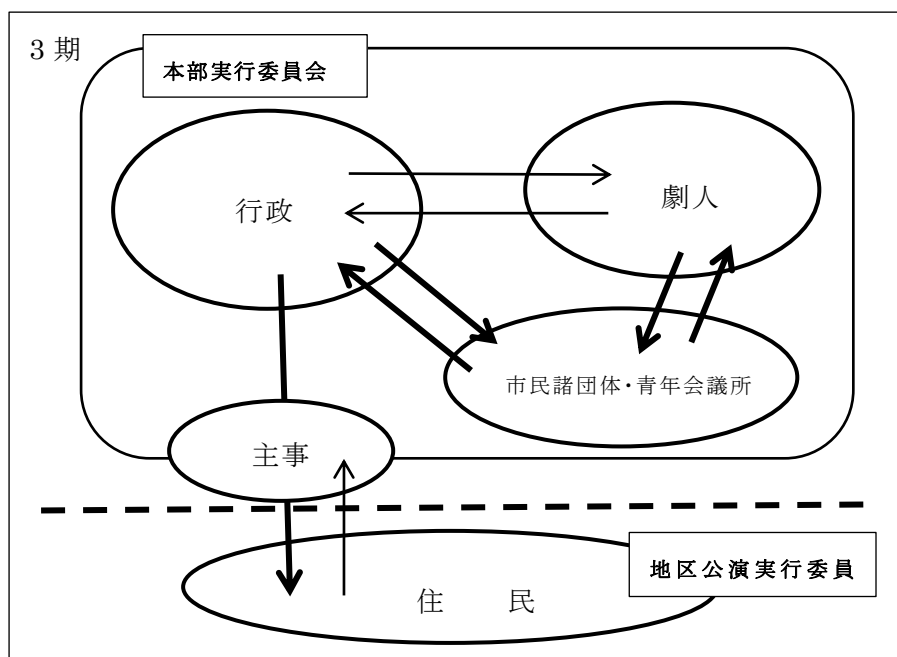


図 2-4 行政と住民・市民の関係：3期

（筆者作成）

演実行委員会と本部実行委員会の区別化が顕著になっていったのである。当時の田中秀典市長は、自発的な市民の参加を評価し、「行政は黒子」であるべきで人形劇フェスタを市民の文化活動として市民の手に返すべきという考えを折に触れて発するようになった。つまり、行政は、市民自らが提案・企画し・運営していく市民文化活動の展開の実現が、市の目指すまちづくりにつながると考えていたといえる。そして、まちづくりを人形劇カーニバルの趣旨としたい行政と、人形劇芸術の発展を趣旨としたい劇人の間の溝が大きくなり、人形劇カーニバルは市長の終了宣言により第20回をもって幕を閉じた。

第4期（人形劇フェスタ第1回～現在：第18回）は、市民によって組織された実行委員会が企画運営する人形劇フェスタとなった18年間である。

人形劇の新たな祭典を生み出そうと考える団体や個人の話し合いにより、有志で参集した市民による実行委員会が組織され、新しい人形劇の祭典人形劇フェスタが開始された。行政は、市民が企画・運営する文化活動として、黒子としてこの活動を支える立場となった。地区公演は、そのまま踏襲されることとなり、開催会場数約75ヵ所、地区公演実行委員への参加住民約1,900人を維持し現在に至っている。個々の意思によって参加した市

民がつくる人形劇の祭典となったが、全くの個人の意志で参加する市民によって組織された本部実行委員会と、地区公民館や分館の役員を中心とした地区住民によって組織された地区実行委員会は、参加者の意志や、活動の目的も異なり、本部と地区の「二重構造」といわれる実態がみられる。

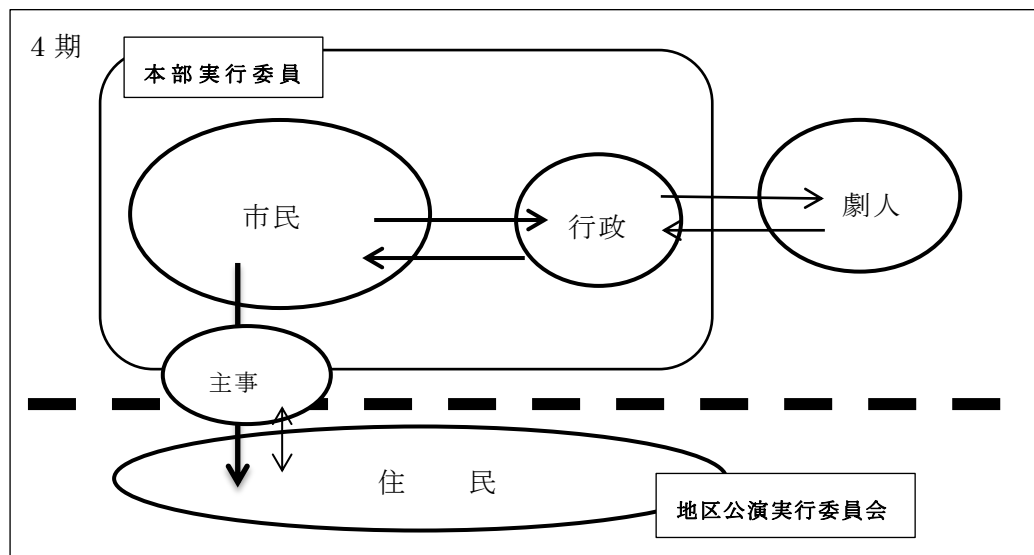


図 2-5 行政と住民・市民の関係：4 期

(筆者作成)

人形劇カーニバル開始から人形劇フェスタ 38 年間の変遷を行政のかかわりの視点からまとめると、行政は、一貫して市民が参加してつくり上げる人形劇の祭典をまちづくりを目的とした文化政策として位置づけ、その目的の達成のために取り組んできた。人形劇カーニバルの開始に関しても、地区公民館や分館を中心とした集落を基盤とした地域社会で取り組むことに関しても、人形劇カーニバルを終了させたことに関しても、市民の活動として環境をつくり上げ、それを市民に下ろす実態がみられた。

しかしながら、それを市民が拒絶せずに、その環境を受け止める状況をつくり出すことにも成功していたといえる。多くの市民の参加を実現させるために公民館を活用したことや、祭典の意義をわかりやすく万人が納得するために国際児童年を利用して子どものための祭典としたこと、市民主体になった人形劇カーニバルへの増額した予算の確保などがそれにあたるだろう。こうした点からは、行政は市民や集落を基盤とした地域社会の実態を把握し、まちづくりの対象者である市民と飯田市というまちについての理解が適切であったからできたことと考える。

第3章 公民館と住民活動の基盤としての地域社会

はじめに

人形劇フェスタの特徴は、公民館を活用した地区公演による市内全域での広域開催と、この地区公演の運営に 1,900 人の住民が参加し、市民文化活動として 38 年にわたり継続開始されている点である。

では、飯田市の公民館活動、さらには人形劇フェスタを 38 年にわたって住民が支え続けてきたという事実をどのように理解すればよいだろうか。1950 年代から 1960 年代にかけ全国で活発に活動されていた公民館活動であるが、今日では全国的に低調になっている。しかし、飯田市においては、低調となるどころか、今日においても公民館を基盤とした多様な活動が市民によって展開されている。人形劇フェスタの場合は、35 年を経てなおその規模を拡大し、地区公演もそれに対応して継続されている。その要因の 1 つは三層構造という飯田市の公民館システムにあると考えられ、この実態については第 4 章で詳述する。

本章では、住民が取り組む公民館活動に関して、公民館研究の中心を占める社会教育学の研究成果を概説し、本論文の目的である人形劇フェスタについては飯田市の公民館活動とそれを支える住民の関係性を、地域社会に着目して分析することの意義を明らかにする。以下、公民館と住民のかかわりについて、戦後の公民館の発足から今日までの変遷にそって、先行研究を検証する。

1 公民教育の振興と公民館

公民館は、戦後の荒廃した状況の中で、民主主義体制確立のための「公民教育」奨励を目的に設置された。設置に至っては、1946（昭和 21）年 7 月に文部次官通牒「公民館の設置運営について」にその構想が打ち出され、翌年の教育基本法第 5 条、1949（昭和 24）年の社会教育法第 7 条により正式に法制化され公的に発足した。次官通牒作成の責任者であった寺中作雄は、次官通牒が発せられる半年前 1946 年 1 月に、雑誌論文として「公民教育の振興と公民館構想」（『大日本教育』800 号、1946 年 1 月）を公表（横山博・小林文人、1986：4-11）した。これは後に「寺中構想」や「公民館構想」と言われ、寺中は公民館の提唱者と位置付けられている。上原直人は、寺中は、敗戦後の生活不安の中で国民一人ひとりが平和的文化国家を建設していかなければいけない義務と使命を持っているとし、民主政治実現のために公民教育の振興をねらっていたと述べている（上原、200：32-33）。寺中構想といわれる「公民教育の振興と公民館の構想」のなかで寺中が述べた公民教育の特徴を、上原は 3 点にまとめている。1 点目は、公民教育は実践教育であるという点で、自ら団体を構成しその運営に触れることで初めて公民教育の目的が達成できるとしている点。2 点目は、公民教育は相互教育であるという点で、団体相互に体得したところを相互に研究し、批判し、討議し、質疑し合うことによって、初めて相互に身に付いた見識になると

いう点。3 点目は、公民教育は総合教育であるという点で、公民教育の主眼として立憲人としての自覚に立ち、確固たる政治的見識を身に付けて社会的見識に留まらない幅広い情操の陶冶、科学的知能の啓発等を含めた公民教育が実施される点である。（上原，2000：33）。また、文部次官通牒には、公民館の設置に関して、町村に 1 ヲ所と、できれば各部落には分館が設置されることが望ましく、町村民の自主的要望と協力によって設置される住民の集会場所であることと明示され、住民の民意によって公民館活動が展開されることが期待されていたが、実際には市町村の一般行政の直轄の機関として位置づけられたなかで発足した（上原，2000：35）。

公民館の設置運営の開始に関して、菅井和子は、公民館が戦後の民主主義の普及に役立ったという点や社会教育において 1 つの拠点となる施設となった点は押さえておくべきであるが、文部次官通牒には「民主主義」や「民主化」といった新しい理念を表す言葉が使われていても、その内実は確立されておらず、日本国憲法で規定される国民の権利とそれに対する国家の保障といった考え方はそこには見られず、それよりも国家再建という急務のための公民育成、そのための公民館という、いわば戦前からの国家主導的な社会教育の考え方が色濃く出ていと述べている。さらに、その後の公民館の展開においても、こうした性格をもって公民館の歴史が始まったことを押さえておくべきと述べている（菅井，1986：56-57）。

2 社会教育の理念の形成

公民館に関する文部次官通牒以降、1949（昭和 24）年には社会教育法第 20 条に社会教育機関としての目的が明示された。法制化を契機に、各地方の自治体の状況にあわせるように公民館は徐々に定着していった。小林文人（小林，1986：25）によると 1948（昭和 23）年の教育委員会法、1949（昭和 24）年の社会教育法にも関わらず、市町村公民館は、1952（昭和 27）年の教育委員会一斉設置まで一般行政のなかで機能し、それに従属するかたちで、理事者層からの政治的支持を得てきた側面もあり、「村づくり・町づくり」運動や郷土振興の活動は、地域支配層の政治的な利害と結びつくことが多かった。このような問題が生じた要因として、小林は、公民館が定着・浸透していく過程において、その普及にあたる行政やそれを受け止める地域の構造が古い体質を色濃く残していたこと、また、公民館の活動を担う住民＝民衆の側の主体的条件や権利意識がなかなか成熟に至らなかった点を挙げている（小林，1988：11）。こうした流れの延長線上において 1950 年代から 60 年代以降、公民館を拠点とした事業は活発に開設された。しかし小林は、その実態は、法制上の理念は別として現実の社会教育実践においては社会教育や学習権の思想が住民に広く認識されるまでには至ってはいなかったとし、60 年代は 1959（昭和 34）年の社会教育法改正後の社会教育のあり方が模索された 10 年となったと考察している（小林，1988：25-29）。

遠藤和士は、1960年代を地域の変貌と生活に結びつけた学習の場としての公民館の充実をめざした議論が展開された10年と言っている。1963（昭和38）年には地域民主主義運動による社会教育への接近の根拠を示した枚方テーゼが発表された。また同年、文部省社会教育省が高度経済成長政策による工業化・都市化の進行に対応する公民館運営について示唆を示した「進展する社会と公民館の運営」を発表した。そして、2年後の1965（昭和40）年には、枚方テーゼを受け継ぐかたちで、公民館職員の役割と性格を示した下伊那テーゼが提起された。遠藤は、こうした10年間の議論を経て70年代に入り、権利としての社会教育の理念が形成されたと捉えている（遠藤，2000：257-268）。

枚方テーゼに関して、藤岡貞彦は、60年代前半の枚方市において、枚方婦人会協議会がいわゆる地域婦人会の殻を破って、「暮らしの中での学修と実践の積み上げを」の基本方針の下で展開させた「大衆運動」からつくられたとし、枚方テーゼは、住民運動の教育的意義の把握とその自覚化を社会教育労働者に要請したもので、自治体にむけて住民の諸要求を掘り起し突き付けていく活動のスタイルと言っている（藤岡，1969：72）。この枚方テーゼは、1968年の中央婦人学級の設置によって具体化された。学級は、市民の自立を尊重し、枚方市教育委員会社会教育課が委託料を支出して設置される制度がとられていた。しかし、直後に職員の異動があり、中央婦人学級は「枚方テーゼ」の後ろ盾を得られないまま、市民の努力によって独自の発展の途を歩むこととなった。宮崎隆志は、この枚方の実践は、「市民の自立」や自立した市民として語られる「自立」の理解、あるいは社会教育の組織化における自由と民主主義の在り方の問題の論争であり、現段階の社会教育・生涯学習が直面している問題をいち早く開示したと述べている（宮崎，2005：25-27,34-36）。しかしながら、数年ごと異動のある行政職員の後ろ盾を前提として開始しているにも関わらず、自治体に要求を付きつける対立の構図にあったこと、また、婦人学級と言う一部の市民による公民館活動であったなかで「市民の自立」をどう捉えていたかについては疑問である。

藤岡は、枚方テーゼは、社会教育の主体は住民であること、その民主化は自治体の民主化を抜きにしてはありえないこと、大衆運動内部における学習を援助することは社会教育法の包囲に即した社会教育行政の任務であること、しかしその行政の任務確立は権力との緊張関係抜きに在りえず組織された労働者（教育労働者・自治体労働者）と住民との結合だけがこの法解釈を可能とすること、といった新しい視角を混迷する1960年代の社会教育界に提起したと検証している。そして、長野県下伊那・飯田公民館主事会によるシンポジウム提案「公民館主事の性格と役割」（1965年3月）の「下伊那テーゼ」が、その視角を受け継いだ（藤岡，1969：76-77）と述べている。

藤岡によると、下伊那テーゼは、社会教育行政の在り方から進んで、教育実践の担当者である公民館主事の公民館活動・教育活動について、「人間疎外をのりこえる力を養うものとしての学習活動」を主事の中心任務とし、生活記録、話し合い学習と社会科学学習を内容

とする基礎学習、それを現実課題と結び付け豊かにしていく応用学習、これら二者の一層の系統化のための行政単位をこえた「郡市→県→国」段階の講座を、学習組織論として提唱した（藤岡，1969：78-79）。

以上、1960年代の枚方テーゼから下伊那テーゼにみられる社会教育活動の変遷から、社会教育学の研究者らは市民の自立は市民だけではなしえないものと捉えていること、それは、行政の監督のもとに住民が展開する活動として公民館を中心とした社会教育を捉える国や行政の視点そのままである、と考えられる。枚方テーゼに影響を受けた下伊那テーゼによる主事の役割の明確化も、行政が教育の指導者として住民の上に立ち、住民の実態を捉えないまま先行して進めたものと捉えることができる。

また、平川景子は、社会教育研究において職員論・専門職論がどのように議論されたかのあとづけとして、戦後の学習論の確認を通して、学習者と職員の関係の捉え方の変遷をまとめている。そのなかで、1949（昭和24）年に成立した社会教育法が1959（昭和34）年までの間に4度改正された時の論点は、社会教育主事の役割と養成についてであったとし、平川は複数の論者の理論をまとめ、職員の専門職化論は両刃の剣であって、専門職と非専門職の分断・差別の論理、専門職の官僚性的組織化の論理に組みするものではあってはならないという指摘が繰り返されてきたと述べている。そして、「職員の専門性を強調すると学習者を低く見ることになるのではないか、戦前のような支配介入につながるのではないか、といった不安が、『専門職化論』と表裏の関係で議論されてきた」（平川，2007：9）と考察している。

以上の議論から理解できるように、この段階の公民館活動をめぐる議論は、「学習者」の実態を実証的に捉える視点は見られないというよりは、「理念」をめぐる論争が中心であり、時に政治的イデオロギーを背景とした議論が中心であったと言える。ただ、竹安栄子が述べるように、公民館を中心に展開された婦人会活動や生活改善運動が、特に農村部における女性の日常生活に新しい光をもたらしたことは評価できる（竹安，1992：219-239；2014：35-54）。

3 公民館のコミュニティセンター化

1970年代に入ると、農村から都市への急激な変化により公民館は新たな再編を迫られ、分館が地区公民館に格上げになる地域がある一方、類似施設として地域公民館システムの外におかれる地域も出て、分館の数は全国的に減少した。また、急増する都市周辺のニュータウンにおける地域社会の形成を政策的に補強するコミュニティ政策として、公民館にコミュニティセンターとしての機能が付与された。この動きは、1968（昭和43）年9月の国民生活審議会コミュニティ問題小委員会報告「コミュニティ生活の場における人間性の克服」（国民生活審議会調査部会，1968）を契機として自治省を中心に始まり、各省庁に波及した（荒井，2007：18）。以後、この動きは市町村自治体の今日に至るコミュ

ニティ政策につながっている。

こうした状況を受け、公民館は社会教育の場合コミュニティ形成の機能を有するコミュニティセンターかといった二者択一の論争が、社会教育関係者や研究者の間で生じた。コミュニティセンター化を目指す流れは、公民館を市長部局に位置付け、自治活動と公民館活動を併せ持った施設としてまちづくりに役立てようとするものであり、公民館としての独自性の保持を主張する社会教育関係者は、あくまでも市民の学習の場である社会教育の場として独立性を重視した。佐藤一子らによると、論争の観点は、1つは方法における「教育」の自覚の有無についてである。コミュニティセンターは、行政職員の教育的な関与なしに地域住民自らが教育の意識を持たなければ主体的に興味を掘り起こす活動が展開しにくい。そして、もう1つは目的であり、コミュニティセンターの目的はコミュニティの形成や住民の自治意識の形成を目的にしているのに対し、公民館は自治意識の形成が入ることも考えられるが、関わる住民の判断・要求により目的は決定される。こうした社会教育関係の議論のなか、実態としては、地域社会の問題に取り組む活動が弱まり、趣味やサークルやグループ活動の活発化とあいまった公民館のカルチャーセンター化が広がった（佐藤・上原・大島、1998：3-4）。

そもそも1970年代に盛んに用いられるようになったコミュニティの語の用法からも理解されるように、この時期のコミュニティ政策の背景には、高度経済成長期に急激に進んだ都市化の過程で各地に建設されたニュータウンなどの振興住宅地に新しい近隣関係を形成する必要があるとの認識があった（松原、1978：13-15）。したがって、既存の伝統的地域社会が一定の機能を果たしている地域での公民館活動の在り方についての議論が展開を見せなかったと思われる。

その後1980年代に入ると、社会教育を通してまちづくりを担う人々を育成することが目的に加えられ、公民館の機能が柔軟に拡張された。つまり、従来の公民館の機能を社会教育かまちづくりかの二者択一として捉える考え方から、両方の機能・役割を担う考え方へと変化してきた。内田和浩は、70年代に広がった都市型公民館にみられるカルチャーセンター化が問題になった際に言われた「農村型」・「都市型」という公民館の二分化ではなく「教養重視型」・「地域重視型」・「貸館重視型」として3つに分類すべきと述べ、社会教育とコミュニティの2つを公民館の機能として設定した（内田、1992：35-37）。つまり、内田は、公民館の機能を、社会教育に絞るのではなく、既に広がりをもって市民に受け入れられている人々が趣味の活動のために集い交流を持つカルチャーセンターのようなコミュニティ機能重心の公民館に、社会の変化に適合した施設としてその存在価値を認めている。

同時期、松下圭一は、内田と同じく、市民が自ら好きな活動を考え、設定して、実践する実態を捉えて「公民館の成熟」の姿とみなし、行政が市民を教え育てる行政教育の不要を唱え、『社会教育の終焉』（松下、1986）においていわゆる「公民館不要論」を投げかけ

た。こうした松下の見解からは、松下は、社会教育は行政が市民の上に立つ関係において、行政が市民を教え導く活動と捉えていたと考えられる。松下は、国民主権の主体として成熟した市民には行政職員による教育などは必要ないとし、行政職員を公民館に配置して教え育てる行政社会教育は不要であると主張した。つまり、行政社会教育の代表的施設である公民館も不要であり、市民が自分の考えで主体的に使用することのできるコミュニティセンターがあれば事足りると主張したのである（松下，1986：17-64）。

4 まちづくりと公民館

1980年代後半には、臨時教育審議会の影響を受け²⁰、文部省による生涯学習のまちづくり政策にとどまらず、政府各省にまたがって生涯学習を掲げた政策を展開した。1990年には生涯学習の振興のための施策の推進体制等の整備に関する「生涯学習の振興のための施策の推進体制等の整備に関する法律」が發布され、公民館によるまちづくりへの取り組みが各地の自治体で展開されていった。まちづくりへの公民館の活用に関して、田淵康修は、まちづくりをすすめるために市民の自治意識をどのように醸成するか、これまでの公共的な事業の実施主体としてその責務を担ってきた行政は地方分権の進展に伴い行財政改革に取り組むにあたり、市民にも積極的に公共的な事業の実施主体としての役割を担うことを求め、その活動スペースとして行政は公民館を提供したと述べている（田淵，2009：61-62）。

内田和浩は、戦後 60 年にわたり首都圏の内陸工業地域かつベッドタウンとして人口が急激に増加した相模原市を事例に、地域コミュニティとしての公民館の実態を報告している（内田，2009：35-54）。内田によれば、相模原市は人口増による小学校建設によって、公民館区を 1 つの学校区として小学校を建設した。そのため、新たな地域コミュニティ形成の範域として公民館区＝小学校区が想定された。そして、公民館活動の場を小学校に、そして校長が館長、教頭が副館長または主事などの職務に就き、公民館の担い手とした。内田は、相模原市の小学校を公民館活動の拠点とした実態を、行政による地域支配ではなく、地区行政サービスの充実と住民自治の単位として地域コミュニティ形成の意味が確認され、地域コミュニティの拠点としての公民館活動が位置づけられたとし、このような取り組みを、内田は、現代的には協働のまちづくりやパートナーシップ型地域づくりであり、相模原市は先駆的な取り組みをしたと述べている。館長や主事を教育委員会の管轄である小学校の教師が担うなかで、住民の参加実態がどのようになっているのか、館長や主事以外の組織や役員構成及び選出など事例の詳細は述べられていない。新たなニュータウンにお

²⁰ 1984(昭和 59)年第 1 回総会が総理官邸において開催され、諮問は「我が国における社会の変化および文化の発展に対応する教育の実現を期して各般にわたる施策に関し必要な改革を図るための基本的方策について」という包括的な課題の下に行われた。1986(昭和 61)年 4 月の第 2 次答申及び 19987(62)年 4 月の第 3 次答申で生涯学習体系への移行が強く提唱され、同年 8 月の最終答申では、生涯学習体系への移行の考え方と生涯学習体制の整備の具体的方策が全体的に取りまとめられた。

いて、流入者である住民らが公民館活動を興すことの困難さは想定できるが、小学校教員に公民館運営を兼務させるという方法を協働の成功と呼ぶことが妥当であるかどうか、正確に検証されているとは言い難い。

荒井容子は、公民館のコミュニティ・センター論と公民館論について、1970年代から80年代にかけてのコミュニティ・センターと公民館をめぐる対立において、公民館関係者の主張した「公民館論」は、社会教育施設としての公民館は地域住民の自治意識の形成に貢献することを目的とし、町内会や他の地縁的組織と区別し、また、住民運動や社会運動そのものとも区別して、教育機関として限定することでその社会的革新性を担保しようとする議論を展開したものであると述べている。こうした見解をもつ荒井は、近年の公民館の状況を、公民館がコミュニティ政策に飲み込まれ、教育機関としての機能・緊張感を失い地域サービスの協働の担い手として諸団体を組織化する新しい公共性のづくり手を調達する道具として位置づけられる危険性があると公民館の存在を危惧している。荒井は、教育機関としての公民館の独立性を保持しながら地域住民がこの事態を捉え返すことの学習機会を提供する役割が公民館にはあり、その射程の中に自治公民館も位置づける必要がある（荒井、2007、17-26）と主張している。

さらに、山田一隆は、社会教育の現代的な在り方の1つとして、生涯学習政策下においてまちづくり活動の教育的営為に着目した学習支援があると述べている。山田は、この場合、社会教育、生涯学習、生涯教育の概念を整理したうえで、まちづくり活動への概念的接近を試みる必要があると考え、行政の現場レベルでは、社会教育、生涯学習の概念的混乱が依然として続いている現状を指摘している。そして、生涯学習政策の閉塞感とは対照的に、地域住民側ではまちづくり、NPOや市民公益活動といったオルタナティブな公共性を形成する萌芽がみられるなど、概念的混乱の整理・決着を待てない状況が到来し、それが要因となり、生涯学習体系化以降、社会教育は現代的な在り方への改革や転換が求められつつもそれが思うように進んでいない、あるいは、在り方そのものの現代的理念の形成が立ち遅れていることを課題として明示している（山田、2002、143）。山田が指摘しているように、住民は理論ではなく活動を興している実態がありながら、行政や研究者は、住民や住民が抱える問題に目を向けずして、理論構築ありきの考え方を払拭できていない。山田は、「行政は」と言っているが、社会教育学者も同様であると言える。

5 自治公民館への注目

そのなかで、最も狭い生活圏であり、住民自治を原則とする自治会を基本とした自治公民館²¹重視のまちづくりへの取り組みが注目された（長谷川・千葉、1995、1-31；遠藤、

²¹ 公民館には2種類あり、1つは条例上の公民館であり、もう1つは自治公民館といわれるものである。前者は社会教育法第20条で定められ市町村が設置する公民館で、公立公民館と呼ばれることもある。一方、後者は、地域住民が自主的に設置運営するもので、そ

2004, 165-180)。遠藤知恵子は、山形県朝日町の事例調査より、住民は、「中央公民館—地区公民館—自治公民館」という三重構造の基礎単位である自治公民館での生活に根付いた学習の重要性を認識しつつ、学習活動の今後の発展のためには、地区公民館や中央公民館の支援体制および支援者としての主事の役割が重要であると指摘している（遠藤，2004：178）。

また、牧野らの研究グループは、飯田市が 2007（平成 19）年に実施した地域自治組織改編を念頭に分館調査を行った。この改編によって、地区公民館の範域に地区を単位として、全市域の 20 地区にそれぞれまちづくり委員会が設置された。委員会の拠点は各地区公民館に置かれたが、委員会組織の中では、地区公民館も一構成員と位置付けられた。その結果、これまで社会教育機能に特化した役割を負ってきた地区公民館が、まちづくりに参画し、一定の役割を果たすことが明確に位置づけられた。さらに分館も、地区公民館同様に各区のまちづくり委員会の一構成員と位置付けられ、まちづくりの役割を負うことが明確に位置づけられた。さらに分館の実態調査（組織・役員の人選方法・活動内容・地域内の他団体との連携状況など）より、住民の生活拠点である分館に支えられて、まちづくりにとって公民館が機能しているとまとめている（東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室飯田市社会調査チーム，2012；2011）。牧野らは、各分館の実態より、公民館活動を通して住民が地域の活動の担い手になる過程を検証し、分館の成功要因として地域諸団体との連携を指摘した。これは、長野県は公民館、特に分館およびその類似施設が多く設置され、公民館と地域共同体との一体性が強い（佐藤・上原・大島，1998：1-19）という佐藤一子らの見解と共通し、長野県内の公民館調査による佐藤の研究成果を敷衍して飯田の事例が示されたといえる。

また、浜田倫紀は、都会の行政が抱える問題点は、肥大化した市町村がもはや地域社会ではなくなったことに起因しているとし、地域社会の基本単位は「邑」であり、その実態は自治公民館であると述べている。そして、町内会や自治会といったさまざまな名称で呼ばれている自治組織を統一して「自治公民館」と呼ぶことに決め、地域の自治活動を公民館活動として取り組んできた宮崎県の例を挙げ、公民館とくに集落単位の自治公民館を中心としたまちづくりの重要性を述べている（浜田，2008：41-44）。

6 公民館研究をめぐる現状と課題

公民館は、戦後日本の民主化教育のなかで公民教育の場として誕生した。「公民館は、住民が、自分たちで考えながら学んでいく、自分たちで学びたいことをつかみ取り、その学習を実現していく。学ぶことのそういう自信が、そのまま自分たちの生活、地域社会を自分たちの力でとらえ、つくり、変えていく自信と力につながっていく。公民館はそういう

の意味から前者が公立の公民館であるのに対して自治公民館と呼ばれている。

自信と力ー自治の力ーを育んでいく過程を多様な形でもっている（月刊社会教育編集委員会、2008：1）」とされているように、公民教育とは、地域をつくる人を育てる教育であるとすれば、教育の場であった公民館が、現在、まちづくりの拠点としての役割を担うに至った経緯も、当然のことと考えることが出来る。

しかしながら、現状においては、近年、公民館活動の衰退傾向が続いている。人間関係の希薄化や、地域社会への関心の低さ（手打、2014：84）を指摘する論者もいるが、最大の要因として地方自治体の財政難、その解決策として実施された1999（平成11）に始まる市町村合併をあげることができる。合併を機に多くの自治体町村が公民館の統廃合を進めた結果、1999（平成11）年に19,063館であった全国の公民館設置数（類似施設を含む）が、2011（平成23）年には、15,399館と、12年間で約3,600館減少した（文部科学省「社会教育調査－結果の概説」）。

社会教育法上、「社会教育」機関と位置付けられている公民館が、飯田市のようにまちづくり委員会の拠点としての機能を担い、公民館をまちづくり委員会の構成員の一つと位置づけられることに対しては、社会教育学の立場に立つ一部の研究者や社会教育関係者から、公民館の「変質」であり住民の学習の自由が侵されるとして批判の見解が出されている。

しかしこのような批判に対して、公民館のもつ、コミュニティセンターやまちづくりの役割を内在していたことを指摘する論者もいる。すなわち、手打明敏は、近年の生涯学習政策やまちづくり政策のもとで公民館を教育委員会所管から首長部局へ移管する動きが進んでいることに対し、公民館の社会教育機関としての機能が変質し、住民の学習の自由が侵されるという批判が社会教育関係者のなかに強くみられると指摘している。手打は、確かに公民館を社会教育機関とみれば、公民館の事業が地域づくりといった地域振興のための活動そのものであったり、そうした事業に「偏重」することは社会教育機関としての公民館の「変質」として批判されるとも捉えられるが、しかし、戦後初期の公民館は、全国の各町村に設置され、ここに常時住民が集まって談論し、読書し、生活向上の指導を受け、お互いの交流を深めた場所として位置づけられていたとして、その上で、1949（昭和24）年に公民館は社会教育法で教育機関とし、自治公民館等を公民館類似施設として混在させ両者の区別をあいまいで分かりにくいシステムにしてしまったことが、前出の牧野らの飯田市の分館研究において、まちづくり委員会に公民館が組み込まれたことを公民館の自立性の原則に制約を与えたと批判する考察をもたらしたのだと指摘している（手打、2014：83-88）。

手打のこの指摘は、現在、注目されている自治公民館とまちづくりに関する分析における、社会教育学からの視点の固定化や先入観への批判的意見といえる。そこで、住民にとってもっとも身近な公民館である分館を地域社会の視点から捉えなおすと、公民館によって住民の自治活動が構築されているというより、歴史的に形成されてきた住民自治組織の活動に公民館を通じた社会教育の成果が反映された結果とも捉えることができるのではな

だろうか。すなわち、牧野らが述べた公民館活動と地域諸団体との連携というより、地域自治組織の活動に公民館活動が浸透していくことによって、飯田市における市民が主体的に取り組む公民館活動が実現したのではなかろうか。

さらにこの地域自治組織への公民館活動の浸透は、次の 2 つの成果をもたらしたと考えられる。1 点は、地域社会にとっては伝統的色彩の濃い組織の民主化が図られ教育的機能が付与されたこと。もう 1 点は、公民館にとっては集落に組み込まれるかたちで分館が存在したことにより広く市民の分館参加が可能になり、三層構造の公民館システムによって全市的な公民館組織のネットワーク化が実現し、これが全市的な市民活動の継続に寄与したことである。

小括

以上、公民館の発足から現在に至る公民館活動の研究を時代を追って整理した。戦後、住民の民主化教育の拠点としての公民館から、70 年代にはコミュニティ形成の拠点としての機能が付与され、さらにまちづくりに向けての自治体との協働の場として位置づけられるなど、戦後 70 年間、様々な議論が公民館をめぐる展開されてきた。しかし、以上みてきたいずれの論者においても、そこに共通するのは、①公民館に集い、活動する住民の意識にまで迫った実証的研究の欠如（散発的な事例報告は多く見られるが）と、②公民館が位置する、その基盤としての地域社会に対する視点の欠如である。その結果、住民は社会教育を通して教え導かれる存在であり、公民館を通して地域社会の自治活動が成立すると捉えられているとの印象を禁じ得ない。しかし、果たして実態はそうなのであろうか。

公民館活動が全市域におよぶ地区公演の開催と、2,500 人の市民ボランティアの運営参加を実現した市民の公民館活動への主体的参加の成果であると描かれているが、果たしてこれが実態なのであろうか。本論ではこの疑問に答えるために、人形劇フェスタを公民館活動として、公民館の視点から捉えるのではなく、人形劇フェスタを支える住民の視点に立ち、地域社会の立場から人形劇フェスタを分析する。

第4章 公民館の三層構造と市民参加

はじめに

本章では、飯田市の三層構造の公民館システムを活用した市民の運営参加へのメカニズムを明らかにする。

人形劇フェスタは市民がつくる祭典として、「自主的な参加による地域平面で展開される人形劇の祭典」を標榜している。(いいだ人形劇フェスタ 10 周年記念誌編集委員会, 2009: 87-88)。事実、2,500 人を数える市民が、運営スタッフとして参加し、45,000 人の観客の大多数も飯田市民である。1 章 3 節で触れたとおり、国内の人形劇の祭典、また、舞台芸術や音楽、美術といった文化活動をみても、市内全域の住民がこれほど多く参加する、市民を対象とした市民による祭典はないといえる。

上述したように「自主的な参加」により市民がつくることを理念とする人形劇フェスタであるが、しかし実行委員会が掲げるこの理念が真に実現されているか、その実態は疑問である。主体的参加の実態はさらに 5 章で地域社会との関係から考察することとし、本章ではまず、2,500 人の 5 分の 4 (1,900 人) を占める地区公演実行委員を中心に、これほど多くの住民の参加を実現させている要因について解明する。

人形劇フェスタの前身である人形劇カーニバルの開始にあたっては、行政が主導し、市民がこの文化活動に挙って参加することを通してまちづくりを進めることがねらわれていた。当時の市長松澤太郎は、かねてより市民の社会教育の場としての公民館の価値と飯田で公民館の活動が活発に取り組まれていたことを念頭に、社会教育課の場である公民館を活用した市民参加を進めた。

しかしながら、現在では、第 3 章で触れたように公民館活動は全国的に見て衰退している現状がある。そうしたなかで、なぜ飯田市では、全市域にわたって公民館を活用した地区公演が実現したのか。そして、人形劇カーニバルから新しい人形劇の祭典人形劇フェスタに移行し人形劇フェスタになった現在までの 38 年間の長きにわたり継続して、住民の参加を得ながら地区公演が継続されているのか。しかも、運営へのボランティアスタッフの市民参加者や実施会場数の減少がみられないまま、逆に参加劇団の増加に伴う期間延長に対応しながら、地区公演が実施されているのである。

飯田市は、長野県の公民館の特徴でもあるが、「分館—地区公民館—分館」という 3 層構造をなしている。人形劇フェスタという市を統合する大規模な文化活動の成功に、集落＝区に存在する分館、そして分館と密接につながる地区に 1 つずつ設置された地区公民館がどのようにかわり、地区公演実行委委員としての住民 1,900 人の運営スタッフの参加を実現させているのか。飯田市の三層構造の公民館システムによる市民の運営参加へのメカニズムを明らかにする。

1 飯田市の公民館

1.1 歴史

飯田市および下伊那郡の町村を含む伊那谷南部のこの地域は、大正期の自由画教育や青年運動から生まれた伊那自由大学などに代表される歴史的・風土的な教育の土壌や、戦後直後からの青年会や婦人会の自主的な学習活動などを背景に、全国に先駆けて公民館が設置された²²。

1946（昭和 21）年 7 月の文部次官通牒いわゆる「寺中構想」うをうけ、1946 年 9 月には公民館設置について長野県教育民生部長から「教育文化を基礎として、郷土産業活動を奮い起こす機関として、民主的に設置されたい」と通牒が出された。県は、公民館設置に対する講習会や大会を開き、強力に設置の啓蒙を行った。下伊那地方事務所でも新生日本の民主化のために公民館設置が望ましいと各村々に積極的に働きかけた。その結果、1947（昭和 22）年 10 月に座光寺村（現飯田市座光寺地区）に、12 月に龍江村（現飯田市龍江地区）に、翌 1948（昭和 23）年 3 月に竜丘村（現飯田市竜丘地区）に、翌 1949（昭和 24）年 1 月に鼎町（現飯田市鼎地区）にと、続々と公民館が設置された。

飯田市は、1937（昭和 12）年に飯田町と上飯田町が合併して市制が敷かれ、以来現在まで 6 回にわたり町村合併が行われたが、その都度旧町村単位に独立公民館である地区公民館と職員を主事として配置した。旧飯田地区（橋北・橋南・羽場・丸山・東野）は、1968（昭和 43）年に 1 館制から 5 館に分離し、それぞれ地区公民館として位置づけられた。その後も 1993（平成 5）年 7 月 1 日に上郷町、2005（平成 17）年 10 月 1 日に上村、南信濃村と合併し、現在は、地区公民館 20 館を取りまとめる中央館的な役割を担う飯田市公民館と、20 の地区公民館が独立・並列方式で配置されている。さらに、分館が 15 地区に 103 館配置されている。ただし、これらの分館は自治公民館として住民によって運営され、行政は直接的なかわりを持っていない。

1.2 理念

飯田市公民館の基本方針は、1973（昭和 48）年に文部省の委託を受け、館の運営基準について職員らが研究した結果から、以下の 4 つが導き出され明文化された。

- ①地域中心の原則：まちづくりを考える時も、日常的に身近な地域から出発することが大切である。地域ごとに設置された公民館は常に地域を中心としてとらえられた学びの場であるべきである。
- ②並列配置の原則：地域の規模や特徴は異なっても、公民館は 20 地区に対等に配置され、それぞれの活動が等しく尊重される。この原則は地域中心の原則を保障するものである。

²² 飯田市公民館が毎年度発行している「公民館活動記録」の冒頭に、飯田市公民館の歴史が端的に説明されている。

③住民参画の原則：公民館を設置し、そこに職員を配置することは行政の役割であるが、公民館の事業の企画運営は地域住民によって組織された専門委員会や運営委員会、より身近な住民の単位である分館活動など、それぞれの事業が自発的な住民の意志に基づいて行われることが大切である。この様な組織や活動は、飯田市の公民館活動の原動力になっている。

④機関自立の原則：教育行政が一般行政から一定の独立性、中立性を保っていることに鑑み、公民館が地域の社会教育機関として住民の主体的な学習活動を保証することは大切である。その意味で公民館が自立した体制を持っていることが重要である。

ここに示された理念を指針として飯田市の公民館活動は進められ、その成果が社会教育研究の対象としても、全国的にも注目を集めた。

1.3 地域自治組織の改訂と公民館

飯田市は 2007（平成 19）年 4 月に新しい住民自治の仕組みとして「地域自治組織」を導入した。新たな地域自治組織は、地域の住民から選出されてその自治体の一組織として事業や予算の執行を預けられる「地域協議会」、住民によって組織され地域づくりを進める「まちづくり協議会」、それらの活動を支える職員組織の「自治振興センター」によって構成されている（図 4-1 参照）。新しい組織において公民館は「まちづくり委員会」を構成する 1 つとして位置づけられた。

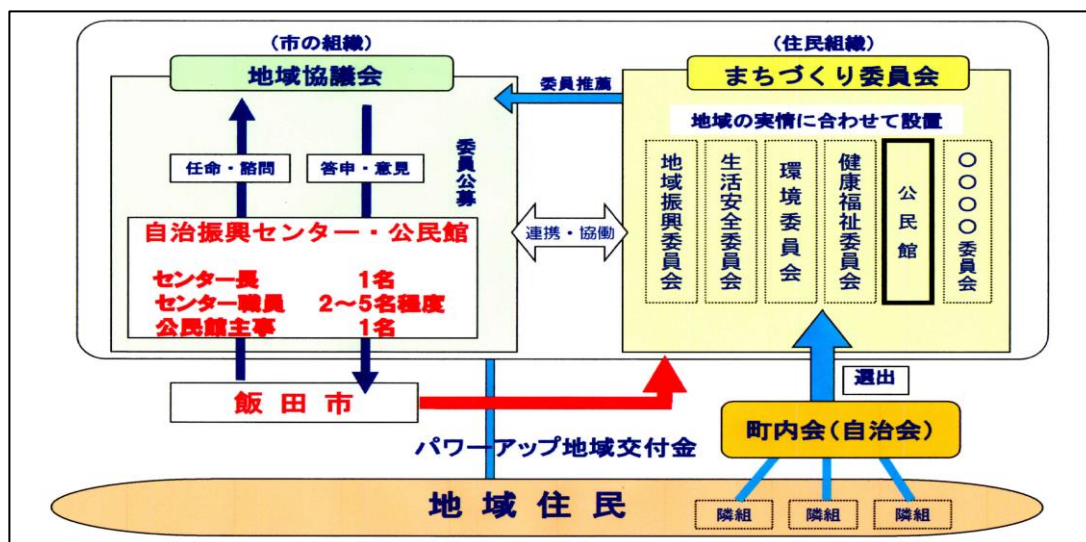


図 4-1 地域自治組織のイメージ図（出典：飯田市資料より）

新制度の導入における公民館の位置づけに関しては、飯田市公民館長会と飯田市自治連合会との間で、2003（平成 15）年 5 月ごろよりおよそ 2 年半にわたって対立関係が続き、度重なる検討が重ねられた。飯田市公民館長会は、公民館の住民自治を守るために公民館は教育委員会の傘下にあって地域課題に取り組む形であることが必要であると主張した。

一方、飯田市自治協議会は、近年は文化祭や運動会、趣味の講座ばかりが目立つ公民館の存在意義を問い、あわせて、公民館長の報酬が月 12 万 9 千円も支給されているのはおかしいと異議を掲げ、公民館も教育委員会から離れ市長部局へ移行すべきだと主張した²³。市当局の庶務課も、「今、各地域における公民館活動の実態は、公民館も各種団体も一緒になって活動しているのが現状であり、既に地域が一丸となってコミュニティの醸成に努めていると言える。こうしたことから、一つの枠にとらわれることなく、共に地域を盛り立てるため、連携・協力していくことが必要であり、まちづくり委員会の一委員会に公民館も入り一体的に取り組むことは、今後の地域を支える仕組みとして望ましいと考える（木下，2012：250）」と意見を表明した。

公民館長会は、まちづくり委員会の理念が不明確であること、公民館の内実的役割と将来に見通すものがないことを問題として指摘した。そして、庁内関係者から改めて地域自治組織導入についての説明を聞く場を持ったり、これからの公民館の在り方について社会教育学の専門家を講師に講演会を開催したり、自治協議会連合会役員と公民館長会との懇談の場を持ったりすることで、地域自治組織の導入と今後の公民館の在り方について検討を重ねた。2004（平成 16）・2005（平成 17）年と時間をかけた協議を通し、2006（平成 18）年に入り、最終的に公民館長会は地域自治組織導入をその目的とする住民自治の拡充や住民の行政参画による分権社会の構築を志向するという理念については一応認めることとしたが、まちづくり委員会において、公民館はあくまでも社会教育法に規定されている社会教育機関であることを強調した（木下，2012：259-261）。教育委員会は、公民館の在り方と今後の方向として、「公的学習権を保障し今日的課題に取り組む体制として、従来通り 18（当時）地区公民館を置き、職員を配置する」「公民館は教育機関ではあるが、地域の中にあっては、自治会はじめ他の委員会等と連携し、地域一丸となって地域づくりを支援していく」「公民館の今日的役割は、住民の心の絆を取り戻し、地域コミュニティの再生、そして地域の教育力の向上にある」と、公民館は市が設置する社会教育機関であるとともに、地域自治組織を構成するまちづくり委員会の一委員会に位置づけられた。

2007（平成 19）年より実施された新たな地域自治組織は、以下の図 4-1 のとおりである。

2 飯田市の公民館の組織

飯田市には、市の中央公民館的役割を担う飯田市公民館、各地区に 1 つずつ配置された地区公民館、そして、集落＝区に配置された自治公民館の分館、以上の 3 種類の公民館が

²³ 竜江公民館長で、市公民館長会長の木下陸奥は、新制度への改訂において、まちづくり委員会の中に公民館が位置づけられることに対し、反対派のリーダー的な立場で行政や市自治会連合会との討議に参加、また、学習会を計画し住民の考える場をつくった。その過程に関しては、『地域と公民館－自治への憧憬』（木下陸奥，2012，南信州新聞社出版部）に記録がまとめられている。

ある。現在、地区公民館は 20 地区に 1 館ずつ配置され全部で 20 館。分館は 20 地区のうち 16 地区に合計 103 館が自治公民館として住民によって運営されている。

2.1 飯田市民公民館

飯田市民公民館の機能としては、全市民を対象とした事業の実施、新たな地域課題や生活課題に対応し、地域公民館に波及することをねらったモデル的な事業の実施やそのための指導者の育成、地区公民館活動が円滑に展開されるためのネットワーク事業の推進が挙げられている。

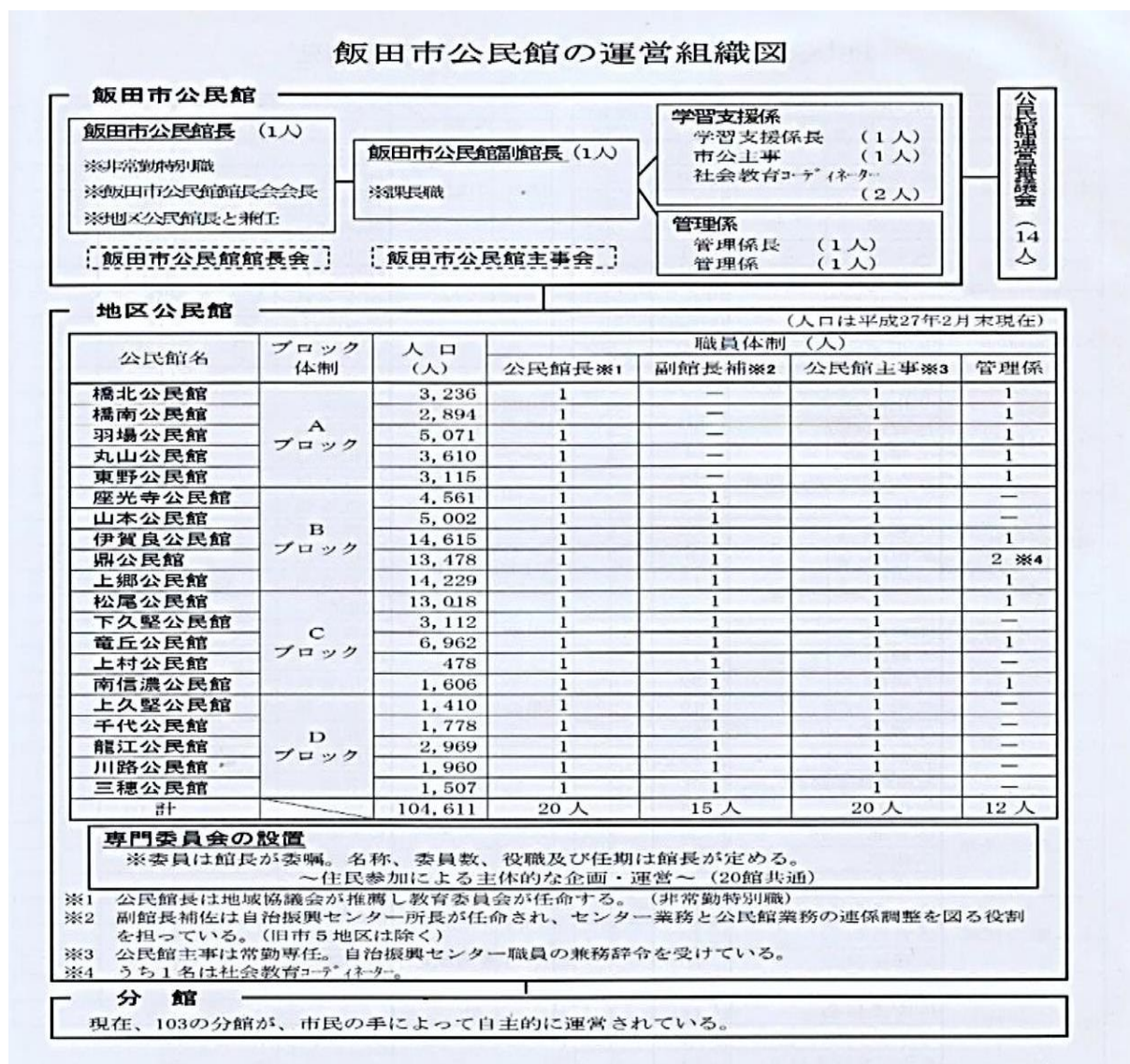


図 4-2 飯田市民公民館の運営組織図 （出典：飯田市，2013，「平成 24 年度飯田市民公民館活動記録」p7）

飯田市民公民館には地区公民館長によって組織された飯田市民公民館長会において、構成員の互選で選出された飯田市民公民館長（非常勤特別職）、飯田市民公民館長を補佐する副館長（課長職）、学習支援係（係長、主事、学習支援係、社会教育コーディネーター）、管理課（係

長、管理係）が職員として配置されている。また、市内全ての地区公民館の館長、主事で構成される館長会および主事会が置かれ、公民館職員の研修や情報共有のための連絡調整の役割を果たしている。主事会には、市民や地域の問題の解決のために公民館や主事はどうあったらいいのか検討するプロジェクトが複数のテーマで設置されている。公民館活動として、地区公演を中心とする人形劇フェスタへの住民の参加について検討する「人形劇プロジェクト」も人形劇カーニバル開始直後から設置されている。

2.2 地区公民館

地区公民館は、ほとんどが小学校区と共通の範囲となっている市内全 20 の行政区画の地区に、各 1 館ずつ設置されている。地区公民館には、飯田市非常勤特別職員の館長と飯田市常勤専任の公民館主事が配置されている。また、いくつかの公民館には管理係が配置されている。地区公民館には、飯田市の公民館活動の 4 つの運営原則の 1 つである住民参加の原則を保障し、住民主体の公民館活動を展開するため「専門委員会」が設置されている。専門委員会の設置状況は地区によって異なるが、主に文化委員会、体育委員会、広報委員会、青少年育成委員会などが組織されている（委員会ではなく、部会、部という名称にしてる地区公民館もある）。専門委員会の名称、人数、役職、任期は公民館長が定めることとなっており、委員は町内あるいは分館から推薦された候補者から適任者を選び公民館長が委託する。地区公民館では住民の要望に基づく学級講座、専門委員会が企画する地区独自の事業、コミュニティを醸成する各種の事業、学習相談や学習情報の提供および施設設備の提供を行っている。

2.3 分館

分館は、自治公民館として行政から独立し、集落＝区の住民によって運営されており、集落＝区の住民の生活に一番身近な公民館として、子どもから高齢者まで幅広い住民の日常的な学習の場になっている。分館では住民同士のふれあいや交流を重要な目的とし、分館独自の事業の他、地区公民館と連携した活動を展開している。

自治公民館である分館が、行政の社会教育の場である飯田市民館の枠組みに位置する地区公民館とどのように結びついているか、その実態については次節で詳論する。

3 公民館の三層構造システム

「市公民館－地区公民館－分館」の三層構造をなす飯田市の公民館は、自治公民館である各分館の独立性はもとより、各地区の地区公民館も上述した飯田市民館の運営理念によってその独立性を確保されている。しかし、その運営においては、市民にとってもっとも身近な生活圏である集落＝区の公民館である分館と、複数の集落＝区によって構成される地区の地区公民館は、日常的に密接なかかわりをもっている。つまり、飯田市の公民館

の三層構造には、有機的に人や活動に関わりをもつシステムが存在する。

「市公民館－地区公民館－分館」の三層構造による公民館システムがどのようなネットワークを形成しているか。この三層構造のネットワーク形成において重要な位置を占めるのが、中間に位置する地区公民館であると考えられる。

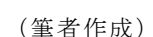
全国的に見て、「市公民館－地区公民館－分館」という三層構造の公民館システムを持つ自治体は少ない。1955（昭和 30）年前後、昭和の市町村大合併の折に、公民館は、地域の独自性を維持しつつ合併後の地域の一体感を形成するためにも、「中央公民館－地区公民館－自治公民館（分館、または集落公民館と呼ぶところがある）」の三層構造の体制を作る自治体が多かった²⁴。しかし、生活圏が拡大し都市化現象が進む中で、最小生活圏である分館は機能しなくなり消滅した地域が多い（遠藤，2004：165）。遠藤知恵子は、山形県朝日町を事例に、公民館三層構造の意義を検討している。この三層構造が形成されるためには、分館の存在が絶対条件となるが、単に分館が設置されても、それが住民によって運営され、本来公民館に求められる住民の自主的参加が実現されなければ地域に定着できない。飯田市の分館は集落＝区に設置され、公民館活動が自治会活動の一部に包摂されたかたちで住民による活動が活発に展開されてきた。ただしこれが、伝統的な地縁関係だけのなかで展開されてきたならば、度重なる合併を経て活発な活動を維持し続けることが可能であったかは疑問である。この点については、次の 5 章にて考察する。

伝統的な地縁関係を基盤にする地域社会の結束を強くもつ分館の上に地区公民館があることで、情報を得たり新たな学習の機会を得ることが可能であった。そうして、分館はそれぞれの集落＝区に終始することなく、時代の変遷に対応した活動を続けることができたのではないかといえる。

実際に、分館と地区公民館は、人（委員）・活動・情報において強く連携している。分館の運営は区＝集落の自治会に位置づけられた公民館部委員会（あるいは、部会・部）によって運営され、正副分館長・分館主事・会計・監事の役員の他、文化委員会・体育委員会・広報委員会などにより組織されている。そして、分館長および各委員長は、地区のまちづくり委員会に位置づけられた公民館委員会の委員として地区公民館の活動に携わっている。つまり、地区公民館の役員は分館の役員を兼任している。分館の役員は、各集落＝区および分館の実態や要望を持って地区公民館の活動に参加し、より具体的な住民の実態を分館から地区公民館に伝えている。こうした体制のもと、文化・体育・広報委員会に

²⁴遠藤知恵子は、山形県朝日町を事例とした研究で、自治公民館－地区公民館－中央公民館の三重構造としている。これは、飯田市の分館－地区公民館－飯田市民館にあたる三層構造と同意である。以後、このような 3 つの公民館が重層的な関係を持つ構造を三層構造として統一して表記する。

そして、以上のように、分館活動、地区公民館活動そして両者合同の活動が活発に遂行されている背景には、地区公民館に配置された主事の存在の大きさがあげられる。教育委員会の管轄する地区



うことができる。しかしながら、牧野らも指摘するように、地区単位での自治活動には、地区としての強い結束を得やすいという利点がある一方、閉鎖的になる可能性を強く持つ。

87

この点において、主事がかかわることで、地区内と地区外との情報流通やコミュニケーションを媒介し、閉鎖的な地区コミュニティ内に新しい情報をもたらし、住民の意識・意欲の向上や動機づけ、新規のアイディアの創発につながることを期待できるのである（東京大学大学院教育研究科社会教育学・生涯学習論研究室飯田市社会教育調査チーム，2011：22）。

飯田市公民館の主事会では、情報交換、飯田市公民館が抱える問題への対応を検討する各種プロジェクト会議、研修会等を定期的に行き、主事はその役割や実際の公民館活動展開について研鑽を積んでいる。

以上の事項を飯田市の三層構造の公民館システムとして図示すると、図 4-3 のように示せる。「分館－地区公民館－飯田市公民館」を重層的に双方向につなぐ人・活動および情報の流れ。そして、各地区の分館をつなぐ地区公民館の公民館委員会やそこで実施される活動。また、20 の地区公民館をつなぐ市公民館の主事会や館長会などの横のつながり。こうした縦横にわたるさまざまなネットワークが地区公民館を中間層に置いた三層構造によって形成され機能している。

4 人形劇フェスタと公民館

4.1 公民館の三層構造システムによる住民参加の拡がり

人形劇フェスタが市内全域に広がりを持ち、運営への市民のボランティアが約 2,500 人、そして、当初行政主導であったものが、人形劇フェスタに移行して市民による実行委員会組織の運営となり、市民主導の人形劇フェスタに移行して、あわせて 38 年間継続開催されている。それを実現させた要因は、上述の公民館の三層構造システムであると考えられる。

人形劇フェスタは、地区公民館の文化委員会が担当する活動として位置づけている地区がほとんどである。各地区では、地区公民館の文化委員会、そして地区公民館と重層的な強い関係を持つ分館の文化委員会の公民館役員を中心に、地区公演実行委員会を組織する。

なお、人形劇フェスタ地区公演実行委員会の組織の仕方には 2 つあり、1 つは地区公民館と分館が合同で組織するもの、もう 1 つは公演を開催する分館ごとに組織するものである。前者の場合も、分館ごとに 1 つの地区公演が運営され、後者との違いはない。本部実行委員会からの予算が地区公民館にまとめて支払われるか、分館ごとかの違いだけである。これらの地区公演実行委員会は、第 1 章の図 1 - 10「人形劇フェスタ実行委員会の組織図」に示したように、飯田市公民館の主事会による地区公演調整委員会が、本部実行委員会との連携を取る中で、個々の地区公民館や分館の実状にあわせた実行委員会活動を展開している。

行政は、人形劇カーニバルの開始にあたって、歴史的にみても戦後の公民館の活動の開始より活発な取組みが見られ、かつ、三層構造の基層をなす地域社会である集落の分館まで組織化されている飯田市の公民館を活用することで、多くの市民の参加と全市域での開

催の実現をねらったと考えられ、事実それは成功したといえる。

住民は、生活に密着した集落＝区の分館役員を、集落に住む住民の回り番のような、ある意味義務的なものとして引き受け、公民館活動に参加する。その活動の 1 つに人形劇フェスタがあり、自動的に地区公演実行委員として人形劇フェスタに運営の参加をすることになるのである。

地区公演は、人形劇カーニバル開始当初より、多くの市民が参加することを願った行政の施策で、市内全地区に組織的に広がる地区公民館を活用して実施することとなった。しかし、地区公民館はもとより分館においても、公民館が各館独立性の原則に則り、地区公演の実施は各館の意志に委ねられている。地区公民館の主事は、行政の視点に立てば、全市域に広がりを持つ市民文化活動をめざし実施を働きかけることもあるが、原則的には住民に決断は任され、住民が検討して決定される。つまり、住民が地区公演を実施するにあたっては、住民にとっても何かしらのメリットがあるから活動に取り組むのである。地区公演を分館および地区公民館が実施するメリットは、次の 2 点だと考える。1 点は実施に際してわずかでも補助金が得られることである。分館および地区公民館の活動費は、市からの補助金と住民からの会費で賄われる。特に、市の補助金は通常年中行事的な活動に支出されることはないが、人形劇フェスタの地区公演であれば、特別な審査なしで補助金がもらえる。第 3 章の人形劇フェスタの財政でも触れたが、地区公演の会場費としての補助金は、市の補助金の 10%、180 万円であり、これを単純に地区会場 75 会場で割ると 1 会場あたり 2 万 4 千円の補助金となる。さらに、住民の交流を目的とした夏祭りの一部として人形劇を楽しむコーナーを設け、ここを地区公演の場として人形劇上演を行ったとしても、地区公演企画として申請し採択されれば、ほぼ希望の補助金が獲得できる。地区公演企画への補助金は、ワッペン売り上げの 10%となっており、およそ 90 万円である。毎年 10 件ほどの新生があり 5・6 件が採択されることを考えると、1 件あたり 15 万円ほどとなる。2 点目は、集落＝区の子どもたちが楽しめることである。人形劇カーニバル開始にあたり、行政は住民の理解を得て地区公演開催が実現するために、国際児童年を利用し、子どもに人形劇を楽しんでもらうことを目的として掲げた。住民は、実際、集落＝区の子どもたちに楽しんでもほしいという考えで、地区公演に取り組んでいる（付属資料 3 を参照）。かつて、評判の高いプロ劇団がある地区の分館で地区公演を行った際、県外の劇人を含め地区外の観劇希望者が参集し会場に入りきらなくなった。この時、地区公演のスタッフが、地区・区＝集落の子どもが観ることが出来ないからと地区外からの来場者の観劇を断ったということがあり、実行委員会で問題として検討されたことがあった。この出来事などは、まさに地区公演はその地区の子どもたちが人形劇を楽しむためのものという住民の意識が理解できる事例である。

行政が主導して開始し、行政の施策として公民館活動に位置付けられて地区公演が開催されるようになった経緯からみると、地区公演は行政から住民に下ろされ、地区住民はそ

れを受け止め従事していると捉えることになりがちだが、住民は、開始のきっかけはどうであれ、年行事のように位置づけ、住民が集い楽しむ活動が、補助金を受けて開催できることも大きく影響して、公民館活動として 38 年にわたり継続開催しているといえる。

4.2 主事の役割

地区公演実行委員はその多くが役職としてかわり、任期の 2 年で次々に交代する。このような実態において、なぜ 35 年間にわたり人形劇フェスタ地区公演が全地区において例年 70 以上もの会場を設けて継続的に実施できたのか。ここに大きくかかわっているのが地区公民館に配置された主事の存在であるといえる。各地区公民館の主事は、前掲図 4-1 に示したように、飯田市民館において定期的に主事会を開催するとともに、地域や公民館の抱える問題解決と公民館活動充実のためにいくつかのプロジェクトを設定し活動している。人形劇フェスタに関してもプロジェクトが設けられ、地区公演充実に向けた取り組みがなされてきた。その 1 つが、「地区公演運営マニュアル」の作成である。このマニュアルは、地区公演の準備から開催、その後の反省会実施まで時系列に沿った業務内容が詳細に記され、これに従えば初めての人でもおおよそ滞りなく業務が進められるほどにまとまったものである。もちろん、この通りに進めなくていけないというものではない。しかし、地区公民館や分館の役員任期が 2 年ほどであることから、初めて担当する人や 2 回目という人たちがばかりの中で地区公演が開催されることを考えると、取り組む実行委員にとっては安心感が得られる。そして、一通りマニュアル通りに進めていけば間違いなく地区公演を執り行うことができ、終了後に一定の満足感や達成感を感じることができるのである。初めて取り組んだ、しかも、公民館の役員として最初は仕方なく取り組んだ活動が成功するか失敗に終わるかは、人形劇フェスタのイメージ形成や、その後の地域の活動への参加意欲等に影響を与えるものと考えられる。このマニュアルも、飯田市民館主事会によって作成され、主事を通して地区公民館および分館による各地区公演実行委員会に活用されている。主事の社会教育的視点があることで、フェスタ地区公演は発展を遂げてきたといえる。

小括

本章では、住民の立場から、この三層の公民館システムの活用と住民の運営への参加について考察し、その結果次の 3 点が考察出来た。①市民にとってもっとも生活に密着した身近な場に分館があり、人形劇フェスタは、この分館を地区公演に活用している。そのことにより、市民は、分館という身近な場の公民館への参加を通して人形劇フェスタに参加している。②分館の役員は、地区公民館の役員を兼ねていることが多く、地区公民館の主事の社会教育的な視点からの援助を受けながら、公民館活動に取り組んでいる。③飯田市民館が人形劇フェスタ地区公演を統括してかかわっていることで、地区公演への参加が結

果として市全域への拡がりをもった人形劇フェスタの一部を担うことになっている。そのため、地区公民館 20 館が 1 つの活動に取り組む一体感と、現在もやや閉塞的な集団性が残る伝統的な地区のまとまりが醸し出す地区同士の競争意識が、住民の取組みへの前向きな姿勢をつくっている。こうしたことにより、38 年を経た現在も、公民館の活動に組み込むことで、会場数の減少や参加者の減少をみることなく、地区公演は住民により継続的に開催されていると言える。

しかしながら、現在、各地で公民館活動の衰退が問題となっているなか、なぜ飯田市では地区公民館や分館を活用した人形劇フェスタのような大規模な市民文化活動が 38 年を経ても衰退を見ないまま継続的に開催できるのか。

第5章 地域社会と公民館—分館活動を支える伝統的地域社会—

はじめに

人形劇フェスタの特徴は、地区公演による市内全地区での広域開催である。第4章でこの地区公演の運営を支える地区公演実行委員会のスタッフとして、1,900人の住民の参加が飯田市の公民館の三層構造の活用にあること、そして、そのメカニズムを考察した。

では、飯田市の公民館活動が活発に展開されていること、さらにはそれを利用して人形劇フェスタから人形劇フェスタにわたる38年間にわたり住民が地区公演を支え続けてきたという事実をどのように理解すればよいだろうか。1950年代から1960年代にかけ全国で活発に活動されていた公民館活動であるが、第3章で述べたように、今日全国では低調になっている。しかし、飯田市においては、低調となるどころか、今日においても公民館を基盤とした多様な活動が住民によって展開されている。人形劇フェスタの場合は、35年を経た後もなおその規模を拡大し続けている。こうした状況に鑑みると、人形劇フェスタへの住民を中心とする市民の参加と、長期継続の実現には、確かに飯田市の三層構造の公民館システムを活用したことが必要条件であったと考えられるが、住民を公民館活動に日常的に参画させ続ける要因はいったい何であろうか。

本章では、人形劇フェスタひいては飯田市の公民館活動とそれを支える住民との関係性を地域社会の視点から解明することを目的とする。特に、住民にとって最も生活に密着している分館活動と地域社会の関係に着目し、公民館活動として取り組む人形劇フェスタへの住民の参加の実態を明らかにする。

1 分館の基盤となる集落の実態

1.1 集落とは

そもそも集落とは、鈴木栄太郎が「自然村」と名付け戦前段階の我が国の農村社会の原型を示すものとして行政村に対峙して提示されたもので、農村における各種組織・集団が累積していて、超えることのない地域的範囲として、農民の行動を律する自足的・体系的な文化圏を構成している。

鈴木栄太郎は『日本農村社会学原理（上）』で、「村とは地縁的結合の基礎の上に、他の様々の社会的紐帯による直接的なる結合を生じ、その成員が彼等にのみ特有なる、しこうして彼等の社会生活の全般にわたる組織的な社会意識内容の一体系をもつ人々の社会的統一である。地縁社会を地域の近接に基く結合とみなすなら、かくの如き意味での村は明らかに地縁社会以上のものである。そこには他の幾多の社会紐帯による結合も存し、彼らにのみ特有の社会意識は、原則的に、相互面識的な彼らの社会生活のあらゆる方向にわたって拘束を加えている。その内に生ずる多くの集団もいわばこの統一的・一般的意志にしたがって統制されている。かくの如き社会的統一が私の意味する村であって、それは自

然村といってもよいであろう（鈴木，1968：56）と、村を定義している。

鈴木は農村の地域社会の構造を重層的な3つの地域から成り立っていると考えた。三層をなす地域社会の真ん中の第2社会地区が、社会的統一を有する「ムラ²⁶」、すなわち自然村ととらえられている。この第2社会地区＝「ムラ」は藩政期の村と領域が一致することが多く、そこには意思決定の場（常会などの名称で呼ばれる）が設けられ、「ムラ」の中の全ての事項がここで議論される。また、水利組織や道普請などの協働労働組織、氏子集団のような祭祀組織など様々な集団が内部に累積している（竹安，1992：219-239；2014：35-54）。飯田市ではこの「ムラ」を「集落」と指称しているので、本稿でも「ムラ」を集落と表記する。

その構造としては、①3層に分化しているケース（北方区）と②2層に分化しているケース（大瀬木区）の2つがある。この2つの成立時期は、①は戦後の流入人口が増えて、戸数が多くなったため、行政上の区割りとして制定された事例で、山村地域においてしばしばみられる。②は、大区小区制に起源をもつ藩政期の構造の継承である。①も②も時代が異なるが、地理的条件等の制約で一定戸数の集落の形成が困難であったことが背景にあると思われる（図5-2「伊賀良地区の自治区画」参照。）。

1.2 飯田市の分館と集落

飯田市は、1937（昭和12）年の飯田町と上飯田町の合併による市制施行以降、6回にわたる周辺町村の吸収合併によって拡大し現在に至る。合併の際、明治期の町村はそのまま地域自治区の「地区」となった。また、当初飯田市を構成していた橋北・橋南・羽場・丸山・東野のおおよそ小学校区で構成される自治区は、1967（昭和42）年にそれぞれ地区として独立した。こうして、現在飯田市は20地区で構成されている。

一方、公民館は、1946（昭和24）年の公民館設置にかかわる文部次官通牒により、飯田市および周辺町村において各行政に1つずつ設置された。その後の町村合併に際して、飯田市は、合併前に設置されていた旧町村単位の公民館をそのまま地区の独立した地区公民館として存続させ、市内全地区に地区公民館を並列に配置させた。また、地区は複数の「区（地区によって「平」というところもある。）」で構成されており、「区」では住民の自治的な活動として分館活動が存続された（長野県公民館運営協議会長長野県公民館活動史編集委員会，1987：223-226）。ただし、橋南・羽場・丸山・座光寺・三穂地区の5つの地区では分館活動は行われていない。また、橋北地区は、地区内に「区」にあたる「町会」が20あるが、その内の1つ江戸浜町会のみ分館（江戸浜分館）活動を行っている。

現在、飯田市には、20地区に103の分館（条例分館27、類似分館76）が設置されてい

²⁶ 行政村と区別するため、社会学で自然村を呼称する場合「ムラ（ないしはむら）」の表記が用いられる。

る²⁷。毎年教育委員会が刊行する「飯田市公民館活動記録」には分館の配置に関して、「多くの地区公民館のもとに、集落単位を基本とする『分館』が組織され（飯田市公民館，2015：5）」と明記されており、主事等飯田市職員が分館を説明する際にも、分館は集落に設置されていると言われている。つまり、飯田市の集落は、分館が設置されている「区」であると定義できる。

本節では、あらためて飯田市の分館が設置されている「集落」について、鈴木栄太郎が自然村と称した近世村との関係から実態を明らかにする。図 5-1 に、村・行政区画の変遷について調査した實月圭吾監修『明治初期長野縣町村衛繪地圖大鑑〈南信編〉』（實月圭吾 1985）を参考に、各地区の分館と、1875（明治 8）年以前の集落いわゆる近世村との関係をまとめた。

その結果、従来、飯田市が言ってきた分館が組織されているという「集落単位」の集落は、近世村を集落として分館を組織しているものが多いが、例外もあることが明らかとなり、それは以下の 4 つの型に分類できた。

- ①近世村の集落と一致する「集落」。
- ②複数の近世村が統合された「集落」（龍江地区。近世村の集落は、大屋敷村・尾科村・石林村・宮沢村・雲母村・安戸村・今田村の 8 つであるが、現在、第 1・2・3・4 区に編成され分館が設置）。
- ③小字単位の「集落」（川路地区。近世村の集落は下川路村 1 つであるが、現在の集落は 2・3・4・5・6・7・8 区と 7 集落となりそれぞれに分館が設置）。なお、このような小字を集落単位とするケースは、長野県の北部の地域にもみられる（佐藤・上原・大島，1998：1-18）。
- ④近世村の集落には存在しない新しい「集落」。新たにできた団地が一集落となって分館が設置された（伊賀良地区の三尋石）場合や、人口増加によりかつての一集落が分割されたと考えられる集落への分館の設置（上郷地区の下黒田北・南・東は、下黒田村を一集落とした地域から分割したと考えられる）など。

以上のように、飯田市の分館配置でこれまで一般的にいわれていた「集落単位」の「集落」とは、多くが近世村の集落を基盤として形成されている。

²⁷ 飯田市公民館による『平成 26 年度飯田市公民館活動記録』により 103 館の分館の世帯数をみると、最小は千代地区芋平分館の 19 戸、最大は伊賀良地区北方分館の 1,929 戸と大きな差があり、分館の規模も構成も一様ではない。このような分館の規模の格差は、同一地区内においてもあり、例えば、伊賀良地区では、最小は三尋石分館の 184 戸で、北方分館の約 10 文の 1 である。

図 5 - 1 飯田市の行政区分としての地区および集落と分館

合併前の町 村名・合併 年	地区名	分館名	M8以前の集 落・村との 合致	合併前の町 村名・合併 年	地区名	分館名	M8以前の集 落・村との 合致
上飯田町	橋北	江戸浜		千代村	千代	北部	
S12	橋南	(なし)		S39		芋平	芋平村
飯田町	羽場	(なし)				野池	野池村
S12	丸山	(なし)				米川	米川村
	東野	吾妻町南				法山	法全寺村
		東新町 1				大群	大群村
		錦町				米峰	米峰村
		高羽町東				毛呂窪	毛呂窪村
		宮ノ前				八ノ倉	
		宮ノ上				下村	下村村
		諏訪町					
座光寺村	座光寺	(なし)	座光寺村	龍江村	龍江	第一	→ 今田村
S31				S39		第二	安戸村
松尾村	松尾	上溝				第三	宮沢村
S31		久井				第四	尾林村
		水城				* 区切り不 明	石林村
		新井	島田村				雲母村
		寺所					大屋敷村
		明					尾科村
		清水		竜丘村	竜丘	駄科	駄科村
		城		S31		長野原	長野原村
		八幡				時又	時又村
		代田	毛賀村			桐林	桐林村
		毛賀			川路	上川路	上川路村
		常盤台		川路村		2	
下久堅村	下久堅	知久平	知久平村	S36		3	
S31		虎岩	虎岩村			4	
		柿野沢	柿野沢村			5	下川路村
		稲葉				6	
		小林	小林村			7	
		南原	南原村			8	
		下虎岩		三穂村	三穂	(なし)	伊豆木村
上久堅村	上久堅	1		S31			立石村
S39		2	柏原村				下瀬村
		3					M8~14
		4					三綱村.
		5					M14 ~ 22 再 び3村
		6					M22 ~ 三穂 村

合併前の町 村名・合併 年	地区名	分館名	M8以前の集 落・村との 合致	合併前の町 村名・合併 年	地区名	分館名	M8以前の集 落・村との 合致
山本村 S31	山本	東平		上郷町	上郷	上黒田	上黒田村
		大明神		H5		下黒田北	下黒田村
		北平				下黒田南	
		中平				下黒田東	
		西平				丹保	
		南湯川				北条	
		竹佐	竹佐村			飯沼南	飯沼村
		箱川	M16 箱川村			南条	南条村
		久米	久米村			別府上	別府村
		二ツ山				別府下	
伊賀良村 S31	伊賀良	下殿岡	下殿岡村	上村	上村	上町	上村
		上殿岡	上殿岡村	H17		中郷	
		三日市場	三日市場村			程野	
		北方	北方村			下栗	
		大瀬木	大瀬木村	南信濃村	南信濃	和田橋北	和田村 ～ M30
		中村	中村	H17		和田橋南	
鼎町 S59	鼎	三尋石				八重河内	八重河内村
		下山				木沢	木沢村
		東鼎				南和田	
		西鼎					
		下茶屋					
		中平					
		上茶屋					
		切石					
		上山					
		一色	一色村				
		名古熊	名古熊村				

(實月圭吾:監修『明治初期長野縣町村衛繪地圖大鑑(南信編)』を参考に、筆者作成。)

2 集落の実態調査

2.1 調査方法

近世村を区とする伝統的地域社会は、現在どのように機能しているのか。伝統的地域社会である区＝集落に組織された分館活動について、すでに牧野らが広範な調査を実施している（東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究科飯田市社会教育調査チーム，2011；2012）。しかし、牧野らの研究は、社会教育機関である公民館の視点から、住民がどのような活動を行っているかを検証したものであって、分館活動に取り組む住民の視点からとらえた実態ではない。

本章では、分館が自治公民館として住民によって運営されている地域社会および住民の実態を伊賀良地区の3つの区の事例より明らかにし、分館と地域社会の関係、分館活動と住民との関係を考察する。

なお、集落の自治機能の分析に関しては、鈴木栄太郎の農村社会研究を参考にする。鈴木は、村にはさまざまな集団が累積、堆積し、「この累積や堆積の基礎に、個性的なる社会的意識内容による相互制約の自足的組織を認むるのであって、この自足的組織こそもっとも狭義における自然村という一社会累計の本質を成すものと思う。この自足的組織が存するために、集団も個人的社会関係も地域を無視し奔放なる結合の網をつくり得ないのである（鈴木，1978：59）」とし、さらに、「共同体は集団の単なる累積的全体ではなく、この累積の基底に共同体をして共同体足らしむ統一がある、それは一つの精神である（鈴木，1978：118）」と自然村の社会的統一性の根拠としての“精神”の存在をあげている。

鈴木は農村における社会的な事実としてもっとも顕著なものは集団であるとし、農村に一般的にみられる主要な集団としてつぎの10種をあげている。一 行政的地域集団、二 氏子集団、三 檀徒集団、四 講中集団、五 近隣集団、六 経済的集団、七 官制手段、八 血縁的集団、九 特殊共同利害集団、十 階級的集団。本研究では、鈴木の農村社会調査を参考に、集落の集団性を重視して、集落における集団の実態把握を目的に調査項目を参設定し、分館と集落の関係性の実態把握を行う。

調査対象は、伊賀良地区の3つの区²⁸（北方区・大瀬木区・中村区）とし、各区の区長に聞き取り調査を実施した。あわせて、全分館の分館長を対象に分館の実態について自記入式の調査を実施した。以上2つの調査より、集落を基盤とする地域社会と分館の関係について考察する。

伊賀良地区は、飯田市の北西に位置し、地区内には飯田インターチェンジがある。かつて養蚕が盛んであったため一帯は桑畑が広がっていたが、現在はインターチェンジに通じ

²⁸ 飯田市では、集落にあたる地域社会は「区」の名称が用いられている。したがって、実態を示す時は「区」を用いる。また、区を単位として組織された住民自治組織は、自治会、町内会、あるいは単に区の名称が用いられている。本稿では、「自治会」と統一して呼ぶこととする。

るバイパス、通称アップルロードが南北に伸び、沿道には郊外型大型スーパーや家電店が並ぶ。北側の丘陵地は日照条件に恵まれりんごを中心とした果樹園が広がる。伊賀良地区は、かつての伊賀良村で、1956（昭和 31）年に飯田市に合併し伊賀良地区となった。伊賀良地区は、現在、市営住宅の開発で新しく形成されたニュータウン三尋石区と近世村から続く集落を基盤とする 6 区の計 7 区から成る。人口減少が進む飯田市のなかで流入人口がみられ、2015（平成 27）年 10 月時点の人口は 14,600 人、世帯数は 5,270 世帯で、市内でも人口の多い地区である。地区内の伊賀良小学校は、県内で上位 5 位に入る生徒数を数え、地区内には若い核家族が多い。新住民に自治会活動への参加を促すことが、地区の最大の課題であり、目的的な自治会活動が展開されている地区であるため調査対象地区として選定した。

〈区長への区の自治に関する調査〉

- ・実施日：平成 26 年 1 月
- ・実施方法：伊賀良地区北方・大瀬木・中村区の区長に対し、筆者が調査員として面接調査法にて調査を行った。
 - ①北方区長 神部和卓氏 （平成 26 年 1 月 22 日）
 - ②中村区長 熊谷義博氏 （平成 26 年 1 月 18 日）
 - ③大瀬木区長 橋部秀夫氏 （平成 26 年 1 月 24 日）
- ・調査内容：区の構成、農業の特徴及び従事者、水利組合、共有林、氏神信仰、寺院（檀家・墓地）、講、冠婚葬祭（結婚式・葬式）の協力、自治会の構成および活動、人形劇フェスタへの意識

〈分館に関する調査〉

- ・実施日：平成 26 年 2 月 1 日～25 日
- ・実施方法：伊賀良地区公民館主事に依頼し、分館館長に対して、託送式調査法で自記入式アンケート調査を行った。
- ・調査内容：分館の組織、活動内容、役員選出の方法。分館役員としての活動への意識、いいだ人形劇フェスタ地区公演に関しての意識
 - *本節では、このうち、①北方分館、②中村分館。③大瀬木分館の結果を引用する。また、調査項目に関しては、分館の組織、活動内容、役員の選出方法の一部の結果を引用する。

2.2 結果および考察

調査結果の詳細は、資料編 1 に記載した。

①自治区画

各区は、図 5-2 に示すように、それぞれの区により自治区画は異なり、構造ばかりでなく名称も一様ではない。

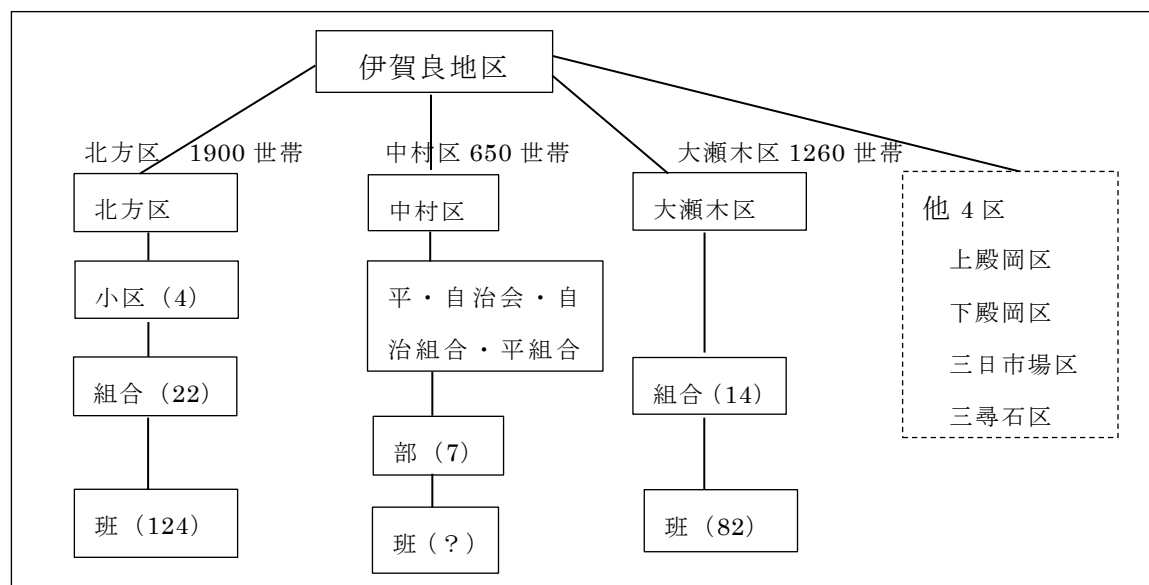


図 5 - 2 伊賀良地区の自治区画

(筆者作成)

ただし、調査をした 3 つ全ての区で一番末端は「班」といい、いわゆる回覧板を回す隣組の 10 戸ほどで組織されている。およそ地理的な範囲で区分されるが、なかには、分家した世帯は本家と同じ組合に配属されるケースもある。

飯田市は近年人口減少傾向にあるが、伊賀良地区はアパートの建設がすすみ、小学生・中学生をもつ核家族を中心とした流入による人口増加がみられる数少ない地区である。そうした流入者に対し、区の自治会であるまちづくり委員会は、自治会加入を促進するリーフレットを配布したり、借家住民に配慮した自治会費の金額設定を行うなど、流入者への自治会（組合）加入に積極的に取り組んでいる。

地区住民にとって自治会活動へのもっとも身近な入り口となる地域集団の「班」は、およそ 10 戸ほどであるため、お互いの顔、家族構成などを把握しやすい規模である。また、回覧板は市の広報誌が最低月 2 回発行され、隣家との定期的な交流にも役立っている。

②地縁的組織の実態（水利組合、共有林、氏子）

伊賀良地区の現在の農家数は 430 戸、専業農家数は 106 戸、このうち男子生産年齢人口が 50 人、女子生産年齢人口は 41 人である（農林水産省、「2010 年世界農林業センサス報告書第 1 館都道府県別統計書」）。北方・中村・大瀬木区とも、かつては農家がほとんどであったが、現在は、稲作や果樹を中心に兼業農家がほとんどである。3 つの区とも現在も水利組合が機能している。北方・中村区は自治会の一構成員として組合を組織しているが、

大瀬木区は水番として特定の家とその役を担っている。

表 5 - 1 伝統的地域社会の実態

(筆者作成)

	北方区	中村区	大瀬木区
水利組合	あり 財産区伊賀良井管理委員会	あり 水利組合	あり 水番（自治会外）
共有林	あり 管理は北方森林組合	あり 管理は市の林務課	なし 以前売却した売上金あり
氏子集団	あり 祭典等のため氏子中心に寄付金を徴収	あり 氏子の年会費 1,000 円	あり 氏子への祭礼の費用負担 5,000 円
結婚式	班の全戸の夫婦を招待	班の全戸の代表者を招待	班の全戸の夫婦招待
講	現在も行っている。	現在は無い	現在は無い
ムラ仕事	水辺の美化管理	道造りは自治会協議員のみ 河川清掃は全戸が参加	並木整備
葬儀	班の全戸の夫婦が出席。現在は役割り業務はなし。	班の全戸の夫婦が出席。現在は役割り業務はなし。	班の全戸の夫婦が出席。現在は役割り業務はなし。
区費 (自治会費)	区費年間 持家 4,000 円 アパート 3,000 円 組合費 3,000 円 自治会入会費 平成 6 年以降なし	区加入金（区有財産共有負担金）20,000 円 区費持家 3,500 円 借家等 3,000 円 平加入金 平ごと 0～80,000 円	区加入金 15,000 円 区費持家年 4,200 円 借家等 2,500 円 組合費 金額は組合ごと

また、地区の財産となる共有林は、北方・中村区は保有するものの、管理は森林組合や市の林務課に委託し、住民が作業にあたることはない。大瀬木区は、すでに共有林を全て売却し、その売上金を地区の財産として地区の予算に入れている。

集落には氏神の神社があり、氏子総代の役員によって祭事が営まれている。氏子総代は各平・組合から年齢を基準に適任者が選出される。基本的に氏神の神社のある地域の住民はすべて氏子になることが出来、氏子の意識がない者も、子どもがいる場合は祭礼に参加する者が多い。氏子の年間費は中村区は 1000 円、大瀬木区は祭礼費用負担として 5,000 円を設定し、自治会費とあわせて徴収している。子どものいる世帯では、祭典への参加を考え、奉納する家庭が多いとのことである。神社の活動に関しては、政教分離の考え方から、自治会との関連で実施することへの異論を持つ人もいると思われるが、若い夫婦世帯

の流入者は子どもが祭りに参加することを考えて、また、以前からの住民は祭りを年中行事の一つとして氏神への信仰を当然のこととして、神社の活動に参加している。

講は、かつては行われていたが、中村・大瀬木区では無くなったとのことであった。

③冠婚葬祭

結婚式の披露宴への招待は、現在は少なくなっているものの、近年まで、班の全戸を披露宴に招待し、招待されたものは踊りなどの出し物を披露することが一般的に行われていた。現在は「ジミ婚」と言われる結婚式の簡素化等の影響もあり、班を中心とした地区住民を招待することはかなり少なくなった。一方、葬儀に関しては、出棺の見送り、葬儀への出席など、今も行われている。

以上の実態からは、地域社会のもっとも小さな社会集団である「班」は、回覧板を回す自治活動の末端組織として行政に関係する業務を遂行する機能以上に、地域社会における日常的な家と家との関係の「おつきあい」が重視される地域集団として、現在も機能しているといえる。

④自治会と分館との関係

2007（平成 19）年の地域自治組織の発足により、地区公民館は地区のまちづくり委員会（地区によっては、まちづくり協議会という。）の一構成員として位置づけられた。これにあわせ、区の自治会および分館組織も一体化し、分館は区全体の自治組織の一構成員となった（区まちづくり委員会・協議会というところが多いが、伊賀良地区の区では、北方区は「北方区」。中村区は「中村自治区中村協議会」。大瀬木区は「大瀬木自治区」という。）

自治組織は変わったが、実際に活動にあたる住民意識としては、大きな変化は感じていない。伊賀良地区北方区在住で、伊賀良地区公民館および北方分館の公民館活動にも永年携わってきた 60 代女性は、「補助金の出所が変わっただけで、今までと変わらない。²⁹」と述べている。

分館財政は、地域自治組織導入前は、飯田市教育委員会から各地区公民館を通じて分館事業補助金が支出されていた。この助成金と、各区の自治会費が分館の活動費となっていた。しかし導入後には、分館事業補助金や地区公民館事業費の一部が「パワーアップ交付金」として各地区まちづくり委員会・協議会の予算に編入され、各区の自治会費も一旦各地区まちづくり委員会に収められ、そのなかから各分館の補助金が下りてくることとなった。（図 5-3 参照）

²⁹ 2016 年 10 月 7 日、電話にてインタビューした。調査対象者の女性は、伊賀良地区で生まれ兼業農家として夫とともにりんご栽培にあたっている。これまで地区公民館の活動に役員として参加し、長年かかわってきている。

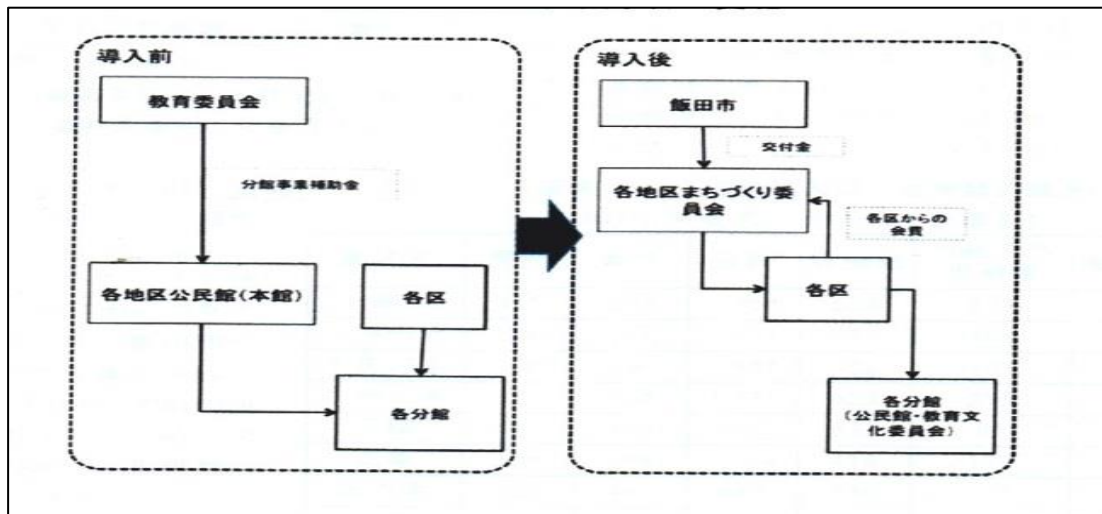


図 5 - 3 分館の財政

（出典：東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究科飯田市社会教育調査チーム，2012，「自治を支えるダイナミズムと公民館」 p21）

本研究の分館長への調査結果では、北方区の北方分館の予算は、総額 1,500,000 円で、そのうち伊賀良地区のまちづくり委員会からの分館事業補助金は 40%、北方区まちづくり委員会から 60%。中村区の中村分館の予算は 1,380,000 円で、そのうち伊賀良地区のまちづくり委員会からの分館補助金は 27%、中村自治区中村協議会から 43%、その他 30%。大瀬木区の大瀬木分館の予算は、総額 1,300,000 円で、大瀬木自治区からの活動補助金が 100%。以上のような回答であった。以前の教育委員会から伊賀良地区公民館そして各分館へ支給されていた社会教育活動の事業補助金として支出されていた補助金が、伊賀良まちづくり協議会において調整され、まちづくり協議会から各分館に支給されるようになった。また、各分館の予算や収入金の確保はそれぞれの分館で異なる。

活動予算に見られるように、地域自治組織導入による公民館の位置づけの変化は、公民館の独立性といった点から、社会教育機関としての公民館の機能の大きな変化として捉えられた。実際、飯田市では、竜江地区公民館の木下陸奥をはじめとする反対派の存在もあった（第 4 章 1・3 参照）。しかし、多くの住民にとっては、地域自治組織導入後の実際の活動の展開において、以前と変わらない活動が展開できているということで、問題を感じることはほぼ無かったといえる。

各区において、集落の自治会の活動と公民館である分館の活動は、地域自治組織が導入以前より同じ建物で行われていた。また、行事・活動も、主催は自治会であっても分館の役員が実働部隊として全般的に関わるなど、共同的な関係をもっていた。つまり、地域自治組織が導入される以前から、集落の自治活動として、自治会と分館活動は連合し、住民にとっては区別が付きにくいものであったと考えられる。地域自治組織を導入したことで、

集落では実態にあった集落の自治活動組織が整ったといえる。

⑤分館の設置

伊賀良地区には、集落である区に 1 つずつ、合計 7 つの分館がある。分館と区の世帯数、場所は、表 5-2 のとおりである。地区公民館とは異なり、分館は公民館活動を行うための独立した施設としては設置されていない。これは地域自治組織導入以前から変わらず、同じ施設の中で自治会活動と分館活動が展開されるため、住民の視点からは両者の活動は一体として受け止められていると推察できる。

下殿岡区の下殿岡公会堂、上殿岡区の上殿岡集会所は、区の住民の出資金により建設され、現在も自治会費に建設負担金が含まれ返済にあてている。その他の区は、施設名称からもわかるように、公的な補助金を活用して建設された。

なお、住民は、各集落の分館を、表 5-2 に示したように多くの人が固有名称で呼ぶ。「分館」というのは、いわゆる行政側の職員が、行政の管轄下に設置され、公民館主事が配置されている地区公民館を中心にとらえて集落の公民館を「分館」と呼ぶのであって、住民にしてみると「分館」という意識は少ないと考える。

表 5-2 伊賀良地区の分館 （筆者作成）

分 館	世帯数（世帯）	分館施設（住民の呼称）
下殿岡分館	330	下殿岡公会堂 （公会堂）
上殿岡分館	407	上殿岡区集会所 （集会所）
三日市場分館	375	三日市場研修センター（研修センター）
北方分館	1,789	北方コミュニティ消防センター（北方会館）
大瀬木分館	1,144	大瀬木コミュニティセンター（コミュニティ）
三尋石分館	182	三尋石市営集会所 （集会所）
中村分館	644	コミュニティ消防センター（中村会館）
地区世帯数	4,871	

⑥分館の役員

各分館は、表 5-3 のように集落＝区の住民から役員を選出し、活動を行っている

分館長、副分館長、分館主事、会計、監事等の主要役員と、具体的な活動内容を担当する文化部・体育部・広報部（他の地区公民館では、委員会というところもある。）の各部員によって構成されている。分館主事は、地区公民館の行政職員の主事とは異なり、他の役員同区＝集落の住民であり、副分館長とほぼ同様の職務にあたる。また、文化・体育・広報部はそれぞれの部員のなから正副部長が選出され、地区公民館の役員として地区公民館

活動の企画運営にもあたることとなる。

表 5 - 3 各分館の役員 （筆者作成）

	分館 長	副分 館長	分館 主事	会計	監事	文 化 部	体 育 部	広 報 部
						内正副部長 1 名 ずつ	内正副部長 1 名 ずつ	内正副部長 1 名 ずつ
下殿岡分館	男 1	—	男 1	男 1	—	男 3 女 4	男 4 女 3	男 1 女 1
上殿岡分館	男 1	—	男 1	女 1	(書記) 女 1	男 2 女 1	男 2 女 1	男 2
三日市場分館	男 1	—	男 1	男 1	—	男 2 女 1	男 2 女 1	男 1
北方分館	男 1	男 1	男 1	男 1	男 2	男 19 女 4	男 20 女 3	男 1 女 1 (自治会も 合同)
大瀬木分館	男 1	男 1	男 1	男 1	—	男 1	男 1	男 1
三尋石分館	男 1	—	男 1	女 1	男 1	男女 4	男女 4	男女 4
中村分館	男 1	—	男 1	男 1		男 5 女 5	男 6 女 4	男 2

任期は、3 年間となっている三日市場分館以外の分館は全て 2 年任期とし、伊賀良地区 6 区の分館役員は全員そろって役員が入れ替わる。三日市場分館は 3 年任期で、半数ずつの入れ替わりとなる。

役員の選出にあたっては、上殿岡・下殿岡・大瀬木・北方分館の 4 分館は、分館長、副分館長、分館主事等は、選考委員会が開催される前に、前任の役員等が個人的に適任者に依頼する。他の 3 分館三日市場・中村・三尋石分館は、各区から輪番で選出された住民のなかから選考する。ただし、どの分館においても、役員に積極的になろうという人は少ないため、役員選考に苦慮している。また、それぞれの候補者の選出にあたっては、年齢を基準にしており、分館長など頭となる役職は、60 歳、65 歳の定年退職直後の人に着任してもらうことを想定し年齢を設定しているところが多い。また、自治会の区長や神社の総代をはじめとする区＝集落の主要な役職との調整を考えて人材の選出を行っている。これは、地域自治組織の導入以前の、自治会と分館活動が分離されていた当時も、同様に行われていたようであり、住民は、自治会と分館を区＝集落の地域活動として一括りに捉えていたと考えられる。

なお、役員の性別に関しては、表 5-3 から明らかなように、分館長や分館主事をはじめとする主要な役員は全体的に男性が多い。飯田市においても男女共同参画推進室が設置されているが、特に集落を単位とする区の伝統的な地域社会では、女性の地域活動への参加

が少なく、改善は進んでいない。伊賀良地区の 7 つの分館の役員にみられる女性の数も、ほとんどが女性枠を事前に設定し女性を選出することで女性の分館活動への参加が実現されている。こうした状況は、市内の全地区の自治会および分館活動において同様にみられるが、住民の男性はもとより女性からも、男性中心の役員構成に対して問題として改善を求める声は上がっていない。当然のこととして受け止めていたり、また、地域の活動への参加をもともと望んでいないという声も聞く³⁰。伊賀良地区分館の実態調査の回答には「役員をなかなか受けてくれない」「(いやいや選出された人が)途中で出てこなくなる、途中でやめることもあり、選出した責任をだれが持つかが問題となった」など、役員のなり手がいないため、役員選出に関する苦労や問題の実態が複数の館長から記されていた。地区公民館委員・分館役員に選出される人たちの心情では、住民の役割として、つまり回り番として回ってきてやらざるを得ない職務として引き受けるといった人が多いようである。

⑦分館の活動内容

7 つの分館の活動内容を整理すると、表 5-4 のとおりである。

活動内容は、分館の専門部会「文化」「体育」「広報」がそれぞれ主となって実施するものと、「学習活動」「地域づくり活動」の 5 つに大別できる。そして、各分館が独自で、その区＝集落内の地区住民のみを対象として実施する活動（＊表中で●を記したもの）と、地区公民館と分館が共同して実施し、各分館の役員が各区＝集落の住民への参加を促し地区全体の行事への住民参加をねらった地区公民館レベルの活動（＊表中で▲を記したもの）がある。文化活動と体育活動は、地区公民館との連携のなかで実施されている活動が多い。本稿でとりあげる人形劇フェスタ地区公演も、伊賀良地区では地区公民館と分館が連携して実施されている。

また、特に地域づくり活動は、区の自治会の開催行事として、分館委員会が中心となって企画運営するが、自治会の他の委員会との連携のなかで実施しているものが多い（＊表中□でしめしたもの）。なお、人形劇フェスタの地区公演は、自治会の委員会ではなく、地区内の保育園の保護者会や上演小学生劇団の PTA といった諸団体と協力して実施しているため□の印は付いていない。

行事の数は、多い分館で 12、少ない分館で 7 つ。月平均約 1 つの活動が実施されていることとなる。

³⁰ 2013 年に実施した市内女性への人形劇フェスタ地区公演実行委員会への参加に関する聞き取り調査でインタビューを行った龍江地区 40 歳女性は、他県から結婚のため飯田市に移住したが、伊賀良地区同様の男性中心の地域活動に対して、活動中も活動に参加した後も、特に問題に感じたことはないと回答している。

表 5 - 4 分館の活動 (筆者作成)

●は各分館独自開催の活動。▲は地区公民館と合同開催の活動。□は区の自治会と連携開催の活動。

	文化活動	体育活動	広報活動	学習活動	地域づくり活動
下殿岡 分館	▲人形劇フェスタ地区公演	●ペタンク大会 ●囲碁ボール大会	●分館広報誌発行	●健康教室	●夏祭り ●敬老会
上殿岡 分館	●文化祭 ▲人形劇フェスタ地区公演 ●りんご参加	? ペタンク大会	●分館広報誌発行 (年 4 回)	? 健康教室	●ウォークラリー ●敬老会 (隔年) ●獅子舞保存活動
三日市 場分館	▲人形劇フェスタ地区公演 ▲子ども工作	●マレットとゴルフ大会	●分館広報誌発行		●子どもと大人の集い ●敬老会
北方 分館	●▲文化祭 ▲人形劇フェスタ地区公演	●区民運動会 ▲ペタンク大会 ●▲ワンバウンドフラワーバレー大会 ●▲囲碁ボール大会	●分館広報誌発行	●健康教室	▲地域を知る活動 ●夏祭り
大瀬木 分館	▲文化祭 ▲人形劇フェスタ地区公演	▲区民運動会 ▲野球大会 ▲ペタンク大会 ▲ワンバウンドフラワーバレー大会	●分館広報誌発行	▲歴史教室 ▲料理教室	▲ウォークラリー ●区民祭 ●敬老会
三尋石 分館	▲文化祭 ▲人形劇フェスタ地区公演 (大瀬木と合同)	▲区民運動会 ▲野球大会 ▲ペタンク大会 ▲囲碁ボール ▲ワンバウンドフラワーバレー大会	なし	なし	●夏祭り ●敬老会
中村 分館	●▲文化祭 ▲人形劇フェスタ地区公演	●囲碁ボール大会 ●ワンバウンドフラワーバレー大会 ▲ペタンク大会	●分館広報誌発行	▲健康教室	●ウォークラリー ●初日の出参拝 ●夏休み子ども大会 ●高齢者の集い ▲成人式

2.3 地域社会の特徴

飯田市は、1937（昭和 12）年の市政発足以来、6 回の合併を行ってきたが、そのなかで旧町村を行政区画の地区にして今に至っている。藩政村を引き継ぐ旧町村が地区となった地域社会には、鈴木栄太郎の自然村の機能を有した集落がいまも基盤に存在する。地区の住民は、もっとも身近な隣組に値する「班」と言われる地域集団を窓口に、住民の一人として集落＝区の活動に参加している。今回調査を実施した伊賀良地区の北方・中村・大瀬木地区には、水利組合や氏子などの共同体としての集落特有の集団の組織がみられ、また結婚式や葬儀においては、以前とはずいぶん変わってきてはいるもののいまだ地縁的關係が重視された地域社会の付き合いの儀礼が残っている。

こうした地縁的關係が機能する地域社会において、分館活動は集落＝区の共同体の組織の一部として入り込んでいる。例えば分館の役員の選出においては、集落＝区の自治会やその他の諸集団と同様に並べられ、組合の回り番として住民の誰かが担当しその役割を担う。また、頭である分館長は、区長や神社の総代等と同等に並べられ、暗黙の了解で設定された年齢条件に合う住民の中からそれぞれに調整して選出される。

そして、活動を行う場所も自治活動と分館活動は同じ建物を共通に使用し、住民にとってみても、両者を区別する意識は小さいといえる。実際の活動も、2007（平成 19）年に地域自治組織を導入し、伊賀良地区には伊賀良まちづくり協議会が設置され、地区公民館は、公民館委員会としてその一部に位置されるようになった。そして区においても同様に、自治会のなかに地区公民館が位置されるようになった。しかしこの形態は、以前からの地域社会の実態にあったものであったと言える。つまり、地区においても、特に区＝集落においては、自治会の活動と公民館の活動は連携し協同して実施されているものであった。

3 人形劇フェスタ地区公演

3.1 地区公演実行委員会の実態

伊賀良地区の人形劇フェスタ地区公演実行委員会を事例に、市民の運営への参加の実態を明らかにし、地区公演の運営に参加する住民は人形劇フェスタをどのように捉えていたかを考察する。なお、本章で述べる伊賀良地区実行委員会の実態は、人形劇フェスタ 2012 の際のもので、2012（平成 24）年 5～8 月に、実行委員会の見学および実行委員、伊賀良地区公民館主事山崎学への聞き取り調査を実施した。

①実行委員会

伊賀良地区の人形劇フェスタ地区公演実行委員会は、伊賀良地区公民館の文化部を中心に、伊賀良まちづくり協議会のひまわり子ども委員会、地区内保育園保護者会、その他個人や団体の有志で構成される。団体の有志には、小学校の授業で人形劇に取り組んだ児童の PTA などがある。

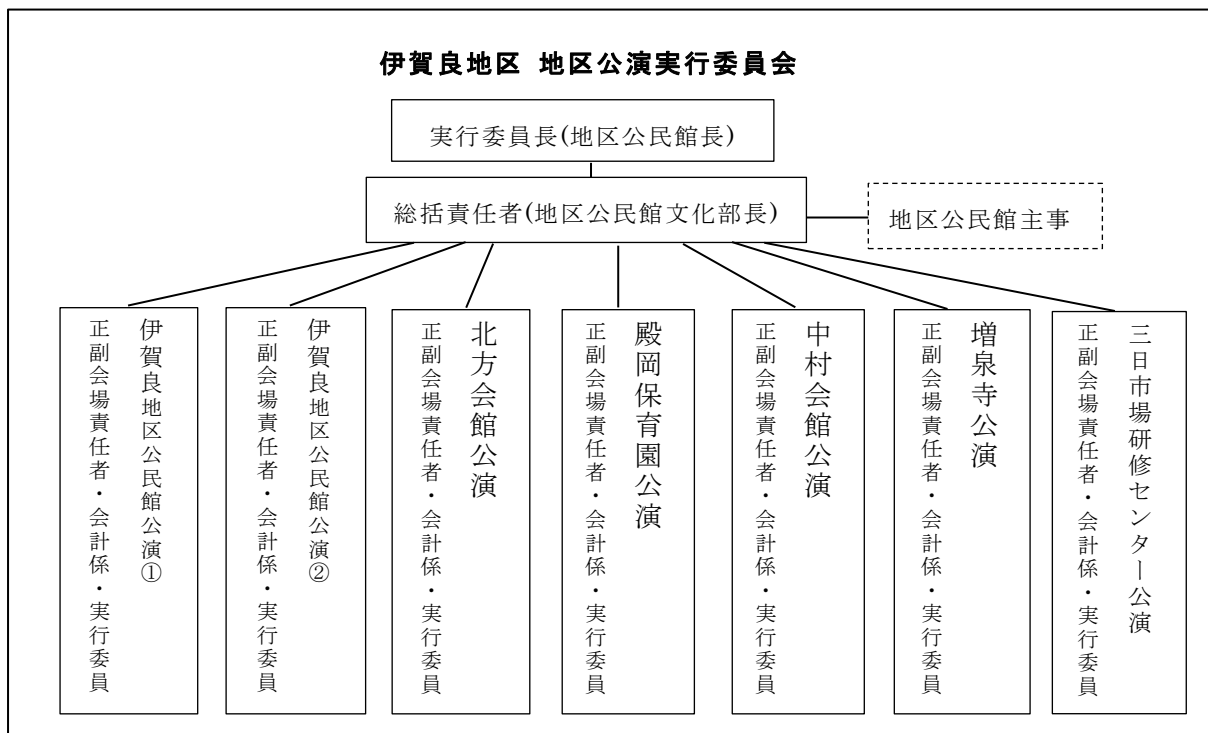


図 5 - 4 伊賀良地区公演実行委員会組織図 (筆者作成)

2012 年度は地区公民館と 7 分館が参加し、6 会場 7 公演を実施した。伊賀良地区 地区公演実行委員会は、実行委員長を伊賀良地区公民館長、総括責任者を伊賀良地区公民館文化部長とし、公演ごと 7 つのグループとして会場責任者と会計係の役職を置く。

地区公演実行委員会の設置や組織編成はそれぞれの地区公民館が地区の実状や考え方によって異なる。例えば上郷地区公民館では 5 会場で地区公演が実施されるが、分館を中心とする各会場ごと地区公演実行委員会を設置し運営にあたっているところもある。伊賀良地区公民館では、地区内 6 会場 7 公演を統括するかたちで、実行委員会自体は地区内で 1 つとしている。

②各公演会場の運営体制

伊賀良地区では例年 6 つの公演会場が設営される。運営担当者として参加する組織・団体および、会場責任者等は、それぞれの会場ごと決定される。会場責任者は、昨年度を踏襲したかたちで、毎年人形劇フェスタ地区公演の事務的な業務が開始される 4 月までに決定させる。副会場責任者および会計等の役員は、第 1 回地区公演実行委員会にて会場ごとの話し合いで選出される。

表 5 - 5 伊賀良地区公演会場と運営担当（フェスタ 2012）（筆者作成）

担 当 分 館	会 場 2012 開催日 備考（劇団）	運営担当者・団体 備 考	（結果） 観客数 ・ 大人 ・ 子ども	（結果） ス タ ッ フ 数
伊 賀 良 公 民 館 ： 本 館	伊賀良公民館 8/2(木)18:00 地区内小学生 劇団	伊賀良地区公民館文化部中心＋小学生劇団保護者 ・ 会場責任者は、公民館文化部長 ・ 公民館文化部（各分館文化部の 3 名：正・副・女性の文化部員）が中心となって運営。 ここに、小学生劇団の保護者が加わる。 ・ 2011 年、小学生の公演会場がなく、文化部での協議の末、伊賀良公民館の公演を恒例の金曜日夜に加え 1 回増やして実施することとした。	・ 145 ・ 199 計 344	28
	伊賀良公民館 8/3(金)19:00	住民の個人企画上演：個人ボランティア＋伊賀良地区公民館文化部 ・ 会場責任者は、個人ボランティアの木下浩志氏。 ・ 住民の木下氏がカーニバル時代より企画提案してきた大人向けの公演「夜のカーニバル」を、毎年恒例で実施している。 ・ 木下氏を会場責任者とし、公民館文化部が中心に運営。 伊賀良公民館での公演が 2011 より 2 回となったため、昨年より公民館文化部は、木か金曜日の上演のどちらかに希望を出し参加することとした。 ・ 地区企画のこの公演は、有志スタッフ中心の運営が望まれている。 2011 より、社会人のみでなく、小中高生のボランティアスタッフの参加も受け付けている。（小中高生のボランティア募集は、2012 より、主事会を通じ、全地区で募集を実施。）	・ 63 ・ 96 計 159	29
北 方 分 館	北方会館 8/4(土)9:00	保育園(私)保護者会中心＋北方分館役員 ・ 会場責任者は、北方体育部副 ・ 地区内の私立育良保育園の保護者会長を主に組織を編制し運営に当たっている。 ・ 分館役員は、ここに手伝いのかたちで加わる。 ・ 今年は大変なので実施しない方向も提案されたが、分館および保護者会での検討の結果、実施することとなった。	・ 84 ・ 126 計 208	32

上殿岡分館・下殿岡分館	殿岡保育園 8/4(土)10:30 地区内中学生 劇団	上殿岡分館役員中心＋保育園(公)保護者会 ・会場責任者は、下殿岡分館長 ・会場責任者は、上殿岡・下殿岡分館の分館長が交替で行う。役員は2年任期のため、任期中1回は会場責任者となる。 ・会場責任者である分館長のもと、2つの分館の役員が中心となって運営。 ・市立殿岡保育園保護者会3役がここに手伝いのかたちで加わる。	・82 ・118 計200	60
中村分館	中村会館 8/4(土)10:30	保育園(公)保護者会中心＋中村分館役員 ・会場責任者は、中村保育園保護者会 ・市立中村保育園の保護者会が中心となって運営。 ・分館役員は駐車場係など、保護者会中心の実行委員会に手伝いのかたちで加わる。	45 73 計118	34
大瀬木分館 三尋石分館	増泉寺 8/4(土)13:00	大瀬木・三尋石分館役員中心＋保育園(私)保護者会 ・会場責任者は、大瀬木分館長 ・大瀬木分館・三尋石分館が共同して運営を行う。会場責任者は、大瀬木の分館長が当たることとなっている。 ・ここに、私立伊賀良保育園の保護者会が手伝いのかたちで加わる。	48 46 計94	40
三日市場分館	三日市場研修センター 8/5(日)10:00	三日市場分館役員＋PTA＋ひまわり子ども委員会 ・会場責任者は三日市場分館長 ・三日市場分館役員にPTAが入るかたちで運営していたが、今年は大変だということで変更し、まちづくり協議会のひまわり子ども委員会の役員に加わってもらうことで開催することとした。	61 92 計153	25

地区公演は、分館を中心に公演会場とし、集落の住民、特に子どもたちが人形劇を観て楽しむことを目的に実施されている。各地区公演会場の運営組織は、分館の役員を中心に、分館のある集落内に設置されている保育園の保護者会が実行委員会にはいるところが4カ所ある。また、地区内の小学校の子どもたちが上演発表する伊賀良地区公民館会場では、子どもたちの保護者が実行委員に加わっている。このように、わが子をはじめとする子どもたちに人形劇を観てほしい、また、わが子をはじめとする地域の子どもたちが上演するのを支えたいという保護者の参加が注目される。

一方、伊賀良地区公民館で行われる2公演のうちの1つは、20年以上前から実施されて

いる大人を対象とした上演を、地域の住民の有志が毎年企画して実施しているものである。個人が企画した公演を、地区公民館の文化部員が加わって運営している。

運営にあたっては、公民館の役員は2年任期での交代、また、保育園の保護者会などは毎年メンバーが変わるため、支障を来さないための配慮がみられる。特に、後述するが、地区公民館に配置された主事の役割が大きいと言える。

③地区公演実施までの流れ

地区公演実行委員会の具体的な取組みを以下にまとめた。

(「地区公演が実施されるまでの全体の流れ」：2012 会場責任者会配布資料より)

4 月：地区公演会場の決定

各分館にて、今年度の地区公演の開催について検討され、実施が決まる。地区公民館主事は、地区内の分館および地区公民館の参加の意向をとりまとめ、人形劇フェスタ実行委員会事務局に報告する。

2012 年度は、三日市場分館が担当する三日市場研修センターで開催してきた地区公演の開催にあたり、分館役員の負担が大きいとの理由から取りやめも検討されたが、まちづくり協議会のひまわり子ども委員会に実行委員会に加わってもらうことで、開催することとした。

開催が決定された各公演会場ごと、前年度を踏襲する形で、今年度の役職より会場責任者が選出される。

↓

5 月 23 日：いいだ人形劇フェスタ 2012 地区公演会場運営責任者会（人形劇フェスタ実行委員会：本部実行委員会主催）

人形劇フェスタ実行委員会が主催する地区公演会場責任者会が開催される。会場責任者は参加し、人形劇フェスタの概要および地区公演の運営についてのレクチャーを受ける。

↓

5 月下旬：各地区公演会場責任者に、フェスタ実行委員会事務局より上演劇団が連絡される。

主事会人形劇プロジェクトのメンバーで構成される地区公演連携委員が、各地区公演実行委員会の希望を取り入れながら、各地区公演会場のプログラム（案）を作成する。会場責任者に上演劇団等が報告されると、会場責任者は劇団と電話などで打ち合わせを進める。

この際、会場責任者は、主事会の人形劇プロジェクトが作成した「地区公演運営マニュアル」を参考に運営業務を進めていく。このマニュアルを参照すると、おおよそ間違いなく業務が進められるようになっている。問題が生じた場合は主事が相談にのり対応していく。

↓

6月11日：伊賀良地区人形劇フェスタ 2012 第1回伊賀良地区実行委員会

会場責任者および分館・地区公民館の文化部員他区＝集落の諸団体からの参加者が参集し、第1回地区公演実行委員会を開催する。この場で各会場の副責任者・会計が決定し、既に決定されていた会場責任者と合わせ3役が決定する。上演劇団からの要望や会場環境を考慮して、音響や照明機器の借用品の確認、地区会場企画公演申請の検討、公演および交流会の内容の検討などが議題となる。

地区公演企画公演の申請とは、地区の課題や個人的な発案にそって、地区公演で特別な取組みをしたい場合にお金や物品の援助や広報活動の援助が実行委員会から得られるというものである。近年、各地区で独自の取組みが積極的に出てくるようになり、神社の夏祭りとの合同開催（座光寺地区、鼎地区名子熊分館）、地区内のいくつかの上演会場をウォークラリー形式で観劇して回る企画、なるべく多くの公演を地域の住民に観てもらえるよう同一カ所で連続的に上演を行う企画（竜丘地区）などがある。

↓

第1回の実行委員会の内容を、会場責任者は、各会場ごとの運営に活かし、準備を進める。催日までの間に、会場ごとの事前の打ち合わせ会議および準備等が進められる。

↓

7月13日：伊賀良地区 人形劇フェスタ 2012 第2回伊賀良地区実行委員会

各地区公演の正副会場責任者・会計、伊賀良公民館会場担当者が参集し、第2回の地区公演実行委員会が開催される。約3週間後に迫り、人形劇フェスタ全体の流れが主事から連絡され、最終確認が行われる。

↓

7月20（金）・21（土）日：プレフェスタの開催

市内2会場で、プレフェスタと称した公演が開催される。このプレフェスタは、人形劇フェスタの開催にむけた雰囲気や事前に盛り上げることに他に、公民館主事が運営するプレフェスタに地区公演実行委員の市民に観客として参加してもらうことで、地区公演の運営のイメージをつかんでもらうことをねらって主事会が実施している。

↓

8月2（木）～5日（日）：人形劇フェスタ開催期間

各会場ごと地区公演を実施。

↓

8月10日（金）：伊賀良地区人形劇フェスタ 2012 第3回伊賀良地区実行委員会

各会場ごとの反省をまとめ、慰労会を行う。

伊賀良地区の人形劇フェスタ地区公演実行委員会の開催は、事前2回、終了後1回の計

3 回であり、地区公民館の定例会の一議題として設定されていた³¹。伊賀良地区公演実行委員会は期間中に 6 会場で開催される 7 会場の公演にかかわる 248 名で構成されているが、全員が参集する話し合いの場は特になく、各会場の役員のみが集まる会議を、伊賀良地区公演実行委員会として開催していた。第 1 回には伊賀良地区人形劇フェスタ地区公演実行委員長である平田伊賀良地区公民館長より挨拶があり、主事からの諸連絡のあと、30 分ほど、各会場に分かれ打ち合わせを実施した。この会議を受けて、必要に応じ各会場の打ち合わせ会議を実施している。各会場の会議は参加者に負担が少ないよう、1～2 回程としている。

3.2 まとめ

伊賀良地区では、地区公民館と分館が連携し、地区公演実行委員会を組織し 6 会場 7 公演の地区公演を開催していた。調査を実施した 2012 年度は今年度の開催検討において、三日市場分館では役員の負担が大きいということで取りやめを検討したが、まちづくり協議会のひまわり子ども委員会に加わってもらうことで開催することとした。

その他、7 公演とも、地区公民館役員や分館役員だけで実施している公演は無く、保育園や小学校の保護者、有志の住民、ひまわり子ども委員会など、地域の諸団体やまちづくり協議会の委員会、住民有志がかかわって実行委員会を組織して公演を運営していた。特に、地区内にある 5 つの保育園（公立 2 園、私立 3 園）のうち 4 つの保育園（公立 2 園、私立 2 園）の保護者会が参加していることは注目される点である。上殿岡分館と下殿岡分館が殿岡保育園を会場に行う地区公演は保育園を会場としているが、その他、中村分館が中村会館を会場に行う地区公演に市立中村保育園保護者会、北方分館が北方会館で行う地区公演に私立育良保育園保護者会、大瀬木分館が増泉寺で行う地区公演に私立伊賀良保育園の保護者会が実行委員会に参加し、子どもの通園する保育園ではない会場で実施する地区公演に協力し参加している。保護者側の立場から考えると、私立の保育園の場合、園の所在する区・地区外に居住する園児も通園しているが、保護者は、公民館活動と保育園の活動とを区別せず参加しているものと考えられる。また、分館役員の住民側も、公民館という枠に縛られない意識で分館活動を捉え、地域のさまざまな人々と協力して活動を実施している実態がみられる。

地区公民館委員や分館役員も 2 年の任期で交替することが多く、また、保育園の保護者など地域の様々な人では 1 年後と参加する代表者が変わるなかでは、マンネリ化が課題とされている一面もあるが（千田忠，2002：203）、開催方法がマニュアル化して示され、会議も負担になるほどには多くないことが、参加を容易にさせているといえる。伊賀良地区公演実行委員会も事前 2 回、事後 1 回。各会場の会議も 1～2 回。会場責任者や会計等の

³¹ 2012 年 7 月 13 日に開催された第 2 回実行委員会に参加し、会議の様子を見学した。

各会場のリーダーとなる住民は、地区実行委員会と会場ごとの打ち合わせの両方の参加になるが、住民は負担を大きくせずできる範囲内で行うことを考慮しているといえる。

4 地区実行委員の意識

地区公演に取り組んだ公民館委員の人たちは、活動を終えて人形劇フェスタをどう意識し、どう評価しているか。公民館委員へのアンケート調査の結果より考察する。

4.1 調査方法

- ・ 調査対象：いいだ人形劇フェスタ 2015 の地区公演実行委員会に参加した公民館役員
- ・ 調査期間：平成 28 年 1 月
- ・ 調査方法：自記入式調査票を主事より公民館大会開催の際に配付。同封の回収用封筒にて、調査実施者に郵送にて提出。
- ・ 配布数：225
- ・ 回収数・回収率：回収 118（無効票 0） 回収率 52.4
- ・ 調査内容：地区実行委員会への参加実態、地区公演での役割、人形劇フェスタの価値、人形劇フェスタへの今後の参加への意識など

4.2 結果および考察

付属資料 4 に、調査項目および結果の一覧を記載する。

①地区公演に関する会議開催について

表 5-6 の通り、分館の会議は、月 1 回から 2 回程度開催されている。分館で行う地区公演に関する打合せや反省会は、基本的には分館の一議題として採り上げられ、地区公演のためだけに開催される会議は持たれていない。こうした点からも、地区公演は公民館の活動の中の一つとして位置していることがわかる。公民館委員にとってみると、他の行事と同じものであり、実際にそのような取組みのなかで開催されている。

表 5-6 会議回数	N=118 (%)
1 か月に 1 回	48.1
2 か月に 3 回	13.9
1 か月に 2 回	12
その他	23.1

表 5-7 地区公演が議題となった会議 N=118 (%)

1 回	4.6
2 回	29.6
3 回	36.1
4 回	9.3
5 回以上	18.5
NA	1.9

②人形劇フェスタの価値について

人形劇フェスタの価値については、「市民が身近な場で人形劇を楽しめる」84.3%、「飯田市内全体が賑わう祭典となっている」64.8%、「地区公民館や分館の恒例行事として位置づき公民館活動が充実する」61.1%、「市民と他県からの来場者の交流の場となっている」47.2%、「小中学生の上演の場となっている」43.5%、「ワッペンをつけていけばいくつでも人形劇をみることができる」42.6%。以上が、回答者の40%以上が人形劇フェスタの価値として認めている項目である。

一方、「市民がつくり市民が楽しむお祭りとして、市民が一体感を感じることが出来る活動となっている」24.1%、「地域の住民が気楽に参加できる地域の活動となっている」25.0%、「各地域で趣向を凝らし各地区の公民館活動が充実する」26.9%といった、地区公民館や分館の公民館活動に直接反映される価値については、30%以下であり評価が低い。

回答者である公民館委員の住民は、自身が地区公演実行委員としてかかわった地区公演を通して人形劇フェスタを評価している。多くの人が認めている事項は、身近な場で人形劇観劇ができること、地区内の小学生の発表の場となっていること、地区の夏の行事として位置づいていること、劇団や市外からの観客との交流の場となっていることなどである。これは、表 5-9 で示した地区公演実行委員を終えて楽しかったことと重なる。

一方、評価が低かった事項を見ると、住民の趣向を凝らす公民館活動充実の場となっているか、市民が参加しつくり出す祭りとして市民の一体感を生み出す活動になっているかであり、公民館委員として人形劇フェスタ地区公演の運営に参加した公民館委員は、社会教育として地域課題の改善に結びつける場としては人形劇フェスタを考えていない。人形劇フェスタを、すでに地域の行事に位置づいた活動として捉え、順番で担当する公民館委員として参加した経験を通して住民が楽しんでいる実態を知り、楽しんでいる実態を価値として人形劇フェスタを評価している。

表 5-8 人形劇フェスタの価値（複数回答）

N=118 (%)

市民が、身近な場で人形劇を観劇することができる	84.3
飯田市内全体がにぎわうイベントになっている	64.8
分館や地区公民館（本館）の恒例行事として位置付き、公民館活動が充実する	61.1
市民と他県からの人形劇団の人たちの出会いを楽しむ場となっており、そんななかで市民が飯田の良さを再発見している	47.2
小学生や中学生の上演の場となり、学校と地域の連携の場になっている	43.5
ワッペンをつけていけばいくつでも人形劇を観劇することができる	42.6
国内ばかりでなく世界にも知られ、市民が誇りを感じることでできるイベントである	39.8
親子の子育て支援の場となっている	37.0
中高生がボランティアとして参加し、若者の地域活動への参加の場となっている	35.2
地区ごとの趣向を凝らした地区公演の取組みにより、それぞれの地区が公民館活動充実への刺激を得ている	26.9
地域住民が気楽に地域活動に参加できる場となっている	25.0
市民がつくり市民が楽しむお祭りとして、市民が一体感を感じることができる	24.1
経済効果を上げている	14.8
離れて暮らす家族や親戚が、人形劇フェスタがあることで飯田に集まる	5.6
その他	0.9
特に役に立っていない	0

表 5-9 地区公演実行委員を終えて楽しかったこと（複数回答）

N=118 (%)

子どもたちが人形劇を楽しんで観劇していたこと	88.0
劇団の人と交流が持てたこと	65.7
たくさんの地域の住民が来場し観劇してくれたこと	60.2
計画通りに問題なく地区公演が終了したこと	56.5
地区実行委員会に参加した者同士の交流が持てたこと	39.8
自分が人形劇を観ることができたこと	38.0
地区外・市外・県外の方が来場し観劇してくれたこと	37.0
その他	2.8
特にない	0.9

③今後の運営及び観劇への参加意思

表 5-11 より、観劇参加の意志は「とてもそう思う」25.5%、「まあまあそう思う」51.9%

と、観劇参加に前向きな意思を持つ人は約 75%を占める。

一方、運営参加については表 5-10 のように、「とてもそう思う」 7.6%、「まあまあそう思う」 28.6%で合わせても 40%に達しない。「どちらでもない」は 37.1%と最も多い回答である。この「どちらでもない」という回答の多さに、運営参加はしたくない・しないと

表 5-10 後の運営参加の意志 N=118 (%)

とてもそう思う	7.6
まあまあそう思う	28.6
どちらでもない	37.1
あまり思わない	17.1
まったく思わない	9.5

表 5-11 今後の観劇参加の意志 N=118 (%)

とてもそう思う	25.5
まあまあそう思う	51.9
どちらでもない	13.2
あまり思わない	7.5
まったく思わない	1.9

言い切るのではなく、公民館委員が住民の回り番として毎年誰かがやるものとして、住民のいわば義務的な存在としてかかわっている実態が現れていると考えることができる。つまり、観劇参加は、各自の判断により参加を決定するが、分館または地区公民館の役員としての地区公演の運営への参加は、分館や地区公民館活動の一つとしてすでに年間行事に位置付けられているものであり、公民館の役員になったからにはやるべきものとなっている。

4.3 まとめ

地区公演に参加した地区公民館や分館の役員である住民は、人形劇フェスタ地区公演を、公民館活動の一つとして運動会や文化祭などの他の公民館活動と同等に意識している。公民館活動のなかでも、実際、人形劇フェスタ地区公演に関して、公民館の定例会の議題として事前の検討及び準備作業が行われ、特別な会議を設定することはないようである。会議の回数も 2~3 回という回答が多く、運営参加者の負担が大きくなりたくないよう配慮されている。

また、人形劇フェスタの価値に関しては、市民が人形劇を身近で観劇できること、地域のにぎわいといったお祭りのなものであることとしての価値を認める人が多い。一方、行政がねらう全市に広がる祭り開催による市民の一体感や、各地区が公演を実施することによる地区が創意工夫を凝らすことでの公民館活動の充実に関しては、人形劇フェスタの価値をあまり認めていない（表 5-8）。

住民にとってみると、子どもたちを中心とした住民たちが楽しむことのできる夏のイベントとして、公民館の役員になった住民が持ち回りで地域のために行う活動という意識が強いものと思われる。住民は、今後の運営参加に対して「やりたい」と回答する者は少な

いが、それ以上に「やらない」と回答する者は少なく、「どちらでもない」と多くの者が回答している（表 5-11 参照）。この実態には、住民は、地区公演実行委員として人形劇フェスタ地区公演に参加する事は公民館委員の仕事であり、公民館委員は住民として回り番の中で引き受ける義務を負ったものとして捉えられ引き受けて実施しているものと言える。

第 1 章の人形劇フェスタ概要で触れたように、人形劇フェスタの理念には参加の意志を持った者が参加し、やりたいことを実現する場とされているが、地区公演に参加する住民はそういった考えよりも、無事に業務として役割を負えること、そして、住民の喜ぶ顔を見ることが第一に求められ、活動に取り組まれている。

小括

人形劇フェスタは、市民が参加しまちづくりにつながる活動となることを願って、行政主導で開始された文化活動である。当初、行政主導で開始された人形劇カーニバルが、次第に市民に浸透し、広域開催と 2,500 人にもおよぶ市民の運営への参加を実現させ継続開催されてきた経緯は、第 2 章で触れた通りである。広域開催と多くの市民の参加は、全地区に設置された地区公民館と、地区公民館と密接な関係を持つ集落に設置された分館を活用したことが大きな成功要因となった。しかし、4 章で述べた公民館のシステムを活用しただけでは、これだけ多くの市民の参加と継続的な開催は、成功できなかったといえる。

本章で見てきたように、飯田市民館—地区公民館—分館の公民館の三層構造の基盤に、集落を基盤とする地域社会が位置付いていたことが、住民の日常的な地域活動に公民館活動が浸透していった重要な要因であったことが明らかとなった。

飯田市は、合併の際にも旧町村のまとまりを尊重し、旧町村を行政区画の地区とし、そこに地区公民館を設置した。そして、地域社会の基盤となる集落＝区には分館を配置した。この分館が置かれる集落は、鈴木栄太郎の述べた村の精神を今に残し、地縁的なつながりを重視した住民同士の関係とその関係のもとに営まれる生活が現在でも残されている。

こうした集落の地縁的關係が依然維持されている地域社会に公民館が取り入れられたことで、住民は公民館活動を集落の活動として意識し、活動に取り組んできたといえる。つまり住民は、地区公演を公民館活動の 1 つとして理解し、地区実行委委員の活動に取り組んでいる。この取り組みの意識は、本部実行委員会を組織する有志で参加する市民とは大きく異なるものである。人形劇フェスタの理念とされる「思いを持った市民がその思いを実現させる場」とは異なり、地区公民館または分館の役員として地区公演実行委員会に関わっている住民は、回り番として担当し、住民が人形劇を観劇して楽しんでもくれることを喜びとして活動に取り組むだけなのである。

また、公民館活動の 1 つとして、開催に向けた会議等の活動も特別設定して活動することはほとんどなく、会議もなるべく回数を少なくさせている。一方でマンネリ化を危惧する声もあるが、2 年交替の地区公民館役員のなかで活動が継承され、間違いなく実行でき

るように公民館主事が作成した地区公演運営マニュアルにより、参加した住民は、大きな問題を起こすことなく地区公演をつくり上げていくことが出来るのである。

第 6 章 市民の観劇参加と継続性のメカニズム

はじめに

飯田市は「人形劇のまち飯田」として人形劇を中軸とした文化政策によるまちづくりに取り組んできた。人形劇フェスタはその中核を占め、人形劇のまちのシンボリック的存在として位置づき、市の広報物のトップを飾ってきた。

人形劇フェスタへの市民の参加に関して、これまで第 2 章では人形劇カーニバルを提唱した行政の立場から、行政が市民の文化活動である人形劇フェスタにどのように関わってきたのか、そして第 4・5 章では地区公民館を支える住民が地区公演実行委員として運営に参加するメカニズムと多くの市民の参加を継続させている要因について、住民の立場から分析を行った。

最後に本章で、人形劇のまち飯田市において、その中核を占める人形劇フェスタはどの程度市民に浸透しているのか、市民は人形劇をどのように受け止め理解しているのか。「みる・演じる・ささえる」なかでもっとも多くの市民の参加がある観劇参加の側面からその実態を分析し、市民への人形劇フェスタおよび人形劇の浸透について考察する。

1 市民の観劇参加に関する調査

1.1 調査概要

市民の人形劇フェスタへの観客としての参加の実態および参加を促進する要因を検証するため、アンケート調査を実施した。調査対象は、市内の全幼稚園・保育所に在園する全園児の保護者（世帯数）とした。

調査対象者の選定にあたっては、以下の 3 点を理由とした。1 点目は、筆者が 20 年近く人形劇フェスタにかかわるなかで、累計 45,000 人におよぶ観客の多くは、市民の親子連れと市外・県外からのプロ・アマチュア人形劇団員の成人で占められ、かつ、市民の観客の大半を占める親子連れの子どもの多くは幼児がその多くを占めているとことを経験してきた。2 点目は、調査を実施した 2014（平成 26）年 3 月時点における飯田市の幼稚園・保育園の在園児数 3,662 人、世帯数 3,083 世帯、就園率 3 歳以上 94.5%、3 歳未満の乳児保育が 30.5%³²であることより、市内の就学前の乳幼児全体の 3 歳未満は約 30%であるが、本調査が 3 歳以上の約 95%を対象とした調査となるため、調査対象は就学前の子どもを持つ保護者のほぼ全てを対象としているといえること。3 点目は、人形劇フェスタが 35 年以上にわたり継続開催されていることから考え、現在、幼稚園・保育園に在園する子どもを持つ保護者の多くが自身の幼児期または生まれた時にはすでに人形劇フェスタが開催されていたと推測でき、人形劇フェスタへの観劇参加経験の結果から、彼らの成育歴にそった年代

³² 飯田市保健福祉部子育て支援課提供の集計資料より。2014 年 12 月時点。

別の人形劇フェスタへの観劇参加の様相が推測できると期待されること。以上の理由により、飯田市民の全数調査ではないが、人形劇フェスタへの市民の観劇参加の実態について把握できると考えた。

また、保護者調査に合わせて、飯田市内の全幼稚園・保育園の園長を対象に、園の保育内容への人形劇活動の取り入れ、人形劇の理解、人形劇フェスタの理解、保護者への人形劇フェスタ等の情報提供の実施についての調査を実施した。その背景には、人形劇カーニバル第1回開催の時に、地区公演開催にあたって住民の協力を得ることが出来なかった地区公民館の主事たちが、一番に協力をあおいだのが保育園・幼稚園の保育者であったこと（人形劇カーニバル飯田実行委員会10周年記念誌編集委員会，1988：170）、地区公演会場に保育園が使用されていることから、人形劇カーニバルの開始当初より飯田市内の保育園・幼稚園が人形劇カーニバル・人形劇フェスタの存在と一定のかかわりを有していたと想定される。すなわち、飯田市民への人形劇の浸透や人形劇フェスタの継続になにかしらの役割をはたしていると考えられることから、実態を明らかにするため調査を実施した。

1. 2 保護者調査について

①実施期間：2014年3月。

②調査対象：飯田市内全幼稚園（6園：私立5園、内4園は認定こども園。公立1園。）・保育園（35園：私立17園。公立18園。）合計41園の全保護者（1世帯1人）3,083世帯。

③調査実施方法：飯田市保健福祉部子育て支援課を通して各園に対し調査協力を依頼した。調査用紙の配布は、保護者数（世帯数）分の調査用紙を梱包したものを子育て支援課より各園に配布。園が各保護者に調査用紙を配布した。回収は、保護者が回答調査用紙を完封して園に提出したものを、園がまとめて子育て支援課に持参してもらい、回収した。

④回収数（回収率）：配布数3,083枚、回収2,028枚。（66.8%）

有効回答数：2,010枚。無効回答数：18枚。

⑤調査内容：現在の人形劇鑑賞の実態と意識。生育過程（就学前期・小学生期・中学生期・高校生期・高校卒業後・現在）の人形劇フェスタへの参加経験。公民館および自治会への意識と参加。回答者の属性。

⑥回答者の属性

・性別：男性 5.9%（119人） 女性 93.4%（1,877人） NA 0.7%（14人）


女性が約95%と、回答者の多くが女性であった。

・年齢：95%の人が45歳未満であり、生まれたときにはすでに飯田市内で人形劇フェスタが開催されていた年齢の人が40%、また0歳から9歳（小学校低学年）のときに人形劇フェスタが開始されたという人が55%であった。つまり、回答者らは、子どものころ飯田市内およびその近郊に居住していた場合、人形劇フェスタへの参加が可能であった人たちとい

える。(表 6-1 参照)

表 6-1 年齢別回答者数

単位：%(人) N=2010

現在の年齢		フェスタ開始当時の年齢
19 歳以下	0.0 (1)	 39.7% 0 歳
20～24 歳	1.2 (24)	
25～29 歳	9.5 (191)	
30～34 歳	29.0 (583)	
35～39 歳	36.9 (723)	0～4 歳
40～44 歳	19.2 (385)	5～9 歳
45～49 歳	4.0 (81)	10～14 歳
50～54 歳	0.3 (7)	15～19 歳
55 歳以上	0.3 (7)	20 歳以上
NA	0.4 (8)	

1.3 園長調査について

①実施期間：2014 年 3 月

②調査対象：飯田市内全幼稚園（6 園：私立 5 園、内 4 園は認定こども園。公立 1 園。）・保育園（35 園：私立 17 園。公立 18 園。）合計 41 園の園長またはこれに代わる人。

③調査実施方法：飯田市保健福祉部子育て支援課を通して各園に対し調査協力を依頼。調査用紙は、子育て支援課より各園に配布。回収は、各園が調査回答用紙を完封したものを子育て支援課に持参してもらい、回収した。

④回収数（回収率）：配布数 41、回収 24 園。（58.5%）

有効回答数：24 枚。無効回答数：0。

⑤調査内容：人形劇観劇および人形劇を演じる活動の教育課程・保育課程取り入れと活動の実態。人形劇への理解。人形劇フェスタに関する保護者への情報提供。

2 市民の観劇参加の実態

2.1 市民の観劇参加の実態

表 6-1 に示したように、回答者の 95%が 45 歳未満であり、人形劇フェスタが 1979（昭和 54）年から 35 年以上継続開催されていることから考えると、回答者のほとんどが、生まれた時からあるいは小学生のころに人形劇フェスタが開催されていたこととなる。こうした実態を前提に、成育歴を 6 つの期に区分して、各期の居住地と人形劇フェスタへの参加状況を調査した。そして、その結果より市民の年齢層による人形劇フェスタへの参加実

態を推察した。成育歴の 6 つの期は、就学前期、小学生期、中学生期、高校生期、大学等進学や就職などした高校卒業後、保護者となった現在である。結果は、表 6-2 のとおりである。

表 6-2 就学前期から現在までの居住地別人形劇フェスタへの参加

単位：％(人)

		フェスタに参加した	フェスタに参加しない	居住者数
就学前期 N=1555	飯田市内居住	63.3 (542)	36.7 (314)	N= 856
	飯田市外居住	7.4 (52)	92.6 (647)	N= 699
小学生期 N=1705	飯田市内居住	72.8 (712)	27.2 (266)	N= 978
	飯田市外居住	10.1 (71)	89.9 (630)	N= 701
中学生期 N=1776	飯田市内居住	13.3 (146)	86.7 (954)	N=1100
	飯田市外居住	1.5 (10)	98.5 (666)	N= 676
高校生期 N=1870	飯田市内居住	3.6 (43)	96.5 (1145)	N=1188
	飯田市外居住	1.6 (11)	98.4 (671)	N= 682
高校卒業後 N=1907	飯田市内居住	19.4 (167)	80.6 (694)	N= 861
	飯田市外居住	4.0 (42)	96.0 (1004)	N=1046
現在：保護者 N=1983	飯田市内居住	49.4 (948)	50.6 (971)	N=1919
	飯田市外居住	23.4 (15)	76.6 (49)	N= 64

当然ながら、全ての期において、飯田市外居住者の参加は少ない。飯田市内居住者の人形劇フェスタへの参加では、就学前期は 63.3%、小学生期は 72.8%と参加率が高いが、中学生期は 13.3%とかなり少ない、そして高校生期は 3.6%未満とさらに少ない参加となる。その後、高校卒業後は 19.4%、そして、保護者は 49.4%と就学前に継ぐ参加割合の高さとなっている。各期の参加者の参加形態は、どの期においても観劇参加が最も多くほとんどが 80%以上である（表 6-3 参照）。

表 6-3 就学前から現在までの人形劇フェスタへの参加形態

単位：％（人）

	観劇	上演	運営ボランティア	その他	参加者実数
就学前期	97.3 (579)	3.0 (18)	—	1.3 (8)	N=595
小学生期	97.3 (765)	57.2 (45)	—	0.5 (4)	N=786
中学生期	82.1 (128)	19.2 (30)	8.3 (13)	1.9 (3)	N=156
高校生期	64.8 (35)	9.3 (5)	29.6 (16)	3.7 (2)	N=54
高校卒業後	79.1 (167)	8.1 (17)	20.9 (44)	9.0 (19)	N=211
現在：保護者	95.2 (920)	0.4 (4)	8.0 (77)	2.3 (22)	N=966

以上の結果より推察すると、人形劇フェスタの観劇参加の年代は就学前期と小学生期の子ども、そしてその保護者が多くを占めているといえる。

人形劇フェスタ自体への参加が減少する中学生期・高校生期・高校卒業後は、運営のボランティアへの参加が他の期に比べ高い割合となる。中学生から参加が可能となるサポート・スタッフに参加した人が、高校生以降も引き続き参加していると考えられる。

2.2 市民の観劇参加を促進する要因

①過去の参加経験との関係

表 6-2 の結果より、就学前・小学生期には 60~70%であった人形劇フェスタへの観劇参加率が、高校生期には 5%を下回るものの、保護者になった現在は 50%と高くなっている。では、中学・高校生期と一旦人形劇フェスタから離れていった市民が、成人し保護者となって再度人形劇フェスタに観劇参加するようになる要因は何だろうか。

35 年以上継続開催されているという飯田市の文化的環境のなかで、観劇参加率の高い就学前期および小学生期の人形劇フェスタへの参加経験が、保護者となった現在の人形劇フェスタへの参加に影響しているかをクロス集計によって分析した。結果は、表 6-4 のとおりである。

表 6-4 就学前期・小学生期の人形劇フェスタへの参加・不参加別現在の人形劇フェスタへの参加 単位：%(人)

		現 在		
		人形劇フェスタに参加した	参加しない	
就学前期	人形劇フェスタに参加した	54.5 (323)	45.5 (270)	N=593
	参加しない	46.9 (448)	53.1 (508)	N=956
小学生期	人形劇フェスタに参加した	52.6 (412)	47.4 (372)	N=784
	参加しない	47.3 (433)	52.7 (482)	N=915

就学前期・小学生期に人形劇フェスタに参加していた人の方が参加していなかった人よりも、保護者となった現在の人形劇フェスタへの参加割合はわずかに高いが、およそ 50%で明確な差があるとはいえない。つまり、就学前・小学生期の人形劇フェスタへの参加は、保護者となった現在の人形劇フェスタへの参加に影響していないといえる。

②観劇参加の動機

・子ども同伴の観劇

本調査では、現在（調査実施年度の人形劇フェスタ 2013）の観劇参加が子ども同伴であったかは質問していないが、大人のみ（1 人または複数で）での人形劇観劇に対する意向

に関する質問への回答は表 6-5 のとおりであった。「行ってもいいと思うが行ったことはない」「行かない」が合わせて 90% 近くとなり、保護者のほとんどは、人形劇の観劇は子ども同伴で行くと考えていた。この結果からは、保護者となった現在の観劇参加者の多くは、当然、子ども同伴で観劇していたと考えられる。

表 6-5 自分 1 人または大人だけの観劇について 単位：％（人） N=2,010

実際に行くことがある	4.5 (91)
行ってもいいと思うが行ったことはない	49.2 (989)
そのように思える人形劇が無い	4.0 (81)
行かない	38.5 (774)
その他	0.3 (7)
NA	3.4 (68)

・観劇参加の動機としての子ども

子どもの人形劇観劇の推奨については、表 6-6 のように、およそ 80% の人が、子どもに人形劇を観せたいと考えていた。

表 6-6 子どもの人形劇観劇の推奨 単位％（人） N=2,010

考える	79.0 (1,588)
考えない	14.1 (283)
その他	6.7 (135)
NA	0.2 (4)

その理由については、表 6-7 のとおりである（複数回答）。子どもを中心に考えている「子どもが喜ぶ」87.3%、「子どものためになる」61.8%が、「自分が楽しい」34.3%を大きく上回った。保護者の多くは第一に子どものためを考え、会場に足を運んでいる。

表 6-7 子どもに人形劇を観劇させたい理由（複数回答） N=1,588 単位：人、（％）

子どもが喜ぶ	1,386 (87.1)
子どものためになる	981 (61.7)
自分が楽しい	545 (34.3)
安価である	118 (7.4)
その他（飯田の文化だから。親子ともに楽しめる。）	44 (5.3)
時間がつぶせる	80 (5.0)

③保護者であるという要因

以上より、約半数の保護者が人形劇フェスタに観劇参加しているが、それは、自身の幼児期や児童期といった過去の人形劇フェスタの参加経験や、自身が人形劇が楽しいからという人形劇への意識に基づいた要因からではなく、何よりも保護者となったことが大きな要因であり、わが子に人形劇を観せたいと考えるからだと言える。

つまり、市民の人形劇フェスタへの観劇参加を促進させる要因は、保護者であることであり、保護者が子どもを同伴して人形劇フェスタに観劇参加することで、就学前・小学生期を中心とした子どもの観劇参加とその保護者層の参加割合が高くなるといえる。

3 保護者の人形劇フェスタへの参加を促進する幼稚園・保育所の役割

本調査では、このような保護者の考えや行動に影響を与えている要因として、幼稚園・保育園の存在があるのではないかと想定した。

3.1 幼稚園・保育園の保育活動における人形劇の活用

①観劇の活動

教育課程・保育課程の中に人形劇を取り入れていた園は、表 6-8 に示したように、2013 年度に取り入れていた園は 17 園、かつて取り入れていた園は 1 園で、計 18 園 75%だった。

また、2013 年度に人形劇観劇を教育課程・保育課程に取り入れていた園での観劇実施回数は、表 6-9 に示したように、年間 2 回以上実施している園が回答対象の 17 園のうち 13 園で 75%以上であった。他の地域との明確な比較はできないが、平成 26 年 6~9 月において筆者が訪問した大阪府・京都府・奈良県の幼稚園・保育園 10 園ほどに質問したところ、人形劇の観劇は行っていないという園が多く、行っている園でも 2 年に 1 回程度であり、人形劇のまち飯田の幼稚園・保育園では、積極的に人形劇観劇を保育に活用していると捉えることができる。

このように教育課程・保育課程に人形劇を取り入れる園が多い背景の 1 つに行政の支援があると思われる。支援の 1 つは、毎年、飯田文化会館人形劇のまちづくり係が実施している公立保育園の保育士を対象にした人形劇研修会である。各園より 1 名が参加し、プロ劇団の劇団員を講師に月 1 回 8 ヶ月指導を受け、小グループに分かれて 1 本人形劇をつくる。制作した作品は、2 月の成果発表会、翌年度 8 月の人形劇フェスタでの上演の他、市内保育園の巡演上演を行う。そもそも保育所行政の管轄は、保健福祉部子育て支援課であり、保育士を対象に実施される毎月 1 回の各種講習会³³は、全て子育て支援課が主催し保

³³ 公立保育士の研修は、毎月 1 回水曜日の午後行われる「保育部会」で実施されている。保育部会は全保育士が出席する。研修内容は、食育、障害児保育など、重点テーマを決めて実施される。

育部会が実施しているが、この人形劇講習会だけは教育委員会によって実施されている。

2 つ目には、観劇活動の実施を考えている園に対しプロ劇団の斡旋と補助金支出の行政支援を実施している。また、市内にアマチュア劇団（小中学校の劇団を除く）が 10 劇団ほどあり園の上演の要望に応えやすいことが挙げられる。このような行政の人形劇の普及を意図した施策も、他の地域に比べ観劇活動が活発に行われる要因になっているといえる。

表 6-8 教育課程・保育課程への人形劇観劇の組み入れ

N=24 単位：園（％）	
2013 年度に組み入れていた	17
かつて組み入れたことがある	1
組み入れたことはない	6 (25.0)

表 6-9 2013 年度の人形劇観劇の回数

N=17 (2013 年度に観劇を実施した園) 単位：園（％）	
1 回	4 (23.5)
2 回	5 (29.4)
3 回	4 (23.5)
4 回	4 (23.5)

②演じる活動

2013 年度またはかつて教育課程・保育課程に人形劇を演じる活動を取り入れていた園は、表 6-10 に示したように 15 園約 60%であった。また、演じる活動の具体的内容は表 6-11 に示したとおりである。

3 歳児や保育園の未満児クラスでも、即興的に演じるごっこ遊びや絵本などをもとに演じて遊ぶ劇遊びなどに人形が用いられている実態が明らかとなり、日常的な保育活動に人形や人形劇が取り入れられていることが推察できる。

表 6-10 教育課程・保育課程への人形劇を演じて遊ぶ活動の導入

N=24 単位：園（％）	
2013 年度に導入していた	12
かつて導入したことがある	3
導入したことはない	9 (37.5)

表 6-11 人形劇を演じる活動の実態

表 6-11 人形劇を演じる活動の実態		N=24		単位：園	
	3 歳未満	3 歳	4 歳	5 歳	
即興的に演じて遊ぶ	9	12	11	11	
絵本などをもとに演じて遊ぶ	6	12	15	15	
発表会で発表する	1	6	7	13	
その他	3	1	4	3	

3.2 人形劇の教育的意義

人形劇の観劇や演じる活動を通して子どもに育つ力、つまり、教育的意義については、表 6-12 に示したように、「感性」「想像力」「表現力」「言語獲得」「創造力」「お話を理解する力」を複数回答で 70%以上の園が挙げた。園は、人形劇を通した多面的な力の育ちを認め、幼児にとって人形劇がふさわしい保育教材であると考えているといえる。

表 6-12 人形劇の教育的意義

(複数回答) n=24 単位：園 (%)		
感性	23	(95.8)
想像力	22	(91.7)
表現力	20	(88.3)
言語獲得	20	(88.3)
創造力	17	(70.1)
お話を理解する力	17	(70.1)
人とかかわる力	14	(58.3)
他者理解	9	(37.5)
推察力	6	(25.0)
その他	1	(4.1)

3.3 人形劇フェスタの理解

①観劇活動の取り入れと人形劇フェスタ

教育課程・保育課程に人形劇観劇を活用している 18 園のうち 16 園 90%の園で「観劇活動の取り入れは人形劇フェスタがあることが影響している」と考えていた(表 6-13 参照)。その理由(複数回答)は、表 6-14 に示したように「人形劇フェスタがあることで保護者や子どもが人形劇に親しんでいる」を全園が挙げた。続いて「保育者が人形劇について学ぶ機会が多い」や「保育者が人形劇フェスタで観劇し、子どもにも観劇させたいと思う経験があるから」など、家庭において子どもが保護者と人形劇フェスタに参加していることだけでなく、保育者も人形劇フェスタに積極的に参加して子どもと保育者双方が人形劇フ

ェスタによって人形劇を楽しんでいることが推察でき、その経験が園での保育活動に反映されていることがわかる。

表 6-13 教育課程・保育課程への人形劇の取り入れに

人形劇フェスタが影響しているか	
N=18 (観劇活動を導入している園) 単位：(%)	
そう考える	16 (88.9)
そう考えない	2 (11.1)

表 6-14 教育課程・保育課程に人形劇観劇を取り入れていることに人形劇フェスタがあることが影響していると考える理由

(複数回答) N=16 (影響していると考える園) 単位: 園 (%)

人形劇フェスタがあることで保護者や子どもが人形劇に親しんでいる	16 (100)
保育者が人形劇について学ぶ機会が多い	13 (81.2)
保育者が人形劇フェスタで観劇し、子どもにも観劇させたいと思う経験があるから	12 (75.0)
園が地区公演会場として地域に定着化している	6 (37.5)
保育者自身が子どもの時に人形劇フェスタで人形劇に触れ、よかったという経験がある	5 (31.3)
地元にアマチュア劇団がたくさんある	4 (25.0)
その他 (飯田の文化として子どもたちに伝えていきたい)	2 (12.5)

②演じる活動の取り入れと人形劇フェスタ

表 6-15 に示したように、教育課程・保育課程に演じる活動を取り入れている 15 園では、10 園 70%の園で「人形劇を演じて遊ぶ活動の取り入れは人形劇フェスタがあることが影響している」と考えていた。その理由として、表 6-16 に示したように 90%の園が「人形劇フェスタがあることで保護者や子どもが人形劇に親しんでいる」を挙げ最も高い割合であった (複数回答)。続いて「保育者が人形劇について学ぶ機会が多い」が 50%、「保育者自身が子どもの時に人形劇フェスタで人形劇に触れよかったという経験がある」が 20%だった。

表 6-15 教育課程・保育課程に人形劇を演じる活動が取り入れられているのに人形劇フェスタが影響しているか

N=15 (演じて遊ぶ活動を取り入れている園) 単位: 園 (%)

そう考える	10 (66.7)
そう考えない	5 (33.3)

表 6-16 教育課程・保育課程に人形劇を演じる活動が取り入れられていることに人形劇フェスタがあることが影響していると考える理由

(複数回答) N=10 (影響していると考える園) 単位: 園 (%)

人形劇フェスタがあることで保護者や子どもが人形劇に親しんでいる	9 (90.0)
保育者が人形劇について学ぶ機会が多い	5 (50.0)
人形や台本などを手に入れやすい	5 (50.0)
保育者自身が子どもの時、人形劇フェスタで人形劇に触れ、良かったという経験がある	2 (20.0)

③保護者への人形劇フェスタへの参加促進の働きかけ

表 6-7 に示したように、24 園全ての園が、保護者に対して人形劇フェスタの情報提供や参加証ワッペンの購入案内を実施していた。

3.1①②で、教育課程・保育課程への人形劇活動の取り入れに子どもが保護者と共に人形劇フェスタに参加していることが影響していると考える園が多かったが、そのきっかけは園側が保護者に対し情報を提供するという参加を促進する働きかけがあったからということが考えられる。

表 6-17 保護者への人形劇フェスタの情報提供およびワッペン購入の案内

N=24(回答者全園) 単位：園 (%)	
情報提供やワッペン購入の案内をしている	24 (100)
情報提供やワッペン購入の案内をしていない	0

3.4 園における地域の文化資源の活用

飯田市の幼稚園・保育園では、人形劇の教育的意義を理解し、人形劇の観劇や演じる活動を保育活動に取り入れている。園は人形劇を取り入れるにあたって、人形劇フェスタという地域文化があり子どもたちが保護者とともに参加して人形劇を楽しむ経験を持っていることが影響していると考えていることが明らかとなった。

保育内容は保育者の一方的な関心や考えから決定されるのではなく、園または家庭や地域での経験をもとに生じた子どもの興味関心・発想との擦り合わせのなかでつくられていく。そして、子どもの家庭や地域での経験は、その経験をともに行う保護者の価値観や関心が強く影響していると考えられる。こうしたことから考えると、保育内容は、保育者と子どもと保護者の三者によって構築されるといえる。

幼稚園・保育園が人形劇を教育課程・保育課程に取り入れる理由に「人形劇フェスタがあることで保護者や子どもが人形劇に親しんでいる」ことを挙げていることは、つまり、幼稚園・保育園は人形劇フェスタが広く市民に浸透していると判断し、まちづくりへの人形劇フェスタの存在を評価していると考えられる。これは、幼稚園・保育園が人形劇のまちづくりを理解し次の 2 つの点で人形劇のまちの核となる人形劇および人形劇フェスタという地域文化を支えることに繋がっていると考えられる。1 点目には保護者および子どもたちの人形劇フェスタ参加を促進すること、第 2 点目に子どもたちが人形劇フェスタに参加したことによって園の人形劇活動が充実し人形劇文化継承がなされるということである。

このように、乳幼児の通園する幼稚園・保育園では、人形劇のまち飯田の地域資源として人形劇を積極的に教育・保育活動に取り入れ、あわせて、保護者に対しても地域の文化

活動を積極的に紹介し、参加を促進させる活動を実施していた。こうした園の働きかけが保護者の人形劇への関心を高め、子どもにとっての人形劇の教育的価値を考えるきっかけになっていると考えられる。あわせて、参加証ワッペン購入についてなど人形劇フェスタへの参加を促進させる具体的な働きかけにより、保護者の人形劇フェスタへの参加が実現されたと考えられる。こうした点からは、幼稚園・保育園は、人形劇フェスタの成功そして人形劇のまちづくりに貢献し、次代を担う人材の育成や地域の文化活動の継承に大きな役割を果たしているといえる。

4 観劇参加という文化活動が継承された要因

保護者として人形劇フェスタに参加した人と参加していない人の、公民館活動や自治会活動等地域および地域活動への関心や参加の実態は、表 6-18～6-21 のとおりである。

公民館活動への関心および活動への参加と役員の経験、自治会活動への関心および活動への参加とも、人形劇フェスタに参加している人の方が関心を持ち積極的に参加する人が多い。居住する地区で人形劇フェスタの地区公演が開催され参加することが、地域の活動や地域の人を知る機会になったと推測できる。

今回の保護者調査の回答者は、男性が回答者全体(N=2010)の 5.9%(119 人)、女性が 93.4%(1876 人)、無回答が 0.7%(14 人)と、ほとんどが女性であり、多くは母親と考えられる。女性の地域活動への参加は男性に比べ少なく、保護者、特に母親は、地域の活動への参加に対し消極的である³⁴。しかしながら、人形劇フェスタのような子ども同伴で参加できる文化活動が地域で実施されることで、母親たちは地域の活動に参加する機会を得るのである。母親たちは、人形劇フェスタへの参加経験を通し、地域の公民館活動や自治会活動に対しての関心を広げ、参加への前向きな姿勢を持つのである。

子どもを持ち保護者となったことが人形劇フェスタへの参加を促進させる大きな要因と考えられるが、さらに観劇参加で子どもと楽しんだ保護者が地区の公民館の役員として地区公演の運営に参加するというように経験が繋がっていくことで、ボランティアとしての運営面への参加へと形態を変えて人形劇フェスタへの参加が継続されことも考えられる。

表 6-18 人形劇フェスタへの参加・不参加別公民館活動への関心

単位：％(人)

		公民館活動への関心				N
		とてもある	まあまあある	あまり無い	全く無い	
今年の人形 劇フェスタ	参加した	6.2(59)	52.9(508)	35.6(342)	5.3(51)	N=960
	参加しない	2.4(25)	37.0(379)	46.9(480)	13.7(140)	N=1,024

³⁴ 内閣府平成 20 年男女共同参画白書によると、女性の地域活動への参加意欲は高いものの、実際、地域の活動や NPO など役員にあたる女性は男性に比べ極端に少ない。

表 6-19 人形劇フェスタへの参加・不参加別公民館活動への参加

単位：&(人)

		公民館活動への参加				
		とても積極 的	まあまあ積極 的	やや消極的	全く消極的	N
今年の人形	参加した	2.9(28)	36.0(345)	38.9(373)	22.2(213)	N=959
劇フェスタ	参加しない	1.6(16)	20.4(209)	37.4(383)	20.6(416)	N=1024

表 6-20 人形劇フェスタへの参加・不参加別自治会への意識

単位：%(人)

		自治会への意識				
		とてもある	まあまあある	あまり無い	全く無い	N
今年の人形	参加した	3.5(33)	47.9(458)	38.1(365)	10.6(101)	N=957
劇フェスタ	参加しない	0.9(9)	20.6(312)	47.1(481)	21.4(219)	N=1,021

表 6-21 人形劇フェスタへの参加・不参加別自治会活動への参加

単位：%(人)

		自治会活動への参加				N
		とても積極的	まあまあ積極的	やや消極的	全く消極的	
今年の人形	参加した	3.3(32)	36.2(347)	38.8(372)	21.7(208)	N=959
劇フェスタ	参加しない	0.6(6)	22.3(227)	36.1(368)	41.1(419)	N=1,020

小括

調査より、市民文化活動である人形劇フェスタへの市民の観劇参加の実態が把握できた。市民は、保護者になることで、子どもたちを伴い積極的に人形劇フェスタに参加するといえる。35年以上にわたり継続開催されている歴史的事実からは、幼少期の人形劇フェスタへの参加経験が市民の飯田市や人形劇フェスタへの愛着を育み、それが成人になってからの人形劇フェスタへの参加に影響を与えているのではないかと想定したが、調査結果からはそれを裏付けることはできなかった。市民（保護者）は、子どもが人形劇を喜んで観るを考え、人形劇を子どもに観せたいと思い、自分一人では観に行くことを考えない人形劇フェスタに子どもを連れて参加するのである。こうした保護者と子どもの存在によって、人形劇フェスタは、累計 45,000 人もの観客を毎年数え、35 年以上継続的に開催されて来た。そして、保護者らの人形劇への理解を深め人形劇フェスタへの関心を広げた背景には、飯田市内の幼稚園や保育園の存在が大きく影響していた。幼稚園や保育園が保育内容に人形劇を積極的に取り入れることで、保護者は子どもが人形劇を楽しむことやその教育的意義を理解する。そして、幼稚園・保育園が人形劇フェスタの情報を提供することで、積極

的に人形劇フェスタに参加することが促進されるのである。

一方、幼稚園・保育園においては、冒頭に示したように、人形劇カーニバル第1回目開催の際に地区公演の運営の協力を仰いだのが保育士であったことや、地区公演の会場として保育所や幼稚園が使用されていることから、市内の幼稚園・保育園が人形劇カーニバル・人形劇フェスタと一定の関係を有しているといえる。地区公演が住民を中心に運営されるようになってからも、市内の幼稚園・保育園では、保育活動に人形劇が積極的に取り入れられ、また、保護者の人形劇フェスタへの観劇参加を促進させる役割を担っている。このような幼稚園・保育園と人形劇フェスタとの関係を構築する要因として次の3点を挙げる事が出来る。1点目は、行政が人形劇を市の文化として育てようとする意志を持っていたことである。行政は保育士の技術向上を目指した恒常的な支援を行っているが、その一環として公立の保育士を対象とした人形劇研修会を毎年開催し、保育士が人形劇をつくり演じる技能を修得するとともに、研修会で結成された人形劇団が保育園を巡演し子どもたちに人形劇観劇の場をつくっている。また、市内の全幼稚園・保育園に対し、人形劇観劇のための劇団幹旋や補助金の支給を行っている。行政が人形劇を市の文化として育てようとする意志を持っていることが背景にあり、この点が最も端的に表れているのが小中学校への人形劇クラブ設置といえる³⁵。2点目に、個人的要素である。すなわち初代人形劇フェスタ実行委員長の高松和子の存在である。高松は、市内の私立幼稚園の園長であり、市内唯一の短期大学の理事長の親族であり教授も務めた。高松は市内の幼稚園に影響力を持っていたと考えられ、幼稚園・保育園の保育活動への人形劇の取り入れに大きな影響を与えたと考えられる。3点目は、35年の歴史の中で、人形劇フェスタが年中行事として定着していた事実である。毎年8月第1週に開催されることが定着していたことで、幼稚園・保育園では地域の年中行事同様、保育活動に取り入れやすくなっていたといえる。

飯田市が、人形劇という文化財をまちづくりの中軸においた要因の一つには、江戸時代に伝播された人形浄瑠璃が300年を経た今も継承されているという文化的土壌の存在があった。しかし、それだけでは人形劇フェスタが市民文化活動として市民に広く浸透し、35年にわたり継続開催されることは難しかったといえる。運営面への市民参加においては、飯田市の公民館システムを活用することで、人形劇フェスタを集落＝区の活動として市民が受け入れ積極的に参加することが実現された。そして、観劇面への市民参加においては、人形劇という芸術性だけでなく教育性を持つ文化財を中核にしたことで、保護者と子どもを中心とする市民の参加が広く得られたのである。人形劇が子どもにふさわしい文化財で

³⁵ 人形劇カーニバル第17回となる1996（平成8）年に教育委員会の意向により、市内全小中学校に人形劇クラブが設置された。その後、現在は、小学校では特別活動の時間数の減少、また、小中学校を通して児童生徒数の減少による設置クラブの精査が行われ全小中学校に人形劇クラブが設置されているとはいえない。総合的な学習の時間が始まって以降、クラブではなく、クラス単位で総合の学習などで人形劇に取り組む学校が増加している。

あるという教育的価値は、誰もがその価値を認め、市民は保護者になったことで、ごく当然のこととして子どもを連れて人形劇フェスタに参加する。つまり、飯田市に在住し、飯田市に人形劇フェスタがあることで、子どもとその親たちは、毎年人形劇フェスタに観劇参加する。そして、毎年、誕生し成長した子どもたちが新たな観劇参加者として人形劇フェスタに参加する。この循環の中で人形劇フェスタは継続されていると考えられる。

ただし、この現状をこのままでよしとするには問題があり、人形劇フェスタをまちづくりの核としてより積極的に活用していくための思索を考えるべきである。例えば、高校生や高校卒業後の青年たちの人形劇フェスタへの参加が極端に少ないことは、今後の課題として採り上げるべき問題であると考ええる。次代を担う若い力として期待される若者たちの地域への関心や地域活動への参加の場として、人形劇フェスタが活用できるのではないだろうか。飯田市では、幼稚園や保育園への人形劇観劇の補助事業や、小学校や中学校への人形劇指導に関する事業は積極的に実施しているが、高校生に対してはほとんど行われていない。2014（平成 26）年より、飯田市公民館が実施を始めたフィールド学習が唯一といえる。この年代への積極的な関与が求められる。

また、保護者層においては、考察より、人形劇フェスタに参加することにより公民館や自治会等の地域に対する関心を高め、活動への参加を前向きに考えるようになることが明らかとなった。こうした実態をまちづくりのシステムに生かすことで、市民参加による人形劇フェスタの成功で終わるのではなく、市民の人形劇フェスタへの参加が、さらに市民の主体的な地域社会の活動への参加を促進し、活発なコミュニケーションが繰り返し広げられるまちづくりに結びつくと考えられる。ここまでいったときに、人形劇フェスタは、人形劇を中軸とした飯田市のまちづくりへの核としての本来の意義を達成できることになるといえる。今後は、そうした文化活動によるまちづくりのシステムの構築を目指したい。

終章

本論は、長野県飯田市で開催されているいいだ人形劇フェスタへの市民の参加に関して、例年運営への参加がおおよそ 2,500 人、観劇への参加が推定 45,000 人という、国内の他の地域活動では見られない多くの参加を実現させ、35 年以上継続開催されている実態を、住民の視点から捉え、地域活動への市民参加の構造を明らかにすることを目的とした。

人形劇フェスタの前身である人形劇カーニバルを成立させ、全国の人形劇人に周知させ毎年 350 を超える劇団の参加を維持するほどの大規模な人形劇の祭典につくり上げるとともに、上記のような全市域からの多くの市民参加を実現させた大きな要因は、まず第一に、当時の市長松澤太郎の公民館を活用した市民の社会教育振興への積極的な取り組みがあったことだといえる。松澤市長は、教育長時代より、公民館や図書館を市民の学習の場としてその意義を強く主張し、市長時代には、すべての地区公民館の建て替えを実施するというハード面の環境整備とともに、ソフトの面では、この人形劇カーニバルを市内全地区の地区公民館で実施させることで、多くの住民の参加を促進し、市を統合するまちづくりを目指した市民文化を実現させようとしたのである。

このような行政主導の開催決定は、飯田市の公民館が三層構造をなしていたことにより、そのシステムを活用し、飯田市から教育委員会、飯田市公民館から各地区の地区公民館館長および主事に実施が伝えられ、まさに上からおろすかたちで、地区公民館での実施が開始された。にもかかわらず、1,900 人の住民が地区公演実行委員として人形劇フェスタに運営スタッフとして参加し、それが 38 年間も継続しているのはなぜかということが、研究に取り組むきっかけであった。

特に、人形劇や市街地の活性化、まちづくりに関心のある市民有志らがあらたにつくりだした人形劇フェスタへ移行すると、人形劇フェスタは「主体的な市民によってつくられる市民の文化活動」という理念が先行して語られてきた。しかし、地区公演の場合は前身である人形劇カーニバルの事業内容をそのまま踏襲して実施していたため、飯田市に居住し人形劇フェスタ実行委員会に参加していた筆者は、強い違和感を抱いていたのである。

本論を通して明らかになったことは、集落に設置された分館、地区に設置された地区公民館、市に設置された市公民館という飯田市の三層構造の公民館システムにより、集落の住民は生活圏にある身近な分館の役員になることで地区公民館ともつながり、人形劇フェスタ地区公演実行委員になる。しかし、住民は、分館または地区公民館の役員になったという意識はあるが、8 月の月上旬に集落＝区内で開催される人形劇の公演が飯田市を統合する人形劇の祭典であるということや、自身が人形劇フェスタ地区公演実行委員会の一員であるということはほとんど意識されていない。住民にとっては、人形劇フェスタ地区公演は公民館活動の 1 つであり、市を統合する市民文化活動という認識や行政がまちづくりの中核に位置付けていることへの認識は低い。多くの住民にとっては、地区の夏祭りに準ず

る地域の夏のイベントとしての行事なのである。

それは、地区公演を開催する集落に設置された分館と地域社会そして住民との関係から明らかになった。つまり、現在の行政区画では小学校区である地区や自治会にあたる集落＝区では、伝統的な農村の地縁的關係が存在し、集落＝区の自治活動と社会教育活動である公民館の分館活動は、渾然一体として存在している。実際に、自治会と分館は建物を共有し、活動も両者の協力関係の中で開催され、住民には何が分館の公民館活動で何が自治会活動か区別して捉えることが出来にくい実態がある。行政や教育委員会の公民館側から捉えると、あたかも分館という社会教育を行う場所が集落に存在し、そこで社会教育活動が展開されているように理解しているが、実際には、分館は集落の住民の活動であって、分館という場所は無いのである。事実、住民は、分館活動を行う建物を「分館」とは呼ばず、「公会堂」とか「コミュニティ（センター）」など、建物の名称で読んでいる。今回明らかとなったこの実態からは、分館活動を指導する地区公民館職員の主事が各地区の分館がどこにあるか知らなかったという事実がその状況を端的に示している。つまりこれまでは、行政の視点からの、あるいは理念的な地域社会の捉え方の中で、公民館活動そして人形劇フェスタ地区公演は実施されてきたといえる。

人形劇フェスタで理念として掲げられ、飯田市の目指すまちづくりとも結びつけて目指されていた「主体的な市民」や「市民の主体的な参加」は、2,000 人を擁する地区公演実行委員会においては、果たして主体的であるかは大きな疑問であるといえる。住民は、あくまでも地区または集落の住民の意識であり、地区が市に属しているという意識はあっても、自分自身が市民として飯田市のイベントの一角を担っているというということは意識されていない。

本論は、人形劇フェスタそれ自体は目的ではなく、また、公民館活動の社会教育的意義を明らかにすることも目的としてはいない。人形劇フェスタへの市民参加の実態分析から見えてきた問題は、日本で市民社会が成り立っているのかという問題にも通じるであろう。少なくともいいだ人形劇フェスタにおいて、市民参加を支えていたのは、この地区公演にみられるように、地縁的伝統社会の地域の一員ということを通して社会活動に参加する住民であった。

さらに、人形劇フェスタは、こうした多くの住民による地区実行委員会と、自身の意志により参加する本部実行委員会の二重構造によって成り立っている。意識も参加の仕方も異なる住民と市民を、一つの活動の創造者としてまとめる枠組みが人形劇フェスタという文化活動であり、そこに公民館の三層構造にのせて両者のパイプ役として公民館主事をかわらせたことが、飯田市が行政として施策をうまく進めることができた鍵と言える。

しかし、住民に含まれていない人々がまだ多くいることは、今後とりあげて考えて行かなくてはならない課題である。本論でとりあげた伊賀良地区では、流入者に対して、自治会は積極的な加入を勧め、地区住民としての一体化に積極的に取り組んでいた。しかし、

高齢者や若い世代の核家族、また、近年増加傾向にある母子・父子世帯など、地域社会の相互支援を必要とする市民ほど、地区住民に包含されず、こぼれ落ちている現状にあり、この解決に向けた取り組みは喫緊の課題と言える。

また、本論では観客の参加に関しても考察し、小さな子どもを持つ保護者がわが子連れで観劇参加している実態を把握できた。人形劇フェスタは、母親である女性が、地域社会の活動に参加する機会となっており、先に述べた、地区住民からこぼれ落ちる人々への地域社会への参加にも大いに役立てることが出来る活動だといえる。

現在の人形劇フェスタの活動においては、市民によって組織された実行委員会のメンバーはもとより、行政側も地域活動への女性参画を促進する契機として人形劇フェスタを捉える意識を持っているとは思えない。この地域文化活動を通したまちづくりの方向性をあらためて市民と行政が考える必要があることとあわせ、飯田市の地域社会の実態を捉え、住民の視点からこの人形劇フェスタと言う市民文化活動を通したまちづくりを見ていくことの重要性を訴えたい。

引用・参考文献

- 荒井容子, 2007, 「コミュニティをめぐる諸政策の動向と公民館」, 『日本公民館学会年報』(4) : 17-26
- 荒井容子, 1998, 「社会教育実践における職員と住民参加の問題」, 『教育科学研究』(7), 47-55
- 飯田市, 1992 「人形劇のまち」 研究プロジェクト研究報告書」
- , 1996, 「第 4 次飯田市基本構想 (1996~2005) 人も自然も美しく、輝くまち飯田環境都市を目指して」
- 飯田市議会事務局, 1979, 「飯田市市議会議録昭和 54 年第 3 回定例会」
- 飯田市議会事務局, 1988, 「飯田市市議会議録昭和 63 年第 2 回定例会」
- 飯田市公民館, 2015, 『平成 26 年度飯田市公民館活動記録』 飯田市公民館 : 5
- 飯田市美術館, 1991, 『伊那谷の人形芝居』, 飯田市美術館
- いいだ人形劇フェスタ 10 周年記念誌編集委員会, 2009, 『つながってく。～人形たちと歩んだ 30 年～』, いいだ人形劇フェスタ実行委員会
- 池浦順子, 2003, 「公民館をキーステーションに支え合うまちづくりーボランティア『オアシス』の実践からー」, 『月刊社会教育』 47 (9) : 12-19
- 市原正孝, 2007, 「まちづくりと地域内分権ー特定非営利活動法人まちづくり山岡の実践をとおしてー」, 『岐阜医科大学紀要』 1 : 67-82
- 伊藤義夫, 2003, 『操り始めて 300 年ー今郷土に生きる今田人形』, 今田人形発祥 300 周年記念誌編集委員会
- 今村真直, 2002, 「信州川路の江戸歌舞伎興行から」, 『伊那』 2002 年 3 月号 : 3-9
- 岩淵泰, 2007, 「『生活型観光地』と住民自治 - 大分県湯布院町の『まちづくり』運動から」, 『熊本大学社会文化研究』 5 : 55-76
- 上原直人, 2000, 「寺中作雄の公民教育観と社会教育観の形成」 生涯学習・社会教育学研究 25 : 31-40
- 内田和浩, 1992, 「『地域重視型』 公民館における社会教育実践の現段階・相模原市を例にー」, 社会教育研究 12 : 35-54
- , 2009, 「地域コミュニティの拠点としての公民館ー神奈川県相模原市における地区公民館体制の形成過程からー」, 社会教育研究 (12) : 35 - 54
- 遠藤和士, 2000, 「昭和 40 年前後の社会教育理論についてー〈枚方テーゼ〉を中心として」, 大阪大学教育学年報 (5) : 257 - 268
- 遠藤知恵子, 2004, 「農村地域における地域づくりと自治公民館～自治公民館重視の朝町の事例から～」, 『北海道浅井学園大学生涯学習システム学部研究紀要』 (4) : 165-180
- 大江正章, 2008, 『地域の力ー食・農・まちづくり』, 岩波書店
- 大木幸子・星旦二, 2006, 「地域づくり活動における担い手及びコミュニティのエンパワ

- メント過程とその相互作用に関する研究」,『東京都立大学都市科学研究科紀要』(6),
25-35
- 大沢和夫, 1985, 「伊那街道 「出る荷」「入る荷」」, 「信濃路」第 50 号, 信濃路出版: 44-47
- 荻野亮吾, 2007, 「市民社会における社会教育の役割に関する考察ー『社会教育の終焉』
論の再検討ー」, 『東京大学大学院教育学研究科紀要』(47), 347-356
- 小熊里美, 2006, 「公民館論と公民館不要論の論理的つながりー公民館研究者はなぜ公民
館不要論に反論しなかったのかー」, 『教育学雑誌』44: 117-130
- 岡大輔, 2005, 「まちづくりをコーディネートする公民館ー有田校区まちづくりの実践か
ら」, 『月刊社会教育』49 (7): 27-33
- 小川利夫・花香実・藤岡貞彦, 1965, 「公民館の現代的性格その 1」, 『月刊社会教育』9 (6):
66-78
- 語りつぐ伊那の女編集委員会, 1983, 『語りつぐ伊那の女』, 下伊那郡郡連合婦人会
- 木下陸奥, 2012, 『地域と公民館ー自治への憧憬』, 南信州新聞社出版部
- 日下部新一, 1974a, 「伊那の人形 (一)」, 「伊那」1974 年 9 月号: 3-8
- , 1974b, 「伊那の人形 (二)」, 「伊那」1974 年 10 月号: 3-8
- , 1974c, 「伊那の人形 (三)」, 「伊那」1974 年 11 月号: 14-19
- , 1974d, 「伊那の人形 (四)」, 「伊那」1974 年 12 月号: 14-21
- , 1974e, 「伊那の人形 (五)」, 「伊那」1975 年 2 月号: 14-18
- , 1981, 「黒田諏訪神社と人形芝居」, 「伊那」1981 年 3 月号: 8-11
- , 1985, 「伊那児の芸能」, 「信濃路」第 50 号, 信濃路出版: 120-123
- 国生寿, 2002, 「社会教育法の改正と地方分権・規制緩和ー主として社会教育関係委員を
めぐってー」, 『社会科学』68: 1-31
- 小林文人, 1986, 「解説 戦後公民館通史」, 横山博・小林文人編, 『公民館の再発見ーその
新しい実践』所収, 3-64, 国土社
- 小林文人, 1988 『公民館の再発見ーその新しい実践』国土社
- 小林平造, 1996, 「地域づくりの主体形成と青年に関する研究ー地域社会教育実践論想像
の視点からー」, 『鹿児島大学教育学部研究紀要. 教育科学編』47: 235-250
- 国民生活審議会調査部会, 1968, 「コミュニティー生活の場における人間性の回復ー」, 『国
民生活審議会 コミュニティ問題小委員会報告』, 大蔵省印刷局
- 桜井伴, 1985, 「伊那街道 中馬が運んだ文化」, 「信濃路」第 50 号, 信濃路出版: 39-43
- 佐藤一子, 1989, 『文化協同の時代 文化的教授の復権』, 青木書房
- 佐藤一子・上原直人・大島英樹, 1998 「地域公民館システムにおける分館の普及ー長野県
における公民館分館をめぐる実態と課題ー」生涯学習・社会教育学研究第 23 号: 1-19
- 佐藤一子・増山均, 1995, 『子どもの文化権と文化的参加』, 第一書林
- 佐藤一子, 2016, 『地域文化が若者を育てるー民俗・芸能・食文化のまちづくりー』, 農文

協

- 財団法人堺都市政策研究所, 2011, 『市民主体の地域活性化（音楽イベントを通じたまちおこし）に関する調査研究業務報告書』
- 白石克孝, 2011, 「日本における持続可能な地域社会実現へのチャレンジと課題－飯田市の事例を手掛かりに－」, 斉藤文彦・白石克孝・新川達郎『持続可能な地域と協働型ガバナンス－日米英の事例比較を通じて』, 日本評論社
- 實月圭吾, 1985, 『明治初期長野縣町村衛繪地圖大鑑〈南信編〉』, 郷土出版社
- 菅井和子, 1986, 「公民館の設置運営に関する研究－公民館の誕生－」, 『教育學雑誌』(20): 47 - 58
- 鈴木栄太郎, 1968, 『日本農村社会学原理（上）』, 未来社
- 千田忠, 2002, 「第4章4節地域づくりと人形劇カーニバル」姉崎洋一・鈴木敏正編『公民館実践と「地域をつくる学び」』, 北樹出版
- 竹安栄子, 1992, 「ある婦人会活動の軌跡－根雨地区婦人会活動を中心に－」, 『追手門学院大学文学部紀要』第8号: 219-239
- 竹安栄子, 2014, 「女性の政治参加活動の展開とその限界」, 京都女子大学大学院『現代社会研究科論集』第8号: 35-54
- 田渕康修, 2009, 「公民館を活かした参画と協働のまちづくり」, 『TORC（鳥取環境大学地域イノベーション研究センター）レポート』32: 47-63
- 田村明, 1999, 『まちづくりの実践』, 岩波書店
- 田中弘, 1999, 「公民館と地域の関係に関する研究－公民館使用許可を中心として－」, 『教育実践研究指導センター年報』(4): 8 - 20
- 田代利恵, 2012, 「文化的イベントが地域協働のまちづくりに果たす役割に関する研究－古い町並みを有する地方都市を事例に－」, 『龍谷大学大学院政策学研究』1: 149-168
- 千代苑子, 2013, 「外発性の文化・芸術活動が地域のまちづくりプロセスに与える影響に関する研究－鳥取県鹿野町・鳥の劇場を事例に－」, 『龍谷大学大学院政策学研究科』第2号, 155 - 171
- 津久井寛, 2012, 「住民アンケートによる地域コミュニティ活性化に関する考察」, 『帯広大谷短期大学紀要』49: 31 - 42
- 手打明敏, 2014「多目的型地域センター施設としての自治公民館－宇佐川満の公民館論を手掛かりとして－」教育学論集 10: 83-101
- 東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室飯田市社会調査チーム, 2011『開かれた自立性の構築と公民館の役割－飯田市を事例として－』東京大学大学院教育学研究科社会科養育学・生涯学習論研究室
- ――, 2012『自治を支えるダイナミズムと公民館・分館－飯田市公民館分館を事例として－』, 東京大学大学院教育学研究科社会科養育学・生涯学習論研究室

- 友岡邦之, 2006, 「地域社会における文化的シンボルと公共圏の意義」, 『地域政策研究』 8 (3) : 167-179
- 中川幾朗, 1995, 『新市民自体の文化行政－文化・自治体・芸術・論－』, 公人の友社
- 中島正博, 2012, 「過疎高齢化地域における瀬戸内国際芸術祭と地域づくり－アートプロジェクトによる地域活性化と人びとの生活の質－」『広島国際研究』 18 : 71-89
- 長野県公民館運営協議会長野県公民館活動史編集委員会, 1987『長野県公民館活動史』 長野県公民館運営協議会 : 223-226
- 人形劇カーニバルシンポジウム実行委員会, 1992, 『地域文化フォーラム'92 の記録』
- 人形劇カーニバル飯田実行委員会, 1987, 「人形劇カーニバル飯田 1987 開催要項」
- 人形劇カーニバル実行委員会 10 年誌編集委員会, 1990, 『人形劇カーニバル飯田 10 周年記念誌 人形たちがやってくる』, 人形劇カーニバル飯田実行委員会
- 根木昭, 2001, 『日本の文化政策－「文化政策学」の構築にむけて－』, 勁草書房
- 原義彦, 2002, 「自治公民館とまちづくりへの課題」『月刊公民館』 537 : 4-8
- 浜田倫紀, 2008, 「自治公民館を核とした地域再生の道」, 月刊社会教育 635 : 41-46
- 長谷川敏郎・千葉悦子, 1995, 「中山間地域の公民館活動と地域力」, 農業研究センター研究資料 31 号 1-31
- 平川景子, 2007, 社会教育実践の展開と専門性の形成, 明治大学社会教育主事課程年報 (17), 1-16
- 福尾武彦, 1964, 「公民館研究の視点：社会教育研究の方法論を求めながら（第 1 部）」, 『千葉大学教育学研究紀要』, 1 - 23
- 藤岡貞彦, 1969, 「社会教育実践と民衆意識（2）－枚方テーゼから下伊那テーゼへ－」, 月刊社会教育 13 (10) : 72-79
- 増田郁夫, 2003 「オーラルヒストリー 松澤太郎に聞く」, 『飯田市歴史研究所年報』 1 号 飯田市歴史研究所 : 136-184
- 松井伴, 1985, 「伊那街道 中馬が運んだ文化」, 『信濃路』 50, 信濃路出版 : 39-43
- 松崎行代, 2011, 「市民による文化活動成立の文化的要因－飯田市の人形劇フェスを事例に－」, 『京都女子大学大学院現代社会研究論集』 5 : 63-75
- ――, 2012, 「飯田市における文化行政とまちづくり－人形劇フェスタを中心に－」, 『京都女子大学大学院現代社会研究科論集』 6 : 79-95
- ――, 2014, 「公民館活動によるまちづくり－飯田市公民館システムと人形劇フェスタを事例に－」, 『日本公民館学会年報』 11 : 94-103
- ――, 2016, 「文化活動によるまちづくり－いいだ人形劇フェスタの市民の観劇参加を中心に－」, 『京都女子大学大学院現代社会研究科論集』 第 10 号 : 1-18
- ――, 2016, 「地域文化を支える幼稚園・保育園の役割－飯田市の人形劇フェスタを事例に－」, 京都女子大学発達教育学部紀要』 第 12 集 : 115 - 125

松澤太郎，1992『21世紀の地方自治シリーズ 第6巻 人形の町 飯田』，ぎょうせい
 松下圭一，1986『社会教育の終焉 新版』公人の友
 松原治朗著，1978，『コミュニティの社会学』，東京大学出版会
 松田武雄，2009，「地域内分権と社会教育の再編－教育機能とコミュニティ機能の関連」，
 『生涯学習・キャリア教育研究』（5）：1 - 6
 三隅治雄，1986，『芸能の谷〈伊那谷〉第2館芸能のパノラマ』，新葉社
 宮崎隆志，2005，「枚方テーゼと市民の自立」，社会教育研究 23：19 - 36
 森岡清美編，1993，『新社会学辞典』，有斐閣
 山田一隆，2002，「「社会教育」「生涯学習」の概念整理と「まちづくり」への社会教育的
 接近－生涯学習政策」下の社会教育の現代的理念の検討に向けて－」，政策科学（10）
 1：143 - 159
 横山博・小林文人，1986，『公民館資料集成』，エイデル研究所：4-11

資料

飯田市，1989，広報いいだ 464号
 飯田市，1986，広報いいだ 466号

参考 URA （＊インターネット・ウェブサイトの最終閲覧は、全て 2016 年 11 月 10 日）

飯田市「飯田市の人口」 <http://www.city.iida.lg.jp/>
 飯田市，飯田市プロフィール： <http://www.city.iida.lg.jp/soshiki/34/koutsuuaccess.html>
 飯田市総合政策部企画課，2016年3月「飯田市版総合戦略」<https://www.city.iida.lg.jp/soshiki/13/sougousenryaku.html>
 飯田市，市政の概要，<https://www.city.iida.lg.jp/soshiki/8/shisei-gaiyouh27.html>
 飯田市議会事務局，『飯田市議会議事録』平成5年第4回定例会 <http://www.kyoi2.ed.iidanet.jp/wp-content/themes/iidaeducation/edyoran/h27/03-03.pdf>
 飯田市教育委員会 平成27年度飯田市教育要覧
 飯田市「飯田市のプロフィール・飯田市の概要」， <http://www.city.iida.lg.jp/soshiki/34/iidagaiyou.html>
 飯田お練り祭り実行委員会，「平成28年お練り祭り参加・協賛団体」
<http://oneri.iidacci.org/guide/group/>
 総務省統計局，2012，平成24年度経済センサス，<http://www.stat.go.jp/data/e-census/2012/>
 経済産業省，2013，平成24年12月工業統計調，<http://www.meti.go.jp/statistics/tyo/kougyo/>

遠山観光協会，「遠山郷の歴史と文化 秋葉海道」http://tohyamago.com/rekisi/akiba_tousin/index.php

内閣府男女共同参画白書平成 20 年版http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitpaper/h20/gaiyou/html/honpen/b1_s00_01.htm (2015.9.10)

農林水産省，2010 年世界農林業センサス報告書 第 1 巻都道府県別統計書 長野県飯田市：<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000001036108&cycode=0>

南信州獅子舞フェスティバル実行委員会，「第 7 回南信州獅子舞フェスティバル参加団」
<http://minamishinsyu-shishimai.com/>

文部科学，「社会教育調査－結果の概要」http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa02/shakai/kekka/1268528.htm

文部科学，「社会教育調査－結果の概要」http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa02/shakai/kekka/1268528.htm¹飯田市議会事務局，『飯田市議会議事録』平成 5 年第 4 回定例会 <http://www.kaigiroku.net/kensaku/iida/iida.html>

謝辞

本論文は、筆者が 2010 年に京都女子大学大学院博士後期課程現代社会研究科公共圏創成専攻に入学し、竹安栄子教授にご指導をいただくことで研究を進め、7 年をかけて書き上げることが出来ました。

竹安栄子教授には、社会学的研究の視点のもち方、研究の仕方といった基本から丁寧なご指導をいただきました。筆者は、社会学に関する学びとともに、竹安教授の御指導によって、あらためて「研究」とはなんたるかを考える機会を得て、理論構築の重要性を知ることが出来ました。そのなかで、理念的な捉え方に陥り、研究対象そのものの実態を多面的に捉えることが出来ていなかったことに気付かせていただき、今後研究を進めていくうえでの基本的な姿勢について重要な学びを得ることが出来ました。深く感謝申し上げます。

神戸学院大学の春日雅司教授には、地域社会研究会において、毎回、的確な御指摘をいただき、その度に研究の方向性を見直すことが出来ました。また、資料となる貴重な書籍をご提供いただきましたことも感謝いたします。

京都女子大学大学院現代社会研究科の西尾久美子教授には、2016 年度、筆者を特別研修者としてお引き受けいただきご指導いただきました。分析的な視点で実態を整理し、その問題点を理論的に考察していく研究的思考について、西尾教授から得た学びは大変大きなものでした。ありがとうございました。

そして、飯田市の方々には、多くの皆様に度重なる調査へのご協力をいただきましたこと、深く感謝いたします。

まず、伊賀良地区の公民館長、自治会長、区長の皆様はじめ、住民の皆様には、お忙しいにもかかわらず、集落について、地区公民館や分館についてお話を聞かせていただき、地域社会の実態について知ることが出来ました。

飯田市公民館副館長の木下巨一様、同係長の氏原理恵子様、元伊賀良主事の山崎学様、他主事会の皆様には、地区公演実行委員会へのアンケート調査実施へのご協力、地区公演実行委員会の実態について見学およびお話を聞かせていただきました。

飯田市福祉保健福祉部子育て支援課には、市内の幼稚園・保育園の保護者対象アンケート、園長対象アンケートの実施に際し、大変ご尽力いただきました。アンケート回答にご協力いただきました保護者の皆様、園長先生方、お忙しいなかご協力いただきありがとうございました。

そして、いいだ人形劇フェスタ前実行委員長の高松和子様はじめ実行委員会のみなさんとは、長年一緒に活動に取り組ませていただき、そのなかで市民文化活動について、体験的に学ぶ場を持たせていただきました。筆者の 20 余年にわたる飯田市での生活は、人形劇、そして、みなさんと取り組んだ人形劇フェスタがあったことで充実したものとなりました。この経験が、本論のもとになったことは言うまでもありません。深く感謝いたします。

す。

最後に、ここにお名前を挙げる事が出来なかった、多くの飯田のみなさんに、あらためて感謝申し上げます。ありがとうございました。

本研究が、今後の人形劇フェスタ、また、飯田市のまちづくりに少しでも役立てていただけるよう、今後も研究に精進していきたいと思っております。

付属資料目次

付属資料 1

集落調査	1
------	---

付属資料 2

市民の観劇参加に関する調査

ー飯田市保育園・幼稚園保護者アンケートー	12
----------------------	----

付属資料 3

幼稚園・保育園と人形劇フェスタ

ー飯田市保育園・幼稚園園長アンケートー	21
---------------------	----

付属資料 4

地区公演実行委員会の実態

ー地区公演実行委員アンケートー	29
-----------------	----

付属資料1 集落調査

〈区長への区の自治に関する調査〉

- ・実施日：平成 26 年 1 月
- ・実施方法：伊賀良地区北方・大瀬木・中村区の区長に対し、筆者が調査員として面接調査法にて調査を行った。
 - ①北方区長 神部和卓氏 （平成 26 年 1 月 22 日）
 - ②中村区長 熊谷義博氏 （平成 26 年 1 月 18 日）
 - ③大瀬木区長 橋部秀夫氏 （平成 26 年 1 月 24 日）
- ・調査内容：区の構成、農業の特徴及び従事者、水利組合、共有林、氏神信仰、寺院（檀家・墓地）、講、冠婚葬祭（結婚式・葬式）の協力、自治会の構成および活動、人形劇フェスタへの意識

〈分館に関する調査〉

- ・実施日：平成 26 年 2 月 1 日～25 日
 - ・実施方法：伊賀良地区公民館主事に依頼し、分館館長に対して、託送式調査法で自記入式アンケート調査を行った。
 - ・調査内容：分館の組織、活動内容、役員選出の方法。分館役員としての活動への意識、いいだ人形劇フェスタ地区公演に関しての意識
- *本節では、このうち、①北方分館、②中村分館。③大瀬木分館の結果を引用する。
また、調査項目に関しては、分館の組織、活動内容、役員の選出方法の一部の結果を引用する。

①北方区

伊賀良まちづくり協議会北方区の自治組織は、図のように、小区、組合、班 というように 3 段階の組織となっている。小字にあたる小区は北方区内を 4 つに分け、1 小区から 4 小区の 4 つに分かれている。小区を成す組合は、4 小区あわせて 20 組合。組合の下に位置する一番小さな集団である「班」は、およそ 10 軒ほどで形成され、回覧板が回覧されるいわゆる隣組の集団である。半は、北方区全てで 124 班を数える。

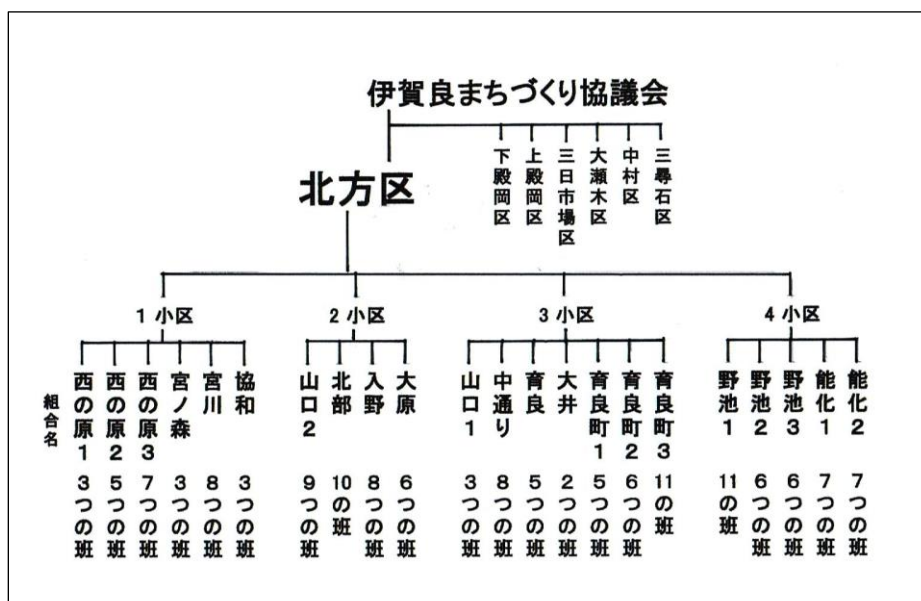


図 1：北方区の組織図

区内の戸数は 1849 戸、人口は 5,122 人である。

こうした新規流入は、市内の他地区から、または、伊賀良地区内に実家のある若い夫婦などで、若年層の核家族が多い。伊賀良地区内の小学校である伊賀良小学校は、県内第3位の児童数を誇るマンモス校である。

北方区には水田や畑・果樹園が広がり、稲作、果樹栽培（なし、りんご、干し柿）などを中心に農業が営まれている。しかし、専業農家は 2 軒のみでほぼ兼業農家である。この専業農家の 2 軒は、花卉農家で、有限会社を立ち上げて花卉栽培を行っている。

専業農家ほとんど無くなっているが、水利組合は財産区伊賀良井管理委員会として存在し、その長である“井守”は雨量による河川の水量の調整や、新築住宅が雨水を河川に流す場合の承認

などを行っている。

河川は新井川と大井川の 2 本があり、大井川は、隣接する鼎地区の一部の区、竜丘地区の一部の区と合同で管理している。市の担当は、林務課があたっている。

・共有林

共有林は、北 10 区と新井 4 区の山が、妙琴原の発電所付近に、また、昭和時代に有志によって組織された北方森林組合が有する共有林が大平高原県民の森の山にある。北方森林組合は、当時は全員が入れないような状況であったが、現在は入会希望者はいない。なお、北方区から流出しても、権利は継続される。年に数回の作業および境界線の確認を行っている。また、9 月 20 日ごろ、もみじ祭りを開催したり、公民館主催の登山が実施され 100 名ほどの参加者がある。樹種はカラマツ。

森林組合は、現在では、上述の年数回の区の共有林の作業の他、氏神である佐倉様の下に平成 20 年ごろ県の里山整備事業の補助事業で植樹した山桜 5000 本の管理を行い、毎年 4 月 20 日ごろに桜祭りを開催している。

・氏神、氏子

氏神は区内に、佐倉神社と育良神社の 2 つを有する。佐倉様は北方 3 小区の他、伊賀良地区内の他の区（集落）の上殿岡区、下殿岡区から氏子総代が出て、大総代が選出される。佐倉様の祭典は、4 月下旬の日曜日に春祭りが、10 月 20 日に秋祭りが実施される。神輿、子ども神輿、公民館役員や壮年会による餅つき、焼き鳥やきそばなどの屋台がでて、賑やかに開催される。

育良神社は、北方区の 4 つの小区から一人ずつ総代が出る。育良神社の祭礼は、春祭りが 4 月第 1 土曜日、日曜日ごろ。秋祭りが 9 月 30 日・10 月 1 日に行われる。北方区の伝統芸能である獅子舞が、北方獅子舞保存会により奉納上演される。

2 つの神社とも祭礼の費用は、氏子を中心とした住民の寄付金によって賄われる。

・寺院（檀家・墓地）

真敬寺が区内にあるが、昭和 30 年代以降住職がいない。

区内の 80 戸ほどが市街地の橋北地区にある大雄寺、10 戸くらいが同じく橋北区にある善勝寺の檀家となっている。それぞれの檀家総代は、特定の家が引き継いでいる。

・講

詳細は把握していないが、現在もある。

・冠婚葬祭

結婚式の場合、嫁や婿を迎える場合は、班（およそ 10 軒ほど）の夫婦を披露宴に招待する。嫁や婿に出す場合は、隣りの家やごく親しい付き合いの家の家人を 1 名ほど披露宴に招待する。数週間後に迫った区長の長男の披露宴には、班の全ての家の夫婦を招待している。仲人はかつては班内など近所の信望の厚い方に依頼していたが、最近ではない。

子どもが生まれた場合、男女の各初めの子どもに対しては、結婚式に招待した人との間では祝物のやりとりが行われる。

一方、葬儀の場合は、班が手伝いを行う。おおよそ役割が決められており、班長は火葬場までついていく、初七日のお参りに班の代表としてお焼香に行く。班の各家の女性は、受付およびお茶の接待などを行う。近年では、セレモニーセンター等での葬儀が多く、実際には行うことはないが、班の住民は手伝いとして参加する。

・自治会（「北方区」という名称） （組織）

自治会の役職およびその選出方法は、次の通りである。

- ・区長 1 名：前役員が候補者を立て依頼する。内諾を取り、総会にて承認を得る。
- ・副区長 1 名：区長になる人が、さまざまな観点から考え、依頼する。
- ・会計 1 名：
- ・書記 2 名：正副各 1 名

以上の役員により、役員会が組織される。

各委員会および業務内容は、次のとおりである。

- ・庶務活性化委員会：会館の管理、広報紙の編集発行、清掃活動長（毎月）
- ・建設委員会：道路や土手の修繕
- ・安全委員会：住民の交流活動、防災防犯活動
- ・環境委員会：美化活動、リサイクル、ごみ収集
- ・ひまわり子ども委員会：世代間交流、飯田市主催の夏祭りりんごへの参加引率
- ・公民館委員会：分館活動

役員会メンバーと各委員会委員長により総務委員会が組織される。

その他に、伊賀良地区まちづくり協議会に、まちづくり協議委員・女性協議委員を小区から 1 名ずつ選出している。すべての役職が 2 年任期となっている。

（活動）

自治会では、これらの役員や委員会によって、運動会や区民祭、そして、各委員会の事業が行われる。運動会は、自治会が主催であるが、実行部隊は分館の役員が行う。

- ・河川清掃、ごみ集積所の管理などの環境づくり。
- ・区民祭、スポーツ大会などの区民親睦行事（公民館委員による公民館活動として）
- ・高齢者が安心して暮らせるように、敬老訪問や楽しい語らいの場の設営。

（自治会費）

新規流入者の核家族が多い地域性から、自治会では、そうした人々に対して自治会加入を積極的に呼びかけ、区の地域活動に参加しやすいよう配慮している。その一環として、自治会入会費 3000 円は、平成 6 年から廃止した。現在は、年間の区費が一般住宅（持ち家・戸建 4000 円、借家・アパート 3000 円、借家・アパートの単身者 2000 円のみとした。あわせて、各組ごとに金額を定めた組合費がある。

・分館に関して

（活動拠点）

北方コミュニティ消防センター

住民は、「コミュニティ」と呼んでいる。

（自治会との関係）

2004（平成 16）年の地域自治組織の導入により、地区同様、区においても分館が区の自治会の一委員会に位置付けられた。以前は、自治会と分館は並列した別組織であった。

（以下、中村、大瀬木も同様である。）

（役員）

- ・分館長 1 名（男性）：全分館長が、前副分館長や分館主事と相談し指名し、総会にて承認を得る。
- ・副分館長 1 名（男性）：前分館正副会長・館主事・部会長などの役員が相談して指名。
- ・分館主事 1 名（男性）：前正副分館長・分館主事が相談して指名。

- ・会計 1 名（男性）
- ・監事 2 名（男性）
- ・文化部 23 名（男性 19・女性 4）
- ・体育部 23 名（男性 20・女性 3）
- ・広報部 2 名（男性 1・女性 1）＊自治会の広報活動（広報紙発行）も行う。

役員選出は、正副分館長、分館主事、会計用は前任者らが相談し指名して依頼することが多い。文化部や体育部など各専門部への配属に関しては、慣例的にどの組合はどの専門委員を受けるということが決まっている。

（行事）

行事では、区の大きな行事である運動会や区民祭は、自治会が主催ではあるが実働部分は分館・区の公民館委員会が担っている。分館の総会は自治会の総会と別に開催されるが、分館の総会には、分館の役員および委員だけでなく、区自治会の役員も出席する。

区内の行事は、運動会や区民祭など年間行事のなかでも大きなウェイトを占めるものは、公民館が実働部隊となって開催されている。

（予算）

1,500,000 円。地区まちづくり協議会から 40%、北方区のまちづくり委員会から 60%が支給されている。

（人形劇フェスタに関して）

文化部が中心になって行う。

人形劇フェスタは市にとっても、伊賀良地区や北方区にとっても重要な行事だとし、観劇の親子に対して意味のある活動と捉えている。

区の住民は人形劇フェスタへの観劇に積極的に参加しているが、運営への参加はどちらとも言えない。

また、地区公演の実施に関しては、特に問題に感じていることはない。

＊区長へのインタビュー調査では、区長は北方区での人形劇フェスタ地区公演を、「地区の活動のおまけみたいなもの」と述べ、区のたくさんある行事の 1 つであると捉えていた。

②中村区

・区の構成

中村区は、小字にあたる「平（たいら）」と呼ばれる地区が、上中村、中平、中川、下中村の 4 つある。このうち上中村平と下中村平は、「平」の下に「部」、その下に「班」が置かれる、3 層の構成。中平と中川平は、「部」を置かずその下に「班」が置かれる 2 層の構成になっている。

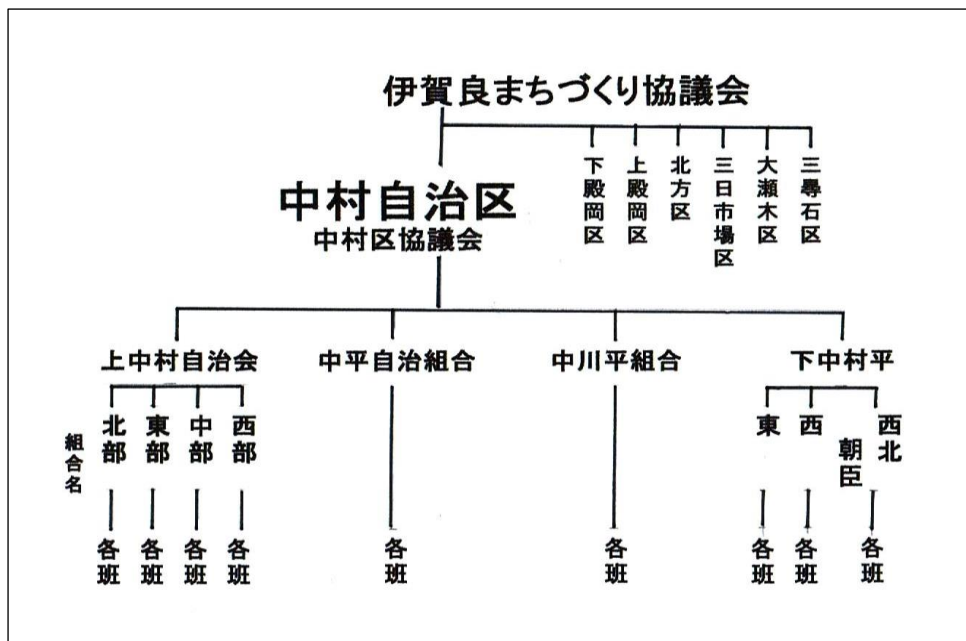


図 2：中村区の組織図

中村区は、小字にあたる「平（たいら）」と呼ばれる地区が、上中村、中平、中川、下中村の 4 つある。このうち上中村平と下中村平は、「平」の下に「部」、その下に「班」が置かれる、3 層の構成。中平と中川平は、「部」を置かずその下に「班」が置かれる 2 層の構成になっている。

・人口および戸数

区内の戸数は 650 戸で、人口は 700 人弱である。

北方区同様に、新規流入者が多く人口は増加傾向である。

・農業の特色および従事者

農家の戸数は明確にはわからないが、昔から中村区に居住していた家は、面積の大小の差はあってもほとんどの家が水田をもっている。専業農家はすくない。農家は、果樹栽培を中心に農業に従事している。生産物は、米の他、柿・りんご・なし・もも等の果樹。また、ハウス栽培で花卉栽培を行っている。稲作は兼業農家が多いが、果樹農家は専業農家がほとんどであり、花卉農家は、会社組織に行っている。

昭和 40 年代、市内に多摩川精機、平和時計、オムロンなどの精密機器関連の会社が創業し、それ以降、農業の兼業化が進んだ。また、同時期、大学に進学する若者も増加し、18 歳以上の若者の人口流出が始まった。

・水利組合

稲作がおこなわれているため、現在も水利組合がある。水利組合の役員は、昔から中村区に居住している家の人、つまり、現在も田んぼで稲作を行っている家の人あたり、水路の修復などの作業を行う。

・共有林

共有林は、伊賀良市区内北方区の沢城湖近辺、市内山本地区の双山区近辺、飯田市に隣接する阿南町昼神温泉郷の北側の山、伊賀良地区内の大平区に財産区の山林がある。共有林は、集落の自治会の委員会野 1 つ財産区山林委員会が管轄しているが、作業等の実務は市の林務課が管理に

あたっている。

財産区についての規約を 5～6 年前に改正し、自治会に入っていない人も財産区の受益を平等に得られるように、入会時のみ一時金を 2 万円支払うこととした。かつては入会金が 10 万円に設定されており、権利の所有と受益が一部の人のみであったため、住民間に不満があった。

現在、管理は住民は行わず、全て市の林務課が行っている。

・氏神・氏子

集落の氏神は、八幡様。

4 つの平から一人ずつ氏子総代が出て、4 人の氏子総代から互選により大総代が選出される。各平での氏子総代の選出は、一定の年齢になった人のなかから他の役員との兼ね合いを見て選出される。総代が特定の家から選出されることはない。

氏子には、新入者も、区内居住者であればだれでも希望で売れば加わることが出来る。

祭礼は、春季と秋季の祭典、および年末年始に行われる。

祭礼等の神社の費用は、氏子からの神社費による。神社費は、一戸当たり 1000 円。区は神社の祭礼にはかかわらないが、助成金のごくわずかに算出されている。

祭礼の際は、上中村平の獅子舞保存会が獅子舞の奉納を行う。また、秋季祭典では、煙火愛好会が奉納花火を打ち上げる。例年 200 発ほどで、費用は地区内におよび地区外からの寄付によって賄われている。この花火は、20 年ほど前から実施されている。

・冠婚葬祭

結婚の披露宴には、親せきではおじ・おば・従妹まで。集落では、回覧板を回す班のおよそ 10 軒を招待する。友人は二次回のみに招待することが多い。仲人は、10 年程前から設けない家がほとんどである。以前、仲人を設けていた際は、職場の上司は避け親せきに依頼していた。

子どもの誕生に際しては、班の各戸はお産見舞いを届ける。

一方、葬儀は、形式だけ班の人たちが葬儀に際してのさまざまな役を担当することになっているが、現在は葬儀会社が全て行うため、班の住民は通知を受け取り葬儀会場にはいくものの、特に手伝いを特別行うことはない。

・寺院（檀家・墓）

区内の寺は、長生寺（曹洞宗）

市街地橋南地区の伯心寺、方向寺などの檀家の家もある。

区で墓地を整備し、永代使用料を支払えば、誰でも利用できる。古くからの家の墓地は住宅地を離れた山にある。

・講

現在は無い。壮年会も現在無く、村人が酒を酌み交わす場は少なくなった。

・自治会に関して（「中村自治区 中村協議会」という名称） （組織）

上中村 6・中平 4・中川平 4・下中村 3 名と区長の 18 名で区自治会を組織する。

役員会は次の役職 8 名で組織する。

- ・区長 1 名 区長は、各平から 2 名ずつ選出された 8 名と、事務局として前区長の 2 名の合計 10 名で、選考し指名する。中村区まちづくり協議会で最終決定される。
- ・副区長 1
- ・会計 2 名（女性）
- ・書記 1 名

- ・財産区山林委員長 1 名
- ・社会委員長 1 名
- ・建設委員長各 1 名。

その他区のまちづくり協議会の委員が区長と各平からの代表者合計 11 名で構成する。

役員会は、月 1 回開催され、事業計画等を作成する。

(活動)

- ・道路や川などの改良要望のとりまとめ
- ・山林の境廻り、おひさま公園の整備、防災訓練
- ・中村八幡神社の祭典。および祭典煙火の共催。上中村祇園祭。各平の津島様祭典。
- ・故郷を知る活動としてのふるさとウォーキングラリー
- ・文化祭、高齢者の集い

また、区長の仕事には次のようなものがある。

- ・会議：伊賀良地区まちづくり協議会および自治企画委員会への出席。
- ・学校行事への参加：平内の子どもたちが通う小・中学校、保育園の行事への参加
- ・福祉施設の行事への参加：地区内の老人施設かざこしの里の行事への参加
- ・災害時の対応：被害カ所の確認、市への改修の依頼新生の提出
- ・地域の改修
- ・現在、中村区の各家に伝わる古文書についてまとめる（現在、取り組んでいる事業）

(自治会費)

平加入金は、上中村なし、中平 31,000 円（中平公会堂建設負担金）、中川 68,000 円（過入金 16,000 円 公会堂建設負担金 52,000 円）、下中村 80,000 円（加入金 50,000 円 墓地権利金 30,000 円）。

区費は、区加入金 20,000 円（区有財産共有負担金）区費年額持家は 35,000 円、借家 30,000 円。

・分館に関して

(活動拠点)

中村コミュニティセンター

(組織)

- ・分館長 1 名（男性）：輪番であたった組合のなかから話し合いにより選出されるが、やや押し付けの感がある。
- ・分館主事 1 名（男性：輪番であたった組合の役員から話しあいによる選出。
- ・副主事 1 名（男性）
- ・会計 1 名（男性）
- ・文化部 10 名（男性 5・女性 5）：各組合により慣例的にどの専門部に配属されるかが決定される。
- ・体育部 10 名（男性 5・女性 5）
- ・広報部 2 名（男性）

任期は 2 年。ただし、副分館主事が次年度分館主事となるよう、他の役員は一度に交代するが、主要な役員は一人ずつ交代して活動に支障が出ないようにしている。

(予算)

138 万円。地区まちづくり協議会から 27%、中村区まちづくり協議会から 43%。その他 30%。

(活動)

文化祭、人形劇フェスタ地区公演、運動会は区と地区と両方行われる。夏祭り。

健康維持教室。地域を知るための活動（ウォークラリーなど）

(人形劇フェスタ地区公演)

文化部が中心になって行う。

分館長は、人形劇フェスタは市にとっても、伊賀良地区や中村区にとっても重要な行事だとし、観劇の親子に対して意味のある活動と捉えている。また、区の住民は人形劇フェスタへの観劇および運営に積極的に参加しているとし、人形劇フェスタ地区公演への問題はないと回答している。

＊区長へのインタビュー調査では、区長は人形劇フェスタ地区公演を、分館の活動とのべ、分館の役員が中心となって行っている実態がうかがえる。

③大瀬木区

・区の構成

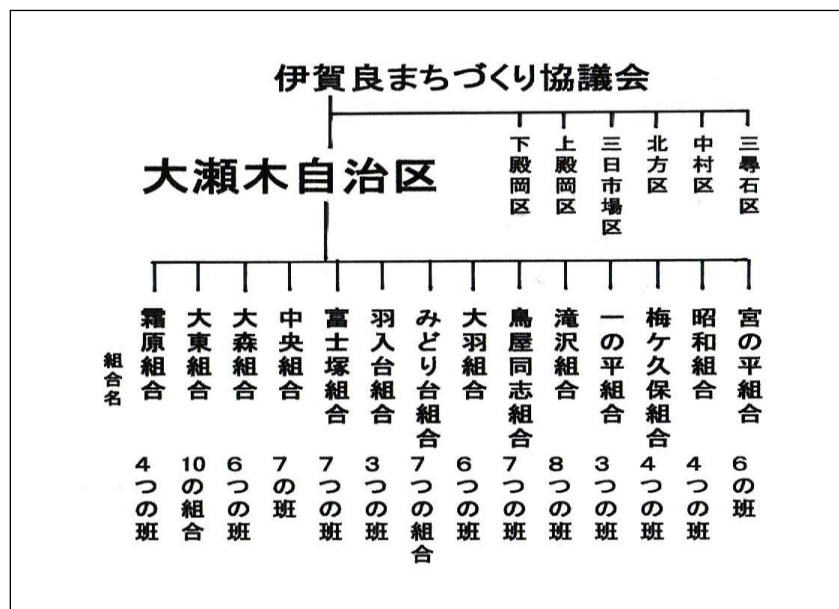


図3：大瀬木自治区の組織図

大瀬木区は、北方区、中村区とは異なり、いわゆる小字にあたる集団がない。区の下は「組合」となり、全部で14組合がある。組合の下には班があり、全部で82班あり、1組合につき多い組合は10班、少ない組合は3班となっている。1班はおよそ10軒ほどで組織されている

・人口および戸数

大瀬木区は、昭和50年代は戸数450戸であったが、現在は1150戸、人口1260人と、大きく人口が増加した。流入者の多くは、伊賀良地区にちかい飯田市の西側周辺部の下伊那郡村部の山間地からの移住者人である。彼らはもともとの住民たちに積極的にかわりこの区の生活に入り込みたいと考えている。一方、別荘として沢城湖周辺に居住する都会からの移住者がいる。彼らは、それぞれ個々の生活スタイルを尊重し、地域とのかかわりは拒否する傾向にある。

・農業の特色および従事者

かつてはほとんどが農家であった。大瀬木地区は河川が少なく稲作が困難だったため、農家の多くは養蚕を中心に行っていた。池田首相（1960～1964年）以降、兼業農家が増加した。現在、

専業農家は数軒で、花卉、キノコ栽培、酪農（牛）をおこなっている。

農業以外では、現在の国道沿いに位置する家々が商業に携わっていた。

- ・水利組合

水利管理に関しては、区の自治会の役員としてではなく、集落で実際に水路を活用する住民のなかで“水番”という役職があり、大きな水路から枝分かれする水の取り入れ口の管理を行う。

- ・共有林

財産区の山林は、沢城湖近辺の山の神の山の山林である。かつてはムラの財産林として手入れなどを行っていたが、社会事情が変わり管理が難しくなったことや木材の値段が下がったことなどにより、山の神の宗教法人を立ち上げ、山林を全て県に売り、その売り上げを法人が管理して地区内の行事の補助金として活用している。つまり、現在は財産区の山林は存在せず、売上金の管理を行い、残金が無くなると解散となる予定である。

- ・氏神・氏子

氏神は山の神と津島様である。その他、戦没者を祀る忠魂社がある。

区内の住民すべてを氏子とし、200戸が年間一戸当たり 5,000 円を神社費として徴収している。現在約 200 戸が氏子になっている。新規流入者は、子どもがいる場合、氏神の祭典に子どもが参加することを考え、満額でなくとも奉納金を献上する家が多い。

- ・寺院（檀家、墓）

長生寺および増泉寺。増泉寺は、かつて寺子屋があり、近年では保育園も行っていた。20 年前、東京都八王子市で教員をしていた男性が退職後僧侶の資格を取得し、毎月八王子からきて、花祭り等の行事や日常的なお勤めを行っている。人形劇フェスタ地区公演も会場として利用する。

三尋石団地の横に新たに墓地を造成し、もともと大瀬木区に居住していた家で分譲した。しかし、すでにお墓を持っている家がおおく、利用を希望しない人は、新入社の方に権利を譲ることも多い。

- ・講

現在はない。

- ・冠婚葬祭

結婚式の披露宴には、親せき関係はいとこまでを招待することが多い。地域関係は、班の各戸を夫婦で招待する。仲人は、かつては親戚に依頼したが、サラリーマンが増え、職場の上司が行うようになっていった。しかし、現在は仲人は立てないことが多い。子どもが生まれた際は、結婚式に招待した人を対象に祝物のやり取りを行う。

葬儀に関しては、かつては組合長が葬儀委員長役を担い、班の協力の下執り行った。精進落としに使用したお平（食器）が現在も保管されている。しかし、現在では業者がすべてを行ってくれるので、班の住民は葬儀に参加し、葬儀に関わっている形をとるのみ。

- ・自治会に関して（「大瀬木自治区」という名称）

- （組織）

自治会の役職及び選出方法は次のとおりである。

- ・区長 1 名：現区長から 3 代前の区長が集まり選出。
- ・会計 1 名：以下の役員は、14 組合から 1 名ずつ選出されたなかで役職が決定される。
- ・書記 1 名
- ・総務社会委員長 1 名
- ・産業土木委員長 1 名

- ・安全委員長 1 名
- ・環境衛生委員長 1 名
- ・ひまわり子ども委員長 1 名
- ・公民館委員長 1 名
- ・健康福祉委員長 1 名

＊その他、区の協議委員を各組合から 1 名ずつ 14 名と、女性委員 3 名を出す。

(自治会費)

区費は加入時負担員として 15,000 円、年間の区費は持ち家は 4,200 円、借家・アパートは年間 2,500 円。

・分館に関して

(活動拠点)

大瀬木コミュニティーセンター

(組織)

- ・分館長 1 名 (男性)
- ・副分館長 1 名 (男性)
- ・分館主事 1 名 (男性)
- ・会計 1 名 (男性)
- ・文化部 (人数不明)
- ・体育部 (人数不明)
- ・広報部 (人数不明)

(活動)

文化祭、人形劇フェスタ、区民祭、敬老会

スポーツ大会、地域を知る活動 (ウォークラリー)

料理教室

(予算)

130 万円。各区のまちづくり協議会から 100%。

(人形劇フェスタ)

人形劇フェスタが、市や伊賀良地区にとって、また伊賀良地区公民館や分館にとって意味のある活動かに関しては、どちらとも言えないと回答している。また、地区の子どもたちや運営に参加した住民にとって意味のある活動であるかに関しても、どちらとも言えないと回答している。分館長は、住民の参加について、観劇への参加が消極的、運営への参加はどちらとも言えないとしている。

全て分館で手配から劇団との連絡、会場手配等あり、柿スポーツ大会が終わってすぐに準備していかなくてはならないこと、区民祭の準備と重なり非常に忙しいことを問題として挙げている。

付属資料2 市民の観劇参加に関する調査
ー飯田市保育園・幼稚園 保護者アンケートー

調査期間：平成 26 年 3 月 1 日～3 月 14 日

配布数：3,038 枚（市内全保育所・幼稚園計 41 園家庭数）

回収数：2,028 枚（66.8%）

有効回答数：2,010 枚

無効回答数：18 枚

調査結果

I あなたの現在の人形劇とのかかわりについておうかがいします。

【1】お子さんとの人形劇鑑賞についておうかがいします。

1-1 積極的にお子さんに人形劇を観せたいですか。あてはまる番号を1つ選んで○をつけてください。(単位：%)

①考える	(79.0)	→	1-2へ	→ 続いて1-4へお進みください。
②考えない	(14.1)	→	1-3へ	
③その他	(6.7)			

1-2 【1-1で①と答えられた方におうかがいします。】

お子さんに人形劇を観せたいと思う理由はなんですか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。(単位：%)

①子どもが喜ぶ	(87.1)	②自分が楽しい	(34.3)
③子どものためになる	(61.7)	④時間がつぶせる	(5.0)
⑤安価である	(7.4)	⑥その他	(5.3)
[飯田の文化だから。 親子共に楽しめる。]			

1-3 【1-1で②と答えられた方におうかがいします。】

お子さんに人形劇を観せたいとは思えない理由はなんですか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。(単位：%)

①子どもが喜ばない	(11.2)	②自分がおもしろくない	(12.7)
③特に子どものためにならない	(1.4)	④時間がない	
(51.4)			
⑤お金がかかる	(12.8)		
⑥人形劇に関する情報がない	(40.7)	⑦その他	(12.8)

1-4 お子さんと一緒にではなく自分一人あるいは大人同士でも人形劇を観に行こうと考えますか。あてはまる番号を1つ選んで○をつけてください。(単位：%)

①実際に行くことがある	(4.5)
②行ってもいいと思うが行ったことはない	(49.3)
③そのように思える人形劇がない	(4.0)
④行かない	(38.6)
⑤その他	(0.3)

【2】あなたご自身の昨年1年間(2013年1月～2013年12月)の人形劇鑑賞の経験についておうかがいします。

2-1 あなたは、昨年1年間で何回人形劇を観ましたか。あてはまる番号を1つ選んで○をつけてください。(単位：%)

- ① 5 回以上 (9.4) ② 3 ～ 4 回 (16.5) ③ 1 ～ 2 回 (30.8)
 ④ 0 回 (43.0) → **【3】** へお進みください。

2－2 どのような時に観ましたか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。(単位：％)

- ①人形劇フェスタ (85.5)
 ②飯田文化会館など行政が主催した人形劇公演（飯田人形劇場・川本喜八郎人形美術館・竹田扇之助国際系操り人形館・風越し子どもの森などで） (9.4)
 ③図書館のお楽しみ会等 (6.2)
 ④りんごっこ劇場（2月に飯田女子短期大学で開催） (2.5)
 ⑤保育士さんの人形劇研修発表会（2月に開催） (8.2)
 ⑥保育園・幼稚園・小中高等学校での子ども・保育者・保護者の発表 (23.2)
 ⑦地区の自治会や公民館の催し・お祭り (13.3)
 ⑧商店の催し (1.1)
 ⑨その他 (3.2)

2－3 そのうち、お子さんといっしょに観に行ったのは何回ですか。あてはまる番号を1つ選んで○をつけてください。(単位：％)

- ① 5 回以上 (15.3) ② 3 ～ 4 回 (28.5)
 ③ 1 ～ 2 回 (53.7) ④ 0 回 (1.7)

【3】 人形劇についてどのような印象や感想をお持ちですか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。(単位：％)

- ①子どものもの (32.4) ②身近である (29.5) ③おもしろい (57.6)
 ④空想的である (17.9) ⑤感動できる (24.0)
 ⑥造形・美術がおもしろい (44.1)
 ⑦演劇と違ってモノを見立てるところがおもしろい (16.4)
 ⑧教育的である (22.6) ⑨気取らない (10.0) ⑩安っぽい (0.9)
 ⑪ばかばかしい (0.4) ⑫その他 (4.2)

Ⅱ あなたの子ども時代から今までの人形劇フェスタ（カーニバル）とのかかわりについておうかがいします。

【4】 就学前の保育園・幼稚園児等の時期についておうかがいします。

4－1 あなたは就学前の保育園・幼稚園児等の時期、どこに居住されていましたか。あてはまる番号を1つ選んで○をつけてください。(引っ越しされた場合は、最も長く居住していた地域に○をつけてください。)(単位：％)

- ①現在の飯田市南信濃地区・上村地区 (2.5)
 ②現在の飯田市上郷地区・鼎地区 (15.0)
 ③ ①②以外の飯田市 (41.9)

④飯田市以外の南信（上下伊那郡）（18.8）

⑤その他（21.5）

4－2 就学前の保育園・幼稚園児等の時期、人形劇フェスタ（カーニバル）に参加（観劇・上演など）しましたか。あてはまる番号を1つ選んで○をつけてください。（単位：％）

①参加した（29.6）→ 4－3へお進みください。

②参加しなかった（47.8）→ 【5】へお進みください。

③記憶にない（20.4）→ 【5】へお進みください。

4－3 【4－2で①と答えられた方におうかがいします。】（単位：％）

どのような参加をしましたか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

①客として（91.8） ②上演者として（2.9） ③その他（1.3）

【5】小学生の時期についておうかがいします。

5－1 あなたは小学生の時期、どこに居住されていましたか。あてはまる番号を1つ選んで○をつけてください。（引越しされた場合は、最も長く居住していた地域に○をつけてください。）（単位：％）

①現在の飯田市南信濃地区・上村地区（2.3）

②現在の飯田市上郷地区・鼎地区（15.0）

③ ①②以外の飯田市（43.1）

④飯田市以外の南信（上下伊那郡）（19.0）

⑤その他（19.9）

5－2 小学生の時期、人形劇フェスタ（カーニバル）に参加（観劇・上演など）しましたか。

あてはまる番号を1つ選んで○をつけてください。（単位：％）

①参加した（39.1）→ 5－3へお進みください。

②参加しなかった（45.8）→ 【6】へお進みください。

③記憶にない（13.3）→ 【6】へお進みください。

5－3 どのような参加をしましたか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。（単位：％）

①客として（93.5） ②上演者として（5.5） ③その他（0.5）

【6】中学生の時期についておうかがいします。

6－1 あなたは中学生の時期、どこに居住されていましたか。あてはまる番号を1つ選んで○をつけ

てください。（引越しされた場合は、最も長く居住していた地域に○をつけてください。）

（単位：％）

①現在の飯田市南信濃地区・上村地区（2.4）

②現在の飯田市上郷地区・鼎地区（15.4）

③ ①②以外の飯田市（43.8）

④飯田市以外の南信（上下伊那郡）（19.0）

⑤その他（19.1）

6－2 中学生の時期、人形劇フェスタ（カーニバル）に参加（観劇・上演・ボランティアなど）しましたか。あてはまる番号を1つ選んで○をつけてください。（単位：％）

- ①参加した (7.8) → 6－3にお進みください。
②参加しなかった (80.9) → 【7】にお進みください。
③記憶にない (9.9) → 【7】にお進みください。

6－3 【6－2で①と答えられた方におうかがいします。】

どのような参加をしましたか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

（単位：％）

- ①観客として (69.6) ②上演者として (16.3)
③ボランティアスタッフとして (7.1) ④その他 (1.6)

【7】 高校生の時期についておうかがいします。

7－1 あなたは高校生の時期、どこに居住されていましたか。あてはまる番号を1つ選んで○をつけてください。（引っ越しされた場合は、最も長く居住していた地域に○をつけてください。）（単位：％）

- ①現在の飯田市南信濃地区・上村地区 (2.0)
②現在の飯田市上郷地区・鼎地区 (15.8)
③ ①②以外の飯田市 (44.2)
④飯田市以外の南信（上下伊那郡） (18.0)
⑤その他 (19.4)

7－2 高校生の時期、人形劇フェスタ（カーニバル）に参加（観劇・上演・ボランティアなど）しましたか。あてはまる番号を1つ選んで○をつけてください。（単位：％）

- ①参加した (2.7) → 7－3にお進みください。
②参加しなかった (90.5) → 【8】にお進みください。
③記憶にない (4.8) → 【8】にお進みください。

7－3 【7－2で①とお答えになられた方におうかがいします。】

どのような参加をしましたか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

（単位：％）

- ①観客として (38.5) ② 上 演 者 と し て (5.3)
③ボランティアスタッフとして (17.6) ④その他 (2.2)

【8】 高校卒業後の時期についておうかがいします。

8－1 あなたは高校卒業後の時期、どこに居住されていましたか。あてはまる番号を1つ選んで○をつけてください。（引っ越しされた場合は、最も長く居住していた地域に○をつけてください。）（単位：％）

- | | |
|-------------------|--------|
| ①現在の飯田市南信濃地区・上村地区 | (0.9) |
| ②現在の飯田市上郷地区・鼎地区 | (10.0) |
| ③ ①②以外の飯田市 | (33.2) |
| ④飯田市以外の南信 (上下伊那郡) | (9.2) |
| ⑤その他 | (46.2) |

8-2 高校卒業後の時期、人形劇フェスタ () に参加 (観劇・上演・ボランティアなど) しましたか。あてはまる番号を1つ選んで○をつけてください。(単位：%)

- | | | | |
|----------|--------|---|--------------|
| ①参加した | (10.5) | → | 8-3にお進みください。 |
| ②参加しなかった | (84.7) | → | 【9】にお進みください。 |
| ③記憶にない | (1.9) | → | 【9】にお進みください。 |

8-3 【8-2で①と答えられた方におうかがいします。】

どのような参加をしましたか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

(単位：%)

- | | | | |
|----------------|--------|---------|--------|
| ①観客として | (63.0) | ②上演者として | (6.4) |
| ③ボランティアスタッフとして | (16.6) | ④その他 | (7.2) |

【9】あなたご自身の人形劇フェスタ 2013 への参加についておうかがいします。

9-1 あなたは 2013 年 1 月～12 月の期間、どこに居住されていましたか。あてはまる番号を1つ選んで○をつけてください。(引越しされた場合は、最も長く居住していた地域に○をつけてください。)(単位：%)

- | | |
|-------------------|--------|
| ①現在の飯田市南信濃地区・上村地区 | (3.6) |
| ②現在の飯田市上郷地区・鼎地区 | (24.2) |
| ③ ①②以外の飯田市 | (68.5) |
| ④飯田市以外の南信 (上下伊那郡) | (1.7) |
| ⑤その他 | (1.5) |

9-2 人形劇フェスタ 2013 には参加 (観劇・上演・ボランティアなど) しましたか。あてはまる番号を1つ選んで○をつけてください。(単位：%)

- | | | | |
|----------|--------|---|---------------|
| ①参加した | (48.1) | → | 9-3にお進みください。 |
| ②参加しなかった | (51.2) | → | 9-4にお進みください。 |
| ③その他 | (0.5) | → | 【10】にお進みください。 |

9-3 【9-2で ①と答えられた方におうかがいします。】

どのような参加をしましたか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

(単位：%)

- | | |
|-----------------------|--------|
| ①観客として | (94.8) |
| ②上演者として | (0.4) |
| ③本部実行委員会プランニングスタッフとして | (0.8) |
| ④地区公演実行委員として | (5.3) |

- ⑤本部実行委員会が募集したボランティアスタッフとして (1.9)
 ⑥その他 (2.3)

9-4 【 9-2で ②と答えられた方におうかがいします。】

人形劇フェスタ 2013 に参加（観劇・上演・ボランティアなど）しなかった理由はなんですか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。（単位：％）

- ①人形劇に関心がない (13.8)
 ②人形劇を観に行くような子どもが身近にいなかった (4.0)
 ③観たいような人形劇がなかった (36.7)
 ④人形劇フェスタに関心がない (5.1)
 ⑤参加証ワッペン（700 円）が高すぎる (9.5)
 ⑥都合が悪かった (44.9)
 ⑦仕事が忙しかった (2.8)
 ⑧人形劇フェスタを知らない (35.6)
 ⑨今年は公民館や自治会など地区の役員（委員）ではなかった (2.8)
 ⑩その他 (4.1)

・子どもが小さくて観劇できない。
 ・ワッペン以外に有料公演にお金がかかる。
 ・暑すぎて観劇に出掛けるのを控えた。

【10】あなたの人形劇フェスタに関するお考えについておうかがいします。

10-1 人形劇フェスタは飯田市および飯田市民にとってなくてはならないものだと思いますか。あてはまる番号を1つ選んで○をつけてください。（単位：％）

- ①とてもそう思う (30.3) ②まあまあそう思う (52.6)
 ③あまりそう思わない (12.7) ④思わない (3.5)

10-2 人形劇フェスタは飯田市および飯田市民にとって、どのような役に立っていると思いますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。（単位：％）

- ①夏の風物詩 (61.1)
 ②地区の公民館等の身近な場所で子どもたちが人形劇を楽しめる (70.4)
 ③子育て支援 (38.5)
 ④中高生のボランティアが生き生きと活動する場 (14.1)
 ⑤世界の人形劇文化に触れることができる (48.0)
 ⑥飯田市のシンボルとして誇れる催し (51.8)
 ⑦日本中から多くの人が集まって市内各地がにぎわう (30.3)
 ⑧飯田市の知名度を上げる催し (32.5)
 ⑨フェスタを楽しみに遠方から親戚や家族が集まる (6.9)
 ⑩経済効果を上げている (12.4)
 ⑪地元のアマチュア劇団の増加に影響し文化活動を活発にする契機 (14.0)
 ⑫市民が人形劇をたくさん観ることができる (44.0)

- ⑬市民が人形劇団の人との出会いを楽しむことができる (21.9)
 ⑭その他 (1.6)
 ⑮特に役に立っていない (1.9)

【11】 あなたの地域の活動への参加についておうかがいします。

11-1 あなたは公民館(分館および地区公民館)活動に対してどのように思っておられますか。

あてはまる番号を1つ選んで○をつけてください。(単位：％)

- ①とても関心がある (4.2) ②まあまあ関心がある (44.5)
 ③あまり関心がない (41.1) ④関心がない (9.6)

11-2 あなたは公民館(分館および地区公民館)の活動にどの程度参加しておられますか。

あてはまる番号を1つ選んで○をつけてください。(単位：％)

- ①とても積極的 (2.2) ②まあまあ積極的 (30.0) ③やや消極的 (67.9)
 ④まったく消極的 (99.4)

11-3 あなたはこれまでに公民館の委員を経験したことがありますか。あてはまる番号を1つ選んで○をつけてください。(単位：％)

- ①ある (9.1) ②ない (90.3) ③その他 (0.4)

11-4 あなたは自治会活動に対してどのように思っておられますか。あてはまる番号を1つ選んで○をつけてください。(単位：％)

- ①とても関心がある (2.1) ②まあまあ関心がある (38.7)
 ③あまり関心がない (42.3) ④関心がない (16.1)

11-5 あなたは自治会の活動にどの程度参加しておられますか。あてはまる番号を1つ選んで○を付けてください。(単位：％)

- ①とても積極的 (1.9) ②まあまあ積極的 (28.8)
 ③やや消極的 (37.1) ④まったく消極的 (31.3)

Ⅲ 回答者ご自身についておうかがいします。

【12】 性別を教えてください。あてはまる方に○をつけてください。(単位：％)

- ①男 (5.9) ②女 (93.4)

【13】 失礼ですが、現在(2014年3月1日)、あなたの満年齢はいくつですか。(単位：％)

- ①19歳以下 (0.0) ②20～24歳 (1.2) ③25～29歳 (9.5)
 ④30～34歳 (29.0) ⑤35～39歳 (36.0) ⑥40～44歳 (19.2)
 ⑦45～49歳 (4.0) ⑧50～54歳 (0.3) ⑨55歳以上 (0.3)

【14】 お子さんの人数は何人ですか。あてはまる番号を1つ選んで○をつけてください。

(単位：％)

- ①1人 (17.0) ②2人 (50.9) ③3人 (25.9)

④4 人 (4.8) ⑤5 人以上 (1.0)

【15】 お子さんの年齢を教えてください。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

①1 歳未満 (9.6) ②1 歳 (12.8) ③2 歳 (18.5) ④3 歳 (20.7)
⑤4 歳 (30.3) ⑥5 歳 (31.1) ⑦6 歳 (30.0) ⑧7 歳 (14.5)
⑨8 歳 (12.7) ⑩9 歳 (9.4) ⑪10 歳 (8.3) ⑫11 歳 (6.5)

付属資料 3 幼稚園・保育園と人形劇フェスタ
 ー飯田市保育園・幼稚園園長アンケートー

調査期間：平成 26 年 3 月 1 日～3 月 14 日

配布数：	公立保育園	18
	私立保育園	17
	公立幼稚園	1
	私立幼稚園	5
<hr/>		
	合 計	41 園

回収数 ： 24 園
回収率 ： 58.5 %
有効回答数 ： 24
無効回答数 ： 0

調査結果

【1】貴園の保育における人形劇鑑賞活動についておうかがいします。

- 1-1 人形劇鑑賞は保育課程・教育課程に組み入れられていますか。あてはまる番号を1つ選び○をしてください。

- | | |
|----------------------------------|-----|
| ① 2013年度の保育課程・教育課程に組み入れられている。 | 17園 |
| ② 2013年度は組み入れていなかったが、組み入れた年度もある。 | 1園 |
| ③ 組み入れられていない → 【2】へお進みください。 | 6園 |

- 1-2 【1-1で①②に○をつけた園におうかがいします。】

何歳児の保育課程・教育課程に人形劇を演じて遊ぶ活動を組み入れていますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

- | | |
|-----------|-----|
| ① 3歳児未満 | 13園 |
| ② 3歳児（年少） | 18園 |
| ③ 4歳児（年中） | 17園 |
| ④ 5歳児（年長） | 16園 |

- 1-3 【1-1で①②に○をつけた園におうかがいします。】

人形劇鑑賞の保育課程・教育課程への組み入れは、飯田市に人形劇フェスタがあることが影響しているとお考えでしょうか。あてはまる番号1つを選び○をつけてください。

該当園 18園

- | | |
|----------|-----|
| ① そう考える | 16園 |
| ② そう考えない | 2園 |

- 1-4 【1-3で①に○をつけた園】

1-3で①「そう考える」と回答した理由としてあてはまる番号すべてに○をつけてください。

該当園 16園

- | | |
|--|-----|
| ① 人形劇フェスタがあるので保護者や子どもが人形劇に親しんでいる | 16園 |
| ② 保育者が人形劇について学ぶチャンスが多い | 13園 |
| ③ 保育者が人形劇フェスタで人形劇を鑑賞し、子どもたちにも鑑賞させたいと感じる経験がある | 12園 |
| ④ 保育園や幼稚園が地区公演会場として地域に定着化している | 6園 |
| ⑤ 保育者自身が、子どもの時人形劇フェスタ（カーニバル）で人形劇に触れ、よかったという経験がある | 5園 |
| ⑥ 地元の人形劇団（アマチュア）がたくさんある | 4園 |
| ⑦ その他（自由記述） | 2園 |
- ・飯田の文化として子どもたちに伝えていきたい
・文化会館での事業の取組みがとてありがたいです

1-5 【1-3で②に○をつけた園】

1-3で②教育課程・保育課程に人形劇が組み入れられているのは、フェスタがあることが影響しているとは「そう考えない」と回答した理由としてあてはまる番号すべてに○をつけてください。

該当園：2園（1園はNA）

- | | |
|--|----|
| ①人形劇フェスタに関係なく人形劇は保育に有効 | 1園 |
| ②保育者が大学や短大等で人形劇を学んだから | 0 |
| ③保育者自身が、子どもの時から現在に至るまでの間に、飯田市以外の催しで人形劇に触れ、よかったという経験がある | 0 |
| ④その他（自由記述） | 0 |

1-6 【1-1で①に○をつけた園におうかがいします】

2013年度において人形劇鑑賞は何回行われましたか。あてはまる番号1つを選び○をつけてください。

該当園：17園

- | | |
|-----|----|
| ①1回 | 4園 |
| ②2回 | 5園 |
| ③3回 | 4園 |
| ④4回 | 4園 |
| ⑤5回 | 0 |
| ⑥6回 | 0 |

1-7 1-6でご回答いただいた2013年度に行なわれた人形劇鑑賞での上演劇団について
おうかがいします。

どのような劇団による上演でしたか。当てはまる劇団の種類の番号すべてに○をつけ、あわせて劇団の種類ごとの上演回数を（ ）に数字で記入してください。

該当園：17園

- | | |
|----------------|--------|
| ①プロの劇団 | 1回：17園 |
| ②小中高大生のアマチュア劇団 | 5園 |
| ③一般成人のアマチュア劇団 | 1園 |
| ④保育者の劇団 | 10園 |
| ⑤PTAの劇団 | 0園 |
| ⑥その他（自由記述） | 0 |

【2】貴園の保育における人形劇（人形を用いて）を演じて遊ぶ活動についておうかがいします。

2-1 人形劇（人形を用いて）を演じて遊ぶ活動は保育課程・教育課程に組み入れていますか。あてはまる番号1つを選び○をつけてください。

有効回答数：24園

- | | |
|------------------------------|-----|
| ①2013年度の保育課程・教育課程に組み入れられている。 | 12園 |
| ②組み入れられていない年度もある。 | 3園 |

③組み入れられていない → 2-4へお進みください。

9園

- 2-2 【2-1で①②に○をつけた園】何歳児の保育課程・教育課程に人形劇を演じて遊ぶ活動を組み入れていますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

該当園：15園

- | | |
|----------|-----|
| ①3歳児未満 | 2園 |
| ②3歳児（年少） | 5園 |
| ③4歳児（年中） | 9園 |
| ④5歳児（年長） | 13園 |

- 2-3 【2-1で①②に○をつけた園】人形劇（人形を用いて）を演じて遊ぶ活動の保育課程・教育課程への組み入れは、飯田市に人形劇フェスタがあることが影響しているとお考えですか。当てはまる番号1つを選び○をつけてください。

該当園：15園

- | | |
|---------|-----|
| ①そう考える | 10園 |
| ②そう考えない | 5園 |

- 2-4 【2-3で①に○をつけた園】2-3で①「そう考える」と回答した理由としてあてはまる番号すべてに○をつけてください。

該当園：10園

- | | |
|--|----|
| ①人形劇フェスタがあるので保護者や子どもが人形劇に親しんでいる | 9園 |
| ②保育者が人形劇について学ぶチャンスが多い | 5園 |
| ③人形や台本などが入手しやすい | 2園 |
| ④保育者自身が、子どもの時人形劇フェスタ（カーニバル）で人形劇に触れ、よかったという経験がある。 | 2園 |
| ⑤その他（自由記述） | 0 |

- 2-5 【2-3で②に○をつけた園におうかがいします】2-3で②「そう考えない」と回答した理由としてあてはまる番号すべてに○をつけてください。

該当園：5園

- | | |
|--|----|
| ①人形劇フェスタに関係なく人形劇は保育に有効 | 4園 |
| ②保育者が大学や短大等で人形劇を学んだから | 1園 |
| ③保育者自身が、子どもの時から現在に至るまでの間に、飯田市以外の催しで人形劇に触れ、よかったという経験がある | 1園 |
| ④その他（自由記述） | 2園 |
- ・子どもが喜ぶので

- 2-6 【すべての園におうかがいします】子どもたちが人形劇を（人形を用いて）演じて遊ぶ活動に使用できると考えられる以下のもののなかで、貴園にあるものはどれですか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

有効回答：27園

①ぬいぐるみ	21 園
②抱き人形	13 園
③着せ替え人形	4 園
④棒遣い人形	5 園
⑤片手遣い人形	6 園
⑥糸操り人形	0 園
⑦ペープサート（立ち絵）	21 園
⑧パネルシアター（フランネル絵）	21 園
⑨人形劇用舞台	6 園

2-7 【すべての園におうかがいします】子どもたちが人形劇を（人形を用いて）演じて遊ぶ活動として、どのような遊びの様子が見られたり保育者の指導が行われたりしていますか。年齢ごと、あてはまる番号すべてに○をつけてください。

該当園：24 園

- | | | |
|----------|---|------|
| ・3歳未満児 | ①子どもたちが即興的にストーリーを作って遊ぶ | 9 園 |
| | ②昔話や絵本の内容をストーリーに沿って演じて遊ぶ | 6 園 |
| | ③発表会で発表する | 1 園 |
| | ④その他（自由記述） | 3 園 |
| | <ul style="list-style-type: none"> ・保育士との即興的なやりとりを楽しむ ・気分転換する ・人形やペープサートをもって、うたに合せて動かしたり、自由に表現して遊ぶ | |
| | | |
| ・3歳児（年少） | ①子どもたちが即興的にストーリーを作って遊ぶ | 12 園 |
| | ②昔話や絵本の内容をストーリーに沿って演じて遊ぶ | 12 園 |
| | ③発表会で発表する | 6 園 |
| | ④その他（自由記述） | 1 園 |
| | <ul style="list-style-type: none"> ・生活のひとつの場面をもちいてごっこ的に演じる | |
| | | |
| ・4歳児（年中） | ①子どもたちが即興的にストーリーを作って遊ぶ | 11 園 |
| | ②昔話や絵本の内容をストーリーに沿って演じて遊ぶ | 15 園 |
| | ③発表会で発表する | 7 園 |
| | ④その他（自由記述） | 4 園 |
| | <ul style="list-style-type: none"> ・その年に観た人形劇のまね | |
| | | |
| ・5歳児（年長） | ①子どもたちが即興的にストーリーを作って遊ぶ | 11 園 |
| | ②昔話や絵本の内容をストーリーに沿って演じて遊ぶ | 15 園 |
| | ③発表会で発表する | 13 園 |
| | ④その他(自由記述) | 3 園 |
| | <ul style="list-style-type: none"> ・ごっこ遊びの中でお客を呼び見せる ・自分たちの経験をストーリーにする（家庭や園での生活） | |

・その年にみた劇のまね

【3】保育者の人形劇の研修会への参加についてお聞きます。

3-1 保育園におうかがいします。2013 年度、飯田文化会館の主催する保育士対象の人形劇研修に、貴園の保育士は参加しましたか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。＊①を選んだ園は、人数を数字でご記入ください。

＊保育園のみ（ただし、母数は不明。園の種類への無回答のため）

①参加している（ ）人	12 園
②参加していない	0 園
③かつて参加したことがある	3 園

＊補足調査「保育士の人形劇研修会に関して」

飯田文化会館への電話聴き取り（6月2日：久保田さん、岩山さん）

- ・平成 23 年度の実績は、17 園より 19 人参加。
- ・公立保育園園長会が主催している。
- ・5 月から翌年 1 月まで 9 回実施（保育時間中）。内 4 回は、人形劇団むすび座より講師派遣。
- 1 月までに作品を仕上げ、その後、市内の公立保育園 11 園を巡回公演。
- ・最後に 2 月に研修会成果発表会の上演会を一般公開
昨年作品は「ねずみのよめいり」「さんびきのこぶた」
- ・参加者は、基本的には各園より 1 名。主任等は保育時間中抜けることが難しいので、臨時、新人が参加者となることが多い
- ・平成 23 年度の担当責任者は、毎年各園の園長が順番で担当する。
- ・平成 24 年度は、私立保育園にも声を掛けたが、参加希望はいなかった。

3-2 全ての園におうかがいします。

3-1 でおうかがいした以外の人形劇の研修会に、2013 年度、貴園の保育者のなかに人形劇の研修会に参加した方はいましたか。あてはまる番号 1 つを選んで○をつけてください。＊①に○をつけた園は、わかる範囲で研修の内容をご記入ください。

有効回答 24 園

①参加した（講座の内容）	6 園
・公立保育園の研修会	
・人形劇フェスタのとき	
②参加していない	18 園
③不明	0

【4】貴園のいいだ人形劇フェスタへの参加についておうかがいします。

4-1 保育活動の一環として、子どもたちを引率してフェスタで人形劇人形劇を鑑賞していますか。あてはまる番号 1 つを選び○をつけてください。

有効回答 24 園

- | | |
|--------|------|
| ①している | 9 園 |
| ②していない | 15 園 |

4－2 園児の製作した人形を市街地等のウインドウに飾る「ウェルカム人形展」に参加したことはありますか。あてはまる番号1つを選び○をつけてください。

有効回答 24 園

- | | |
|-----------|------|
| ①したことがある | 4 園 |
| ②したことがない | 20 園 |
| ③それ自体知らない | 0 |

4－3 人形劇フェスタについて保護者に向けて情報を提供したり、ワッペンを購入を勧めたりしていますか。あてはまる番号1つを選び○をつけてください。

有効回答 24 園

- | | |
|--------|------|
| ①している | 24 園 |
| ②していない | 0 |

【5】人形劇は子どもの育ちにとってどのような影響があると思いますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

有効回答 24 園

- | | |
|------------|------|
| ①感性 | 23 園 |
| ②表現力 | 20 園 |
| ③言語獲得 | 20 園 |
| ④他者理解 | 9 園 |
| ⑤人とかかわる力 | 14 園 |
| ⑥想像力 | 22 園 |
| ⑦創造力 | 17 園 |
| ⑧推察力 | 6 園 |
| ⑨お話を理解する力 | 17 園 |
| ⑩その他（自由記述） | 1 園 |

【6】人形劇フェスタが飯田市にあることは、子どもにとってどのような意味があると思いますか。当てはまる番号すべてに○をつけてください。

有効回答 24 園

- | | |
|----------------------|------|
| ①人形劇を鑑賞する機会が多い | 24 園 |
| ②人形劇を身近な芸術として感じられる | 22 園 |
| ③多様な表現方法に触れられる | 15 園 |
| ④自分のまちのシンボルとして誇りに感じる | 9 園 |
| ⑤地域の人との出会いの場になる | 10 園 |
| ⑥人形劇人との出会いの場となる | 10 園 |

⑦飯田市を誇りに思う	7 園
⑧人形劇を演じてみようという気持ち生まれる	17 園
⑨さまざまな国の文化に触れることができる	11 園
⑩その他（自由記述）	2 園

付属資料 4 地区公演実行委員会の実態 ―地区公演実行委員アンケート―

調査対象：いいだ人形劇フェスタ 2015 の地区公演実行委員会に参加した公民館役員

調査期間：平成 28 年 1 月

調査方法：自記入式調査票を主事より公民館大会開催の際に配付。同封の回収用封筒にて、調査実施者に郵送にて提出。

配布数：225

回収数・回収率：回収 118（無効票 0） 回収率 52.4

調査内容：地区実行委員会への参加実態、地区公演での役割、人形劇フェスタの価値、人形劇フェスタへの今後の参加への意識など

調査結果

I. 地区公民館（本館）の役員の活動について教えてください。

【1】現在、所属している部会・委員会を教えてください。（SA）

選択肢	選択比率（%）
1 文化部会・委員会	60.2
2 体育部会・委員会	4.6
3 広報部会・委員会	4.6
4 育成部会・委員会	8.3
5 女性部会・委員会	0.0
6 企画部会・委員会	16.7
7 その他	4.6
無答	0.9
合計	100.0

N=108

【2】今年度 所属された部会・委員会では、どの程度会議が開催されましたか。（SA）

選択肢	選択比率（%）
1 1か月に1回その他	48.1
2 2か月に3回	13.9
3 1か月に2回	12.0
4 その他	23.1
無答	2.8
合計	100.0

N=108

【3】会議の開催は、およそどのような時間帯でしたか。（SA）

選択肢	選択比率（%）
1 平日の夜	93.5
2 休日の午前	0.0
3 休日の午後	0.9
4 休日の夜	2.8
5 一定ではない	0.9
6 その他	0.0
誤答・無答	1.9
合計	100.0

N=108

【４】会議にはどの程度参加されましたか。(SA)

選択肢	選択比率 (%)
1 毎回参加した	75.9
2 3分の2以上参加した	19.4
3 半分以上参加した	1.9
4 3分の2以上欠席した	0.9
5 ほとんど欠席した	0.9
6 その他	0.0
無答	0.9
合計	100.0

N=108

【５】部会・委員会の１年間の会議のうち、人形劇フェスタ地区公演が議題となった会議は何回ですか。(SA)

選択肢	選択比率 (%)
1 1回	4.6
2 2回	29.6
3 3回	36.1
4 4回	9.3
5 5回以上	18.5
無答	1.9
合計	100.0

N=108

【６】部会・委員会の会議に欠席されたことがある方は、欠席の理由を教えてください。(MA)

選択肢	選択比率 (%)
1 仕事の都合	74.3
2 家事や育児が忙しい	0.0
3 家事や介護が忙しい	0.0
4 体調不良	20.0
5 趣味や知人との交際と重なった	11.4
6 参加したくなかった	0.0
7 なんとなく	0.0
8 その他	8.6

N=108

【7】今年度、分館の役員を兼ねていらっしゃいましたか。(SA)。

選択肢	選択比率 (%)
1 兼ねていた	62.0
2 兼ねていない	35.2
誤答・無答	2.8
合計	100.0

N=108

Ⅱ. 今年度の人形劇フェスタ地区実行委員会の活動への取組みについて教えてください。

【8】今回の地区公演で、あなたは、どのような役割を担当されましたか。(MA)

選択肢	選択比率 (%)
1 広報	19.4
2 劇団との打ち合わせ	34.3
3 劇団の送迎	11.1
4 会場設定	67.6
5 受付	32.4
6 会場内の案内（観客への対応）	44.4
7 駐車場・道案内	22.2
8 司会進行	25.0
9 交流会	67.6
10 その他	2.8
11 当日は不参加だった	2.8

N=108

【9】今回の地区実行委員会の活動を通して、うれしかったことはありますか (MA)。

選択肢	選択比率 (%)
1 子どもたちが人形劇を楽しんで観劇していたこと	88.0
2 たくさんの地域の住民が来場し観劇してくれたこと	60.2
3 地区外・市外・県外の方が来場し観劇してくれたこと	37.0
4 自分が人形劇を観ることができたこと	38.0
5 劇団の人と交流が持てたこと	65.7
6 地区実行委員会に参加した者同士の交流が持てたこと	39.8
7 計画通りに問題なく地区公演が終了したこと	56.5
8 その他	2.8
9 特にない	0.9

N=108

Ⅲ. 人形劇フェスタの価値について、あなたのお考えを教えてください。

【10】人形劇フェスタは、市民や飯田市にとってどのような価値があると思いますか。(MA)

選択肢	選択比率 (%)
1 分館や地区公民館（本館）の恒例行事として位置付き、公民館活動が充実する	61.1
2 市民が、身近な場で人形劇を観劇することができる	84.3
3 親子の子育て支援の場となっている	37.0
4 地域住民が気楽に地域活動に参加できる場となっている	25.0
5 小学生や中学生の上演の場となり、学校と地域の連携の場になっている	43.5
6 地区ごとの趣向を凝らした地区公演の取組みにより、それぞれの地区が公民館活動充実への刺激を得ている	26.9
7 飯田市内全体がにぎわうイベントになっている	64.8
8 市民がつくり市民が楽しむお祭りとして、市民が一体感を感じることができる	24.1
9 国内ばかりでなく世界にも知られ、市民が誇りを感じることでできるイベントである	39.8
10 中高生がボランティアとして参加し、若者の地域活動への参加の場となっている	35.2
11 ワッペンをつけていけばいくつでも人形劇を観劇することができる	42.6
12 離れて暮らす家族や親戚が、人形劇フェスタがあることで飯田に集まる	5.6
13 経済効果を上げている	14.8
14 市民と他県からの人形劇団の人たちの出会いを楽しむ場となっており、そんななかで市民が飯田の良さを再発見している	47.2
15 その他	0.9
16 特に役に立っていない	0.0

N=108

【11】人形劇フェスタの参加証ワッペンは、「みる・えんじる・ささえる」さまざまな参加の方法でみんながつくる市民文化活動としてのフェスタへの参加意思を表すものです。この趣旨とあわせて考えて、この価格は適正だと理解していますか。(SA)。

1) 観客にとって

選択肢	選択比率 (%)
1 適正価格だと思う	67.6
2 高いと思う	25.0
3 安いと思う	4.6
4 その他	2.8
合計	100.0

N=108

2) 公民館の役員など実行委員にとって

選択肢	選択比率 (%)
1 適正価格だと思う	60.2
2 高いと思う	33.3
3 安いと思う	1.9
4 その他	4.6
合計	100.0

N=108

IV. これまでの人形劇フェスタ（人形劇カーニバルを含む）への参加について教えてください

【12】 これまでの人形劇フェスタへの観劇の参加について。(MA)

	あてはまる (%)	あてはまらない (%)
1 自分が子どもだったとき（乳幼児～高校生）観に行った	8.7	91.3
2 大人になってから一人または大人同士で観に行った	25.0	75.0
3 大人になってから子ども(自分の子ども以外、孫や知人の子どもも含む)を同伴して観に行った	45.2	54.8
4 人形劇フェスタ 2015 において、実行委員として運営に携わった公演以外に観に行った	36.5	63.5
5 今まで観に行ったことはない	16.3	83.7
6 その他	3.8	96.2

N=104

【13】これまでの人形劇フェスタでの上演の参加について。(MA)

	はい(%)	いいえ (%)	無答(%)
1 自分が子どもだったとき（幼児～高校生）、学校等の活動として上演参加した	3.1	92.8	4.1
2 大人になってから趣味の仲間や職場の仲間で結成した劇団で上演参加した	8.2	87.6	4.1
3 今まで上演参加したことはない	87.6	10.3	2.1
4 その他	1.0	94.8	4.1

N=95

【14】これまでの人形劇フェスタの運営への参加について。(MA)

	はい(%)	いいえ (%)	無答(%)
1 中学生以上が参加できるボランティアスタッフに参加したことがある	5.2	93.8	1.0
2 部実行委員会に参加したことがある（今もしている）	8.3	90.6	1.0
3 地区実行委員会に参加するのは、今回が2回目以上である	77.1	22.9	0.0
4 その他	16.7	83.3	0.0

N=97

V. 今回の地区公演の活動を終えて、これからの人形劇フェスタへの参加についての考えを教えてください。

【15】今後、人形劇フェスタに、観劇で参加したいと思いますか。(SA)

	参加意向 (%)
1 とてもそう思う	25.5
2 まあまあそう思う	51.9
3 どちらでもない	13.2
4 あまり思わないまったく思わない	7.5
5 まったく思わない	1.9
合計	100.0

N=106

【16】今後、あなたの周りの人に、人形劇フェスタへの観劇の参加を勧めたいと思いますか。(SA)

	勧誘意向 (%)
1 とてもそう思う	21.7
2 まあまあそう思う	55.7
3 どちらでもない	14.2
4 あまり思わないまったく思わない	7.5
5 まったく思わない	0.9
合計	100.0

N=106

【17】今後、人形劇フェスタに、上演で参加したいと思いますか。(SA)

	上演参加意向 (%)
1 とてもそう思う	3.8
2 まあまあそう思う	5.7
3 どちらでもない	19.0
4 あまり思わないまったく思わない	39.0
5 まったく思わない	32.4
合計	100.0

N=105

【18】今後、人形劇フェスタに、運営で参加したいと思いますか。(SA)

	運営参加意向 (%)
1 とてもそう思う	7.6
2 まあまあそう思う	28.6
3 どちらでもない	37.1
4 あまり思わないまったく思わない	17.1
5 まったく思わない	9.5
合計	100.0

N=105

VI. 【19】人形劇フェスタに関して、一市民として感じていることがあれば、何でもお書きください。

(FA)

記入 57 件

・人形劇フェスタに参加したい劇団は増えているのに、観劇をする人数が毎年減ってきている。

少子化や楽しみの多様化もあるだろうが、このままではダメだと思う。

- ・あまりレベルが高いと思われない上演者が居る気がいたします。レベルが高いものを見てみたい
- ・自分の地区以外の観劇が出来ない
- ・親子で楽しめる文化的イベント。ただし平日開催だと仕事の都合で中々参加できない。
- ・小中学生が参加する人形劇としてもらいたい
これにより、地区の盛り上がりがあると思う
- ・身近な地区公演と見ごたえのある有料公演と両方あって、市民参加のふんいきが出ている。
- ・市民手作のフェスタでよい活動になっている。
- ・大きなイベントになり、市民の間でも定着してきていて、良いと思う。
人形劇が、あまりメジャーではないと思われ、もっと広めていくにはどうしたら良いか考えていく必要があると思う。
- ・夏は暑いので時期的な事を考えられないか。
- ・この企画は長い歴史がありすばらしい！！自分も演じてみたいと思う。伊那谷は人形劇の長い歴史があります。
- ・今は孫といっしょに行きます。以前は子供といっしょでした。動ける限り、1人でも行こうと思います。
- ・定着したビッグイベントだが、自分の中での盛り上がりとしては用事、年齢など理由は時々で違うが波があるのは当然。過去、スタッフでもなんでもないときに、やはり子供が小さい頃は自発的に興味を持ち出掛けたが、現在は役がついていなければ特に高い意識はキープしない。
みなが同様なら、つまり、子供を持つ世帯が減ってくればいずれ曲がり角がくるのかなと思うが、エリアも広範囲で係りを広げられるので、全体像としては正直掴めない。
- ・市の文化都市など活性化に良い。
- ・人形劇フェスタを含め、公民館活動の良い面も認めますが、負担感を感じている地区公演を支える地域住民がいることも事実です。平日日中に対応しなければ成立しない内容を、どう分担し継続していくか、常に悩みながらいます。
- ・地区公演もよいが丘の上でのパレードが良い。楽しい
- ・もっと周知が出来れば、もっと良いイベントになる。
- ・有料公演が多すぎて、気楽に楽しめる（ワッペンを購入すれば観れる）という最初の考え方から変って来ている。
- ・今回参加された劇人が、終了後自動車のバンに天上にまでも人形劇使用道具を3時間もかけて乗せて帰っていった そんな手間をかけてこのフェスタに来てくれた事をうれしく思い劇人の意ごみを感じることが出来た。
小学生の人形劇参加もあり、やはり終了後に小学生の目が達成感にあふれてかがやいていた
これが今、やりきれない世間に大切な友達関係とか親子関係に良い方向にむくのではと感じた。
- ・人形劇が以外と県外や他国の人形師が認知度があるが、飯田市民の間では、小さな子供のイベント的は多元の方が多く、参加者が限られてくる。
- ・今まで参加した事がなくはじめてでしたが、子供達も私達も楽しんで観る事ができ、良かったです。
- ・年少者には、短時間でわかり易い劇が良いが、高学生以上はプロ劇団が良いと思うが、なかなか劇団の選択が難しい。

- ・飯田といえば人形劇！かなり定着してきているように思う
今後も継続していく事に期待したい
- ・とても良い行事である。(市民にとっても劇人にとっても)ただ関わりのない人との温度差が大きく、市民全体としての取組みとはなっていない。無理して市民の祭りとはせず、今まで通り子ども、人形劇が好きな人、劇人の祭りのままで良いと思います。
- ・人形劇にはあまり興味がなく子供が小さい頃1, 2回見に行った事がありました。でも興味がなくてもその時期になると街が賑やかになり、とてもうれしく思います。
又日本だけでなく世界的にも有名なのでうれしいです。
- ・市民として誇りに思う
- ・地元の小学校の人形劇と専門的な立場での人形劇がうまくマッチして家族そろっての参加で大変に良い。
人形劇を通じて地元の方とのコミュニケーション、又、不断できない家族とのコミュニケーションが取れて良い。
- ・ワッペンでの観劇とその他の有料公演の割合がどうか。なるべくワッペンでの観劇を多くしたほうが良い。
- ・人形フェスタは素晴らしい催しで、長くつづいてほしいと思います。飯田市民の宝
一方大人の方にとっては、身銭を切ってまで「観に行く気が生れない」と云うのが本音ではないかと思う。そこへワッペンを売り込んで宣伝していくには、かなり努力と熱意がなければ広がっていかない。一般的な呼びかけだけでは売れません。
大人の人には面と向って「町づくり」世界的人形フェスタ飯田を「ささえ」「参加」を呼びかける事。
- ・日本国内外より劇人が集結し当地区で人形劇が上演される事は子供の情操教育としてとても良い事だと思います。
- ・素晴らしい飯田の文化だと思います。継続してきたことが大きな成果です。これからも若い世代が引き継いでいってくれることを期待しています。
- ・素晴らしい人形劇ですが、人形劇の会場が散らばりすぎ行きたくても行きにくい
飯田市人形劇だからしかたないのか
- ・公民館行事として行う感がありますが、組織(協力)体制見直しも必要と思います。全市として広域に統一することの難しさもあり、コンパクトにしてもいい時期かと感じます。
- ・この人形劇を通して、飯田市がもっともっと全国的にも国際的にも、認知されればよいと思います。
- ・文化として根付いており、飯田市にとって重要なイベントである。
- ・盛夏のイベントであり、スタッフとしてはつらい。
- ・後であれば参加はするけれど、そうでなければ観に行くことはあまりない。人気のあるものはチケットが取りづらいし、その時期には仕事が忙しいので、人形劇フェスタに行きたくても仕事をほっておいて観に行けない。
- ・子育てが終わって、孫も居ない今は、この人形劇フェスタが、唯一の機会で、とても楽しみにしています。年令にあわせたり、昔子供と見た劇団を探したり楽しんでいます。
- ・子供や大人が楽しそうに観劇している様子がみれて、とてもやりがいがありました。
- ・市外から来られた皆さんが盛り上げている。実行委員以外の市民はあまり関心がないのが感じられて残念。

- ・公民館にとってやって良かったと思える点は有るのでしょうか？
 - ・地域住民と小学生高校生との交流し人形劇を上演していただき、または小学校の教室まで行って人形づくりをさせていただきました。子供さんたちも皆一生懸命でした。
 - ・人形劇という今までの形にとらわれずに、人形劇という形をこわさずに、現在の運営に加えて、何かイベント事が行いたいかなと思う。子供達が自分の気持ちや考えを気づき、発信することの役に立てたらと思う。
 - ・地元市民より他県の方々のほうが、いろんな情報を知っている。楽しんでいる「灯台もとくらし」でしょうか。興味のあり方で、こんなに違うんだと（楽しみ方）観客にインタビューしてみte気づいた。大人の楽しめる大人のための観劇の回数がもっと多いといいなと思った。
 - ・安価な料金にてワッペン購入すれば生ライブの観劇が可能な期間が毎年自分の地域で体験できることに幸せな時間が味わえ継続していきたい。
 - ・大人が楽しめる人形劇がもう少し多いと、異なった層の人達の参加が増えるのでは？
 - ・街の活性化にすばらしいイベントだと思っています。ずっと続けてもらいたいと思っています。ただ、700円のワッペンは高いと考えます。300円ぐらいにして全市民に購入させれば良いと思う。スポンサーがもっと付けば、ありがたいです。
- 人形劇は、心を育てるのにとっても良い教材だと私は考えます。特に子供が押さないときに期間中、朝から晩まで妻と観ていたのが心に残っています。子どもたちの喜怒哀楽の顔を観ていると、成長の糧になるのかなと考えていました。県外の方がフェスタに興味を持ち、調査まで実施していただき感謝申し上げます。これからも宜しくお願いします。
- ・子供たちが楽しそうにしている姿を見るといいもんだなあと感じる。
 - ・私には子が2人居ます。2人とも、それぞれ、小学生の時に、クラス単位で、上演することが出来ました。どちらのクラスも、話（ストーリー）を作ることから始まり、人形づくりや多数回の練習、支えて、見守って、まとめて下さった担任の先生や地域の数々の知恵の有る方々。又、運搬や送り迎えをして支えてきた私共親たち。そんなことがこの静養していく過程の中で、あたりまえになっている地域です。この地域で育った子達は大きく成長して家庭を持ち、子を持ち、地域を担っていく一人と成った時、どのように感じ、どのように行動し、どのような未来を創っていくのでしょうか。それが飯田でない場所だとしても。明るい豊かな未来が見える様な気がするんです。
 - ・子供達が楽しんで観ている（目がかがやいている）
そんな姿を見るとやり甲斐を感じる。
 - ・多くの子供達が人形劇を楽しんで観劇してくれてそれが親子の子育て支援につながり、また公民館活動としても充実することが素晴らしいことだと感じています。都会にはない地方のよさをアピールしたいです。（家族の輪や子育ての環境について）
 - ・子育てを始めたころから「カーニバル」があったので、プロ・アマに関わらず身近で観ることができて楽しみにしていた。
 - ・参加すると、その素晴らしさがわかるが、ふれたことのない人には伝わりにくい点。

Ⅶ. あなたご自身のことについて教えてください。

【20】これまで、区および分館等の地域（集落）のさまざまな団体の活動に参加されたことがありますか。現在行っているものもふくめてお答えください。（MA）

	やったことがある (%)	やったことがない (%)
1 区まちづくり協議会の役員	35.2	64.8
2 分館役員	77.1	22.9
3 区まちづくり協議会の役員	41.0	59.0
4 高齢者クラブ	5.7	94.3
5 自主防災会など防災にかかわる活動団体	28.6	71.4
6 育成会など子どもの健全育成にかかわる活動団体	26.7	73.3
7 婦人会	8.6	91.4
8 民生児童委員	4.8	95.2
9 P T A保護者会	42.9	57.1
10 観音講などの講	2.9	97.1
11 伝統芸能の保存会	19.0	81.0
12 山林管理の団体	9.5	90.5
13 水管理の団体	4.8	95.2
14 氏子総代など神社の関係団体	11.4	88.6
16 その他	8.6	91.4

N=105

【21】性別を教えてください。(SA)

性別	(%)
男性	78.7
女性	21.3
合計	100.0

N=108

【22】子どもさんやお孫さん（中学生まで）はいらっしゃいますか（別居も含む）。(SA)

	(%)
いる	70.4
いない	29.6
合計	100.0

N=108

【23】生まれてから高校生までの期間、短期間でも飯田市に在住していましたか。(SA)

	(%)
在住していた	80.6
在住していない	19.4
合計	100.0

N=108

【24】失礼ですが、年齢を教えてください。(SA)

年齢帯	(%)
1 19歳以下	0.0
2 20～29歳	0.9
3 30～39歳	3.7
4 40～49歳	24.1
5 50～59歳	34.3
6 60～69歳	30.6
7 70～79歳	6.5
8 80歳以上	0.0
合計	100.0

N=108

【25】お住まいの地区を教えてください。(SA)

住所	(%)	住所	(%)
1 橋北	1.9	11 龍江	2.8
2 橋南	1.9	12 竜丘	17.6
3 羽場	1.9	13 川路	3.7
4 丸山	8.3	14 三穂	6.5
5 東野	5.6	15 山本	3.7
6 座光寺	2.8	16 伊賀良	10.2
7 松尾	9.3	17 鼎	4.6
8 下久堅	0.9	18 上郷	5.6
9 上久堅	9.3	19 上村	1.9
10 千代	1.9	20 南信濃	0.0
		合計	100.0

N=108